九月

女子文壇

第五年第十二號



本品は最も完全なる白毛赤毛染なり

又本品を以て赤毛を染る時は有に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日々多大なり

全國到る處の小間物化粧品店薬店に有り



本舗

東京市日本橋區通塩町一番地

服部重右衛門商店

【本欄】

女子文壇
第五年第十二號

目次

うづまき雲




天上天下唯我獨尊
千代田香油
特製七十錢
大瓶三十五錢
中瓶二十五錢
小瓶十七錢
千代田香油
千代田香油
山岸三之助


偽物御注意
IVORY
MIKASA
アイボリー石鹼

如何なる婦人も見逃がせぬ大問題を見よ

婦人世界

九月一日發行　六卷拾號　冊拾五錢　郵税一錢九厘

◎嫉妬は果して婦人の惡德か……村井弦齋

▲不良少年を感化して成功せる私の苦心……櫻井圓次郎

◎御前講演の秀才を出せし家庭教育　梨本宮家令　坪井祥

◎良人と共に樂しむ私の家庭の遊戲……高橋義雄夫人　高橋千代子

▲轉地修養中の女子大學夏季寮を訪ふ……一記者

△一週間斷食して水垢離をとりし實驗……實驗者　川田さく子

△日本人の妻となりて舅姑に感心されし英國婦人　其婦人の舅　鈴木眞

△大坂の大火に類燒して得たる教訓……罹災者（桑原政氏夫人）桑原直子

△東京腦病院を訪問して婦人精神病者と語る……一記者

▲九十歳の長壽を保つ老夫婦の家庭を訪ふ……一記者

◎海水浴にて危く溺死せむとせし時の實際　遭難者　尾島菊子

◎女髪結が良人を助けて成功させた實驗　女髪結　長澤常子

▲出産のため轉地療養せる西洋婦人を訪ふ記……婦人記者

◎巴里籠城中に實見せし佛國婦人の働き……貴族院議員　渡正元

婦人音樂家



神戸絢子女史

天野愛子女史



實業家の夫人



寶石會社支配人松岡須吉氏夫人



代議士日向輝武氏夫人

少女は天下一品面白い雑誌てす

九月一日第壹號發刊　美麗口繪數葉

少女



定價一冊拾錢 郵税壹錢 ◎半年分六拾三錢 郵税とも ◎壹年分壹圓貳拾錢

◎少女小說 **吉祥果**（三色刷 古洞畫）……泉鏡花作
子供を可愛がる鬼子母神がなぜあんな恐い顔をして居るのでせう、此物語を讀むと其いはれが何んなに面白いか分ります

▲きり〱すの話……西村醉夢

◎**萬兩の土臺石** 巖谷小波

▲斷れし繪卷物

◎**琴のお稽古** 今井慶松

◎**お月様の戸籍調べ**

▲小猫……横瀨夜雨

◎お伽芝居 **花の祭** 磯萍水

▲清き心持……一色醒川

▲牛乳嫌ひの光子さん 中山蕗峯

◎**秋の七姫** 園女

東京京橋區大鋸町 **女子文壇社發行**（振替口座東京第壹七貳九番）

特約大賣捌所 東京堂 至誠堂 東海堂 上田屋 北隆館 良明堂 外取次全國雜誌店

◎**どっこいしょやっこらしょ**……西崎花世

◎いなごの飛行器 宮崎與平

▲都下各女學校の徽章

◎**停車場の花賣** 河井醉茗

▲少女ノート……

▲英語の手ほどき 西城隱士

◎**面白い譬**……記者

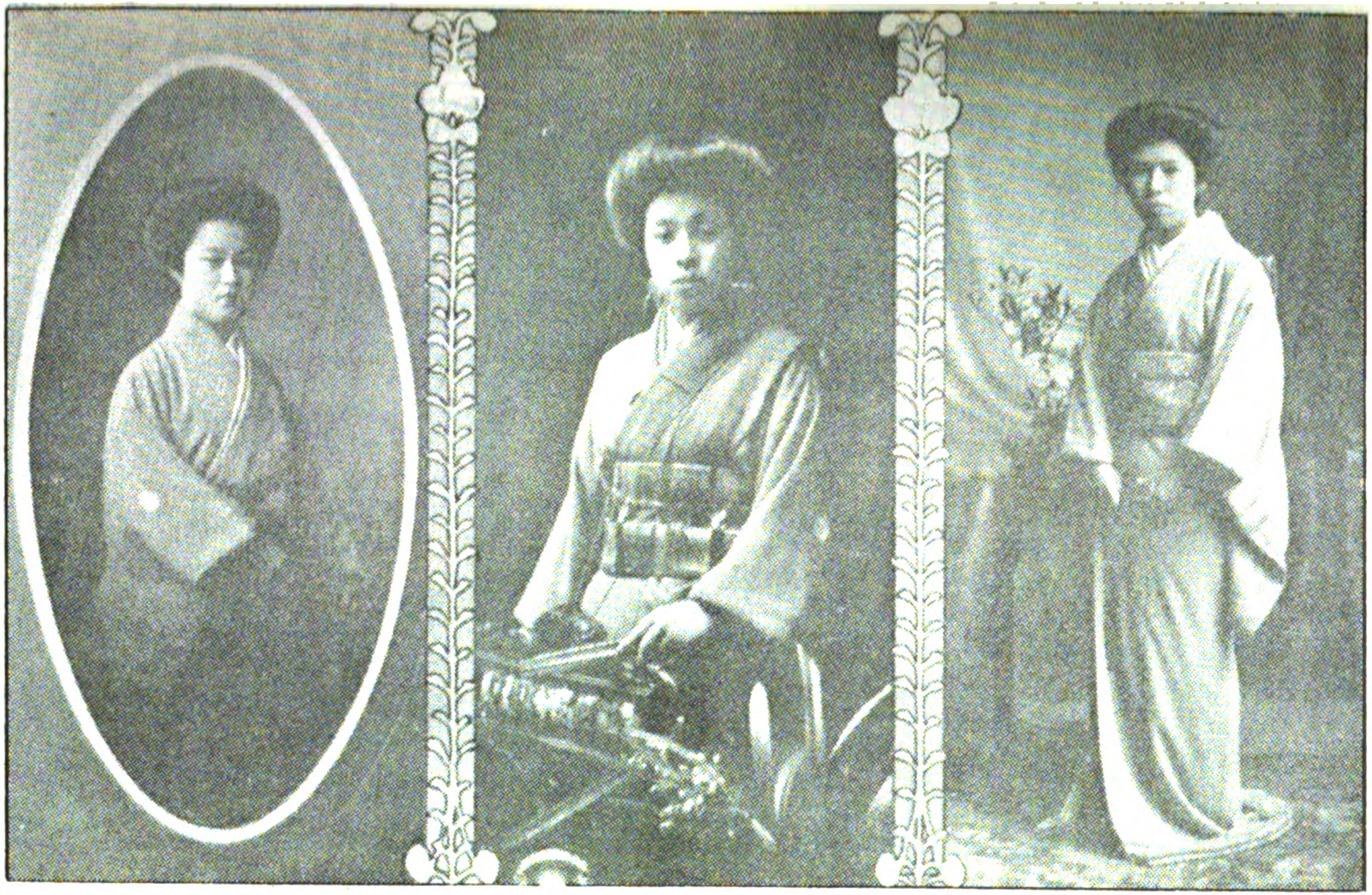
◎**九つの豆**……溝口白羊

◎**活きた花と造り花**……矢部理學士

▲新聞……

◎**少女文壇** ◎文章◎日記◎日用文◎和歌◎俳句◎詩◎雜讃◎圖畫◎笑話◎工夫畫◎少女料理◎少女實驗談◎世事問答◎少女くらぶ

【挿畫執筆】岡野榮、山中古洞、宮崎與平、片山春帆、竹久夢二の五氏……



池田男爵令嬢 鉥子嬢（日本女子大學校卒業）

古市工學博士令嬢 喜子嬢（お茶の水高等女學校卒業）

埼玉縣素封家田中叉氏令嬢 あさ子嬢

故イーストレーキ博士第四回忌紀念撮影



四女クララ嬢　中野武営氏令嬢　長女マリー嬢　末子レジナルド

三女ベリル嬢　長谷川泰氏令嬢　次女コンスタンツ嬢

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

於發明品博覽會 **名譽賞牌受領**

大改善―新學期開始―會員募集

習字速成通信教授

本會獨特の特許速成法は効果最顯著なるがため既に天下を風靡せり

書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生及玉木愛石先生

○女子部書者 小野鵞堂先生外講師大家數拾名

見本 詳細會則無代進呈

東京本郷森川町一 電話下谷三〇壹壹

帝國習字速成學會

(はノ一)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の

梅毒根治新劑

ばい毒根治特効

新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痳毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**することを確證す從來醫療實藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係り

男女 **生殖機不能即ち陰萎病。腎虛神經衰弱** 遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑重症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を達する天下無比 **可驚奇効** ある最新發見藥也 **精力**を**增進**し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光** 世にありふれたる誇大奇言を臚列する内地製無効實藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードプリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓拾錢 前金即刻送藥す

▲世界唯一 麻病消渇の根治新藥

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進步したる最新の痳病消渴即治療藥なり、本劑はありふれたる普通の一般藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是か内服して**麻病消渴**の原因たるゴノコッケン一を忽ち**滅殺**すべき處方に基き製したる新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分劑にて必ず根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり效驗確實峻烈なるだけそれだけ藥價も不廉なり用藥者像め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢 特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

腋臭は醫療實藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ 價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢前金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共顏物の痕、はつぼうはけの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蓄々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

特別製分金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人畫報

毎月一回一日發行　**九月の卷**　九月一日發行　定價一冊貳拾五錢　郵稅二錢　六冊前金郵稅共一圓五十錢　十二冊二圓八十八錢

畫報

◉初秋の風　井川洗厓筆　彩色美人畫
◉北白川宮葉山御別邸
◉凉氣滿秩
◉この花會員の富士登山
◉朝顏につるべ取られて貰ひ水……
◉小兒のいろ〳〵
◉妃殿下の御散步
◉貴婦人と數名家令孃鑑
◉梨本宮兩殿下の御歸朝
◉當世婦人の風俗
◉清國の一親王妃殿下
◉葉山に於ける細川侯高崎男北里松尾首藤諸名家別邸
◉輕井澤に於ける女子大學生……
◉女流碁客と双六
◉各女學校の夏期講習……
◉小兒玩具
◉御前揮毫の少年少女……
◉流行の髷
◉島津公爵培養朝顏
◉新郞新婦瓶華
◉其他十數……

讀物

▼家庭に清新の氣を入れよ　下田次郎
▼女に必要なる滑稽趣味　巖谷小波
▼日本婦人の美點を失ふ勿れ　男爵高崎正風
▼初秋は眞面目に物を思ふ時　十五銀行頭取　園田孝吉
▼虎の威を假る狐　大町桂月
▼身たしなみのよい婦人と悪い婦人　泉鏡花
▼子供に持たせる玩具　高市次郎
▼秋の景色と衣服の色　大原鉦一郎
▼訪問日記　廣岡夫人　ゆき
▼臺所拜見
▼避暑中娘の家政練習　遠山稻子
▼新秋の好期を利用せよ　下田歌子
▼家事經濟と芝居　小野崎中佐夫人
▼お氣の毒な衞生家
▼流行はき物の好み……
▼偕老同穴……
▼瀑音　岡田八千代
▼チクタイ仕立方　泰院長
▼和歌……
▼月見料理
▼育兒
▼美文九月　水穗

東京飯田町四町四の四　**東京社**　電話番町二三三九

秋風



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肥滿病新藥

（米國新輸入劑）

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人◉ぶと〳〵ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤◉ふき出物多き人◉脹滿◉ぶつ〳〵逆上頭痛輕症は一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば色は艶白となり程よくやせて誓つて美顔窈窕たる美人となる事を保證す……

諸嬢姉の福音



藥價 一劑一圓五拾錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 送料十錢宛

▲肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◉世界唯一 **月やく下し藥** ……見よ……病める婦人 月經なき女子

専門博士賞賛指導の新發見良藥

▲勿驚……藥力最強度……其效極て峻烈……有効無害……保險藥

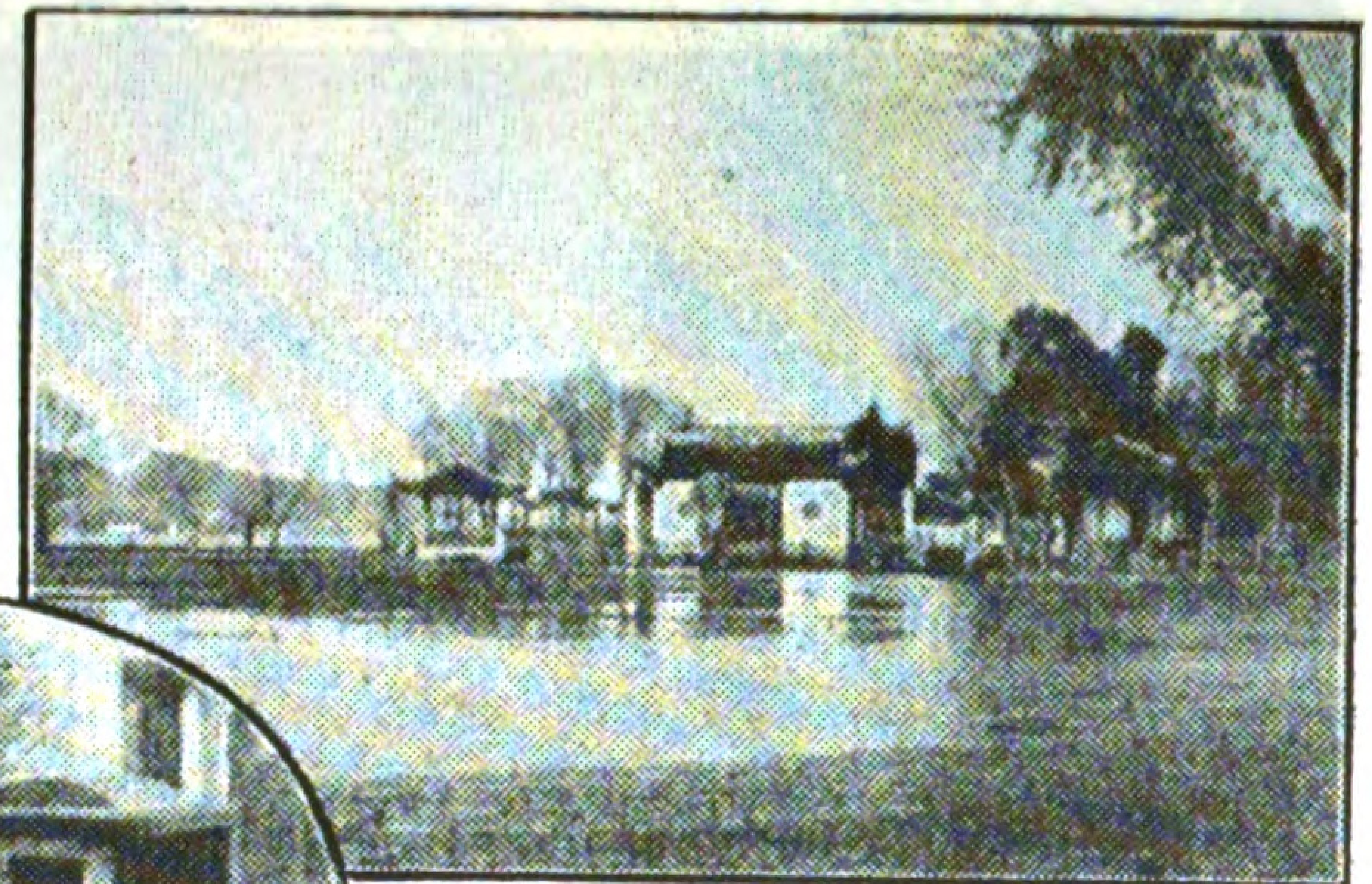


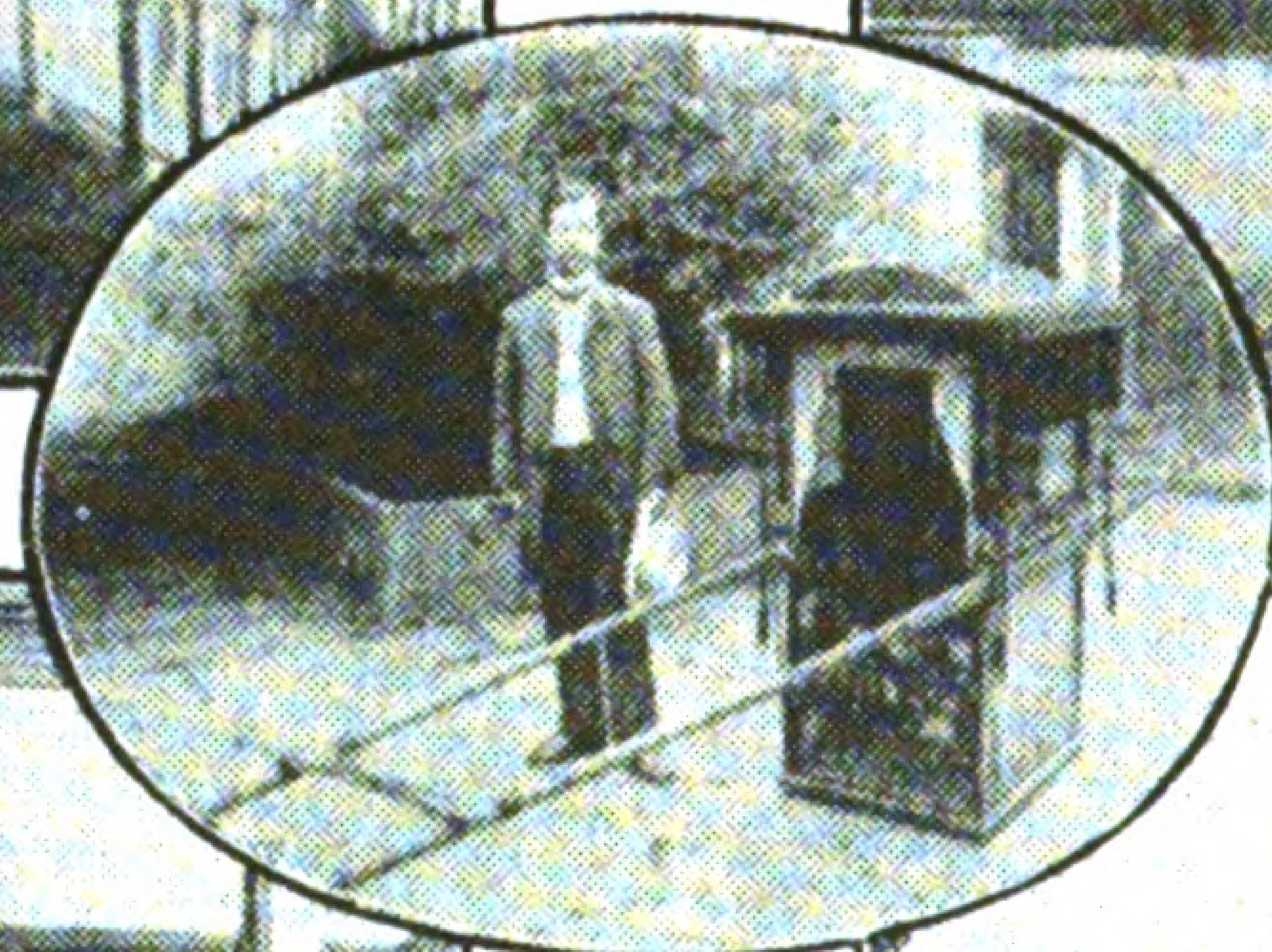
本劑は婦人二三ヶ月の**月經**不順月經閉止月經**滯**りは一二劑にて必ず流下す**四五月**以上又は**血塊**にても特製或は別製分服用せば安心に忽まち**流經**す夙に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ▲藥價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

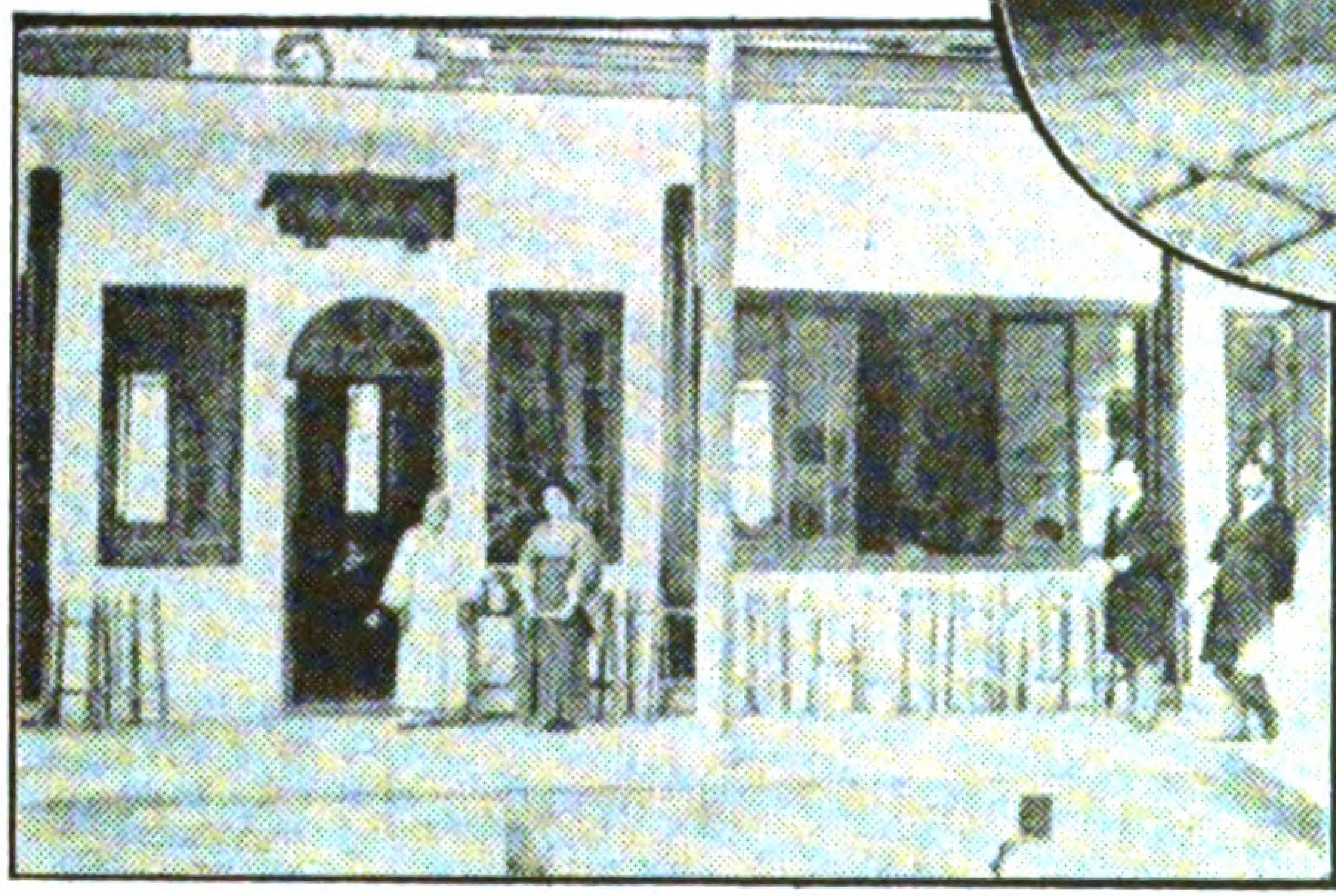
發賣本舗 東京々橋區中橋和泉町 振替口座一〇六七七番 **小宮愛生堂**

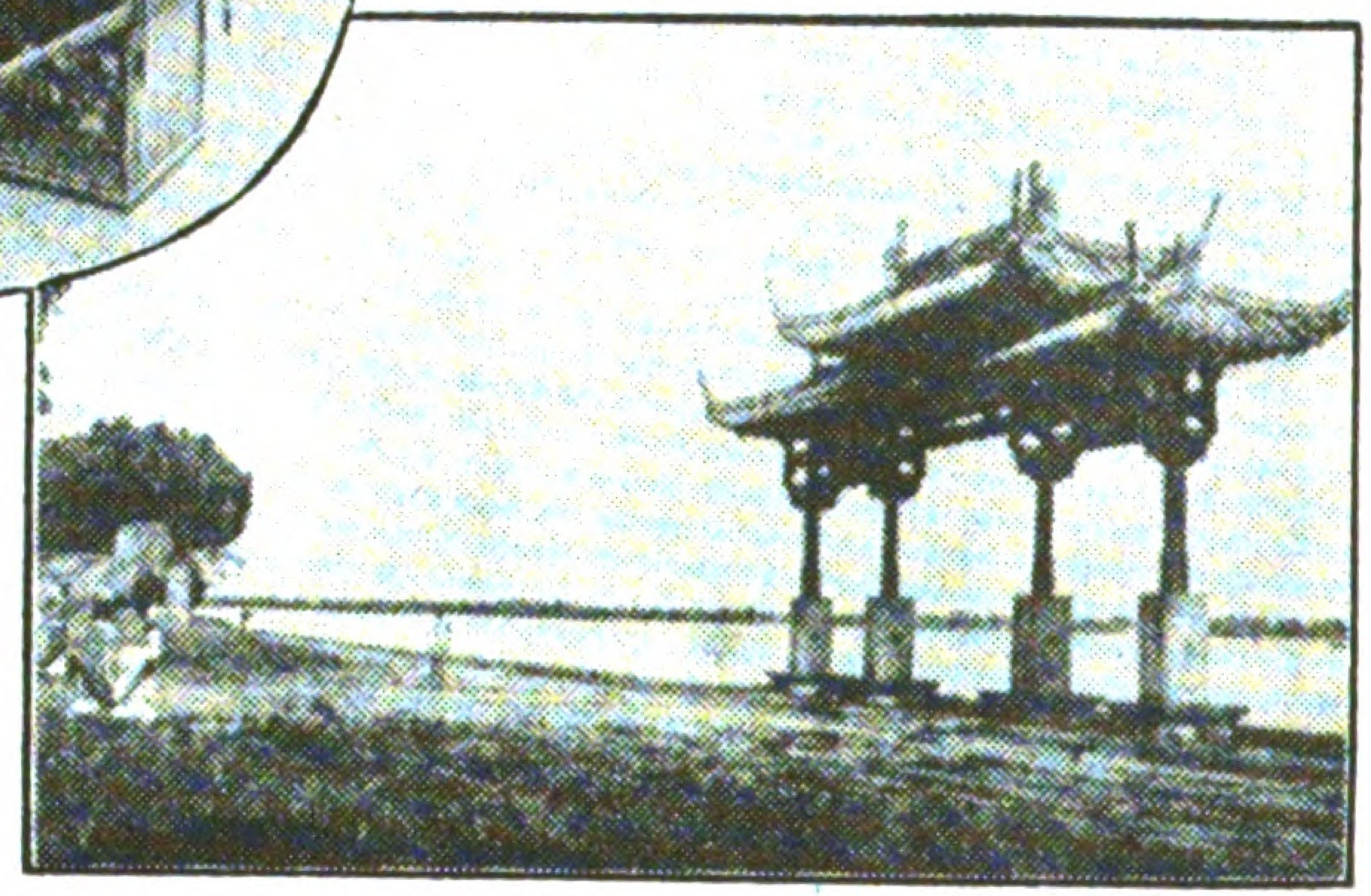
南清之風光











（本欄記事參照）

涼しい姿



(韓國　森よう子寄贈)



(京都　佐藤植子寄贈)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第二回新學期開始

◉入會の最好機は來れり

九月廿日迄は入會金免除の特典あり

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的也
▲講義　言文一致當入れ假名付きにて誰にも判る
▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌　會員には講義錄の外機關雜誌を毎月進呈

實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の敎授法により丁寧懇切に敎授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會員の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費　全學期の會費は都會半月の學費にて足る
▲入會　何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

◉見本つき規則書申込次第無料進呈◉

講義錄第一號は拾月一日發行す

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

振替東京四二〇〇番　電話本局（三〇〇四番）（三七〇七番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

佐々木邦譯

いたづら小僧日記

拾版發賣

定價金四拾錢 郵稅四錢

▲「東京朝日新聞」曰く

夏目漱石氏の『我輩ハ猫デアル』と同工にして異曲其の奇想天外より落ちて人の頤を解かしむる所は此れ却ッて彼に優る所あり。天下の奇書なり。譯文明快毫も難澁の痕なし。

▲「東京日々新聞」も亦曰く

奇想天外より落ち來る所漱石の『我輩ハ猫』以上なり、譯文、巧妙凡て創作の風致あり、辛き世に笑ひたき人は、速に一冊を購ひて繙くべし。

▲「文藝倶樂部」曰く

いよ〱出でゝいよ〱奇拔なるいたづら、讀みて頤を解かざる者なけむ。夏目漱石氏の『猫』に随喜せし人々は、必ずや此の書を繙きて多大の興味を感受すべく、實に近來稀に見る珍本と謂ふべし。

▲「新佛教」曰く

實に面白い、讀んでは吹き出し、又讀んでは吹き出す、實に奇想天外より來る程のもので飜譯と云ふと雖も、文章輕妙にして警句に富み、全く飜譯離れがして居る。今の日本の文壇で、この位のものを書き得るものは、先づ漱石か楚人冠ぐらゐだらう

▲「笑」曰く

事端の繁きだけいたづらは愈々奇拔になりて面白きこと限りなし。記者も之を讀み行くうち自然の失笑を禁じ能はず、傍人より何がそんなに面白きかと聞かれたり。近頃珍らしき愉快なる書と云ふべし。

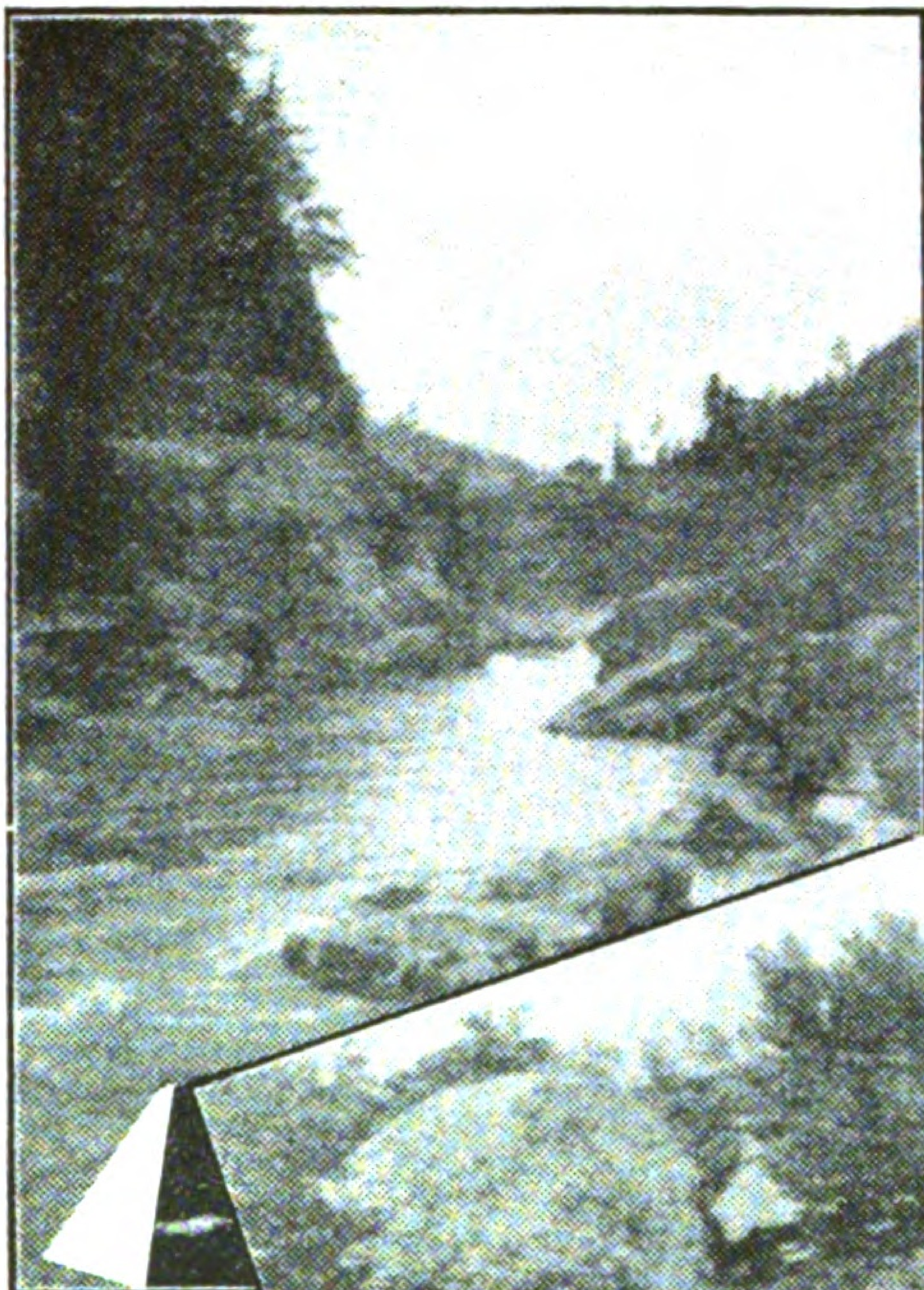
三版

おてんば娘日記

佐々木邦譯
定價參拾錢
郵稅四錢

面白い小説は必ず賣れる、本會出版の『いたづら小僧日記』程賣れる本は實際近來の出版界に類が無い。五百部千部と一時に注文する書店も多いので、始終製本が間に合はぬ盛況に在る。此の時に於て其の姉妹篇たる本書は新たに出た。面白きこと彼と同じく、天下の奇書たること彼に讓らぬ。而も其の無比無類なる面白味は全く彼と別様の面白味なるは勿論である。

版元 東京巣鴨郵便區染井傳中山縣邸內 振替貯金口座東京第三百五十五番 內外出版協會



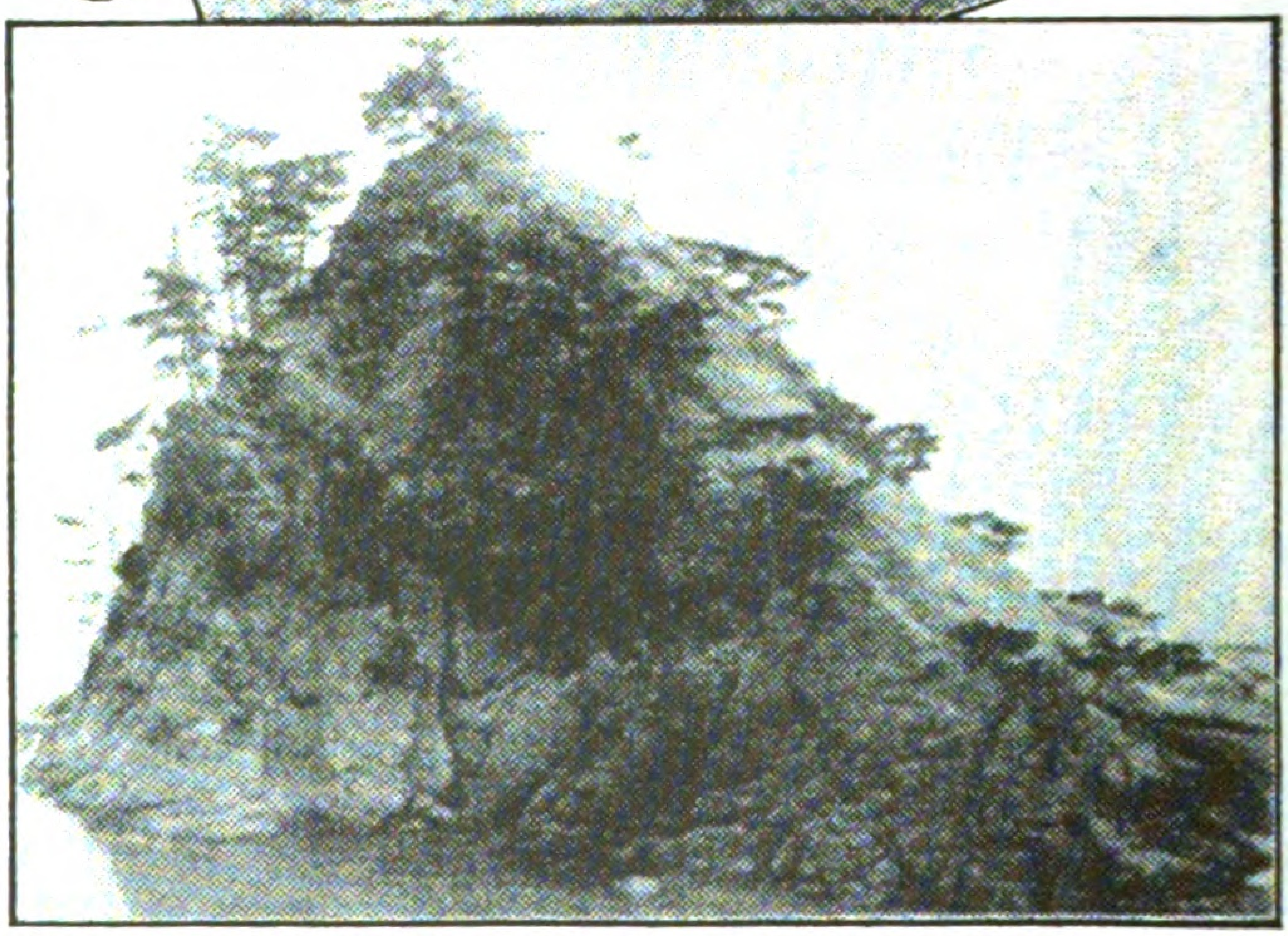
信濃山清溪

（信濃　丸山清子寄）



信濃姨捨山

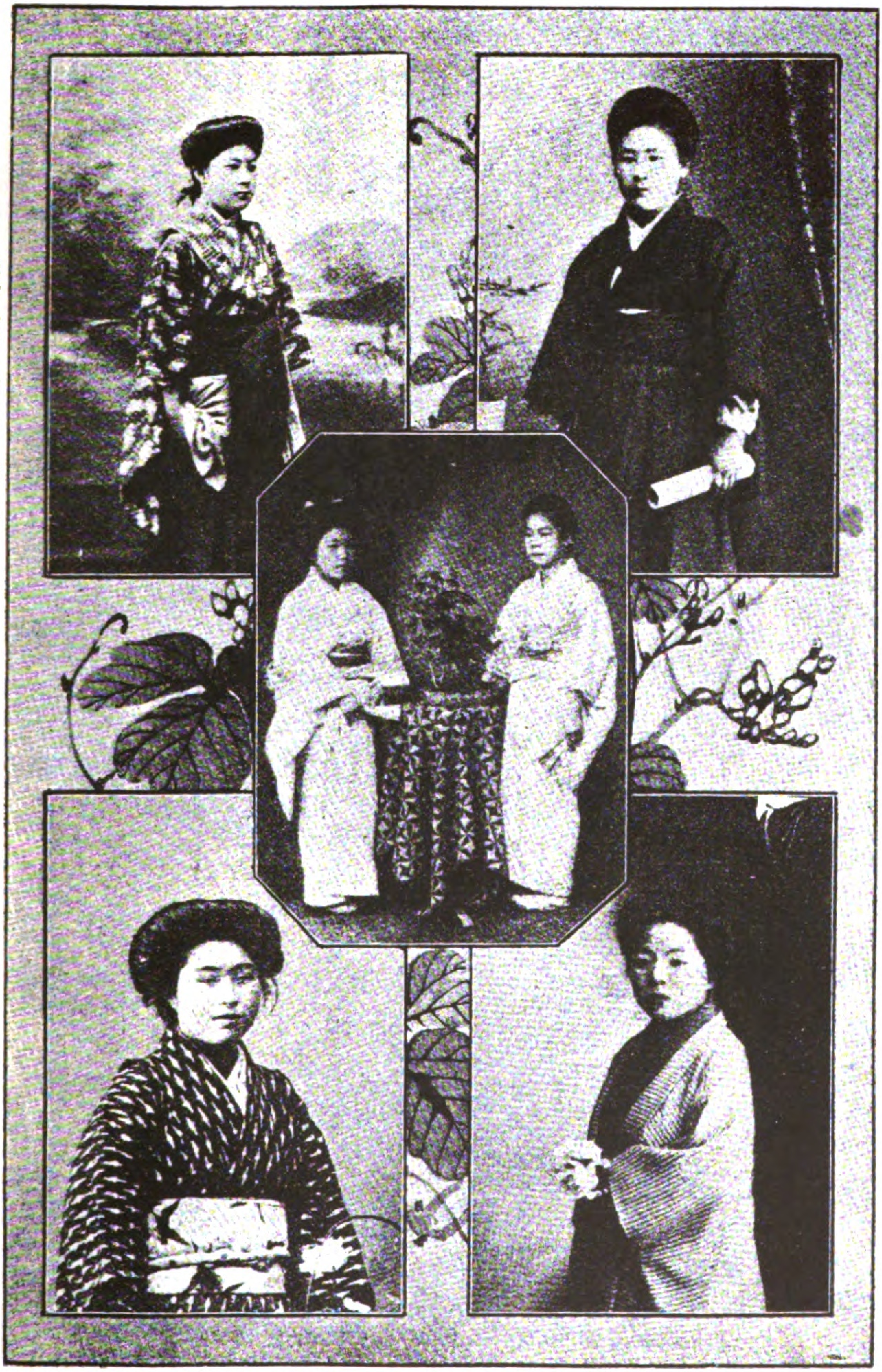
（信濃　安原富美子寄）



（京都　白井八重子寄）

丹後由良の桃島

わが寫眞帖



（下野）小島すみれ子

（東京）今井鈴子

（千葉）渡邊なか子

（山形）平田いつ子

（靜岡）中谷こはま子、伊藤もん子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇第四增刊大懸賞募集

家庭日記

日記は其日〳〵の出來事を書くものですが、只心覺えに書いて置くものと、少し氣を付けて書くのと二通りあります、今回本誌第四增刊として『家庭日記』を募集いたしますから、之を幸ひとして少し氣を付けた日記を書いて頂きたい、家庭日記と言ひましても、廣い意味ですから、必ず家庭的に書かねばならぬと云ふ理由はないので、皆さんが常住座臥の間から材料を見出して新しい考へ、新しい意味、新しい感興さへ喚起せば好いのです、寄宿舍に居らした處がそれを一つの家庭と見做して差支えないのです、要するに皆さんの生活に伴ふて起る出來事と其出來事に就いて何等かの心持とを明白に、誠實に、而して全力を擧げて書いて頂けば澤山です、　日記以外に短篇小說、美文、新論文、書簡文、詩、和歌、俳句等も例の如く募集いたしますから、何うか今より心掛けて好い作を寄稿して下さい。

▲懸賞募集項目と賞金額

日記（一等 正金拾五圓　二等 正金拾圓　三等 正金五圓　四等 正金四圓　五等 正金參圓　自六等至十等 各正金貳圓）

▲原稿は二十四字詰百行限り振假名付ける事

小說（天 金七圓。人 金貳圓。地 金五圓。（物品贈呈））

▲原稿は二十四字詰百行限振假名付ける事

美文○論文○書簡文（天 金五圓。人 金壹圓。

新體詩○和歌○俳句　地 金貳圓。（物品贈呈））

（▲美文、論文、書簡文は廿四字五十行限。詩は長短隨意假名付。和歌俳句は十首迄を限る）

圖畫（三寸の二寸大さにて薄紙を用ふ）自一等至十等 圖書切符贈呈

▲投稿締切九月三十日

發表十一月十五日

投稿心得

▲投稿の封簡には「家庭日記原稿」と書き添えること▲投稿は女子に限るべし▲紙上には匿名差支なけれど原稿の片端へ住所本名ゟ明記すべし▲原稿は明瞭に認むべし▲はがきに書したるものは一切採用せず▲入賞者には前以て通知する筈なれば其時は寫眞を送られたし▲賞金品は作物發表の翌月末に贈呈

募集發行元　東京市京橋區大鋸町　女子文壇社

好評嘖々

前半期の女子文壇臨時增刊一、二

新美文

全一册美裝
定價金貳拾錢
郵稅壹錢五厘

口繪 入選作家十二人寫眞及石版彩色樂聲三隅筆密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の厳正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學はんとする者には無双の寶典たるべし

▲附錄 名家新作

①小寒日記……薄田泣菫
②裏の家……吉江孤雁
③憧憬……小川未明
④一轉機……高須梅溪
⑤女床屋……兒玉花外
⑥捨て犬……岡田八千代
⑦火葉……澤村胡夷



女子名文 新作家

口繪 原色名畫頗鮮麗 入選作者十七人寫眞光澤紙密刷

定價金貳拾錢
郵稅壹錢五厘

若き女子が大懸賞應募の小說、美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

▲附錄 閨秀作家短篇小說

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

各紙數大判二百四十頁價格は最廉無比

東京市京橋大鋸町十二番地 女子文壇社出版 (振替口座東京第壹七貳九番) 賣捌全國書店

最寄書店になくば出版元へ申込を乞ふ



第五年第十二號

明治四十二年九月一日發行

新曲かぐや姫（第五段より）　坪内逍遙氏作

一同
「あれを見よ。不思議やな。折しも今宵仲秋の望の月の輪見るうちに、十ばかりも合せたる爛銀盤の光りとなつて、耀き輝く眞晝の光り風遠近の、草の葉、木の葉の、葉色も、葉並も透徹つて、驚き飛交ふ羽蟻の、翅の文理も揭焉たり。

司
「ふしぎやな。天地爛然として、今まで在りつる大月見えず。

一同
「いづこともなく妙音聞えて、彩雲流るゝ天の一方。見よ、煌星のやうなるもの、群り、燦き列を作つて、見よ〳〵、琴瓶降り來る金龍。次第に近づく妙音樂の、調べも今や闌に靈香薰じ、花降りかゝつて、あれ〳〵、間近く屋のむれに、怪しきものゝ降立つたり。

余は兩側の林を覗きつゝ行くと、左側て林のやゝ薄くなつて居る處を見出した。下草を分けて進みふと顧みると、此身は何時しか深林の底に居たのである、とある大木の朽ちて倒れたるに腰をかけた。

林が暗くなつたかと思ふと、高い枝の上を時雨がサラ〳〵と降つて來た、來たかと思ふと間もなく止んで、森として林は靜まりかへつた。

余は暫くジッとして林の奥の暗くなつて居る處を見て居た。

獨步氏『空知川の岸邊』より



若き婦人の根本修養

羽仁もと子

第九　感情の陶冶と趣味の涵養

まだ頭腦の單純な少女時代に、家内の雜務を學び、併せて身體をまめやかに働かせる習慣をつくり上げ、學校にて習ふ學科の追々に六ケ敷くなる頃より、學問に身を入れて出來るだけの學力を養ひ、その養ひなしたる學力を以て、適宜の暇を利用して、生涯讀書を癈することなく、得たる思想は、活ける社會に於ける經驗と相待つて、智識に於ても品性に於ても、歲月と共に限りなく進歩するとの出來る準備が整ひましたなら次に新に心掛くべきことは、私共の感情の陶冶と、趣味の涵養に就ての工夫であります。

優婉なる婦人とは何か

生花、茶の湯、琴とかピアノとかいふやうなものは殆ど若き娘の學ばねばならぬもの丶やうになつて居り

ます。實用的の才能一方では婦人として物足らぬことになるからてありませう。實用的の智識を持つてゐる丈ては、完全なる婦人の資格に缺くる所のあるヿは、實にその通りて御座います。併しながらバイオリンや活花やを稽古するヿによつて、優婉なる婦人になるヿが出來るやうに考へてゐるならば、それは大いなる間違て御座います。恰も料理や裁縫を覺えた丈けて、理想の妻または母となるヿが出來ないやうに…………。

優婉なる婦人とは、活花の出來る婦人、音樂の出來る婦人といふのてなく、その表情の美しき婦人、その趣味の深き婦人をいふのてあります。如何にせば私共はかゝる資格を備へるヿが出來るてせうか。

最も力ある母の愛

時として感情は各人うまれつきの持前て、如何ともするヿの出來ないものゝやうに思ふ方もあるやうてありますけれど、決してさうてはありません。感情もまた智惠と同じく、修養の力によつて、その先天的の種子を充分立派にそだてあげるヿの出來るものてあります。

さうして私は感情のよき發達のために、まづ何よりも父母——殊に母親のやさしく平和なる愛の中に長ずるヿが大切てあると思ひます。母の美しき愛に浴せざりし人は、その感情の上に不幸なる打撃を被むるヿは實に思ひの外なるもので御座います。且つ少年少女の時代に醇なる感情を持つヿの出來なかつた人は、長じて自その事に心づき、ためなほさうとする苦心も、多く無益に終る場合が多う御座います。この事を思つて見ると、たとひ貧しくとも地位はなくとも、平和なる家庭にやさしき母の手によつて育てらるゝ方は幸て御座います。さうしてまた皆様のやうな若き娘たちは、この優しき母となつて、多くの子女の幸福の基をつくらねばなりません。私共は、この事よりして考へて見ても、美くしき感情をもてる場合とならねばなりません。

天然と文學

母の力は實に私共の感情の基礎を据ゑるのであります。据ゑられた基礎の上に、よき建築をするのにはどのやうにしてよいでせうか。細かく考へて見ると、種々のこともありませうけれど、第一に大切なものは、天然の感化をうけることと、高尚なる文學を味ふことであると思ひます。

よき文學は讀む人の情の戸を開きて、その持前の美を發揮せしめ、或は頑なる心を和げ、或は暗き心を照らして、すべての人に多くの慰籍と、高尚なる感化を與ふるものであります。常に人事に注がれてゐる私共の心の、時に美しき自然、無邪氣なる天然に接するとは、恰も驟雨心地よく、大氣中の塵を、一掃して、清らかなる空を望むやうなものであります。俗事に疲れたる心を休めるために、さうして清らかにするために無邪氣なる自然に接する事程、きゝめあるものはありません。

私共は常に適當の時間を割いて、よき文學に親しみこれらの生活にかゝはりなきが如くに見ゆる、小さき動植物の有樣などにも、折にふれて細やかなる注意を拂ひ、心を潜めて、空の色、水の姿、四季折々の風物に接する機會を持つやうにしたいと思ひます。なほ卓越したる思想を以て、自然を詠じたる詩歌などは、これらの趣味を養ふために、殊によきものであります。

小説を耽り讀むことの害

女學校に通學してゐる位の若き娘達の、目にふるゝまゝの小説に耽り讀む如きことなどは、文學に親しむといふこととは似て非なるものであります。まだ考の定まらぬ若き息子娘の、好んで小説を讀むとは、よしその小説は左程によくないものでなくつても、樣々の容易ならぬ不利益を蒙るものであります。小説などを讀みつけますと、自然に理解に骨折れる、さうして左程に面白くなき學校の學科や、その他、日常の仕事が、知らず〳〵おつくうになり、自分の日課に興味を持つ

て充分熱心につとめることの出來なくなる結果は、いつのまにか現在の生活を不如意にし、不愉快にし、遂に不健全なる煩悶に陷りて、幸にして所謂墮落までには至らずとも、心身を害するとは實に非常なるものであります。さうして年若き時代にうけたる心身の創痍は一生の間その人についてまわるものであるからで御座います。息子娘の小說に耽り讀む消極的の損害だけでも、かくの如きものであります。況んや讀む小說そのものゝよくなかつた場合には、その害毒を蒙るとは、實に豫想外でありませう。

文學――殊に小說類は、前號までに記しました通りの修養をなし、健全なる思想と、一廉の理想とを有し幾分か現實の社會に接觸する機會をもつやうになつた時に、出來るだけ高潔穩和なる理想を有する作者の名著を擇びて讀み始め、年月を費して、追々にさま〴〵の種類の名作を讀むやうにしたいと思ひます。

第十　社會の習慣を知らねばならぬ事

日常卑近の手業の出來る上に、進步せる智識と高尚なる理想を有し、その感情は美にして趣味深き婦人でありますならば、德は自にしてもその間に備はり、眞に申分なき立派なる婦人であります。それならば、私共の心掛けて學ばねばならぬとの大體は、それでよいのかといひますと、いま一つはそれ〳〵の身分と位置によつて、自分の生活する社會習慣に通曉するといふことは、私共の世に處して行く上に、是非とも必要なことであります。

何かの小說にこのやうなことがありました、子爵某といふ一人の紳士は、風光明媚なる田園の地に於て、可憐なる佳人と相知り、綿々の情、片時も相離るゝに忍びず、靜肅なる神の御堂に偕老を契りて、新婦と共にそのいかめしき本邸に歸りました。前代の子爵夫人、

即ち今の子爵母堂は、心優しき婦人でありましたけれど、此邸には早くより獨りのかゝりう人がありましたそれは母堂の身内であるといふ、頗る虚榮心の强い婦人で、心私かに英國の上流に相應の地位を有する、この富める舊家の女主人とならうと思ひ、教育あり、才辨あるに任せて、母堂だけはとくにその手の内のものとなし、子爵に對しても、そこは賢き女だけに、目だたぬやうに肝膽を碎いて、樣々にその心をひきつけやうと試みて居りましたが、上品にして溫厚なる子爵は、常に自分に對して充分の親切を持ちながら、唯二人さし向ふ時などには、異性としての愛情は、露だに示してはくれませぬので、流石に施さんすべもなく暮らしてはゐるものゝ、いつかは必ずわが望みを遂げやうものをと、拔目なくその心を配つてゐるといふやうなわけでありました。姿も心も美くしく汚れに染まぬ子爵夫人は、その最愛なる新夫に伴はれ、さりとも知らず喜びてこの家に到着したのでありました。

此間より思ひがけなき知らせをうけて、云ふべからざる失望と、やるせなき忌はしさの中にも、どこやらに高のしれたる田舍娘と、爪をかくして待つてゐたこの婦人は、まづ新夫人の神々しきまでに美しきその姿殊に二人のまたなき睦ましさに、前よりも一層の失望といま〳〵しさを經驗したりしにもかゝはらず、到着後の數時間に於て、早くも心ひそかに凱歌を奏して、喜びました。そはその生活すべき社會の習慣に通ぜざる可憐の新夫人は、この夜直に家族四人の、いと打解けたる晩餐の席にて、已に樣々の失敗をしたからでありました。

新夫人は決して愚なるたちではありませんでした。むしろ心の底に最も賢き智惠を蓄へてゐる婦人でありました。しかもその習慣を熟知せざる社會に生活する悲しさは、萬事に行屆かぬとのみ多く、その度に夫と家の役に立つのは、即ち妻と主婦との役をするのは、例の才走りたる婦人でありました。愛する妻の行屆かぬために、屢々悶えて一人奥深き庭園を徘徊する子爵を、葉がくれの木の間に、態とらしからず見出して、

その鮮に塲所なれたる物ごしに、遂には情れなかりし人の心をあやしくも、ときめかする事が度々てありました。しかも子爵の心は容易にその熱愛し居りし妻を忘るゝとが出來ませんてした。併しながら、遂に天使の如き美しき人も、そのいと僅かなる落度のために、いばらの如き婦人のために、その愛を破られ、その位置を奪はれてしまつたといふのです。

わが住む社會の普通なる慣習は、必ず注意して心にとめ、すべての塲合にあまり、不似合なるよ、不行屆きなるとのないやうにせねばなりません。

以上九ケ月に渡りて記したる事柄は、若き婦人の修養の、兎にも角にも、大體とさうしてその順序とを盡してゐると思ひます。それ丈けの修養が屆いたならば如何な境遇にあるとしても、必ず光榮と幸福にみちみちたる生涯を送ることが出來ませう。しかもこのとは隨分に若き間の歳月を賢く利用しなければなか〳〵になし盡すとが出來ません。活花も茶の湯もよいととは思ひます。而も私はそれ以上に大切な前の如き樣々のとがありますゆゑ、むしろ肝腎の修養時代の少からぬ時間を末技のために費消することを惜むもので御座います。

●●●●●●●●●●●●●●●

次號よりは結婚に就ての注意を記します

△化粧の最も拙なるものは、顔や頭髪を人の目につくやうに飾りたて、大業に他人の目を引いて置き、ヘテきれいな人がと、我にもあらず注意する時に、此所にも此所にも樣々のあらの見出されるやうな仕方です。顔よりは襟元、襟元よりは手足と、目たゝぬ所目たゝぬ所と、一層清潔に手入れの行屆いてゐるやうにするのこそ、身だしなみの極意でありませう。この二つのことをよく心得て、すべての塲合に應用を誤らぬのが、まづおつくりの第一の秘訣だと思ふこと。

△見れば見るほど快き感じを他人に與へるといふのが身だしなみの最上なるものでありますゆゑ、まつ白な白粉がまづ眼について、注意すると脂汗がにじみ出てゐるのが分つたり、香水のにほひやリボンの色にひかされてよく見ると、毛筋の間にふけが一杯にたまつてゐるといふやうな化粧の仕方は間違つてゐます。如何に美人であつても、このやうに化粧の仕方が間違つてゐては、誠に見劣りのするものである。顔かたちの劣つてゐるために、一寸は人の目につかぬ人も、親しむまゝにどことなく清らかに爽やかなる風情の見ゆるのは、眞に嬉しきものであります。また容貌のさまて美しからぬ人の極彩色は殊に淺ましきものであります。極彩色の下より美しからぬ顔の出るのは、香水の下より汗のにほひを嗅ぎ、リボンの間よりふけを覗くのと同じとてある。化粧はほど〳〵になどいふとも、この心より出たものであらうと思ひます。

（婦人の友八月號より）

以前と變つた女學生の風俗

山脇高等女學校長　山脇房子

女學生の風俗變遷と申ますと、具體的ばかりでなく精神も伴ふ事と思ひます。

昔の女學生と、只今の女學生と比較致しますと、形の上から申ましても、精神の上から申ましても、昔の女學生の方が、すべて眞面目であつた樣に思ひます。

私共の學生時代は、今日の樣に、女子教育が盛で御座いませんてしたので、希望のものは親に歎願して、學問をした樣な譯で御座いますから、學問をする位ならば、よほど秀たものに成つて、人の模範と仰がれる樣に成らなければ、親に對しても世間に向つても、申譯が無いと云ふ心から、自然學事に熱心て、且自重心も強う御座いました、そして學校を思ふ心も教師を信ずる念もよほど深かつた樣に思ひます。彼の大坂の梅花女學校が、いまだ貧力の不充分て有つた時代に、生徒が申合せて、一週に幾時間とか定めて、編物を編んで學校の費用のたしにしたとか、川口の居留地へ行つて、一日二錢て草とりをして、其賃錢を學校へ寄附したとか、寄宿舍の下女を減じて、生徒が交る〳〵湯殿や便所の掃除の樣な事までも仕て、學校の隆盛をはかつたと申す事其他すべて其當時より、學生が子弟の情誼に厚く、先生の爲とならば、いかなる難儀も忍ぶと云ふ樣な事は、實に美事と思ひます。

其代り又一方には、形り振りに一向無頓着て髮を蓬蓬させて黑光の顏をして、衣服を裾短に着、肩を怒らせて歩くと云ふ、女らしくない風などは、好事とは申されません。

それが只今では、女子教育と云ふ事が、世間普通と成りまして、父母に乞はず共、自然其年齡に達します

と、たとへ自分は好まず共、高等女學校へも、進んでは其上の教育までも授けさせられる樣に、學校は何も彼も完備して居りますから、學生それ自身は、何所でも外形の立派な學校へゆき、年限がくれば卒業し、良緣があれば嫁ぐと云ふ樣に、ちやんときまつて居ります。云はゞ無中で學問してをる樣な譯で、學校の益をはかるとか、子弟の情誼とか云ふ樣な事は更になく、たゞ〳〵落第せずに、卒業さへすればよい位な考へで居る人が多い樣で御座います。したがつて自然勉强よりは形り振りに主に氣を付ける樣に成りまして、例へば白粉をこくぬつたり、着物のがらを選んだり、洋傘がどうだとか、履物がどうだとか、中には懷中鏡など持つて居て、時々それを出して、お化粧して居ると云ふ樣な事が昔と今と變つて來た、主なる點で御座いませう。

つまりどちらにも、一得一失は免れませんけれども時勢の進步につれて女學生の風俗も段々善良に進んで參らなければなりませんから、成可形式に流れず實力の養成に勉める事が肝要と存じます。

シュトルム二篇

秋元蘆風

七月

兒守歌が風に響いて來る、
日の光は暖かに地を見おろしてゐる、
麥は穗を垂れてゐる、
紅い實は莢にふくらんでゐる、
野は惠に充ち滿ちてゐるのに——
若い女よ、ひとり何をおもふぞ。

（シュトルム）

四月

其處に啼くはツグミか、
わが胸うごかすは春。
われは感ず、そが優しく現はるゝを、
精靈が地より出で來るを。
生は夢のごとく流る——
われに花の如し、葉も樹も。

（シュトルム）

英詩界出色の女詩人

野口米次郎

▲世界の何れにも女詩人は少い

歐洲古今の文學史を通覽して一驚を喫するは女詩人の少ない事で第一流に屬する女詩人は全く無いと云ふとが出來る、又第二流の者でも至つて僅少である。伊太利人を除いては英人は歐洲の中で最も詩的な人種といふ事が出來るが其英國に於てさゑも女詩人の數は甚く程少いのである。古昔エリサベス女王の朝は英國でも一番詩的な時代で詩は空中を吹く風程豊富で、歌は田野を飛ぶ蝗程澤山であつたと言はれて居るが、其盛大なる文學時代にも女は部分を取つて居ない。女王エリサベスとかスコッチクヰーンのマリーと云ふ人共は多少詩を書いたといふ跡があるけれ共、大體からいふと其時代には女詩人は無つたと云はれる。然して十八世紀になつて女詩人が顯はれたは顯はれたが其時代を動かすとか代表するとかといふ大詩人は發見せられぬ

十八世紀は今日の時代と比較すると女に對して詩人たるに適して居つたと云ふのは、英國では其時代に已に女には充分な教育を與へて一般に國は富んで居るのであるから、夫れ〳〵時間も有して居れば、旅行もする(何が詩人たるに必要であるかといふと其大なるものは時間と旅行であると思ふ)寔に女が詩人として活動するには好時代であつた。此を今日に於て見ると如何、女も時代の影響と壓迫を受けて、教育の點は教育され過ぎて居ると云へる。如何なる職業の道も開かれて女でも大學で數學の最高名譽を得るといふ時代である。女の學生は希臘語の劇を演じたり、又演ずるのみならず希臘語の劇や詩さへ書くといふ所謂文明の今日だ。今日は今日であまり文明過ぎるので女詩人は出ないものと云へる、佛蘭西は女の修養に關しては進んだ國だが女の論文家とか小説家(此等は文明の産物である)と云ふものはあるけれども詩人に至つては無い。

西班牙に於ても同じてある、伊太利には二三の女詩人があるけれども第一流ぢやないので、又大なる獨逸の詩人、ボノサシユの詩人、露國の詩人皆男子だ、眼を轉じて印度、波斯其他の東洋を見ても今日は女詩人の無い時代てある。十九世紀の半印度にトル、タツトといふ、年僅に十八歳といふ稀有の女詩人が顯はれたが詩を作り初めてから僅々數年立ぬ内に死だ。思ふに精神上發達の期に達せぬ以前に餘りにこれを費過ぎた結果てあらふ。この女詩人は特種の例て、近世は大小を論ぜず女詩人に乏しい時代てある。



も同様てあると知る事が出來る。

▲女詩人の振はざる理由

古今東西を問はず、斯く女詩人が少ひ所を見ると文學上に於ても女は男子に比較すると大に劣る所があるからてあらうと思ふ、成程古昔希臘にはサホといふ大女詩人があつたのみならず、サホ時代には女詩人には豐富てあつた。然し彼等の殘した作品を見ても明白な事だが、女が詩人としては詩の短詩形に於てのみ勝ると言ふ事は言へるのである。此點は日本の歌界には比較的女詩人の多いのを見て短詩形の詩に於て勝

る所があるといつても詩人として男と比較するとが出來るといふ譯ぢやない。實際に於て女は男子と競爭は六ケ敷と思はれる。又詩の上に於てのみでなく彫刻でも音樂でも繪畫でも最高の藝術上て男子と席を爭ふ迄には時日を要すると思はれるのである、或は將來とも不可能かもしれぬ。女の長所は其他に於て發見せねばならぬ。

然らば如何なる理由で然るか、其答は單純である。女は男子に比較すると、男子が有するが如き强大なる神經作用を有して居ない、如何なる藝術でもこれを完全にしやうとするには永き經驗的努力を要し又非常なる神經的出精を試驗せねばならぬ。けれども女子はこれに堪へることが出來ぬ。又人間としての感情の點でも女は或は微細なる事は出來やうけれ共、其强大と深淵なるとは男子に劣るのである、自然藝術の大作は出來ぬ事となる。

二三時間詩人が作詩に苦心するのは二三時間激烈なる身體上の勞動より疲勞を來すのである。如何なる力の勞動に堪へても時に依つて精神上の勞動に堪へられぬ事がある。又身體と精神とは相待つて働きつゝあるのを發見するのである。女が或る藝術に對して全く不可能であるのを見るのである。此處に女は母となる大責任を有して居るのであるから、其爲で來るだけ勢力を貯蓄して後日の要に供へんとするのは自然の方則である、可成く神經作用の經濟を實行して他日子供を作つて之を養ふ時に必要なる場合に供へんとするのである。誰でも斯る理由を考へて居るのではないけれど天の配劑上そうなつて居るのである。故に母たる運命を有し又有する運命を迎へるのであるから男子の如く頭腦を動かし又神經作用を亂すことが出來ぬのである。女に大詩人が無い又大文學者がないと言つても其は女の價値如何と論ずるのではなくて女には他に女の長所があるのを說明するのみで別に驚くには足らぬ。又ないのが至當であるかもしれぬ。今女詩人ありとせば其詩人は女の本分たる短詩形に於て勝る詩人であり又あらねばならぬと思ふ。

▲此處に一個出色の女詩人あり

女をして詩人たらしむるには十八世紀より十九世紀の方が不適當ではあるけれ共其數に於ては十八世紀より十九世紀間に女詩人が多い。其幾多の女詩人が頭を上げて一時の名聲を保つたが今日では全く忘却せられて

居るのが少くない、ヒーマンス夫人は有名てあつたけれども今日夫人の詩を讀むものはあるまいと思はれる又ブラウニング夫人の作は一時其夫たる人の作より遙に上作てあるとさへ評せられたが、今日になると夫人の作て後世迄殘る價値のあると思はれるのは僅々數頁に過ぎぬ。エリオツトは小説を以て名をなした作家てあるけれ共詩をも作つた人だ。然し今日ては其詩は寧ろ一種の骨董として見より外はないのてある。此處に比較的大なる女詩人があつた、其人は前の四人より詩人として永續的價値を有して居る、其人はロセチ嬢てある、實際嬢と同時代に顯はれた數多の男子の詩人と比較しても嬢の作は感情の微細に渡れると、信仰の深くて力のある點に於ては勝つて居るのてある。如何なる女ても肉體上の力は男子に勝ることは出來ぬ、又文學上の作品も其作者の肉體上の勢力如何に關係する。テニスン卿の如き大作を後世に殘さうとするには卿の如き肉的勢力のある人てなくてはならぬ。又ブラウニングたらんには神經的活動が等き程度の人てなくてはならぬのてある、然るにロセチ嬢は女であるのみならず女としても特に薄弱なる女て、靜かな小作な婦人てあつた。而して忍耐と精神的努力とて斯る作品を殘したのは驚かざるを得無い。

▲ロセチ嬢

有名なダンテ、ロセチ（詩人幷に畫家として）は嬢の兄て、今日尚生存して英國評壇の大家なるウイルリアム、ロセチは嬢の弟てある。嬢に姉があつてマリア、フランセスカ、ロセチと云つた。此婦人は作詩は遣らなかつた。一生宗教的信仰に捧げた人て、嬢も此婦人の影響を受けて遂には一生未婚で暮して同じく靜謐て寧ろ寂莫な生活をしたのである。嬢が死の前後は全く宗教家の態度を存して人をして其の敬虔の念に撃れしむるのである。人生未婚て終ると云ふのは女として不自然てあつて、結婚したらば同情と愛とが子供とか家庭の方面へ向くべきであるけれ共、嬢に於ては宗敎又は天國的の理想の方へ向つたのである。若嬢にして結婚して幸福なる家庭ても作り得たならば宗敎詩といふ普通の信仰を歌つたものよりも世間的の詩を多く殘したのであらう實際に於て詩の價値よりいふと如何に嬢の詩が良くもあまり其文學的價値は大なりとはいへぬ。英詩界に於て不朽の名を成す所のものは嬢の宗敎詩てなくて世俗の詩てある。又嬢の詩中に宗教詩と

も付かず、世俗の詩とも付かず一種の變調の詩がある文學的なると宗教的なると半して居るのがある。今一例として擧げると Up-Hill と云ふ小篇である。孃の詩は字句の單純を以て有名であるが此詩は特別に單純を極めて居る。其色彩音調の上には此詩は勝つて居ない。けれ共其力に於て再讀三讀の價値がある。表題の『山路』と云ふのは我々の人生の行路を云つたので、詩中人あつて問ふて云ふのに、『かう山路ばかりだらうか、——かう骨折つて苦痛ばかり感じ無つてはならぬのか』孃は答へて云ふのに、『然り生命を終つて死する迄』詩中に句がある曰く、汝はあの客舍は見あやまる事はあるまいと、("you can not miss that inn.")此客舍とは墓場を云ふので我々人生の旅客は誰でも見落さずに死といふ點に達し得るのを意味するのである。又詩の中に『汝の勞働に對しては其報酬があるだらう』といふ句がある。即ち "Of labour you shall find the sum" て、此世の中で我々の爲した報酬は何日かは拂はれるてあらうとて、此現世ばかりでなく未來の希望を存して居るのであるが、如何なる報酬なるやは明言せられないので暗いサツゼツションを引起して詩としては妙てある。この『山路』と同じ意味を更に簡單な美と結成の力で歌つて居るのが『境界』とてもいふ一篇てあらう。

▲滑稽恐怖奇異

孃の詩は一見宗教の詩とか思想の詩とか思はれるけれど其實說話の詩であるのが多い、其說話の詩は數が多くない中でも其の二三篇の作は其種の詩として第一流に屬し、孃の時代に顯はれた英詩中高き地位を取る事が出來るのである。孃の說話詩は一種のフエリー、テールて其お伽噺が想像に訴へ奇異の美を極めて居るのである。此のグロステク（今譯して奇異）といふ事は滑稽的の分子と恐怖的の要素が合して奇異の狀態を顯すのである。孃の詩に於ては時としては恐怖的の分子の多いこともあれば、他の場合に於ては滑稽的要素が勝つとがある。孃は特種の技量を以て其の奇異なる精神を一種優美な說話に入れ込だのである、此時代に於ける詩的活動は盛なもので、兄のダンテは悲劇的であり又神秘的な感情の上に詩を作り、スウインバーンは所謂レネイサンスの感情を以て熱情の放縱を極めて居る。又モーリスは英雄的精神を北方の傳說を借りて歌つて居たが、孃の如く、道德の背景を持つて奇異の

香氣を放つたフエヤリー、テートルに手を付けた作家は無つたのである。

▲幽靈のねがひ

孃の復活的詩に The Ghost's Petition（幽靈の請願）といふのがある、此詩は必ずしも奇異を以て勝るのではないが英詩界好いものゝ一である、此詩の思想は妻の悲哀の情が死だ夫の靈をして妻の部屋へ歸らしむるに至つたといふのである。斯る問題を歌つた英詩は少くない、ロングフエロウに一篇の詩がある、ロングフエロウの詩では生き殘つた者の涙が地中に染込むので其下で眠つて居る死者は不安を感ずといふ思想を歌つて居る、孃の詩は少しも悲劇的の感情はない、死者の靈が生き殘つて居る妻の部屋へ來るのも極めて自然に歌はれて居る、二人の女其中の一人は死んだ男の妻てあるが二人とも悲哀に落ちて、「暫時たてば歸つて來る」と云つて死んだ男を今や來るかと待つて居る。妻なる女は妹なる女を無理に眠らしめて自分獨て亭主の來るのを待つて居ると夫は自分の部屋へ來たのてある、女は何故夫は戸を明けて入つて來ないかと疑つて居たが兎に角夫は面前に立て居るので夫に不快な顏を見せまいと涙を拂つた。夫の靈は妻の側に寄つて妻が嘆く爲め自分は死んでも休息と安意を得ないと語る、妻は不平である。夫は何故に幽靈としてのみ歸つて來たかと問はんとして居る、且墓場の下て何を爲してゐる、自分も後を追つて行きたいものだといふ、亭主は云ふ。

What I do there I must not tell;
But I have plenty, kindwife, content ye;
It is well with us,——it is well.

Tender hand hath made our nest,
Our fear is ended; our hope is vlended
With present pleasure, and we have rest.

自分のなす所のものは語る事が出來ぬけれ共何不自由なくして居るから安心してほしい。悲哀は終り希望は快樂と合して我々は墓場の下て休息しつゝあるのてあると語つた、所て妻なる人は直に死を欲し、顧みて現實の寂寞を思ふと堪られ無いので、汝にして許すならば自分も墓下の生活を共にしたい、涙を拭つて喜悦の狀を爲すべし自分て感ずる苦痛はあつてもその苦痛て以て汝を喜ばしむるとは出來ぬ故有つて益なき苦痛で汝を妨げるのを止めやうといふので終つて居る。

▲怪物市場

ロセチ嬢の詩中最も有名なはGoblin Marketで、此詩は奇異を極めて居る。ゴブリンは怪物でマーケットは市場といふ字てある。歌つた所の者は化物共が夜な〳〵寂しい場所へ出掛けては美くしい若い娘共へ、妖魔の果物を賣つて歩くので、其果實は安いし驚く程美しくつて甘い、然し一度これを口にすると其味忘る可らずして再び之を欲する。果てはこれを喰た女は直に老ひて死するに至るといふのである。英文學の批評家は之を稱して不思議の作品として多くの人は此詩中に伏在してゐるモーラルを發見しようと勉める。然し已にフエリー、ストリーてあるから何も其意味を丁解せようとしたり、モーラル如何を論ずる必要はあるまいとおもはれる、又何程勉めても解結せられぬのである知られ得る點は一人の娘が自箇を犠牲として其妹を助けるに至つたといふとのみてあつて、其他は何故に嬢はこのゴブリン、マーケットを書くに至つたかは了解せられる所のものてないのてある、前いつた如く、夜な〳〵化物共が果實を賣つて歩くのを一の娘が聞いた、然し姉が常に其悪しき事なるを誡めた、所で自分獨で居る時例の化物共の通つてゆくのを見て、ソット覗いて見ると成程美しい果實だ。然し化物共の顔を見ると或る者は鼠の顔をして居るし、或る者は猫の顔をして居るし化物と雖も他にはもつと美なるものもあるべしと思つた。果實は美であるから聲をかけると化物共は寄り添つて來て彼等の語る言葉の優しさは恰も鳩の聲の如してあつた。化物共は買つてくれと願ふが娘は買ふ錢がない、錢がなければ頭上の金髪の一房て賣らむといふ。

"you have much gold upon your head,"
They answered all together,
"Buy from us with a golden curl."

所て娘は毛髪の房を切つて妖魔の果實を買つて、化物共が笑つていつてしまつた時始めて味はつたが、其美味なる事言語に譬へ難してあつた。姉に遇ふと姉は一年前或る娘が化物共から果實を買つて喰べた爲め秋になつて毛髪は灰色と化して、死んだ。何故ならば喰べたくて喰べたくてならぬのに喰べる事が出來無つたからてある、と語つた。妹のローラ（ローラ果物を買つた娘の名て姉の名はリジーといつた）は毛髪さへ遣

れはいつても買へると思つて居つた。二人の娘は床を並べて安眠に就た。ロセチ孃は其眠つた有様を以下の美麗な句て歌つて居る。

Golden head by golden head
Like two pigeons in one nest
Indeed in each other's wing;——
They lay down in their curtained bed,
Like two blossoms on one stem,
Like two flakes of new-fallen snow,
Like two wands of ivory
Tipped with gold for aufel kings.

金髮の頭を連ねて眠つた樣は一巣の中て羽と羽とを一にして眠つて居る鳩の如だ。又之を譬へて見ると、一莖の上に咲ける花か新らしく降つた雪の二片か威嚴正しい王様のため作れる金の頭をもてる象牙製の二本の杖かと歌つて居る。翌日になつて果實を喰べたローラは喰べたくつて堪られない、賣りに來る化物も居ないので急に其毛髮は變じて灰色に成つて來る。之を見て姉のリジーは妹の生命を助けて遣りたいと思つては私に化物を見付に出掛た、所が幸にして出逢つたので錢て果實を賣つて呉れと賴んだ、化物は即座に其果實を喰ふならば賣つてやらうといつた。喰べないと答へたので化物共は怒つてリジーを倒し踏んだり蹴つたりして果實を口の中へ押入れて喰はせやうとしたが中々承知しない、又化物共がリジーを殺すことの出來ないのはリジーは善良なる女であるからてある。惡魔は善良には打ち勝つ事はてきぬのてある。所で仕舞には果實を其儘地上に打遣つたまゝ何處かをさして行つて仕舞つた。ロセチ孃は歌つていふ。『或る者は地上て紐絡み、或ものは渦巻き泡立てゝ水中に潜めり、或ものは音を發せずして强風に乘じて疾走し、或ものは遙か遠方に消え失せた。』リジーは歸家して、自分は果實は喰はしなかつたが其味を嘗て來たから唇を嘗よとローラにいつた。ローラは夫を嘗るや否や地上に倒れたが其爲め彼女の一命は助けられた。數時間立つと再び彼女の美とユーズは歸つて來て昔日の美なる娘に立ち歸ることが出來たといふのてある。

▲親王様の御成

The Prince's Progress はゴブリン、マーケットに比すると大に長し又形式上異つた作品てある、表題は譯すると『親王様の御成』とてもいふてあらう。

或る親王（或は王子）が御姫様と結婚の約束をして某日いよ〳〵偕老同穴の祝宴を張ることにした。御姫様は其日になつて約束の場所へ來ても親王様は御成がないのみならず、親王様が其場所へ到着せられた時は已に約束の日からは殆ど十年も後てあつたといふのてある親王は道々種々なアドヴエンチユーアに出遇つたのである、此詩はゴブリン、マーケツト程世に有名な作てないが詩としての美は劣つて居ない、恐らくは餘りに美すぎるともあるかもしれぬ。此詩に於ても孃が奇異な想と優美な感情とを一にする手腕を有して居つた例を見ることが出來るのてある。

▲少女の歌

然し詩の形式上の妙を知んとするには孃の短篇て題して『少女の歌』といふのがある。三人の少女が夫れ〳〵自分の歌の魔力て夫を得たといふのを歌つたもので一章〳〵の最後の一列が皆等しく韻を踏んて居る點を見るべきて、今例を上げていふと

To her hand more soft than *snow* と with pathetic
pleading *low* と Honey-smooth the double *flow*

の如くスノウとロウとフロウと韻を踏んだのてある。

然しそれが四つや五つならば六ケ敷は無いけれども全篇二十一章からなる詩て皆この形式上の一致を保たしむるのは作詩上少からず天賦の才がある作家でなくては出來ぬ事てある。

▲北方からの愛戀

其他ロセチ孃の作品て注意すべきものは『北方からの愛戀』Love from the North といふ一篇のバラドてあらう、此詩に於て孃は神仙の土地を離れてお伽噺的てなく中世紀の愛戀談を話すのてある。女といふものは力の強くて精神の健かな男子を欲して夫たらしめんといふのてあるといふ意義を歌つたのてある。スコツトの若いロチパーといふバラドに比較せらる可き名篇てある。テニスン卿もプリンセスの詩中ロセチ孃の詩を想はせる様な句がある。自然のエコノミーとでもいふのてあらふか、女が自然に強壯なる男子を撰ぶのは強壯なる子供を望むといふ念慮が無意識の裡に動いて居るのを説明するものと見てよからうとおもはれる。或評家は此のロセチ孃の詩は遥かにスコツト以上と云つて居る。もう一つこゝに讀者の注意を促したいと思ふのは孃の小篇て『三期節』Three Seasons といふ作て

ある。此詩の中にはシンボリズムもあり又神秘の香氣も發見せられる。

今其詩を上げて見るところである。

"A cup fos hope!" she said
　In Spring time ere the bloom was old:
The crimson wine was foor and cold
　By her mouth's richer red.

"A cup for Love!" how low.
　How soft the words; and all the while
Her blush was sippling with a smile
　Like Summer after snow.

"A cup for memory!"
　Cold cup that one must drain alone;
While Autumn winds are up and moon
　Across the barren sod.

Hope, Memory, Love——
　Hope for fair mom, and love for day
And memory for the evening grey
　And solitary dove.

これは小篇ではあるが或る評家に云はすると十九世紀間詩の作物中最も美なるもの丶一といふ、一讀すれば一種の繪畫の色彩を想起し此詩の深き感情で動かされざるを得ない、こゝに三箇のスタデーがあつて三期節を代表してゐる。又朝、晝、夕と一日に見てもよい、三期節とは年と我々の人生の三期節である。未だ一人前の女にならぬ青春の愛戀に燃る娘には希望がある、其娘が酒杯を擧げて何事かを誓つて居るが彼女の唇は酒よりも更に赤色である、之を繪畫にして見ると春の繪だ。人生の春の繪である、花は亂れて咲香つて太陽は鮮かに照つてゐるといふのである。次の章になると、時節は夏になりて前章に於ける少女、今は一人前の女に成らむとして居る。已に或男に結婚を約束して其日の近きつゝあるのを思つては微笑をたゝへて居る彼女は愛戀の杯を擧げて居る、三章になると最早秋だ、彼女も已に年をとつて今や記憶の裡に生活しつゝある樣になつた。空は寒くて灰白の狀を呈し、秋の風は吹いて萬物皆荒廢の躰を顯はして居る、四章に於て歌はれて居る如く、人生は一年の期節を同じく、希望といふ春に出て丶夏といふ愛戀に入る。愛戀に入つたかと思ふと秋の寂寞を感じて人生は皆記憶の悲哀のみ

と感ずる様になるのである、これを一日に譬へると希望は朝で愛戀は日中で夜は則ち記憶の悲みである。歐州の繪畫で、鳩を以て悲哀を代表せしめる事が行はれる。鳩は別離とか愛戀の悲哀を説明する鳥で、極めて情合に富んで居る鳥といふ事で、鳩の一番があつて、其一方が一つ殺されてもすると他の者は悲んで死するといふ事が傳へられてゐる。此詩は詩形上の問題を外にして詩の感情の點に於て卓越して居り、徹頭徹尾婦人の作であるといふ優美な香氣を放つて居る、名作といふべきであらう。

ロセチ孃の作品の四分の三は所謂宗教詩であるけれども、今此處に掲げない、其多くの物は餘り讀者に訴へる所のものが少いのである。一時は大女詩人として名聲を馳せて今日では人から珍重がられ無くなつた、ブラウニング夫人に比較すると、孃の作品の方が非常に其生命は長いものといつてよからうとおもはれる、ブラウニング夫人は藝術家には必要なる藝術的制限を自分の作の上に實行することが出來なかつたが、孃は其作品によく其態度を示して居る、形式上に於て自然に欠點がないのである、前いつた如く女の詩は短詩形の上に組成せられて其卓越を示さねばならぬが、孃の作品は、其長いものでも他の英詩人の作に比較すると、短篇であるといへる。其他孃の作品は勿論短篇中の作品ばかりである。

詩壇片言

○詩壇の未來危殆の念を抱く者は蒙昧の徒なり、自然科學が如何に進歩するとも、我等の心臟に血の通ふうちは歌あるべし。

○詩壇二十年の歴史を無視し、破壞し、口語詩の易きに就かんとするは災なるかな、口語詩は易きが故に作るべきものにあらず、むづかしきものなるが故に容易に手を下し難し。

○詩歌の衰頽は青年の墮落なり。

○詩は論ずべきものと思ふ勿れ、詩は作るべき者なり。

○女子の作詩の振はざるは、一般に新しき詩歌の修養に乏しきが故なり。

○詩を流行品として取扱ふ間は、未だ眞の詩は現れざるべし。

○本年の詩壇は概して倦色あり、二三の青年詩人を除いて殆んど表面の活躍なし、先進も後進も一致して大いに振はざるべからず。

月

川路柳虹

磯の沙、松の上、
淋しみに濡れた
月がかゞやく。

一いろのさびしさ……
風はかるく丘から
悲しみの色を口づけ、
廣いひろい海へと
おちてゆく。

わが追憶の
細やかな音樂、
夢の言葉、
斷れ〲に絶えて
いま、消えてゆく
亡却のふち、

磯の上には
淋しい月がゐのこり、
白み疲れて照らす
光り――

そこには まだ
私の知らぬ悲みが潜み、
息づき、
恐しく輝いてゐる。

悔

路の並木の上に
重く被さる雲の色、
沈んだ息に見かへるとき、
白い「悔」が悲しくかゝる。
…………
今日も
今日も
疲れはてた魂……

橋の上

加藤介春

私は此所で再び、
白い顔の――センシブルな眼の……
彼れに今會へる氣がする。

さつき會ふた彼れ
青い傘を斜めにして
ゆき摩りに別れたが

その行きずりの一瞬が、
長い記憶となつて
再び彼れに會へる氣がする。

頼りない凝視が、
それからそれへ、
極めて早く……熱烈に。

町の並びの高い家、
電車の音、
塵埃の立つ態。

橋の上……其所で
白い顔の――センシブルな眼の……
彼れに再び會へる氣がする。

晝の二人

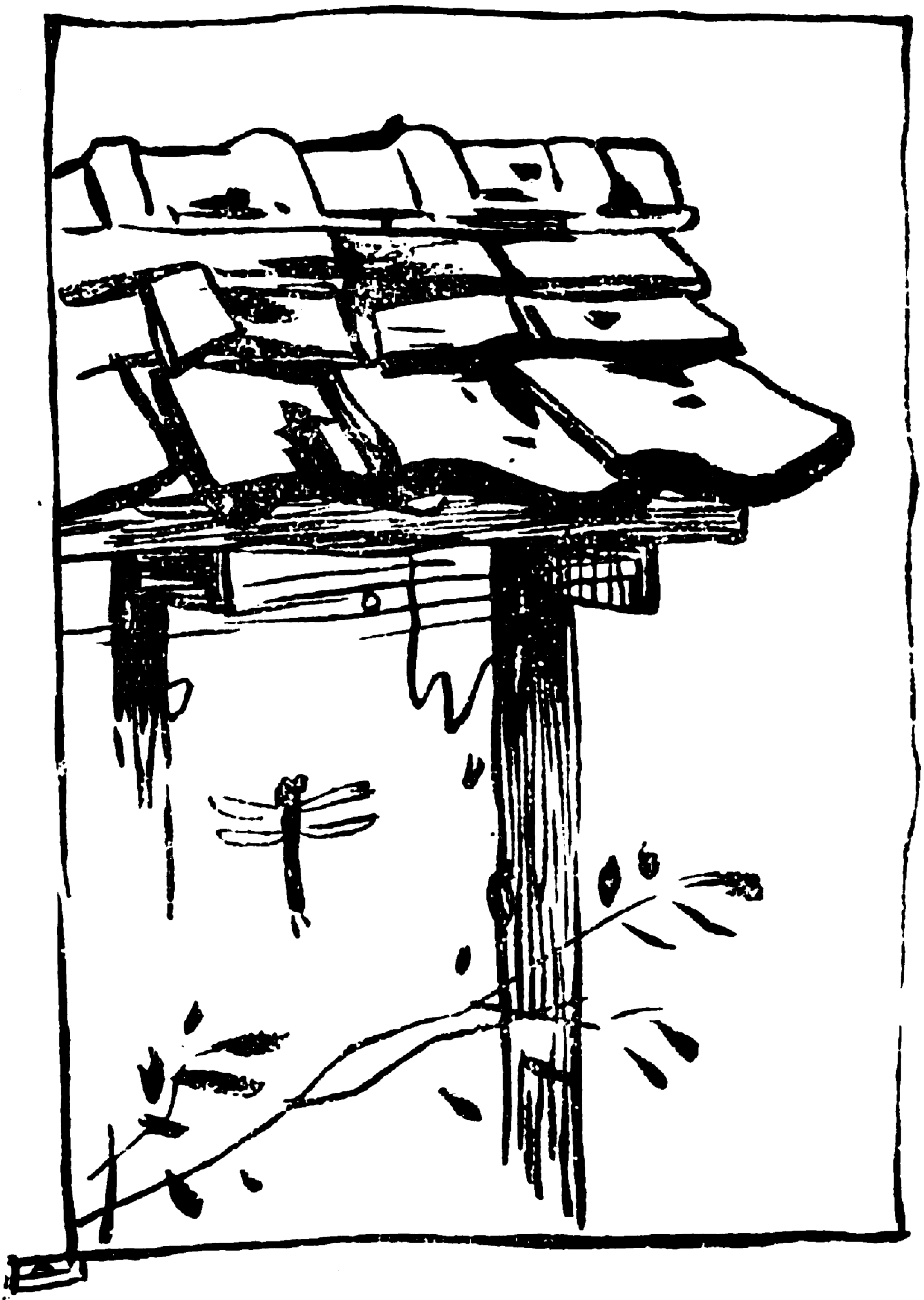
眼で呼ぶ、
頰笑む、
近く、
佇む、
顔あからめる。

手を握る、
わななく、
接吻、
――ああ晝、
ああ晝、
恐れて逃げる。

優雅なる南清の舊都

清國浙江師範學堂教頭　中桐確太郎

私の行て居る杭州城と云ふのは、浙江省の一部で、南宋と云つた昔からの古い都であります。戸數八十萬戸と稱へられて居ますが、實際の人口等どれ程ですか詳しいとは分りませぬ、なかなか大した歷史を有して居るので、一時長髪賊の打撃もあつたりして、多少の消長はありましやうが、大抵文明も傳はつて、今に優雅な風が殘つて居る、人間も華車である、日本で云ふと京都と云つた樣なところであります。



十三世紀の頃に、伊太利ヴエニスの人でマルクポールと云ふ人がありました、此人は元の忽必烈の顧問であつたと云ふ人ですが、印度洋を渡り支那へ來て此地を通過した時に、「天にパラダイスあり地に杭州あり」と激賞したと云ふ事です。今も殘つて居る靈隱寺と云ふ寺に五百羅漢があります、其の五百羅漢を作つて居る時にマルクポールが來合はせ

て、自分の形のも作らせて、達磨波羅と名づけたと云ふ口碑があります。

城内はなか〳〵廣く、いろ〳〵の古蹟がある、有名な岳飛の墓もある、吳山の第一峯など云ふものも城内にあります。

杭州城の西方に西湖と云ふ支那第一の景色の好い港がある、其れと相對して葛嶺と云ふ山がある、其處は葛洪仙人と云ふ人が住むで、藥を煉つたと云ふところです、この仙人は抱朴子と名づくる書物を著はしました。其れから天竺と云ふものがある、上中下に分れて三天竺と稱へられて居る。

杭州の東に鐵塘江と云ふのがある、此處はかの『爐山煙雨浙江潮』と云ふ有名な詩にもあるところで、舊曆八月十八日になると潮が高く騰る、これは世界の名物になつて居て、今では其頃見物に來る者も澤山あります。

て、古來名高い文人の、白樂天、蘇東坡、林和靖など皆この杭州に住むだ、その跡もいろ〳〵殘つて居ます、林和靖が鶴を放した跡なぞもあります、かく景色が佳く、名所が多く、散步に適して居るので、『蘇州の女を妻にして杭州に住み楊州に死ぬ』と云つた唄がある程、住み宜いところと言はれたものです。

この漢人と北方の滿州人とは人種までも違ふのでは無いかと思はるゝ程違ふ點が隨分多いやうです。氣風は凡べて民主的で自治政を長く取つて居ます。で、勞働者などを見ても如何にも生活に勞れ切つたと云つた風で、全體の調子が迚も日本の勞働者などに見るとの出來ない悲慘な色が顏に現はれて居る、而も貧富の懸隔が隨分甚しく、一方に金持があるのですが、其れであつて一揆や革命が起らない原因は其れ〳〵其道が講ぜられて居るからなんです。

其一つは同善堂と名づくる養育院があつて、其處には貧民救濟の組織もあり、私生兒などを引受ける方法も設けられて居るやうです。又寺とか宮とか役所とかを中心として、冬の寒い頃などにはお粥や何かの振舞をする、中には知事が乞食に扮けてお粥を求め、この粥は餘り水つぽいなぞと叱る、其んな事で名聲を博する事もある。斯樣な社會的慈善事業が隨分行き屆いて居る。其れから自治の組合が作られて居て何一つと雖も此組織に洩れるものはない、甚だしきは豆腐屋のお神さん達の寄り合などがある、これらはよく取調べると經濟上面白い事だらうと思ひます。

支那の文明は西洋文明に似て居る、其衣食住の生活共に相通ずる節が多い、若し西洋にも或る要素が入て居ないならば、たしかに恁う成つて來るのではあるまいか、云はゞ爛熟の極單純に成つたものゝ樣に見える。服裝などの事一つを考へて見ても、唯ズボンを穿いて長いマンテルを上から着た丈けです、これは洗濯も容易で、折目をつける必要もなく、唯バサ〳〵としてゐる、實に單純なものです、けれ共此の一事に於てさへ初めからの單純なものではないとが見える、で、思想などにもさう云つた傾向があつて、滿洲は唯大體軍事上の支配をする丈け、云はゞお城の番丈けて、漢人其者の眼中には無く、生活の實權を握つて居れば其れて宜いのだとして居る、つまり國家的觀念を絕してゞも居るのでしやうか、昔しの宗主の怨恨をどうしやうと云ふ樣な事は毫も念頭に置いて居ないらしいです。



女子なども日本の樣に恥しがつたりする樣子は無い近頃は纏足もして居ないし、體操の如きも好んでどし〳〵やつて居る、それはなか〳〵活潑なものです、又實に澄ましたものです。

女の服も例の單純なのですが、材料は大抵絹地て、

色は澁い、其癖色彩の強い、一色で地味な中にセンシユアルな感を與へる色を以て作つて居る。少し齡の行つた人は長い目の服を着ますが、女學生はズボン丈け膝の邊までの服を着る、其れが所謂ハイカラなんてす、さうして一體纒足の遺習の爲め足が拇指の方に發育して居るので、歩るくのに手を振つて中心を取るとてろから、なか／＼威張つて見えるのです、直立の姿勢も宜い方です。

其れから漢婦人は滿洲婦人と違つて髮の結び方も簡單である、中には廂髮もやつて居ますが、例の支那一流の額を三角にして、軟かい髮を一絲亂さずに梳いて居る、其色も實に好いので、そんな色出しの爲め三十幾種の油を用ひて居ると云ふのもあります、て、頭には笄を三本さして、梅とか梔子とかの生の花を摘み取り針金に連ねいてかける、蕾は又櫻絡のやうにしてかけるのです、から云ふ花はすべて香の高いものを尙びます。白粉のつけ方も上手な樣です、化粧は盛んに行はれ、裏店のお神さんに至るまで、濃くつけて頰の邊をホンノリ紅く見せるやう彩つて居る。

是等の女子中、今どれ丈けの自覺心を以て敎育を受けつゝあるものかは分りませんが、女としての身だしなみ愼しみ、新らしきもの丶爲めに古きものを碎かない點、だらしなき事を爲さずしてやつて居る點は宜い、手工の技倆は殊に勝れ刺繡などなか／＼巧みてあります。

元來同國政府の、壯丁學堂敎育章程にある方針を見ると、中學以下は別として、女學敎育は家庭に於て爲すべきものとして、學校を認めて居ない樣ですが、しかし日本の敎育方針を採り新らしい文明を紹介すると云ふ事になつて居ます、丁度明治の初年中日本にもあつた、革命思想に伴ふ女權擴張と云つたところから覺醒して來たものと思はれる、賢母良妻と云つた主義を唱へる學校もあるが、其生徒中旣に人の妻たるものが隨分有る、土曜日などに其夫が寄宿舍に迎へに來ると、伴はれてサッサ／＼と歸つて行く、こんなわけですから日本で云ふ樣な賢母良妻主義と云ふ事も結局意味が少なくなるのです。

結婚は十六歲位からである、再婚すると云ふ事は無論ない、さうして未亡人は尼寺へ這入る、是れは家寺と云つて未亡人になると新らしく作るのです、もとより佛敎の盛んなところてお寺も多いが、更にこんなわけて尼寺が多い、二百人も住んで居る寺がある、こん

な事から勢ひ惡風が生ずるのてしやう、尼寺は淫賣窟だとかいろ〳〵な評もあります。

例の關帝の廟も處〳〵にある、其お宮の周圍に倶樂部の樣なものが設けられて居る。女子は家庭に於てさへ接待などもしないから、男子に會ふ樣な事もありませんのてすが、さう云つても今ては汽車なんかゞ出來た爲め、其んなに顏を隱してばかり居る事が自然出來なくなつて行くのてあります。

附記、本號口繪に挿入したる南清の風光は氏が歸省の際持歸られしものなり

武藏野の秋草

外島劉

秋の大氣は爽かに澄み切つて、蒼い空に白い雲が靜に動いて居る、汽車は秩父根をさして段々山に近くなる、甲武線も好し、青梅線もよし、河越線も好し、武藏の奧を走る汽車なら何處でも好い、車窓から見下すと、到る處尾花が風に靡いてゐる、林に入つたならばなほ注意を要する、雜木の下の一帶の草原には必ず女郎花が無數に咲いてゐる、丘の南面には萩の花がホロ〳〵とこぼれてゐる、撫子が咲いてゐる、金線草が咲いてゐる、桔梗、銀菊の類は云はずもがな、秋咲く草のありだけが咲いてゐる、武藏野は昔ばかりでなく今ても花野の面影がある。

て、武藏野の秋草の美しかつたことは、古歌、古文に徵しても明かてあるが、今少しばかり秋草に就いて散見した處を擧げてみやう。

武藏野を通りはべりしに東西南北、草のみ茂りて、人も住まず、草花色々咲き亂れて、宛然の錦を廣げたらん心地しはべりて（中略）かくてやう〳〵分け入りて見はべるに花を手折りて家居するあり。

（『撰集抄』）

三田彈正氏忠、同じく子息政忠、これがれ駒打ち列べ武藏野の萩芒の中を通り行く（『東路のつと』）

武藏野を狩り行くに、まこと、行くとも果て有らばこそ、萩芒、女郎花、花の露に宿る虫の聲々哀をもよほす許なり（『武藏野紀行』）

昔の秋の俤、今も殘りて平原はてしなく、まがきも野邊も秋の千草の花しけるが、こと〳〵く萩、芒、

女郎花の色も世にことなり、他野にかぞへがたし
（「武藏野地名考」）
此の夜はこの野に假ねして、色々の草花を枕かたしきて、少しまどろみ夢さめければ「花ちりし草の枕の露のまにゆめぢうつろふむさし野の原」云々
（「廻國雜誌」）

等とあつて、秋草の中にも殊に、萩、芒、女郎花が多かつたらしい。今も『萬葉集』にうたはれた桔梗や、貫之に詠まれた女郎花の子孫が繁榮して居るのだから今、武藏野に行けば一本の草花にも歷史あり素性ありて低徊去る能はざる趣がある。

さて武藏野特有の秋草とは如何なるものかと云ふに、名に負ふ武藏野の事故、草花と云ふ草花は何でもある、然し、その主なるものを擧げて見ると、

先づ、一番多いのは言ふ迄も無く芒である、芒も色の赤いのや在平芒などで無く普通の野生の芒許りである「武藏野は月の入るべき限も無し草より出て草にこそ入れ」と云つた草とは芒であらう、今は野も拓けて多く田畠になつたけれど、猶、細い曲折した小徑を行くと一里でも二里でも、半日歩いても身丈より高い芒が兩側からかぶさつてくる、朝、露の消えない頃に二三町も歩いたら單衣は絞る樣になる。若し秋の末の眞晝であつたら、穗にてた薄、所謂尾花の袖は、風は亂れ、道もわからぬ程である、村はづれの一軒家などで日當のいゝ處に老夫婦が穗芒で木兎を造つて居る、之が近郊の大師や藥師の掛茶屋の前にブラ下げられて都會の人の土產になるのである。

女郎花も武藏野特有の物で、到る處にあるが、簇生した處へ行くと二町も三町も續いて、遠方の小高い丘から見ると粟粒を撒いた樣で、高いのは三四尺位もある、其の間に白い花の男郎花が交つて實に美くしい

或る日、自分は、事更、芒の多い小徑を辿つて、突當つた、少し許の林に出た事がある、其の楢の木陰には苔蒸した墓が五六墓、元祿頃迄の碑の欠けたのが倒れてゐる、其濕々した間に、女郎花が美しく咲いてゐるのを見た時は云ふに謂はれぬ深い感にうたれた。加之に百鳥が鳴く、風は涼しいので劍盾のひらめきが收まつて元の靜けさに返つた武藏野合戰の後の有樣を思起さざるを得なかつた。

武藏野には到る所、僅かな林がある、其地には必ず二三基の無名の墓が見出される、又墓の傍には必ず、美しい悲しげな花が咲いて居るのに氣が付く。萩は東

京に近くなるほど小さい、——花は皆折られるので枝は小さいが根が大きい——萩の四五尺に延びたのは都を遠く去らねば見られない。

草の中から見附けて一番氣持のいゝのは撫子の花てある。と云ふのは綠の葉中に、紅の花が繪の様に浮いて居るからてある、紅と云つても野生だから、眞紅てはなく淡紅色てある。緣日の植木屋の持つて來るやうな撫子とは價値が違ふ。多摩河の上流へ行くと河原撫子が河原に夢の様に咲いて居て綺麗だ。

次に不老草、燕尾香などと云ふ藤袴や又吾毛香は、四五尺の高さのがある、普通二三尺て吾毛香は葉毎に枝が出て、其先端に十筆の様に簇生した、赤紫の地味な花て、あまり人に賞められないが、寂しみのある好い花だ。昔は此の草の根を日に乾して槌て砕いた艾の様にし、瀬戸物に孔を穿ける爲に用ひたさうだが、今は取る人も無し、到る處の野面にある。

武藏野の桔梗は野生と思はれぬ位ゐ、鮮かな藍紫色て丘の雜草の中にポツ〳〵星の様に咲いてるのを見ると、途中て萎れる事は知つてゐても折らないと氣が濟まぬ、又先きに有るので又取る、半道も來た頃には始めのはしほれて捨てる様になる、捨てるのは惜しいけれど、新しい生々したのが眼に附くからてある、見た割に根は大きい、大きいから美しい花も咲くのてあらう。

其他、紫花があるし野菊があるし、夕日が森を洩れて來る野の面に鮮かな黄色の月見草もあれば、葛もあり、芒に、まつはる晝顏も秋は花が少さくて、しかも捨て難い趣がある。

武藏野には河がある、從て淸冷な水に搖れて白い河骨もあれば、澤潟の小さくなつた花もある。

以上は先づ最も多くあるものの二三を擧げたのみだが、此外、名も知れぬ秋草は數へ切れない。加ふるに、虫の音と、鳥の聲と、雲の變化とは秋草に對する、對象物として忘れる事は出來ない。

て、人が「斯く多くの花があると云ふのに、何處へ行つたら見られるか」と云ふ質問を能くされる。然し武藏野の廣さ東西十三里、南北九里と古書に載せてあるが、其の半分としても一々說明する事は困難てある。

先づ地圖を開いて、東京市の北方（東及び西には殆ど無し）多摩郡、入間郡、新座郡、を中心にして地圖の上に林の記號のある處は、必ず女郎花が多い、林て

も若い楢林なら乾度女郎花か萩がある。若し汽車で行くなら、小金井、國分寺邊から氣をつける必要がある。最も好いのは國分寺から川越と青梅に行く間である、朝七八時に新宿を發して所澤か立川で下車し二三里歩いて又汽車で歸れば三時頃に新宿へ着く事が出來る。徒歩ならば、甲州街道に併行した村道を、處嫌はず深大寺か、北野邊迄行くか。玉川上水に添ふて、牟禮、連雀附近を逍遙すれば、秋の武藏野の面影の一部分は覗はれる。

秋草の最も多く咲いてゐる時節は九月中であるが、早くは八月の末から、遲くは十月に入つて咲いて居る十月に入ると花が小さくなる、露けくなる、うら枯に近い野末に咲き後れた秋草の花を見出すのもあはれである。斯くて十月の末、はや初霜が降つて、雜木林の落葉し初める頃までも秋草の生命はある。

●附記　近代になつて謂ふ所の秋草、又は秋の七草でなく、少し古きに遡つて武藏野の野に生へたと云ふ草の名を參考書から拔いてみると略左の通りになる

●求。紫草。黄蓮。菅。當歸。麻黄。青蒭。蛇床子。孔雀花。地膚。茜草。決明。蓬。地黄。芍藥。三稜草等。

舍監を欺かんとしたる淺はかなる女生徒

萩の花妻

十年間の舍監生活……ミツシヨンスクール……ハイカラ女學生來る……嚴肅なる外出の掟……女名前の封書……母親から外泊を頼む……別莊……一學期間の放埒……知らぬ顔して寄宿舍に歸る

私が舍監となりましてから、彼れ是れもう十年以上になります。一人の上の十年なら兎も角、入り替り立替りの生徒を預かる十年の日子は、決して短かい時日ではありません。何しろ時代の推し移りを上から眺めてゐますやうなものですから、其れを見ながら驚いたり呆れたりするともありますれば、又自分自身の白髪のふえて行くのを毎日數へてゐるやうな氣もしまして、果敢ないやうな、情けないやうな思ひをするともあるのです、このまあ十年の間に得ました色々の經驗中には、中々面白いともありますから、今日は一つ、若い女生徒にまんまと欺かれた、老人の失策話を致し

て見ませう。

けれど申上げておきますのは、這麼ことが年中あるのではないと云ふとです。いえ恐らくこんな事は前後たヾ一つか二つと申してよいてせう。兎も角も此校はミッションスクールてあります。東京から百五十里も飛び離れた御蔭には變轉の烈しい悪風潮の影響を大して受けもしませず、多くは田舎出の生徒を集めての尼寺のやうな生活ですから、近い周圍の刺戟を受けるとさへ少い方なので、まづ淳朴溫淑の氣風は、私の學校の特性と申してもよいのです。それに宗教を標榜し、半ば傳道を目的としての學校てすもの、兎もすれば尼寺の何のと世間の批難もあるほど嚴重に取締つてゐますのてすから、斯うした事が度々あつては堪りつこはありません。併しそれが嚴重なだけ、宗教的てあるだけ、偶ま起つて來ると恐ろしいほどの智慧を絞つて關係者を欺すのてす。誰だつて欺されて氣持の好いてとはありませんが、それがまして大きな目を瞬つて監督する謂はヾ自分の娘、そんなのに欺されるのてすから腹も立ちますし、馬鹿〳〵しくもありますが、どうして〳〵年若い人の鋭敏さと云つたら、二重にも三



重にも人を欺して目を眩ましてうま〳〵と網を潜るのです。それに元々責任は此方にありますし、預けた親達や世間からあべこべに理窟を捏ねられても泣き寢入らねばならぬてはありませんか。

所で此の事件のヒロインを私の學校に迎へたのは數年前の事てありますが、私の學校は此娘――假りにエス子と呼んでおきませう――エス子を迎へた爲に、其風紀の上に非常な變革をうけた程に彼女は恐ろしい勢力を有つてゐました。彼女の兩親は然る感化事業に從事してゐて世間に一通り名も知られてゐる程てすし、それに其娘の保證人は堂々たる大教會の牧師てすし、田舍臭い私の學校は、東京育ちの彼女、殊に善良な家庭の感化もうけてゐる彼女を預かつて、少くとも他生徒の模範とする事も出來ると、多少の期待を屬してゐましたが、事實は全然反對、と申て何も性質が惡いのどうのといふ譯ではありませんが、エス子は來るときから白粉を塗る、五吋幅のリボンをつける、ハンカチーフを薰らせる、是が昨今の事であつたり、又東京のやうな所でしたら珍しい事もありませんてせうが、何しろ私の學校ては恁ういふ類ひは鷄群の一鶴、素肌の黑味を遠慮なく見せつける筒袖連、木綿黨は目ひき袖ひきそれを見るのです。それてこんな事は女同士の間にはすぐと傳染し易いもの、物にかぶれ易い生徒から漸々と其の風をまねて、しな〳〵した態度が活潑になり、「オイデンサイ」「キナハイ」の言葉が「イラッシャイ」となり、忽ちにして甚い感化をうけたものですから、私達は種々苦心して警戒をしました。が其警戒もそれだけの事で、それ以上何の疑念を抱く理由もありませんてしたが、然う思つて安心したのは私達の大ぬかり。エス子には寢ても覺めても忘れられぬ情人があつたのです。情人と申して私の申しますのは何方かといへば低い意味にとつて申すので、唯だ許嫁とか、戀人とか、精神的に申てのことなら學校の精神から申ても私の主義から申しても構ふべき事てはありませんが、それが然うてないとすると、教育上から云つても監督上から云つても許すべき事てはないと思ひます。

一躰私の學校の寄宿舍生活は、極く家族的で親密で、教師と生徒との間でも姉妹か母子のやうなのです。舍監や教師の居室て、日永に乾餅ても燒いてゐますと、其香をかぎつけた生徒がすぐとやつて來まして

「先生、妾たまらないわ」と鼻聲を出す。

「何故？」といふと

「でもう胸が」と唾飲をするのですから、到頭乾餅を配けてやるやうになると云つたやうな有樣。ですがそれは内部の無邪氣な生活の一例で、萬事が決してルーズなのではありません、個人々々の品性の監督や、一歩門外に出る時の取締りと申したらそれは嚴重で、これは唯表面を飾る手段ではなくて立派な主義あり方針ありなのです。いかに家族的と申しても、一つ腹から産れた息子娘の寄り合ひとは違つて、多樣な性格や境遇に育つた人を集めて取締るのですから、つい放任て置けない譯になつて自然一主義の下に嚴重に括らねばならぬやうにもなるのですが、それは局外者の分らぬこと。私の學校も尼寺と非離れる程の取締りをして、外出するにも外出簿に時間を記入し、保證人の許までは必ず他の同伴者と共に屆ける、それからは保證人の監督に移つて歸校の時は又印を貰つて歸る、と恁うした具合で一週一度の外出も中々容易ではないので生徒は大コボシなのですが そんな二重三重の圍みをも破るやうなものが出て來るのですから堪りません。それと申すも家庭の教育を信じたのが一つの失敗、母親の娘に甘いのが一つ、父といふのが又表面非常な嚴格な人で、内が然うでなかつたといふとも後から考へて又一つの原因であつたといふとが分つたのでした。

エス子には能く女名前の封書が來ました。郵便物の取締も嚴重なのですが、之は從姉妹だと申てゐますし、殊にエス子の伯父はそれと同姓なのでしたから、つい安心してゐましたが、此從姉妹と云ふのこそ、エス子の忘られぬ情人であつたのです。

或日エス子は私の許へやつて來まして、少し體の具合も惡いし、食物の養生もしたいから當分外泊を許してくれといふのです。病氣なら致方もないが、兩親や保證人の承諾がなくてはと申しますと、暫くして東京の母親から、一學期ほど娘を外泊させて養生させてくれといふ依賴書が來たのです。母から依賴して來たとですから打すてゝおかれもせず、早速保證人の牧師と相談しまして、其牧師の世話で然る信者の老婦人の宅へ一學期預けるとにしましたが、油斷はそこにあつたのでした。此方は保證人の牧師と其老婦人を信用して安心してゐましたが、其老婦人といふのは、其家の別莊を預つて留守番をしてゐるお婆さんでして、是は後で分つた事ですが、お婆さんは又お婆さんで「當節のお若い方は違つたものだ」と只管エス子に呆れ驚いて

ゐたといふ事です。

といふのは、エス子の許に日々と訪ねて來る一人の青年があつたのです、エス子か其婆さんに語る所では其男はエス子の從兄弟といふとてして、金色のメタル華やかな某高級の一學生、肩を張り靴を鳴しての凛々しい姿は、若い女の心を憧がれしめねば措かなかつたのでせう。が是が舍監の眼をも欺むく女名前の手紙の主人公と誰が知りませう。それも日々訪ねて夕方なり夜なりに歸るのならよいですが、暫らくすると大びらに遠慮もなく泊つて行くのださうです。預かつたお婆さんは一人で心配し乍らも、「當節の若い方」で呑込まれ、「東京仕立の女學生」で嚇され、それに他ならぬ從兄弟と云ふ肩書もあれば、家庭は立派な內、猶又牧師の知人といふ裏書もあるので、半ばは飽くまで信用し、半ばは控へてゐたのださうです。けれども何は何だつて若い人同志、それが叔父姪と云ふではなし、親身血を分けた兄弟といふではなし、殊に一室に枕を並べて寢むのなら兎も角も、自分は一人で階下に臥し、二人は二階で寢むのですもの、どんな過ちが無いとも限らず、萬一の事があつてはと氣を揉んで、遂々エス子に向つて一日

「貴方の事ではありますし、わけてお從兄弟さんといふのですから別事もありますまいが、東京とは違つて此方は世間が狹いのですから、夜分だけお一人は階下でお寢み遊ばしたらどうでせう。ナニ決してお二人が何うといふのではありませんけれど、然うすると世間の手前も宜いと思ひますから」

と婉曲に申しましたので、エス子も否む譯には參らず、それからは一人は階下の一室で寢むことにしたさうですが、それで立派に隔てのついた譯でもなかつたでせう。學校を欺して親を欺して病氣と僞つてまで外泊したのですもの、それも學校からつい近い所にゐながら、青年を近づけて泊らせまでするのです。一學期三ケ月の間、思ふまゝに仕度い放題をしたのでせう。通俗に云へば是が嬌奥とでも云ふのですか、若い人が青春い心の逸るに任せて、何の自覺もなしにするとは危險で爲方が有りません。

偖て約束の一學期も終りました。其間といつて無論日々通學してゐたのですから、別に善惡とも變つた容子はありませんでしたが、兎も角もエス子はケロリとして又元の寄宿舍の籠中に歸つて來たのです。私共固より外泊中何のやうな事があつたか知らう筈はなく、

元のエス子を元の儘て、再び保證人から引取つたといふまてゞす。
其後は又一しきり其從姉妹からといふ女手紙が烈しく來ましたが、エス子は遂に又一策を案じ、母親の僞手紙を作つて學校を欺してうまく〱と城中を出て、その青年と携へて近村へ一週間も旅行した事から、遂に事が破れて一騷動――飛んだ大騷動が起るやうになつたのです。(未完)

美文の作法（五）

西村醉夢

二　漸層と疊句

●●漸層は英語の Climax の事て、次第に調子を高めて行く句法てあります。詳しく申せば、弱より强に、低より高に、狹より廣に、次第〱に調子を高めて、讀む人の心を高潮に達せしめやうとする句法てす。假令ば『その子を愛する程の者は、必らずその親に孝行てあるし、その親に孝行を盡す程の者は、必らずその君に忠義てある。』といふ風に、一句一句と意味を擴くし感情を强めてゆくのが乃はち漸層てあります。此の句法は强い感情、固い決心などを言ひ現はす場合には、極めて適當な修辭法てありますが、餘り過度に用ゐますと、つい誇大に流れて實感實情から遠ざかりますから、餘程注意をしなければなりません。

●疊句と申すのは、英語の Repetition（反復）によく似てゐますが、少しく趣が異ひます。反復は只だ繰返すばかりてすが、疊句は句を疊んて上下、前後に連絡を保たせながら、文を進める方法てあります。例へば『日暮れて月清し。月清し、江上に舟を泛べて遊ばん哉』と申せば反復て御座いますが、『日暮れて月清し、月清けれども共に遊ばん友もなし。』とその場合には疊句に感じます。よく例に引かれる句ですが、近松の『女殺油地獄』の中に『印を見せずば置くまじと、駈け上りん〱鈴りん〱、引ずり下せば又駈け上る、不動の眞言どたくたくはつたりばつたりだ、引ずりおろされ山伏も、錫杖から〱命から〱歸りけり。』といふのなどはこの好適例てあります。

一三　對句と警句

●●對句は英語のAntithesisの事で、支那の詩には澤山用ゐてある句法で御座いますが、西詩にも隨分使つてあります。これは面白い句法で御座いますが、餘りに華々しく、餘りに綺麗過ぎますから、猥りに用ゐると浮華に流れて、文章の嚴かな味を削いて了ひます。引くまでもなく皆さんは御承知て御座いましやうが、念の爲めに漢文の中から一つ例を引いて見ますと『六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。……五萬一樓。十萬一閣。廊腰縵回。簷牙高啄。』と申すのなどは、即はち對句で御座います、わが國の詩歌にもまた對句の例は澤山ありますが、私はあまり澤山對句を用ゐるのは嫌で御座います。

●●警句は對句に反して、極めて簡奇な句法てあります。文章の眞の價値は警句のあるのとないのとで決られると申しますが、全くこの言葉の通り大文章家の文には警句が澤山御座います。警句は英語のEpigramの事て、元來が短い句て、深長の意味を言ひ現はすものてすが、時には反對の事を云つて、言の裏の意味を言ひ現はすことも御座います。『地獄の沙汰も金次第。』とか『のみと云はゞ槌』とか云ふのは、語簡にして意長きものですが、『盲のかき覗き』の如きは反語的性質を帶んでゐるもので御座います。これは誠に貴い句法で御座いますが、中々名句が出るものではありません、下手な警句程見苦しいものはないから、滅多に用ゐてはなりません。

一四　文體の種類

自己の思想や感情を有りの儘に他人に傳へるのが文章の目的で御座います。そして人の思想や感情の各々異つてゐることは、その顏の如くでありますから、それを外に現はす方法もまたそれ〳〵違つてゐます、これが即はち文體に差異のある所以て御座います。文體には色々ありますが先づこの數種でしやう。

（一）●●簡約體（Concise style）と云ふのは用法に注意して出來る丈け語句を短かくし一語中に多くの意義を含ましめやうとするものです（二）●●蔓衍體（Diffuse style）は意味を明らかにする爲めに語句を澤山使ふことを厭はぬ文體であります。（三）●●剛健體（Nervyus style）は語句文勢の雄健な文體て、その特色は重もに用語から來るやうです。（四）●●優美體（Fuble style）は音調や語格が暢りと

してゐて何處か弱々しいところのある文體で剛健體の反對てす。この外(五)素撲體(Simple style)と(六)綺巧體(Labored style)とあり又(七)華麗體(Florid style)と云つて美くしい詞藻を以て華やかに修飾してるものもあれば(八)乾燥體(Dry style)といつて、平易と通知とを旨とし、何等詞藻て飾るてとのない文體も御座います。要するにこれ等は、皆々内容に適したものを選んで、文に作る人各々の注意のものを用ゐれば宜しう御座いましやう。



一五　文體の要素

バルヂーンと云ふ人は『修辭學の組織』といふ書物の中で、文體に共通の要素は六つあると申しましたが、クワッケンボスと云ふ人は、文にての說を推し擴めて、文體の要素は、

a、純粹(Purity)

b、穩當(Propriety)

c、精確(Precision.)

d、明斷(Clearness)
e、遒勁(Strength)
f、調階(Harmony)
g、統一(Unity)

の七つであると申してゐます。純粹と云ふことは用語を選んで純粹でない國語は用ゐるなと云ふとです。穩當とは語句を選び、語義を誤らぬやうにし、文法上の錯誤なからしめると、精確とは意味が確實で表現もそれに伴ふこと、明晰とは作者の思想が明晰に發現せられてゐること、遒勁とは力のあること、調階とは上の修行がよく調ひ揃つて巧みに和合してゐるとですから此の六條件が巧みに調和しますとそこで始めて統一のある文章が現はれるので御座います。

一六　結言

私は以上、修辭上の事について大體を述べましたが、紙面の都合で此の上詳しく說くことは出來ません。男子のも勿論ですが、婦人の文章は特に整つて正しくなければなりません、間違だらけ、粗忽だらけの文章を書くやうな婦人は、その性格も疑はれます。先づ第一に文法、第二に修辭學、第三に倫理學と多少は辨へてゐなければなりませんが、美文に於きましては倫理學などは、殆んど全く必要がありません。美くしい文章を書かうと思ふものは、何うしても根本的素養として美學を心得てゐなければ成りません。

申すまでもなく、美學は精神上、並びに形式上の美文を講ずる學問でありますから、美文の如く、美思想と、美形式とを必要とするもの丶根本義に、美學を研究した上でなければ、本當に分るものではありません。やれ文法だ、やれ修辭法だのと、一々項を分けて解剖して見ると、小六ケ敷いものに成りますが、爾うして了へば文章は拙らぬものに成つて了ひます。私は思ひます、當初の中こそ、文法を考へる必要もあるし、修辭學を學ぶ必要も御座いますが、所詮は修練と推敲が肝腎です。さうした曉に自由に文章が書けるやうに成れば、文法も修辭もへちまも有つたものでは有りません。筆端玉を轉ばし、紙面華を點するの妙域に達します。こうならなければ眞の文章家ではありません。

《完》

地方處女の生活狀態

（三）常陸

▲常陸は一體農家の多いところで御座いますから、一般處女の氣風に就いても、先づ農家の娘、次に町娘、それから女學生と云つた樣に三分して申すのが便宜でせう。

▲農家の娘でも土浦、石岡邊の繁華な町の近在の女子と水戸、太田方面の娘とは風姿も動作も多少異つて居ります、鹿島、行方、筑波、稻敷方面は餘程古風で、隨つて氣風も亦質素であります。或は質素と云ふよりも、未だ田舍の風習が脱けないのかも知れません。しかし全國通じて質素勤勉の風ある事は疑ひありません。それから生えぬきの人に意地惡るはまあ無いと云つて宜い位、尤も心の奧底には常陸根生の負けじ魂が絕えず燃えて居る所爲かして、何をさせても比較的好果がある樣でゝ、つまり是れは常陸上府として駿府甲府等と比肩した由緖から自重して、他より抜んじやうとする觀念が殘つて居るのかも知れません。又一方には筑波や霞浦の秀麗明媚な風光が暗々裡に與ふる感化の爲めでしやうか、美術文學と相容れない性質では無いやうです、少くとも南部の方では左樣觀らるゝのであります。

▲農家の娘は概して柔順なうちにしつかりした所があつて、農事でも養蠶でも能く働きます、殊に蠶業が盛んですから女子が先になり、動作もキビ〳〵して、機敏に立廻りますから品物の出來も好いさうです。

▲しかし純朴質素と云はるゝ土地の氣風であつても、東京邊の流行物などが來るから、若い女の事とて相當に虛榮心も挑發さるゝのであります、同じ茨城縣でも下總境になると隨分保守的で、矢鱈に華美な衣服等用ふる時は、人の口端に上る位なんですけれど、土浦石岡近方は豪農が多く繁華でもあり、東京に近い方ですから、隨つて町娘の氣風も、華美を盡くし人目を惹く樣に作ります、髮も日本風に結つて雪駄ばきで外出するのが多いやうです。

▲農家にあつては、豪農の娘が生花茶の湯の稽古をする位で、音曲は餘り習ひません、習へば個々箏を彈く位なものです、其他普通の村娘は、農事の餘暇裁縫とか行儀作法を習ひます、機も大抵習ふのが習慣になつて居るやうです。

▲町育ちの娘達は小學校を卒へると、大抵上流から下流まで裁縫女學校へ通ふ、濃い髮を桃割に結つて白丈長をかけた少女が、少しづゝ群をして雨ふりなどにはうす紫の傘の下から涼しい眸をかゞやかして通るところは純日本式です。水戸丈けで申しますと、上市の町娘は一體に着物もパッとして隨分華美を好み、髮の形も前髮をハイカラに出して、稍々根下りの島田か銀杏返し、時の流行物を競つて誇とする樣な風は免かれませぬ、下市の娘は派手よりは自分相應の物で、柄も高尚なのを、髮も根上りに桃割なり銀杏返しなりに結ひます。

▲町家に在ては遊藝が盛んで、就中石岡土浦邊では三絃の趣味が際だつて普及せられて居ます、生花は多く遠州流の正しいもの、茶は裏千家玉川。箏もなか〳〵盛んであります。

▲女子の學校は高等女學校が二つと女子師範が一つとしかありません。水戸の方は市內の女子よりも地方の人が多く、服裝は一般に、白襟に紺服で、年齡に不相應な柄、絹物髮飾等は一切用ゐぬ事、履物は豎無し或は靴などで、極質素を主とします、髮は一體に油氣の無い蠻カラ的な廂です、雉刀も盛んに奬勵されて居るので生徒は皆な活發です。土浦のは女學生も亦華美で、惜からぬ程にハイカラなのも見受けます、大抵は小學校を卒へてから入るやうです、成蹟も槪して佳い方ですが、其學科中通じて佳いのが文學音樂の方面です、英語は隨意科として居る向もあるので、一體に進んでは居りません、裁物や造花は多く專科生が習つて居ます。一口に評すると水戸は紫式部的、土浦は清女的さうして、師範は官公の母?

▲言葉は大抵上流は東京風です。が多くは餘所行の取つときの語で普通處女が家庭に於いて使ふのは、アクセントに特殊のひゞきある尻上りな用ふるので、一寸耳につくこともありませうけれど、「ひ」と「へ」「い」と「え」「ゑ」「ゐ」等の發音が正しく無いばかりで、方言としては先づ淡泊な方でしやう、尤も一つ村ばかりに居る人はわけても重くるしく鼻にかゝる です。學校では地方から來て居る人もあるので、多分は東京化されて居ますが、夫れでも何か感心したりすると『さうけえ』なぞとお里丸出しになるとも珍らしくはありません。（J女、K女、T女、）

花言葉

水野葉舟編

は、ば、ぱ、

ばら―白(凋れたの)―　ちよつとの間の印象

ばら―黄―　愛情の衰へ。嫉妬。

ばら―ヨーク、ランカスターの―　戦争。

ばら―二つの蕾の上に花満開になつて居るもの―　秘密。

ばら―白と赤とを一束にしたもの―　一致。

ばら―ばらの冠―　依怙。

ばら―赤ばらの蕾―　清く且つ清らしき。

ばら―白ばらの蕾―　少女時代。

ばら―苔のついたばらの蕾―　愛の自白。

薄荷　感情の暖かさ。

薄荷―ひめはつか―　逃走。

ハウストニヤ　満足。

蓮　雄辯。

蓮の花　はれつけられた戀。

蓮の葉　違背。

パンジー　思想。

バーシカリヤ　回復。

バイナツプル　あなた完全です。

山梅花　記憶。

山梅花―カロリナの　失望。

ハンプルプラント　失心。

蠅捕なてしこ　わな。

蠅捕なてしこ―紅―　若き戀。

蠅捕なてしこ―白―　背信の。

はこべ　集合。集會。

はうちはまめ　貪欲。想像。

赤楊　柔和。

ひ、び、ぴ

ひるがほ(ニンオルヴラス)　禁錮。情縁。

ひるがほ―小さい青い色の―　平安。夜。

ひるがほ―大輪の―　消えはてた希望。

ひるがほ―石竹色―　思慮のある柔しい愛情に妻は

れた俸

花言葉

水野葉舟編

ヒヤシンス　遊戯。

ヒヤシンス—白—　つゝましやかな可愛い心。

ヒドランゼア　大言者。薄情。

ヒツウプ　清浄。

韮沃斯　不完全。

ヒビスカス　優美。

酸漿（すかんぽ）　愛情。

酸漿—野生—　時はづれの頓智。

酸漿—森の—　快楽。

ひえん草　不良。軽薄。

ひえん草—石竹色の—　浮薄。

ひえん草—紫—　驕慢。

雛菊（デージー）　無邪気。

雛菊—園の—　何でも私はあなたのお心持の通りになります。

雛菊—秋咲きの—　左様なら。別離。

雛菊—まだらの—　美。

雛菊—野生の—　お察し申します。

ふ、ぶ、ぷ

フィユイデス（アイス、プラント）　あなたの顔色は私を氷らせるばかり。

ぶし（ハムレット、フラワー）　騎士の徘徊。

フリユール、ド、リー、　情火。身が焼けるやうな思ひがする。

フリユール、ド、リユース　激情。火。

フライ、オーチス。　過去。

フロッグ、オフリス　顧慮。

フランス菊（オックス、アイ）　忍耐。

ブリユー、ベル　不易。不変。

山毛欅　幸運。

へ、べ、ぺ

ベウドンナ　沈黙。

ベルフラワー—金字塔形の—　不易。

ベルフラワー—小さい白花の—　満足

ベルエディーア　私はあなたに反対する。

ベトニー（薔香の一種）　驚愕。

ristmas and new year, I suppose.

B: It looks like a regular foreign country-town when you see many neatly-dressed foreigners, old and young, going to church on Sundays. I have never seen so many attractive foreign babies before.

A: Are the houses built together?

B: No, they are scattered. One of my friends has a quiet cottage among birch-trees with a buffling spring near by. Another has built her pretty house on a hill commanding the whose valley below. And when the air is clear, Mt. Asama and the Myogis are seen on the right and the left.

A: Did you go in a picnic?

B: I was too busy to go this time, but a foreign party of ten or twelve is having a picnic almost every day.

A: Foreigners are active even in the vacation.

B: That is what I envy them of. They play tennis—grey-haired fathers and blooming daughters—in the sun, and aged mothers take a long walk with their vigorous sons.

A: It is true how most of Japanese who go away for summer, spend their days doing nothing but eating and sleeping.

B: I trust your vacation is used for a better purpose.

處ですね。

乙. 毎日曜に清楚なる衣服をつけた，大勢の外國人，老若男女共に，敎會に行く處を見ますと，純然外國の田舍の樣に思はれます. 彼樣に澤山の西洋の赤子をみた事は御座いません。

甲. 家屋は皆一所に竝んで居りますか?

乙. 否，皆離れて建つて居ります. 某友人は靜な別莊を赤楊(ハンノキ)の森中に建て，傍に泉が湧いて，如何にも閑靜な處に居り，今一人は小丘に家を建てゝ，平原を見下して居ます，其に，空氣の澄み渡つています日には左右に，淺間山と，妙義山とが見えます。

甲. 遠足に御出かけなさいましたか?

乙. 今度は少々多忙て，參りませんでしたが，毎日西洋人は，十人，十二人と團體をして遠足でした。

甲. 西洋人は休暇にも活動的ですね。

乙. 其處が浦山しいのです。白髮がかつた父と，妙齡の子女とテニスをやる，老坂の母が壯健な子息と遠足等をするは感心です。

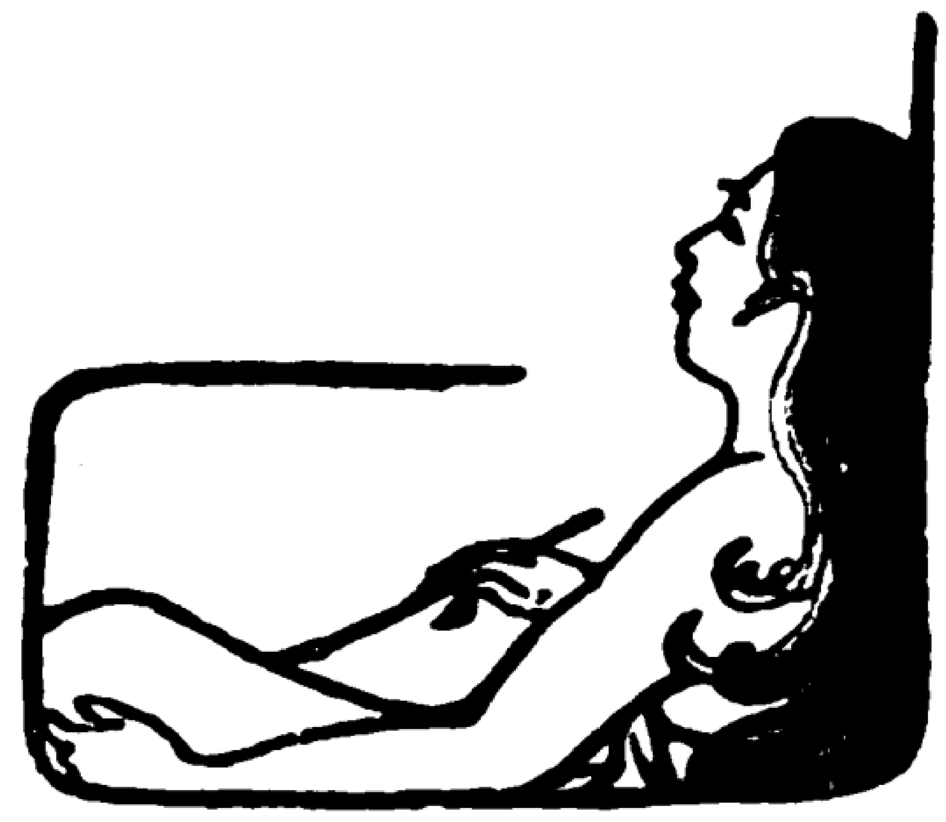
甲. 避暑に出掛る樣な日本人の大概は，食たり，寢たりの外何もしませんよ。

乙. 貴女は休暇有益に御使ひなさいまし。

英文

（第五年第九回）

女子英學塾講師 河井道子



Karuizawa.

A: You are two deep later in returning home from Karuizawa, and have kept us naiting.

B: I am very sorry for it, but I could not help it. Do not scold me from the very first.

A: Well, if you give us good news, we shall let you go. How well tanned you are. The rest has done you good.

B: I think I have not rested much, but the air up there has invigorated me.

A: Did you get these pretty hand-bagsand drawn-works in Karuizawa? I did not know that you could buy such articles there.

B: You must remember that nearly eight hundred foreigners spend their summer there and that merchants are clever in opening their stores to accommodate customers. You can get these things much cheaper there than in Yokohama on account of the rivalry among the stores.

A: It is a very nice place, then, to get small presents for Ch-

輕井澤

甲. 輕井澤からの御歸は二日後れて，皆を這麽に待たせなさいましたよ。

乙. 御氣の毒てした，併し私とても止を得なかつたのて，最初から左樣に叱らないて下さい。

甲. 良い御噺があれば，赦して上げます．酷く日に焦けなさいました事，御休が御爲になつたのてしよう。

乙. 別に休んだとも思ひませんが，彼地の空氣が私を强壯にしたのてす。

甲. 這麽綺麗な手提やレイス物を輕井澤て御買ひなさいましたの？ 彼地て，かゝる品物がかへるとは知りませんてした。

乙. 消夏の目的て，八百人以上の外國人が彼地に集合しますし，商人等が，購客の便宜を量つて商店を開くなど，なか々々盛なものてす。又御互此商店てす競爭てすから，橫濱などて買ふよりも，却て廉價に買はれます。

甲. 然うてすと，クリスマスや年玉の少々な買物には結構な

つかの間

蒼き空、綠の地
生々と目ざめたり、
此朝風柔かく
飛ぶ鳥の翼ゆたかに
つちを行く若き處女の
白き足美しき、

天うれし、地うれし
かゞやけき生命見て、
はる〴〵と我魂は、
はてしなくひろごるを、
何ならん熱き、頰に、
流れしは――あな淚かな、

美しき感情の
をどりゆくはてしなさ、
海なりや、空なりや、
唯遠き彼方より、
若き靈や呼びてんと
あかつきの海に來て、
胸はりし我聲の
口惜や―思ひ中ばにふるへるは…

我魂は　はてしなき
自由なる天地は
ひたすらに慕へ共
野に立ちて淚あり
海に來て聲ふるふ
おそれ持つ紅の
身をめぐる血の暖かさ、

女かや――あゝ我は、
聲ふるへ、淚ぐみ
野に海にあくがれてのみ
地をゆく女かや。

あかつき

あかつきの空より來る
柔き風の誘きに
いき〴〵と朝を見つめつ
夢の香ぞくゆる部屋ぎの
紅燃ゆる衣ぬぎ捨てゝ
純白なる生絹はひたと
暖き肌にまとひつ
我は今天地の前に、
大らかに面あげけり。

夢殿守



○慰安（天賞）

大阪市　秋葉清子

其日の夕暮、お磯は生家から歸つて來た。早速箪笥の曳出と醬油の樽とを調べてみたが、獨りでニヤリと笑ふた。夫の清造は、晩酌後のトロリとした顏付で、緣側へ出て、機械のやうに團扇を動かしてゐた。

『貴方今日、樽から油醬出しましたか！』

『いゝや……』お磯はそれつきり、何も言はなかつた

『私さへだまつて居りや……』と強く思つた。

それから半月程たつた或日、裏の姑の家へ北海道の娘の所から小包が一個届いた。今年三十二になる、縦にも横にも一人しか無い子で、婿は小樽の或商店の番頭をしてゐる。驚いたのは、それを配達した郵便屋が受取だと言つて、小さい紙片に判を押させて持つて歸つた事である。こんな事はかつて無かつたので、姑――お才の胸は少なからず騷いだ、丁度配偶の爺さんも家にゐた。何でも餘程のものに相違ないといふので二人は急いで開けたが、何の事はない、古びた、虫の食つた軸が一本、幾重にも幾重にも紙で卷いて、勿躰らしく包んであつた。そして中に手紙が入れてあつた。お才はそれをひろげて讀み出した。爺さんは傍でぢつと待つてゐた。爺さんは字が讀めない。身體は至つて小さい方だが、頭の恰好から顏付が、クリ〳〵してゐる。自慢するのと頑固なのとが此人の特色で、一旦人と議論でもやり出すと、邪が非でも自分の說を徹さねば止まぬ。元來が自分で拵へた頭腦ではないから、すぐ相手に遣込められる。さうするともう仕方がないので奥の手を出して、『そりやさうぢやない、俺のいふ通りぢや！』の一點張で動かない。これで大抵の者が

○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以內とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

根負する。すると爺さん勝つた意りで大得意だ。また平生新聞一枚讀むでもないのに、政治や軍事の話で氣狂のやうになる。いつか大阪に火藥爆發の大慘事があつた時、「火藥なんて何の道破裂するに定つたもんだ。一體そんなものを市内に置かせてる奴が大間拔だ。火元が惡いのでも何でもない」といふ説を立てゝまるで知事を子供のやうに罵倒した。これには少なからぬ、自信もあつたし、正直な隣家の幸七などが、成程そりやさうぢや、など〻感心したので、其當座、來る人遇ふ人に食つてかゝつてゐた。「一體あゝいふ事を誰が言て聞せるんだ」と清造は不思議がつてゐた。

手紙の筆蹟は婿である、お才は眼の中へすりこむやうに近寄せて、一字一字と辿り乍ら讀んでゐた。爺さんは軸を取上げて、こは〳〵ひろげてみた。虎の畵だ「フーン、よく書いたもんぢやな」と機械的に口の中で言つたが、誰が書いたものやら、どれ位の價値のあるものやら、さつぱり分らない。爺さんは眼ばかりキヨロ〳〵させてゐた。

其夜、爺さんは清造の家へ行つた。

「北海道からエライものを送つた來てナ」

「何だな！エライものつて」

「ウン、何ぢやな、應擧ちうと、餘程えらい畵家ぢやらうがな？」とサグリを入れる。まだ軸に就ては皆目自信がないので、平生に似合はない弱い調子だ。

「應擧？」と清造はニヤ〳〵笑つて「それあ大したものだよ、圓山應擧つてな、有名な畵家だ……」この一言で爺さんはグッと腰を強くした。

「さあそれぢやて、その應擧の畵いた軸を一本送つて來たんだがな……」

「ほゝう……」

「北海道で百圓なら何時でも買手があるんぢやけれど……一寸都合があるから、其方で賣つてくれちうてナ七十圓なら手離してもよいと書いとる……」

「それあ又大變なもんぢやないか。」と清造は呆れたやうな顏して「一たい何の畵だね！」

「虎の畵だ。それあ素拔らしいもんだぜ、隨分古いもんらしい、」爺さんは鼻をうごめかして「マア一度見に來るがよい、何も話の種だてナ」爺さんはさん〳〵吹いて歸つて行つた。お磯は裏の家へ行つて、軸を見せて貰つて居たが、爺さんが歸つて來て、清造も見にくると聞いて、急いで歸つた。

『どうだ、軸は見たか、可愛さうにもう夢中になつてるぢやないか、龜の甲より年の功といふが、情ない事にはこゝらが無學だからな。それに中井も中井だ。いゝ年をして下らん惡戯をする奴だ：』かう言ひ乍ら、清造は足にあたつた下駄をつゝかけて裏の家へ軸を見に行つた。

――

爺さんは其翌日、例の軸を寺へ見て貰ひに行つた。住職もいゝ加減にあしらつたと見えて、流石はあゝいふ人は違たものだ。こんなもんても、見える人さへ見りやチヤンと分るんぢや、』とかたく信じた。もう誰が何とケチをつけてもビクともしない。『眼の見えん奴等あ情ないもんだ。まるて猫に小判だな』と言つて歎息して居た。もうかうなると家の寶だ。賣るなんて以つての外の話だといふので、箱の中へ收めて誰にも見せない事にしたがどうも不安でたまらない。應擧――百圓――寶――こんな思がいつも頭に、グル〳〵して居て、清造だの、誰だの彼だのが、唯あの軸をねらつてゐるやうに思へる、もう仕事も碌に手につかない。『不安心だ。滅多に家は不在に出來んぞ』と口癖のや



（天賞）賣り子　　青森　立花ともこ

うに言つてゐた。

其後、北海道からは着たかとも言つて來なかつた。

周圍の人には馬鹿にされ合ひ馬鹿にされて居ながら、御當人だけは大得意で居るやうな好人物の老爺を書いたものだ。書出しから終ひまで、雜を入れて見やうのないほどに上出來てある、選者の僻見かは知らぬが恐らく此の作者も男と云ひたい。（評）

○ある日（地賞）

美濃　藤井みどり

何だか非常に暑くなつたので、お峯はひよつと眼を覺ました。

三時過ぎの、ぢり〳〵燒き附く樣な光線が、簾を外れて斜に腰から下を照らして居る、道理でどうも暑かつた。』と思ひながら、立膝した儘、解けた伊達卷を卷き直して、一つ生欠伸した。夫が正面の柱懸けの鏡に判然映つたので莞爾して、曲つた束髮を直しつゝ、思はず凝乎と見入つた。

『やつれたな。』と染々思つた。自慢の髮も薄くなつたし、頰の艶も褪め果てた。おまけに額には、微ながらも皺さへ寄つた。――

『其筈さ、もう二十六だもの。』呆然呟いて、『それに散々、勝手な眞似をしたからさ。』

再度呟いて、投げつける樣に机に凭れた。而して、苦い〳〵絕望の笑を洩らした。

夫でも未だ眼を拗ゑて、鏡の面を見詰めて居たが、頓て吐息して手文庫を取り出した。

十八の春まで、憂き事知らずに育つた。溫い御影の濱邊の父母の家を捨てさせ、終には自分までも振捨てた、初戀の人も、死別れた第二の人も、其後種々な境遇を經て、今の看護婦になるまでの、數知れぬ程の戀の面影は、皆此中に秘められてあるお峯は一つ〳〵に寫眞を見て、文殼を見て、うつとりと眼を閉ぢた。

トン〳〵〳〵と威勢よく、誰かが階子を上つて來る。お峯は手早く蓋をした。

上つて來たのは、橋部と言ふ若い看護婦、片手を背後へ廻して笑ひながら、

『齋木さん、好い物上げませう？』

『エ、頂戴な。』

『何だか當てなくつちやあ：貴女の一番お好きな物なの。』

『然うね、ありの實？』

『どうして〳〵大違ひ！細長い樣な、四角い樣な、斑になつてる物』

「分明らないわ、何卒敎へて頂戴。」
「オヽ……。實はね、お可愛い〳〵、弟子樣からのお手紙なの。」
机の上へ投げ出して、自分も傍にべつたり座つた。
お峰は詮方なげに笑つて、直ぐ封を切つた。
「又這麼事言つて寄越して、眞個に弱つ了ふね。」
「エ、何なの？」
「例の通りよ。『今夜七時までに行くから都合して呉れつて……。でも近頃は派出もなし、さう〳〵は會長にも頼めないんですもの、ねえ。」
「然うね、而して又、一躰何にさうお金が要るんでせう？」
「何につて矢張り、交際にでせうよ。」
一寸眉を寄せて横向いた。橋部はまじ〳〵見て居たが、
「彼麼人でなくつても、外に澤山有るだらうに……。」
と獨言のやうに言ふ。
「でもねえ、姉さん〳〵と慕はれて見ると、義理にも今更……。」
フッと言葉を途切らして、妙に笑ふ。その顔は赤かつた。橋部はくすぐつたい樣な顔をして、之も矢張り默つて了つた。
櫻橋を渡る電車の響が、急に耳について來る。お峰は頰杖ついて、窓の敷居に上せた、朝顔を見て居る。
橋部は默つて、トン〳〵〳〵と下りて行つた。
狂ひ獅子とか言つた、瑠璃色の奇麗な花は、全然すぼんでぐつたり考へ込んで居る。『能く自分に似て居ると考へた。『けれど花はまた咲く。自分は？』斯う思ふと心細い。橋部の言葉が胸に浮ぶ。此朝顔を買つた時にもさうだ。『鉢を持つて行つて呉れても宜さゝうな物だに、僕アお供ぢや無い。』と言つた。彼人のお友達に逢つた時、私の方を見ちや何か笑つて居る。思ひなしか舌もお出しなすつた樣だつた。其上、『友達が誰だつて聞いたから、叔母さんだつて言つてやつた。』つて大笑ひした。矢張り私は……。
お峰は烈しく首を振つて、其儘机に突伏した。永い永い間考へに沈んで居た――。
きつちり六時に夕飯が初まつた。
「行くんでせう？」
橋部が窃と聞くと、
「エ。斷るにしても、手紙ぢや間に合はないから行つて見るわ。」

とむつかしい顏して答へた。

座敷で別に食べて居た會長が、一寸此方を見た。

着物を着變へて、下り掛けてから氣が附き、立ち戻つて時計を取り上げたが、急ち氣を變へて又下に置き立上つた。

階子を下り、下駄まではいた。夫でもぢく／＼して居たが、思ひ切つて二階へ馳上り、とう／＼時計を懷中へ入れて、周章て丶四邊を見廻した。

お峯が飯つて來た時には、上も下もしんとして、柱時計のみが起きて居た。時間を合せやうと思つて手を入れ、思出したお峯は一人苦笑して。

「仕方が無い――」

力無く呻いて、汗に汚れた蚊張の片隅へ、そろ／＼とむぐり込んだ。

橋部は枕を外して居る。

お峯は手文庫を抱いて寝返りした――！。

恁うした女の一種の悲哀がよく伺ふ事が出來る。好い作だ。選者が以前に此作者の『柳小路』と題するものを評して、男ぢや無いかと疑つたのに對し、作者は此作の最後に附記して自己を證して居られる。選者の疎淺を謝して此の作者の前途を祈る。（評）

○製糸工女（入賞）

紅百合

「それぢや、お前、身躰に氣をつけてなあ」

涙にうるむだ御母樣の御聲の、切れるか切れないに、馬車は全速力でかけ出した。私はもう、何にも云へない、つっかけて來る悲しさをくいしめて頭をさげた、しよんぼりと、淋しさうに見送つて下さる母弟の姿がだん／＼少さく遠ざかつて行くにつれて私は何とも云へない程、心細くなつて來て「飛びおりてつてもう一度あの溫い御手に、縋つて來たい」と思つた。

あ、曲り角――。私は心を定めて、もう一度點の樣に見へる二人の姿を好うく見てお別れのおじぎをした點が動いた樣だ――と、もうまがつてしまつた。もう見へない、戀しい御姿も、なつかしい家も…。

思はず袂を顏にあててしまつた。

「御前樣、はじめてだつて云ふて、切ねえは無理やねえが、そんねえに泣えたつて、どうなるでもねえし、又向ふへ行きやあお連れも出來て、面白くなるだて」

となりにゐた三十二三の御ばさんがこう云ふてくれた私をばつれに來た男の人も、

『少しなれてさへしまやあ、家へ歸りたいなんて思つた事が可笑しくなる程だ』て、合槌をうつ、車中の十四の眼は、皆私に注がれてゐるらしい、だん〳〵心が鎭まるにつれて耻かしい、と云ふ氣が起きて來た。『此車に乗つてる人の中にだつて、私よりも辛い事情て、學校も途中てやめ、樂しい家に思ひを殘しながら、ゆく人も居やう、見れば、私よりも小さい人も居る、私は八年も學んだ上未だ一年も餘分にやつてる、こうした自分の運命を恨んだりしちやすまない、さうだ卑しい工女のむれには入つても心さへ、それに染まなければ、ちつとも耻しかない一心にかせがう、そして折角中學には入れた弟を、心配させない樣に勉



（地賞）　なつ姿　京橋　くに子

強させ樣、たより少ない御母樣を、安樂におさせ申さう、なに勉强しやうと思へば、夜のてまにもやれる、そして家計の順さへつけば――」

こう考へがつくと、暗い前途に淡い光が輝いてる樣な氣もする。

馬車はいつか一里の道を走つて賑やかな上諏訪の、町の眞中を、勢よく走つて居る、ぎつしらと大きい家並は後へ後へとかけて行く、私は窓につかまつて、夕暮の騷々しい町の樣を、ぢつと眺めた。

足袋屋、時計屋、理髮屋、呉服屋、とだん／＼活動寫眞見る樣に移つて行く、が、どの家もどの家も、皆多忙さうに此所一二時間の後に來る夜の活動の準備をして居る、表を掃く、水をまく、戸をくる、のれんをかけかける、店の飾りつけをなほす、とそこを、人力車がかけて行く、豆腐屋が妙な聲で呼ばつて行く、自轉車が風の樣に走つて行く、山裏から薪や炭をつけて來た馬だらう、小さな包を着けて、ぽか／＼と引かれてゆくあれも、これから住みなれた厩へ行つて休むのだと羨ましく見送つて居ると、

「大變工女が行くはねえ」

工女!! 私はハッとして首を引きこめた。

他の人は相變らずきやつきやつと騷いてる、水汲みに行つたのだらう、赤い太い手に大きな桶をさげて下女らしいのが二人、さもさげすんだ瞳で見送つてる、私は限りない腹立しさを感じて顏をそむけた道傍の人も、逢ふ人も時ならぬ馬車の響に目をそばだてるけれど、私を見ると『フン工女か』つた樣な顏して行つてしまふ、私は眼をつぶつて後へもたれた、そして早く馬車が町はづれに出てくれる樣に祈つた。

『湖水！湖水！』みんなが騷ぎ出したので私はホッとして顏を上げた、町はづれの停車場を通り過ぎたので人通りは至つて少ない、て何となくのび／＼した心地になつた。湖水がすぐ眼の前に見へる、夕暮の湖――何て雄大な景色だらう、けさ方迄の雨に水はすつかり濁つてしまつて、緑と紫と黑とを一所にした樣な沈欝な色の浪が、うねつて來ては岸をかむ、かんでは物凄く碎ける、と、古綿をひろげた樣な雲の端がつと裂ると思ふと華やかな夕日の光がぱつと凄い波の面をてらした、鼠色の雲の裂目を金色にくまどつて…。

ふと、先生につれられての舟遊びの樣がうかぶ、と矢の樣に其先生から昨日頂いた手紙の文句が頭の中にひらめく、『實業につかれるさうだ、秀才、級中の花、そ

れを手放すは級として私として惜しい、けれどお家の事情の爲、仕方がない、自重してしつかりやつて下さい……」秀才、級中の花、先生はなぜこんな事を云つて私を苦しめなさるんだらう。『實業の方が適してゐる學問なんかあきらめてしまへ」とでも云つて下さつたら、この煮へかへる樣な胸がちつとは靜まるだらうに……。

「さあ來たぞ、おりた、おりた」

もう下諏訪に來たのだ、例の男が賃錢を拂ふのをまつて、私は大きな包を下げて暗いぽく\/道を、「お父樣が生きていらしたらなあ」と思ひながら、皆のあとから機械の樣にあるいた。

家の事情のため學校をやめて工女になつて行く。只それだけの事を書いたものだが云ふに云はれぬ味がある。恐らく作者自身の經驗かも知れん。文章も癖の無い實に奇麗なものだ。(評)

【秀逸】

○闇闘

三河　てる子

「只今。」と閾をまたぎながら云つた滿枝は愛嬌のない顔であつた。紫緒の雪駄を揃へて脱いで、ぐん\/座敷へ通る。

「お歸りなさいまし。」と、細君は和笑々々して云つたが、滿枝の無愛想な樣を見ると、暗い顔をして、押し默つて終つた。

一しきりムカ\/と騒いだ心が、鉛のやうに落着くと細君は

「馬鹿阿尼め、何程の月給取りて。」と、口の中で嘲笑つた。

「木村さん、お手紙が來てゐましたよ。」と、追つかけるやうに細君が大聲で云つた。

「えゝ。」

「机の上へ上せておきましたがございますか。」と、細君は禮語を促す。

「御座います。どうも御世話樣でした。」と、丁寧に云つた。その聲は彼方を向いてゐた。

包みを下へ置き乍ら、滿枝は机の上の封書の名を讀んだ。在所からだ、急いで袴を脱いで封を切つた。文面は滿枝を弟に再婚したいと云ふのだ。年齡も下で、死んだ夫よりは出來の惡い弟になほるのは馬鹿々々しい事だと思つた、侮辱されたやうな氣もした、感情に委せて、一も二もなくことはつてやらうと思つたが、六つになる子の母と思へば、さう斷然と、強いとも云へなかつた。然し弟に婚るのは、何所までも不服だつた

事を獨身で押し通さうか――あれか、これかと思ひ惑つてをると、恰度遊びから歸へつて來た、鈴ちやんが「木村先生。」と、框から聲をかけた。

滿枝は默つてゐた。

「木村先生。」と、鈴ちやんは、も一度呼んで、襖を明け、

「先生花を拵へて下さい。此間のやうな。」と滿枝の机に手をかけて坐つた。

「今日は忙がしいからね、また拵へてあげます。」と、滿枝は、さも五月蠅いと云ふやうに眉を顰めて、一度封へ治めた手紙を、も一度、始めから讀みなほした。

「鈴ちやん〳〵。」と、勝手場から、細君が慳貪に呼んだ。

「先生は他家の衣服を拵へて御忙しいから、そんなもの、ねだるんぢやありません。お邪魔になるから、此方へお出てなさい。言ふとを聞かないと、お父さんに言ひつけますよ。」

「お父さんなんか居やあせん。」

「まあ何と云ふづるい子だらう。たんと、さう云つてお出なさい、お父さんが歸つてくると、みんな言ひつけてあげますから。――お母さんは店へお使ひに行くけど、鈴ちやんは止めるかへ。」

「お駄賃を買つて呉れにやいや。」

「ああ、買つてあげるからお出てなさい。早く來ぬと置いてきぼりにしますよ。」と、細君はビール瓶を持つて、上框の所に立つてゐたが、

「うそだ。」と、澁々出て出る鈴ちやんを見ると、強く目で叱つた。

同じ廿六歲で、而も男で、準訓導の田山や、村井が自分と、同額月給と知つた時、傲慢な性質の滿枝は、胸の透くやうな思ひであつた。さう云ふ滿枝の心は、自然素振りに現はれて、同居してをる訓導の妻君の眉を、しば〳〵顰ませた。今度、訓導が、一月ほど講習をやられてから、滿枝の素振りが、余計に目に立つやうに細君には思はれる。二人の間に闇鬪が絶えなかつた。

細君が買物から歸つて來たのは、冬の日が山の彼方へ落ち、西の空が、冷たく光る頃であつた。

滿枝が小さなバケツを携げて、湯へ行くところであつた。

「お湯ですか。」と細君が云つた。

「えゝ。」

『お夕飯はお濟みて?』この女、どこをどう饒舌り廻つてゐるだらうと滿枝は思つて、

『え〻。』と氣の無い返事をして歩きだした。

少し遊び過ごしたので細君も實は少し極が惡かつた、家へ入つてランプを點けて、夕飯の仕度にかゝる。

滿枝が湯から歸つて來た時は、細君も、もう夕飯を終つて、ランプの前で居眠をしてゐた。

『奥樣、お湯へ行つておいでなさい。夕飯時て恰度すいてゐますから、』と滿枝が云つた。

『今夜はもう止めます。』と、細君は居眠から醒めて、膳箱を片づける。

『さうですか。』と、滿枝は強いてもすゝめず、そのまま座敷へ通つて、灯をつけて、夜業を始めた。

鈴ちやんの鼾聲が靜な室にひとり高い。

細君はその夜、何時になく早く寢た。

教員の細君と、同居して居る女教員との暗闘。……一はだらし無き細君。一人は夫に別れたが傲慢な女教員、當然二人の間に來るべき暗闘を書いたものだ。未だ書足りない所もあるが、全篇最う少し突込んで欲しかつた。(評)



（入賞）よせ　仙臺　佐藤はゝつき

○をばさん

伯耆　竹本春江

妻椽で爪を切つてる時『夏代、夏代』つて呼んだものがある。ふつと向ふを見ると私はあはてゝ飛んで出た。そして袂をしつかりとらへて『お變りなかつたの』。しみ〴〵云つた。

今年の春三月ばかり○○町に講習のあつた時分、私とは遠い緣續きの小父さんの宅に宿つて私は通つてゐ

小母さんはあかの他人だけれどもさつぱりしてゐて私を可愛がつてくれた。今私を呼んだのは其の人だつた、矢ぱり此の村に小父さんの兄さんが住んでをるので、その宅へ行くのだらうと私は察してる。

『じや其處まで』と私は嬢樣を負つたまゝ二人並んで歩るいた。何から話して佳いかわからぬので默つてゐると小母さんは『日に燒けたゞらうが』つて自分の手を見せて、『百姓したぜ』つて何氣なげに云つてのける私がゐる時分に洗濯して日に燒けたのを氣にして、その夜小父さんにかくれておしろい塗つた事を私は思つた。

『實家のお父樣が加減が惡るかつたつてね、よくなつて？』

『あゝ、今日も實家へ行く筈だつたけれど兄樣に用があつて……今朝何やかや云ひ合つてな』と言葉を切つて、

『良人にや今頃ちつとも仕事しなはりやせんぜ、十日に三日位ほか……そイしていつも將棋ばつかりさいてね、ほんとに毎夜々々將棋で遲くまで起きてるわ。自分の嫌やな仕事したつてつまらん、好きな仕事ならなんでもするつておいてるだもん』。とはじけた樣な、咽ぶ樣な聲でいふ。『何てすきだらう、鼻についたんだよ』

困つたものだ、と私は思つた。

此の間寄つてくれた時分、洗ひ張りした縞の單衣着て、跣足で何も被らずに蛇の目傘一本さげて元氣のない調子で私が小母さんへの言傳にもろくに返事もせずそわ／＼かへつてしまつた。

去年の秋、何處かの鐵道へ出てる時分少々融通の利く處から、柄にもない洋服に時計のクサリをわざと見せびらかして歸へつて來た、あの時の小父さんとはまるで別人の樣だと、後見送つてしみ／＼小母さんを氣の毒に思つた。

二人は默つて歩るいた。兄さん家の前まで來た。おかみさんが戸口で洗濯してゐて『ありや、……ようあがりなはつたな、どげな事て　　』つて濡手をふき／＼還入る。口もてなしは佳いけれどもしんみりしてないので、小母さんは力ない風にもじ／＼してゐる。

『マあがりなはい』つて先きにあがつて火鉢の傍に座つゝ煙草をつめながら不安そうな目してどげな事をまたくりかへす。『どげな事つてないんだけれど……今朝何やかや云ひ合つてな、なんにも俺が惡いけんだ、俺もあげに云ひまいと思ふだどもしつていだけんな……。

兄さんは『今出なはつたぜ、何云ひ合つて、良人に迚も居つてだつたつて……一體菊さんももう四十だがあげな事つちやいけんな、ちと考へにや』、小母さんは兄さんが留守てひどくがつかりしたといふ風にあまり口をきかない。兄弟と思はれぬほど兄さんは眞面目な人の佳い人て、自分はどんな辛らい目しても弟達から頼まれると仕末をしてやる。また錢の事だらうとお内儀さんが案じたと見える、小父さんは人に物を借りてもまアほんのちよつてりといふ風に、返へすあてもないものを借りて引きずつておいて、催促されても『アヽ忘れちよつた』なんて、なるべく内兜を見れるのを嫌ふので、人は惡くはないがすぐに信用を落してしまふ小母さんは小父さんの缺點をなるべく人に知られまい〳〵と自分の身をつめて〳〵苦勞をする。私にだけは何も打ちあけた。そして小父さんを頼りない〳〵と話してゐながら、菊さんとはなれる氣はないつて。云つてゐた。けれど小母さんも眞面目に暮らす人じやなかつた。虚榮心にとんだ、派手な人だつたけれど女だけに、小父さんの樣に膽が太くなかつたのだ。

私がかへる時分にも小母さんは私をわざ〳〵呉服屋につれてつて、なられぬ内からどうして拵えたのか、めりんすの佳い柄の襦袢の袖を買つてくれた。私は何もかも知つてるだけ悲しくつて別れる際に、小母さんの胸に顔をすりつけて泣いた。小母さんは木綿のかすりの單衣を着て。よくふだんにした繻子とめりんすの晝夜帯をキチンと格好よくメめてゐたが、襦袢はきてゐない。よく使に町内を歩るくよりみなりが落ちてゐる。涙がこぼれそうになつて私は下を向いた。

『俺一人と思つて何も拵へてないがほんの有合せで御飯ても』とお内儀さんがいふのに、吃驚して歸りに是非寄て貰ふ樣に約束して私はいとまをつげた。人の家に歸る途中て何か贈りたい〳〵と思つたが、人の家に世話になつてる今の身には何も考へがつかず、も少ししたらあの襦袢の袖の何倍にもして錢を返してやらうといふ樣な事を思つた。

其の日は寄らなかつたが、翌る朝掃除してると寄つて馬車の出る間話した。小父さんが仕事せぬので食はれぬから自分は田の草取りにでも出ようといふと、小父さんが怒つて出さぬといふ事や、手紙をくれてかなしくて〳〵聲を放つて泣いて、隣りのお内儀さんが夫婦喧嘩かと思つて蒼くなつて來たといふ事や、返事を書くつていふと小父さんが切手代がいるなんて卷紙に

わるさ書きしてしまつたといふ事やとりとめもない事を話した。
　馬車が出た。小母さんはそれに乘つた。誰れものつてない、只つた一人、窓からボンヤリ顔を出して力なささうにこつちを見てゐる。馬が歩き出すと小母さんの顔が次第々々に朝霜の中へ吸ひこまれてしまつた。
伯母さんの性格がよく出て居るし伯父さんの家庭もボンヤリと想像出來る。此の人の書くものは何時も同じやうなものばかりだ。文章も洸けづりて讀づらい。（評）

○兎

遠江　山本ます子

　豆腐屋の聲が絶え入る樣に消えた。炎天の中に電氣會社の煙筒から出る黒煙が漲る。電車の軌り行音もひどく耳え觸る。湯屋の微かな白烟が青い空に透して見える。紺屋の臭氣、屋根上を馳け廻る音、歌ふ聲など雜然として居る。
　父と、社長とは競でもするかの如く、無心にペンを走らせて居る。母は應接間に裁縫して居る。眠いのだらう、時々欠伸と共に延をする。
　と、德が悄然と這入つて來た、不審そうな面相して居たが、母が居たので劇に嬉の色が浮いた。
「重雄さんは」と母は訊いた。
「堀川え這入つたて逃げて來た」と德は言つて、困つた鼠のように其處え寢ころんだ。
　些か三疊しか無い應接間に面して、少さな坪庭がある、青くじく／＼するらしい苔が生えて居る。庭の向ふは塀で圍らして、皮屋である。皮屋では何事か口論が始つて居る。
『毎日だよ』と母は言つた。德はよく續けたものだと獨言ちた。
　十二時が鳴つた。社長と父とは高々に打ち笑ふ。德は、故郷の祖父から戴いた梨子を、母と共に食べた。母は種々と國の事を聞て見る。德は、祖父さんも祖母さんも働いて居る、今年の下女は馬鹿だ！の何だのと話した。俺も歸り度い、元の百姓が可いなどと言つた母の聲は、本當のようであつた——
　暫らくして御飯になつた。
　御飯の時、始めて髯のある書記を見出した。父が簡單に、休暇だから來たのだと言つた。社長の子の重雄と言ふのが大きく坐つて居るのと、德とを比較したらしかつた。
　社長は片眼である。時々恐ろしい眼て自分の子を睨

め付ける――
食べてから德は八方から國の事を訊かれる――社長も、下男も遠洲生れてある――そして、遊に行つてないでと言われた。然し德は厭がつて、下男が養兎に草を呉るのを見回つた。(此會社は養兎會社てある。)
何百とも知れぬ養兎が、塀の周圍に幾箱も幾箱も積んである。德は珍らしがつて見て歩く――
日が餘程傾くと德と重雄さんとは湯屋え行つた。入り口に爺やが居て、五厘では厭な顔――と德は讀んだ、實



凝視　青森　松尾千代子

際十四だから。
まだ誰も這入らないので、みがいた許りらしく思われた。廣い湯場だと德はそう云つた頃之して兩人は湯屋を出て。家え歸つた。もう社長は新柳町の自宅え歸つて、德の父が帳簿を調べて居た。電車は相変らず軌り行き又軌り行く――
晩餐の時は、重雄さんも強いて行義を正した、が食べて了ふと布團を敷けと下男に言つた。そして眠入て終ふ後は自由に社長の惡口を言はれる、妾が見があるそうなと下男も謂つた。

父も珍らしいと謂ふので芝居見物にと出掛けた。新築の虎兎富貴座は森として電光が處々に冴えて居る許りであつた、で、圓道寺筋の笑福座に行つた。此處は古いが賑しい。木戸番が大聲出して居た。這入て見ると案外席が空て居た。佐倉宗五郎を演て居た。面白くも無いが大團圓迄見て外え出た。暗い路次を軒燈の光りて漸く歩いた。

歸つて見ると下男が、障子に淋しい影を映して洋燈の本に小說本を讀て居た。其聲が面白い。德は電燈も無い貧乏會社だと笑ふ。

『明日は大須え行こうか、え、大きなお寺だよ』と元氣を附けて父が、淋しがる德を慰めた。

『お祖父さんは？』と又父は訊いた。然し德は笑つた許りである。

漸々皆寢て了ふ、德は久し振りに、父と母の間に寢た。そして故鄕を想ふ。祖父母、弟、……淋しいと云ふのが、幼い情緒を刺したのだらう、矢張り名古屋も貧乏だ！と微かに謂つた。

今日も晴れて居る、書記の淺川と德と重雄さんとは御城見に行く、夫に博物館が無代て見せると聞て――お城を見て、博物館え行こうとしたが、德が厭つて止にした、もう正午近い頃であつた。

歸て見ると德の名宛て故鄕の祖父から手紙が來た。中には弟からのも一處にあつた。文意は兎を送るとの事であつた。

其の通り、晩養兎が五匹來着た。赤いの、灰色の、種々あつた、けど、病があるとの事でツブシ場に運れた。

悲鳴を上げて死ぬのも近いうちだらう。

德は故鄕を想ふ、今頃お祖父さんはどうして居るだらう――

些つと素人ばなれをしたものだ。文章も接續詞が少なく全然獨創的な新しい味のあるものだが、所々解し難いやうな所もある、もう一層作者の奮勵を望む。（評）

○下男

しらぎく

久し振て錢湯に入つて來て治助は心地好さゝうに火鉢の側に座つて夕飯をたべ始めた。

『ひどく旨い鮭だ、鹽加減があまくつて、これやあ可い』と獨りでさう思つて箸で幾度かつゝいた、そして小さな德利から二處ばかりかけた盃に酒を注いだ。

「昨日買つたしらすぼしも、まだちつと殘つてた筈だ」と蠅帳をあけて菴物を出して旨さうに食べた、

「こうして酒を呑んでると、お北が側から酌をして與れるんだつた、淡白した刺身か何かに落し玉子の清汁惣菜が一品ついて、それからきつと加減の可い香物が二種三種は膳に上つて居た、お北は湯上りの薄化粧してさうだ今頃ならば派手な中形に帶を華奢に引きしめて、少しほつれかゝつた髮を氣にして時々かき上げるんだ」と死んだ妻の面影を浮べた。

治助は三十餘年前の事を思ひ出してうつとりした。一體現在の樣な境遇になつてから平常はもう昔時の事なんか毛ほども思ひ起さないのだけれども、先刻湯屋て年取つた三助の話それが桐生の生れのものだといつていろ／＼彼力の事を話した、丁度其三助が郷里に居た時分の事だから今からやはり三十年も前の事だ、治助の古い記憶は如何して呼び起さずに居られやう、驕奢に遊與んだ其當時を如何して思ひ出さずに居られやう。「こう云つては可笑しい樣だが、俺も若い時分は隨分とそれやあ、面白い金子も費消つたもんてさ、なあに同じ一生だ苦もありあ、樂も有る、最初に樂をしてしまつたんだから、今此年に成つて、こうして人に使役はれる身分になつたつて、何、なんとも思やあしませんや。」

といつも口癖の樣に人に話す、實際彼は過去を回顧つて身を果敢なむにはあまりに打たれた怒濤が激烈しかつたのだ彼は默つてコツ／＼と働いて、食べて寢る、冬は火の氣の無い床に、夏は蚊の侵入る蚊帳吊つて、それでも安樂に足を延べてもう何も要求める處はない極樂世界に居る樣な氣がして、何も思はず眠つてしまふ、そしてまた翌日は暗い中から起きて邸周圍をガサ／＼と掃除する、日中の倦疲い盛りも金槌か何か手にしてコツ／＼と遣つて居る、其、今の境遇に充分滿足して居るのである。

が計らずも今日湯屋で三助の高話、それも幾年放浪の身の上で郷里の桐生に居た頃の全盛をなつかしんだ樣な昔話、治助も同じ世の浪に破れた身、彼の胸は力なく、響きをたてた佐野屋の若旦那と云はれて仕入に行くのを待ち兼ねて下にも置かぬ待遇をされたもんだ東京で町内一の淡路屋のお北を嫁に貰つて、親父が死んでも寸分動がぬ家の柱をひそかに誇つて居たものだ桐生で五指をさゝれた今福屋の流行女おかつ、今は如何して居るだらう、音信を絶やしてからもう二十年に

近くなる、親はなくても子は育つとか、お初は貧乏な父の手に移つて既に美しい二十の女になつた。
誰に語る者も無い、寂しく追懷で〻寂しく感慨にしづむ――が愁は大して深いものではない、老い果てた治助の回顧はたゞ夢の樣な、寢ぼけた樣な、力弱い、弱いものであつたから、薄い膜一重距たつた樣な追憶であつたから――。
酒は一滴も餘すところない樣になつた、黑ずんだ飯櫃を引き寄せて茶漬を搔き込んで種々な器を隅に片づけ蚊遣りを焚いてゴロリと横になつた。
『御免なさい、御父さん御在宅』
娘の聲だ、今頃何しに來たらうと思ひ乍ら
『お初か、御入り』
躰を半分起して上り口の方を見た。
『如何かしたのか』といきなり心配さうに尋いた、今も思出して居たおかつに瓜二つの娘の顏を見て如何やら血色のよくないのを推察つたから。
『私此頃胸が變に痛くて如何しても御用が勤まらないんですよ、早い内に療治した方がよからうからよく御父さんに相談して見ろつて奥樣が仰しやつたの、相談に來た處が今の處如何つて、御父さんに心配かける許りだと思つたんだけれど奥樣が仰しやるのにそれを聞かないでも惡く思はれるから』といつて術なさゝうに息をついた。
『不可ないなあそいつは、』と治助は困つて、
『兎に角早く一つ醫者に見て貰はなけれやなるまい、其上でまた如何とも覺悟を定めるんだ』と一寸考へて
『南町に安く診察てくれる醫者が有るつていふが其處に行つたら可いだらう』と云つた、
其晩お初は泊つた、そして翌日は醫者に行くと云つて髮なんかも整然と結つて懷中から鏡を出して白粉をたゝきつけて紅もさした、
『ちやあ行つて參ります』と出掛けやうとすると
『御門を出る時、そつと氣のつかれない樣にしろよ』と聲を掛けて『はい』と返辭を殘してゆく娘の後影を見送つて何とはなしに治助は
『賴りないなあ』と云ふ樣にしみ〴〵感じた。

後半が最う少し書足りて居ないやうに思ふ。殊に『御門を出る時、云々』と云ふ治助の言葉は何の意味か分らぬやうになつて了つた。

新體詩

横瀨夜雨選



○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を踰ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○曇れる空（地賞）

日暮里　細谷　鋭子

見よ灰色の空の大海、
星影は朦朧と、
消えがてに霧の流れて、
町並の建物は眠りはてける、
そがなかにひとり建てる洋館の、
玻璃窓ごしに青白き、
電燈の光きら〳〵と、
沈默を破りほがらかに、
もるゝ女の笑聲、
折々は人影さして、
さゞめきかはす。
やがて鎧戸とざゝれて、
暗は町をつゝみけり、
見よ灰色の空の大海、
星影はあらず、
淋しやかすかなる―雨のしのび音。

築地あたりを夜行くとよくこんな情景に接する、尖ったまち。雨に更くるけしきはしんみりする。よい作です。

○雛の壇に（人賞）

越後　雲井の雁

ねぢけながらも獨泣けば、緋色の枕
色うつりて、髪はそゞろとふりかゝ
れ。
戀に燃え立ちし春の日の、其たまゆ
らを秋と云ふ、冷たき息吹に觸てよ
り、色沈みける黒染の、櫻はわれと
なりにけり。
くづれし胸のやけつちに、花はせん
なくやしなへど、青葉燃え立つ雨の
宵、みづから明き燭して、常は亂れ
て髪をあげ、紅もさしけりつのぼう
し、しからむふりの裾さばき、帶は
やの字にたてしめて。
雛の壇に新人と、ならべられたる涙
かな。

銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀槍鳴、東船西舫悄無言、唯見江心秋月白。嗚呼天涯淪落の人、撥を擧げてまた琵琶を弾ず。

【秀逸】

○病みて

仙臺　R、K

椽により仰ぎみすれば

細き雨、晴間もみえず。
悲しきかな。故郷遠き
宮城野原の雨の夕暮。
我からとのがれ出てにし故郷なれど
我からとのがれ去りにし胸なれど
戀しきかな、今はなか〳〵に。
（かへらんか――）
涙流るゝ。得も知らぬ病らひに。
くし〳〵と胸いたみ血の氣うせゆく
此日頃、
すがりて泣かん母しなければ、
さりげなく夜を日をすぐせ。
あゝかくて病重りて、冷き軀とかへ
らむは、
いとはねど、白きしき布に包まるゝ
臨終の軀よ。
しら〳〵と頬に傳ふ故郷戀の
涙思ひては、噎たへがたきかな。
（かへらんか、母ます故郷に）
母の御膝にすゝり泣せし幸思ひ
人の胸に魂ごもりにし昔日の
幸思ふ。あゝ服從とは
辛きものよ！　世に背き
父母をなかしめて、ひたぶるに
君が腕に走りしそのかみは
苦痛の中に幽にも赤き花をみき。
今はたゞ胸の野中さびれはて、
一本の花さへみぬ。
寂しさに涙流るゝ。

ひそかにおもふ、君が涙眞ならば、何ぞいつはりのことばを設けて愛無き母にかへるの要あらんや、昨は血をそゝぎて死を誓ひし人、今は路傍に人を棄てゝ知らざるまれをよそほふ人、戀しいかな。「神よわれは退かん、われ老ゆるに從うて、次第に泣かんとするを稀なり、……されどわが世のをはりまで、わが涙はかわかしめな」嗚呼神よ、生れてよりやがて死ぬるまでわれはたゞ人に弄ばるる命なりき、くりかへして曰ふ、神よわれは退かむ。

○をんな

伊豆　加藤爲子

嚴しくは裝へども
男とは空のものよ
五尺のからだ大きけれど
形なき鎖に繋がれ
か弱き手に操られつゝ
天地も狹しと動く
貴きも、いやしきも
はた忠といひ孝といふ
尊き名與へんも
たゞ吾が心のまゝなるを
今ぞしる、あゝ今ぞしる
女てそ果きものと思ひしに。

物騒きはまる。

○訴へられぬ悲しみ

鳥取市　桑木ささ子

我より外に人を知らぬ
駄々子のわれを、夢の秘神は、
夢のゆらぎに、十八の
少女と變しゝおどろきよ。
春美しき宵にして、
紅の衣きて、琴とれど、
たゞ故もなき悲しみに――、
泣きてはみれど、悲愁しみを
きざむ調は胸の深奥、

唯おぼろかにひゞくのみ――。
やさしき母が和瞳には、
昔のまゝの慈愛はあれど、
我心和まず――、何故か、
訴へて泣かんか――。
あゝいとせめて、母にのみは
故もなき悲しみの、
悲しむ我の胸へだに
訴へられぬ苦しさよ――。
氣遣ふ母が柔膝に、
せめて、すがりて、泣けずとも、
七年前のおぼこ氣を
思ひて微笑まん――。

冒頭「それもいやこれもいやよと何事も、ほんに仇と困らせて」とあつたのを削る、淨瑠璃とまちがへられるからだ、何故とも知れぬかなしみはやがて思ひあたる時があらうから、今はいはぬ。

○嫁ぎて

越後 佐藤 浪子

葉櫻のみきに默してよれり、
夕の鐘ひゞく、幽愁のおもひ籠めて。
寂し、此響き、長々し、森越えて野をこえて。
母にこそあまいはしつれ、
嫁ぎて三日、夫とは呼べど、
おん瞳仰ぎて、あまゆる程に馴れざるを、
淋しき哉。
妻と呼ばれて、
ね高き髷に結びたる、幼き身。

ほんとですか。



たそかれ　大田和子

○鈍き日

京都市 春日 桃牛

沈默す白壁、圖書館の……。
道幅廣き道路は、
あゝ縦横に貫きて、玆に開けし、新市街。
いと廣き面積の中央に、さは、
建てる二階建、
新式の館は聳ゆ!――。
柿色の欄干は、光澤を照らされ、曇日に……
踏めば音する。ざく〳〵と……
……黒き砂利。
黒き棚、黒き箱、黒塗ペンキ
――眞鍮の鍵はかゝれり。
白き鼻緒の上草履、こは晝なれば影少し――。
宏壯なる内法よ! 沈みたる白色の
うるほひ上塗の――。

緩かに囚——いと淡き壓され心地。
ハーッと吐く息—半ば濁れる室内の
晝の空氣よ。
透明る薄き乳色、七つ八つ六つ二十
四の華電燈、裝飾淡し——梁に。
叫ばゞ反響せん？　室の四隅。
褐色の滑らなる、柱の皮膚よ。
靜かに歩む靴の底、絨氈の忍び音。
曇れる空！　白日の光線は融けて、
朦朧と射し入れる窓——開放ちたる
硝戸窓。
默然と——窓に泛びぬ。連山は……
憂鬱の!!……

この人の名は桃作といふのぢやあるまい、春日といふ姓もくつけものらしい、詩は上手は上手だけれど男だらうと思はれて……

○あだばな

攝津　みなしご

袖重ければ、撫肩の、優さ姿にも見
ゆるらむ。
綿ふくよかの重襟に、柳の腰となり
にけり。
華燭の夜を思ひ浮べつ微笑みて、
針運ばししも夢よ。
朝な〳〵殘る移香袖に秘めて、縫る
姿の影追ふも早二年。
噫其苦み、もとより苦の界とはき
けど。
病みては——(薄暗の室にむしろ敷
き薄き夜着さへ汚染みてかゆもも
てこず訪ひもこず)
今宵しも隣れる鳩の、夫呼ばふ聲を
きゝつゝ。
ふと思ふ——、吾は眞にあだばなな
りと。

紳よ、この君に哀史を作らしめたまふな。

○冬

京城　なてしこ

冬なり、星は赤々と沈める空に
うかゞひぬ疎なる林の木下みち、
街よりかへる空ぐるま灯もなくて
憊れたる寒きひびきの二列——
轍のあとの黒土の凍らん夜にか。
あゝ幽光り天より落ちて一すぢは
夜の姿立ち木の並らみ——荒涼に
繫ぎぞかゝれ冬の林の靜寂は
息ごもりぬ、樹枝を打ちて寂聲の
枯れし一葉の地にかへる生命のゆく
へ。
石には蒼きかげをひく朽葉のしめり
そゝけ髮して立つ櫟の群木より
木暗あゆみぬ——あゝ蓬髮の若者は
かゝる夜すがら蹌踉と鳥巢もあらぬ
木梢あふぎて潸々と涙するか
冬空翳す茂みなき木原の根には
隱りにか戀ふよしもなし羞恥の
愛慕の昔——血ぞ冷ゆる零落の頰に
嗚呼悽慘の星の光消たぬ一瞬
老いて行く心閃めき映り來れ。

抽象語が多くてつかまへ所は無いやうな氣がする、素養淺からぬお方と見受けますから評は二三度お力をためしてからとおもひます。

○日の瞳

岡山夢子

執着の日の瞳よ
汗ばめる青き空より――
我が薄き影に喘ぎて
何物をか我に求む。

あはれあはれかゝる時
悲しき胸にふと浮ぶ
暴き獸の血の色の――
媚ぶるが如き
君が瞳――はた君が笑。

去りにし日我を慕ひて
我が胸ぬちに室得むと
泣き給ひたる
君が笑ひよ――瞳よ。

あゝ、あゝ悲し
記憶の糸の譜のそのゝき
我が後に從ひ來る薄き影より
かすかに響く。
人思ふ惱ましき我が影より――。

記憶の糸がうすき影から從ひ來るといふのはどうしたとてせう。

○靈まつり

はま松　岸次子

それよ
咲き亂るゝ天界の花とも
かずしれぬ灯のまたゝき
金蓮や銀蓮や
ほのゆれの時めきわたれど
ふす〳〵と香のかのくゆり
――（暗き世の魂のそののき）――
しめやかに
しめやかにたゞ夜こそ更け行け。
一年、かつて
やすらひのみやの人
今宵こゝに迎へらる。
ふと起る――
寒き鐘の音と念珠のまさぐり音と
だみたる唱名とひくきしはぶきと
迎へらるゝ君は幸なり
迎ふべき人のなべて
見ずや、あな、不安にふるふ。
とみる中なる一人
念珠かなぐり捨て行けり
冥闇のおくに――
かくて、また一人、また一人
あゝつひに殘れるは
高僧の法衣のゆらめき
また、羨望のされど疑惑の
倦怠にねそびれし空けたる骸。
靈まつる一夜よ、
まつらるゝ君は幸なり
なれど聖ないものを
相容れじ永久に
まして迷へる人の子なれば――

魂を祭る人もやがて一人一人かくれ行く、のこるは法衣きらびやかなる比丘のみといふ、あなだのふとだのとわざとらしい間投詞があるので尠なからず興がさめる。

○海の夕

上毛　岩田ろく子

見よ、——日輪のかくろひ、大空は
美姫の裳裾の彩、
緩う吹く沖つ風にかろらかや
たゆたふ雲の紅の入潮。
紫の東の大空、
たゞ一つ幽に匂ふ夕づゝ、——
水禽かすかに鳴きて遙に、
遙に、少くちさく消ぬ、紅の中に。——
海原やがて靜にくれて、
漁火波に照り榮えて、——小舟は
櫂の音、低く幽に、海人の子の
波の上に闇の中を、漁火の方に。——
巖が上の茅屋の灯、
幽寂を破る暮鐘に消えがてに、
さは、あえかの姫の戀に破れし
萎び萎や、吁哀愁。——

こい(戀)お(小)ゆう(夕)をゝ(大)、こんなめ茶く茶な文字を使ふ人がこれだけの詩を作る筈がない。

○夜の海

熱海　土尾さゝ川

仄かなく浪の音
寂びしい悲しい響き——
亡者の泣く聲だ。
浪の上に小さな燈が
フイ〳〵と浮いてゐる
冥府の灯だらう？噫。
數多恨を呑むで死んだ
人の靈魂が迷つて
世を呪つてるぢやないか。——
「不安」だ！
私は暗い室にぢーつと
うづくまつた。
夜の色、闇の海
「秘密」「破壞」
浪の音、燈！。——
噫！私は——世はこのまゝ
亡ぶのぢやあるまいか
恐怖——吐息——涙。

惡くヒスかゝつたぢやありませんか、不安中毒もかく度々てはなんぼ醫師だつて手がつけられない。

○病床

山口縣　河村靜子

魔に魅いられて
眠りもやらぬあだ枕
厚き病の戸の
深くも魂をとざしぬ
光りこそ通はぬ隅暗に
死の魔潜みて
なまぬるき息つき
を暗き胸の間道を漂ひ
深くも吾を導くよ
悶え——寂しみ——胸に溢れ
戀らの昔の追懷に
かられてはい泣けり
うちよする潮の如く
不安からぬ…かなしび
冷き胸の血の揺ぎ

嘆かなしび
かなしびこめし薄暮の
輝き光りもけだるげに
血の褪せ線をなごりげに
ほのぬるかに輝せり
なぐらきにつめたき床ながら
疲れし身をのびのび
窓下のどよみに耳そば立つれば
廣告隊もさびしげに
樂器かなてずとぼとぼと
ちまたの方に消えゆきぬ
夢よ生も……死も……
　なそかれはやかれ
吾は安き和やかなる日
　天國にあそばん

○愛の廊

神戸　田中ますゑ

寇かつきし、鐵の築土
そはよしや、如何に高くとも
厚くとも、
我には越えん、手段あり
我には拔かん、術もあり
　あゝしかれども
愛もてなりし、ついひぢを
誰ぞ破りえむ、あゝ誰ぞ
寇も越え得ず、かどにまつ
まどはしともも、うらにまつ
　われいざなはんとて……
月の御座の、それよりも
いとゞやすきは、愛の廊
我とはに出でじと思ふ
あゝ安き愛の廊

○病みて

麻布　花子



夏の夕方　矢名氏

未だ暮れやらぬ、宵の今
病み疲れたる、吾體には
脉の動悸を覺えきて
沈默の胸の底に……おそひくる
鐘の遠音も……
厭ひ耳せど……戰慄ぬ……塔へがたや
ふと氣付けば……音低う……小雨する
夜の淋しさに涙して
看護りの人に聞かるさへ
ひし／＼とせまり來し……夢の惡覺
運命なるかな――冥府の扉も開かれて
淋しく殘る我が影も……一日と共にうつりゆく

○花の影

臺北　稗貫みつ子

赫々とあつき太陽は中天に
岸邊の枯あしさら／＼と
あたり靜けき眞晝中
神澄む古沼に小波して
花こそ落ちつれ
木々の葉末の戰いて
つと目を射つる紅の花。
「おゝ希望の花」思はずたゞよ
　ひぬ「誇」の笑
「湖上の花はゆら／＼とと
らんとすれば消え失する」

○煤煙

長野　東條志宇子

もくもくと將たどろどろと
青空にいとも靜かに
ゆるやかに煙そのぼる、
西より來るや、東より來しや
一陣の、旋風
並ぶ人家に砂卷くり
立てる楷を吹き折りて……

靜かにのぼる煤煙を
上へ下へ……
と……吹き亂す
あな……あな——戀に破れし醜の女が
長きそのくろ髪をふりみだして
馳けり狂ふが如く
亂るゝ煤煙……

○樂しき秘密　美濃　さくら子

さとられぬ——
親しき友にすら明かさず、
胸深く己が心の裡に、
包みひそめし秘密！。
日毎に通ふ蜻蛉の脚に、
その行ずりの道すがら、
我秘密、友の誰彼に、
それとなく語り合れ、
いろ〳〵と戯弄れる。
事なげに盲ひとけど、
いつしか色にあらわれて、
日々に益々陽に。
いとはづかしく覺ゆれど、
又嬉れしくたのしき。

○夏の野　京都　紫花

太陽は、眞上に、
夏野は今ぞ、草いきれ、
そを我れは、一人分け入りつ。
み空は、雲もなく、
遙かに見えてし、大複、
いよ〳〵間近に、なり行きつゝ。

ふと見る……木陰に、
牛のいこふ。小筵敷きて……

○田植小女　和泉　金田香雲子

黑髪の匂ひこもれる
笠美くしき——二少女。
髪の多きは姉ならむ
紐をつなぐ紫と
紅をつきたるたすきして
秋をばしかと結べど
美ぐしひとみは曇りて見えぬ。
やは胸に美まし戀をもつゝめるか
妹は清き聲あげ
花に疲れたる夜の夢を
うつゝに歌ふ如く
微風に苗田の上を渡らする
（側らに姉は沈めど）

○流星　美濃　篠田欣子

儚げに、星は流れぬ、
鈍色の、地平の空を、
いと細く、長き尾ひきて。

靜かなる、沈默の室に、
永劫に、呪はれたりし、
儚なの漂泊人。

ふと思ふ、若かりし日の、
華やかなる、歡樂の匂ひ、
あな今は、喰うらぶれて。
涯しなき、愁の空に、
沁みも入る、淡き光の
悲嘆の、星は流れぬ。

○白梅　横濱　みれ女

暗く沈める我室を
慰め顔に咲き香る
梅は花瓶に白けれど
かけて待つうつしゑの兄君は
外國人が眷りして
心靜に神の手に
ゆきぬと聞きし其日より
なやみはしげく幸うすき
果敢なき夢の世の中に
すまはんことの苦しさよ

○我すまひ　長崎　あい子

春の日光の長閑さよ
萬象は長閑けき日光浴びて
新芽を出す、
幸なる春を我はうらむよ。
去年までは我を愛でし、
父居たれど。
人の心も凍る冬の末つ頃より、
ふといたつきにとらはれ、
明けて初春の靜なる朝、
永久の夢にとけ入りしなり。
日にいやます母のうれひ顔
そをなぐさむるすべもなき、
おろかさの我心かな。
いつ春はおとづれん。
あゝ寂しらの我住居。



○規定　抒情、叙事、叙景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

○首途の束髮（天賞）

徳島縣　吉田紫花

伯母が渡して呉れた紫縮緬の絎紐を襷にして妾は從姉の亡き骸の後ろに立つた、昨日まで姉さん〳〵と親んで居た義姉の再歸らぬ首途の結髮をするのである、義姉は嫁入つて來た人、其生家のお母さんと、私の伯母とが兩脇から體を抱いて、章樣（義姉の弟）が前から頭を持つていらつしやる、冷たい姉はすべてを皆に委した樣に兩手を垂れて居る、サア古磨さんが髮結ふてくれるのですよとお母さんが涙のお聲臨終のきわに苦しい息の中から力ない眼を見張つて、かみよ——と語尾に胸一ぱいの思を込めてじつと妾の顏を見入つた痛々しい面影さへ今目の先に見へる樣な、假の緣の妾でさへ堪へられぬものを、生みの親御のお心なら御身にかへてもといとほしいてあらう、姉さんお約束の通り妾が結つて上げますよ、取り揃へられたる髮具の中から櫛をとつてもつれを解いた、今更ながら薄い髮に驚くと共に痛ましさも加はるので、じつと櫛の手元を見て居た伯母が、三十やなんぞてこんな髮じやもの長生きする筈がない章樣も正面から眼鏡越しにつく〴〵と今日が見納めのたつた一人のお姉樣のお顏を名殘惜し氣に見守つていらつしやる、男丈に涙こそお見せなさらぬが御心中は誰にもよく〳〵解ります、いつもの樣に結ふといてやつて下さいよとお母さんが云はれる、ハイハイそうして置きませうと香油の壜をとりにうつむいた拍子に、こらへて居た涙が止め度なく溢れ出て、手にうつした香油の量さへわからぬ、涙ながら丁嚀に油をつけて云ひ譯計りに梳きとつて前髮を分けた、根をする時下から義姉が何か云ひそうに思つた、前髮の出し加減をのぞく鏡も今日は置いてないので、二人の伯母に見て貰つて根に括り込んだ、又しても落ちる涙

を櫛持つ手の甲で拭い拭い漸ふ髷が出來た、有り丈のピンで止めて、金の散り紅葉の付いてゐるゴムの三枚櫛をぐるりと、小さい紫の石入りのたぼ止め、バチンと止めてほつれ毛とき込み、最後に中止めの大きなピンを深くさし納めて、漸う首途の髮は出來上つた、ヤレヤレきれいに出來ましたと二人の伯母が口を揃へてサア義姉樣出來ましたと櫛持つた儘妾は思はず手をついた、人目がなかつたら存分に泣くのであつたが、氣をとり直してアア最一度名殘りに一櫛と又立ち上つて前髮を二櫛三櫛、此れが此の世のとき納め、又後の世にもめぐり遇ひお髮を結ふて上げませうよと思ひ切つて惜しい惜しい最後の櫛を引いた、ヤレ御苦勞樣といふ伯母の言葉にもうもうとり付く島もないので靜に櫛を置いてホツト息を吐いた、髮を結ふて美しくなつた丈に猶更痛ましい首途の姿を打ち見ては又新しい涙が湧くのである。

一字一涙とは斯んな文章を云ふのでせう、わざと巧みに描かうとした處は少しもありませんけれど、天與の感動性は其まゝ文字の上に表はれて、何んな人でも泣かされます、「此れが此世のとき納め」のあたりは、まるで近松ものを讀むやうで、暫くはうつとりとします文、必ずしも新奇を要せず、人間の誠が人間を動かすのです(評)

○產（增賞）

信濃　しぐれ女

午後の三時を聞た頃から、そろ〳〵おなかが痛みだして、四時となるとだん〳〵烈しく成つて來るので、こらへ切れずに姑君にかくと打ち明けると、それでは！と云ふので床をしいて、其上に臥させて下さいました、芳さんは產婆をよびに行つた樣ですし、太一(下男)はお醫者へかけてく樣子です。

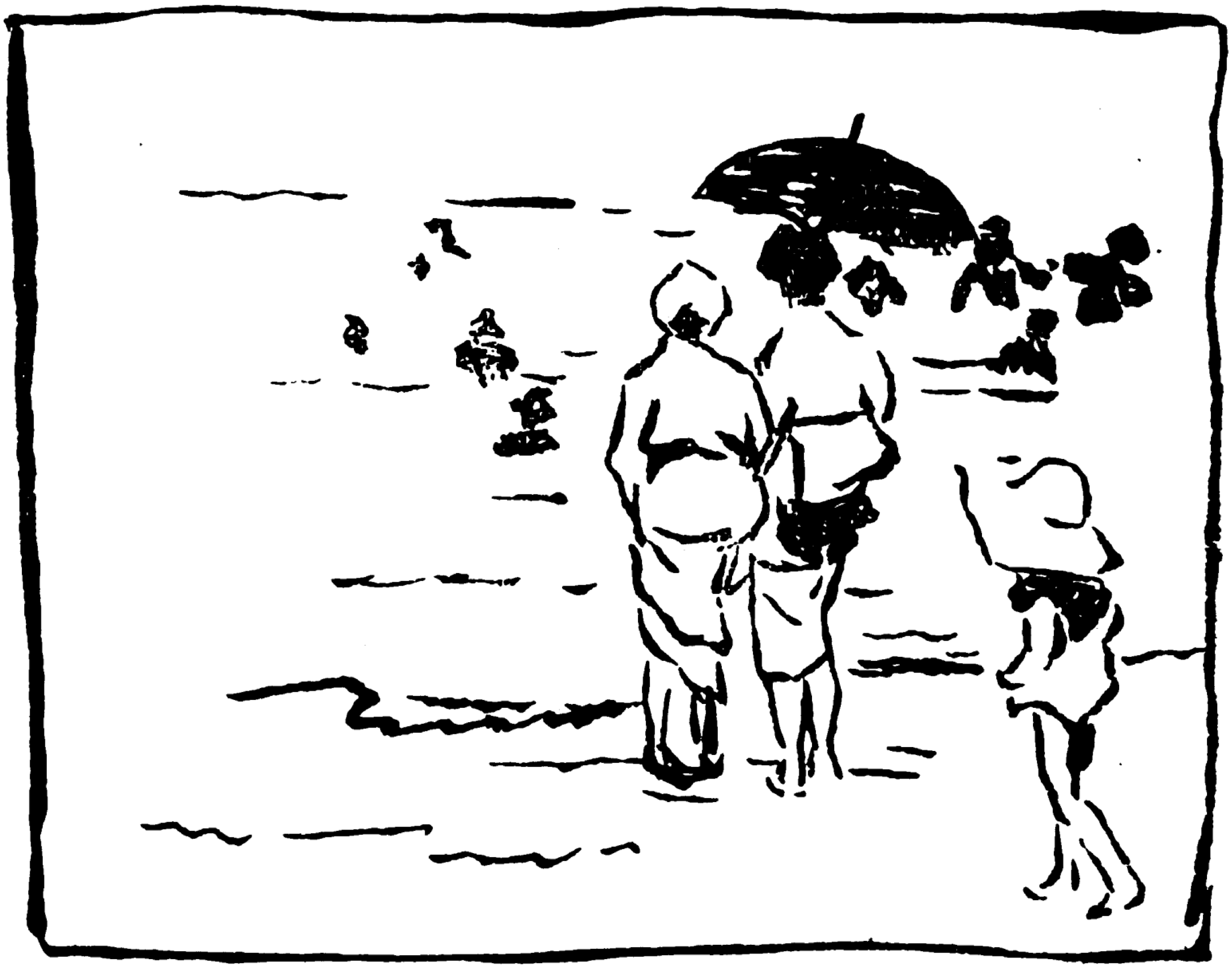
お產の前に髮も洗つて、小ざつぱりといちようまげにてもして、お湯へもはいつておこう、とは、處女の時代から胸をはなれぬ願でありましたのに、實地はあまりに事が急で何一つの用意もありません、ありませんけれど自然の力はそれをまたづに、刻々おなかの痛みはまさつてゆきます。私は床に仰向にねて只もうおそろしい何事かの宣告をうける罪人の如く、絕對の力の前に默して居ます、時計がカチ〳〵なる音のたびに、まさりゆく痛みに、日頃はおぼへぬ「時」と共に進みゆく人のからだのはたらきを感じました、此おなかの痛みが時の進むにつれてまさつてゆくと同樣の進み方て、私は生れて刻々と、ついに兒を生むこゝまで進んて來たのに、更に今迄其樣に感じませんでした。

あの海に見る大浪が、よせては返す其樣に時をさだめておしよせてくる痛み、我身乍ら又何物かの樣にも思はれますし、今こゝに、自然の大なる力によつて、新に生を探つたものを、此世の中に出すべき我だ!!と

感じる時、云ひがたき一種の感におそはれます。

そばに付てる妹の顔を見るたびに、あゝ此妹と一緒にあそんだり、けんかをしたり、泣たり笑つたりした昔の事があり〳〵目の前に浮んてきて、更に現在の我身、見を生まんとしつゝある我が、うその様にも思はれてなりません、醫者も來ました、産婆も來ました、今更らうその不思議のと云てるどころてはありません。

見よ!!時の、大なる潮にのつて、自然は生むべき大なる、痛みとなやみをよせて來つた、私は只、其力の前に服從して居るのみ、我を忘れてうめきすがり、無我夢中、自然の力にまかせて居つた間に、新しきものゝ



海邊　青森　須藤みつ子

泣聲をきゝました、身はしつぽり汗に成つて――夜は一時に近う御座います。

お産のことを此れほど意味深く書いたものは少なかつた、寫生式にいゝ作はいくらもあつたやうですけれど、叙情式のは少い事件が餘りに大なるだけ普通には出來ないからてせう、此文くだ〳〵しい事柄を一切省いて中心に力をこめたから甚だ佳い（評）

○朝の人云ふ

（入賞）芝　八重子

貴方には電車の響きがきこゑませんか。古い建物は毀されて新らしく建築されつゝあるその町の様子が見えませんか。貴方は何を思ひ、何の爲めに其麽に俯向いて歩くのです。それ貴方の古靴は埃だらけては有りませんか。不規則な危げな歩み

やうをして歩く——二町、五町——十町——その間には貴方の足搔きは消え、身躰は地の下に沈んで仕舞ひさうではありませんか。

覺醒なさい。頭を抬げてよく見なさい。

新しい風が間斷なしに湧く樣に、思想は刻々に新らしく新らしく進んで行くのてす。動搖しつゝ在る現在に貴方はもう引込み思案をして居るのてすか。倦んでしまつたのてすか。壯年と云ふ時代てすのに。

それてはあんまり意氣地がなさ過ぎます。卑怯者てす。

朝てすよ、夏てすよ。

其麽暗い木の蔭を行かないて、もつと廣々した、日や風のあたる大道を濶歩なさい。

完美の作、散文詩風の形式もよし(評)

【秀逸】

○海

羽後　菊地りう子

海は沈默して居る。と思つたら傍にざぶんと音してばらばらばと冷い飛沫が頬から全身にかゝつた、目を閉ぢて端然と古の儘に殘つて居る羅漢がどつと白く碎ける波に、一寸見えなくなる、又出る。海は無言の間に活動しつゝあるのだ。古、この村に一人の僧あつて、此岩に十六の羅漢を刻んて出來上つた時、狂して怒濤に生を葬つたと——。萬年の後こゝにこうして皆忍んだ少女の名も知る人はないのてあらう。海はから／＼と笑ふた、と思つた。「小さき人の子よ我眼より見れば僧も羅漢も汝もまさごより小さきものを」と。更に何物かさゝと笑ふた。中天の彼方て「海よ何をいふ。我より見れば陸も海もけしの實より尚小さきものを！」と。私は黑い岩に腰を下して萬物の聲を聞かうと耳をすました。岩と岩との溜水の中をちよろ／＼と黑い魚が走る。貝が澤山ついてる。やゝ上に赤百合がぶん／＼香つて二つ咲いてる。ふとみる、北の空から灰色の雲が足早に廣がつて來た。海も灰色に變つて來る。此廣い無限の境に只一人。おびえやすい我幼き靈は此灰色の海と空とに吸ひこまれる樣に感じたけれど、何故かそこを去る事が出來ない。私は生れるとよりの一切の罪を神に謝した。とすぐ目前の岩の間からぬつくり現れた、一人の漁師。六十位、肉は黑く、赤く光つてる。ぢろりと嶮しい目てみた、眉は白い。右手にざるをもつて。無人島に人をみし心地して私は「翁さん」とよんだ。ふりむきもしない又「翁さん」とよんだが矢張無言てざるを岩の上に置いた儘、ざぶんと波の中にとび入つた。あとはぐるぐる渦になつて、はーつと思つてる間にぬつと首を出した、口にさびた金器をくはえて。右手に貝を二つ許り握つてる。岩にはい上つてざるの中の貝を數へる。「翁さん」「何よ」うるさ相にいふ。「何

をとつてるの」「かきさ」「浮山とれて」「知らねえよ」「みてもいゝ事」傍に寄つて籠をのぞくと、つとひつぱつた。そして又ざぶんと波の中に。雲は漸々廣がつて波は次第にあれて來る。翁は又ひよつくり出た。「翁さんあれ、あんなにあれてきてよ。あぶない、あれ波が、まあ又入るの、よしなさいな」波はざぶんと私の膝迄かゝつた。翁はぢろりとみて「へッ、入ろうと入るまいと勝手ぢや。おめいさんあぶねえなら、早く歸らつしやれ己あ、も一度入らねえと晩のめし食えねえだ又ざぶんと入つた。私はたゞ海の廣さと空の大きさ以外に或何物かまだ〳〵大きい物に接しつゝある樣な心地て、つと立ちあがり二三歩歩み出した時五六間先に、彼翁がざるをさげてさつさと岩をつたつて行つた。空と波とは益々激しい活動を初め出した。

文章の調子が沈着になつて來たのは好い變化です、小さな主觀めいた考はあつてもよし無くても好し、考は腹に持つてゐるだけて浮山です、筆には只其外光だけを表はしてよい（評）

○孤兒院の子

麻布　江森美子

「ごめんなさい」はて誰の聲だろう、私は讀さした、詩集を、俯せて玄關に出て見たら幼い子が私の顔を見て「何んてもいゝから入れて下さい」と、小さな袋を出した。あゝ孤兒院からだ、私はるすだからと云つて斷ろうと思たがかわいさうになつたので袋を持たまゝちよつと笑顔を見せて、居間に這入た、何もやる物がないので、袋へは、少しばかりお金を入れて、母樣がお食べと出してつて下すつたビスケットをお皿ごと持つて「是れ少しだけど、落さない樣に」と袋を左手に持たせてビスケットは胸掛の、ポッケットへ這入るだけ入れてやつた、少女はポッケットの上を手でかるく打ちながら嬉色は白いまるい可愛いゝ顔に溢れて居た、私は何んだかたまらなく可愛くなッた。錢金よりも食べ物の方を喜ぶ少女らしい、少女の其の心が可愛くなつたのだ、私は少女を、すぐ歸へすのが惜くつて少し遊んて被居い」とこは〳〵言つて見た。少女はうなづいた「是れお食べなさいな」とお皿に殘つて居たビスケットをそば近く出してやつたら、少女は又うなづいて、一つ一つ、紅葉の樣な手て摘まみ始めた、「貴女何年つ」「六つ」「さう」少女は餘念なく、ビスケットを食べて居る、私は其の姿を、つく〳〵見て居る中、ふと此んな事が胸に浮かんだ。あゝ此の少女は人の情けが積り積つた化身である。千金にかへ難き命をつなぎ得て六年間の日月を、過して來たのは、血あり涙ある人の情けのたま物である。此の少女の全身に漲ぎつて居る溫たかき血潮も、ゆたけき肉も、總べて皆とほとき人の情けである。と、私は今更に世の人の美しい心がより集まつて是れまでに出來上がつた少女を見詰めた時、少女

は、ビスケットを、食べ終へて、笑顔に私の顔を見て、「もう歸へるの」と云ふ、「さう又被居い」私は少女の可愛い姿を見送りながら、父母なく、人の情けの、あかしによつて、たどり行く道は、此の先幸ち多かれと祈つた。

子供より、菓子をやるお孃樣の態度の方が面白く表はれてゐるやうです（評）

○黒い帆

金澤　むらさき女

ひどい嵐のあつた翌朝、濱には男やら女やらが、澤山集つて冲の方を見て大騒ぎしてゐる。めい〳〵の顏は獨りでに見合され不安の色に彩られてゐる。冲！そこには嘗て見た事もない黒い帆の船が、漕でるでもなし止つてるでもなしに漂ふてゐる…浪はまだ怒つてる…船をこぎ出そうと云ふ者もない。あゝ黒い帆の船！あれは世界の果ての〳〵油のやうな海にかつてその海にこぎ入れて、一生出る事の出來なかつた船の中の死人を積んであるのではなかろうか。其死人が一ぱいになつて、もう積まれぬと云ふ時、其油の樣な海は荒れにあれただろう。そして現世との道がついて流れ〳〵て今日こゝへ漂ふたのじやあるまいか。黒い帆の船は漂ひながら西の方に向つてゆく――濱の人の心を引つけて――白い海鳥が帆の邊りを掠めてくる〳〵と舞つた…。

奇想（評）

○あゝこの胸

羽後　きみ子

あゝ苦しい、胸が痛む――、もし世の中に道徳といふものがなかつたら、世界の壞亂といふものがあつたら、そんな中に於てこそ、この胸の痛みは癒えやうが……。

あゝ彼の君も、歸宅するとすぐ、あの青葉に覆はれた丸窓によつて泣いたろう、失望したろう、落膽したろう、一時片時も、自分を見出さうとする、彼の君の心は、遠慮勝なかの瞳をすら通して、自分の胸を射るぢやないか――彼の君の血は實に美しいものである、彼の人の戀は實に熱烈なものである。自分だとて、木や石ぢやあるまいし、況してやあぶらのやうな柔かいこの胸、どうしてどうして、その血の慄きの響かぬ事があらうぞ、それやあ、未來がどうの過去がどうのといへば、二人の戀はなり立ち得べきではない、どうしたつてならぬとわかつては居る、然しそんな事を考へて居る隙はない。

抑も彼の君がかう迄痛切な戀をした事は、今が始めてだろう。然るに自分は已に戀した事がある。自分の胸には紅い印象が深く〳〵刻まれてある。それは如何

にも美しいものではあるが、彼の君にこの胸を抱かせるべく、餘りに罪深いのである、どうしたつて力の限り盡しても、無事に今日を通り越さねばならぬと、遊びに來たのを幸、戒めやうと決心したが、云はうとすれば口は縫ひつけられたやうになる、こゝぞと吾と吾が心に、一鞭あてゝ、遠まはしに語り始めた時、自分の聲はふるへて居た、言葉は切々に吃り勝ちてあつた。彼の人はどんな顔をしたか自分は知らないが言葉のきれ目に乘じて、ツイと立つて歸つて了つた。歸られた後のこの胸、恐らくは彼の人の悶えと違ひはあるまいあゝ苦しい、切ない、どうしやう――。

近頃の少し年齢取つた處女には能く斯う云ふやうな煩悶の聲を聞きます、此文小説めいて居ますけれど誠に痛切の響があります（評）

○潮風

麹町　喜久

江の島をすぐ眼の前にして私は濱にひとり立つて居る、長い橋を人が二人ほどポツ／＼と歩いて居るのを見やつて居たがだん／＼夕の色がよせてきて人影もおぼろになつた、富士はすつかり雲てかくれてしまつた、鎌倉の方角を見つめた、私の胸は輕く波うつた、何だか自分の名をよばれた樣な氣がして我に返つた、浪が足もとによせ返して居る、私はいまひとりで濱に立つて居る、靜かな海岸には誰の影もない、私はもう活々とした氣になつて、何となく嬉しくてうれしくて譯もなくほゝえんだ。

鎌倉にはまだ知らぬ人がいらつしやる、ありのまゝをいへば早く、どんな方だかおめに掛り度くてたまらないのだけれどなか／＼まだおめに掛るわけには行かない、こうして待ち暮してから丁度もう半年、しかしあと僅かの月日なのだからと思ひ返して元氣が出る。けれどもし、其方が、すまないけれど嫌ひな樣な方だつたら、と恐怖の影がちらとさした。

涼しい風が肌をふく、砂地をみつめてあちこちして居た私は海面を眺めた、江の島には七八點のあかりが見える、呼ぶ聲も闇に吸ひとられてしまひさうな海岸の夜の色、なつかしい樣な香がする、そろ／＼と足を宿の方に返して、芝生の庭づたひに椽に來て腰をかけた、海からゴーツといふ音が聞えてくる、一時間ばかりたゝそれをきいて居た。

「まあ其處に居たの、」と町にいつてました母樣は汗をふきながら私の側にいらした。

「寢やうねえ」といはれてそこらを片つけてふしどに入つたがしばらく戶を閉てぬ事にした。

浪の音をきゝながらねむるのは久し振りだ、大きいの小いの、長いの短いの、ゆるく、せはしく、今宵一夜をどんな浪がどんなに寄せるのであらう、と思つてふとまた、此胸のなみは？

蚊帳の中には潮風がみちた。

火の用心のまはる音がする。

何となく縹緲たる趣があつて、自然に感興を催ふします、何處が好いと云ふのではなく、全體に文章の氣品が高く、そして優しいからてせう（評）

後の想ひ

横濱　さゝ川

想ひは暗くなつてきて、針持つ手はいつか止つてゐた遠くに豆腐賣りの聲が聞える、水道の水をくむ音バケツのかち合ふ音など、夕暮れは人がざわついてくる。くけ台を傍へおしやつて、縫かけの單衣を纏まうと立ち上つたがまた座つて了つた。亂れて長い物思ひに苦しみ乍ら幾日過したらう、きのふも一昨日も皆同じ想ひに聞えて來た、けふも裁縫し乍ら終日聞えたやるせない思ひがまた續いて――噫、悲しみに胸はえ堪へぬ。失戀――戀は破れた。幼い弱い胸に受けたいた手は深くていまに癒えぬ……あゝされど儚ない運命をもつて生れた戀だつたもの。たとへ義理といふ苦しい世の制裁がなくとも二人は長く此世に戀を語ることは出來なかつたらう。儚なかつたとは歎くまい、儚ない故に二人の戀は美しく終つたんだもの、あの……忘れませんいつまでもあなたのことは忘れません……であの別れのきわにきいた言葉、私の戀はその一言に永久に生きたのだ。過去は夢とも思つて――と彼人は云つた――此世の戀は過去と云ふ夢に葬つて了つて限りない靈と靈との戀に生きやう、此世に聖い戀といつてもそれは囁き接吻をくり返す戯れにすぎない。新らしい戀を人の世に再びは望まない。

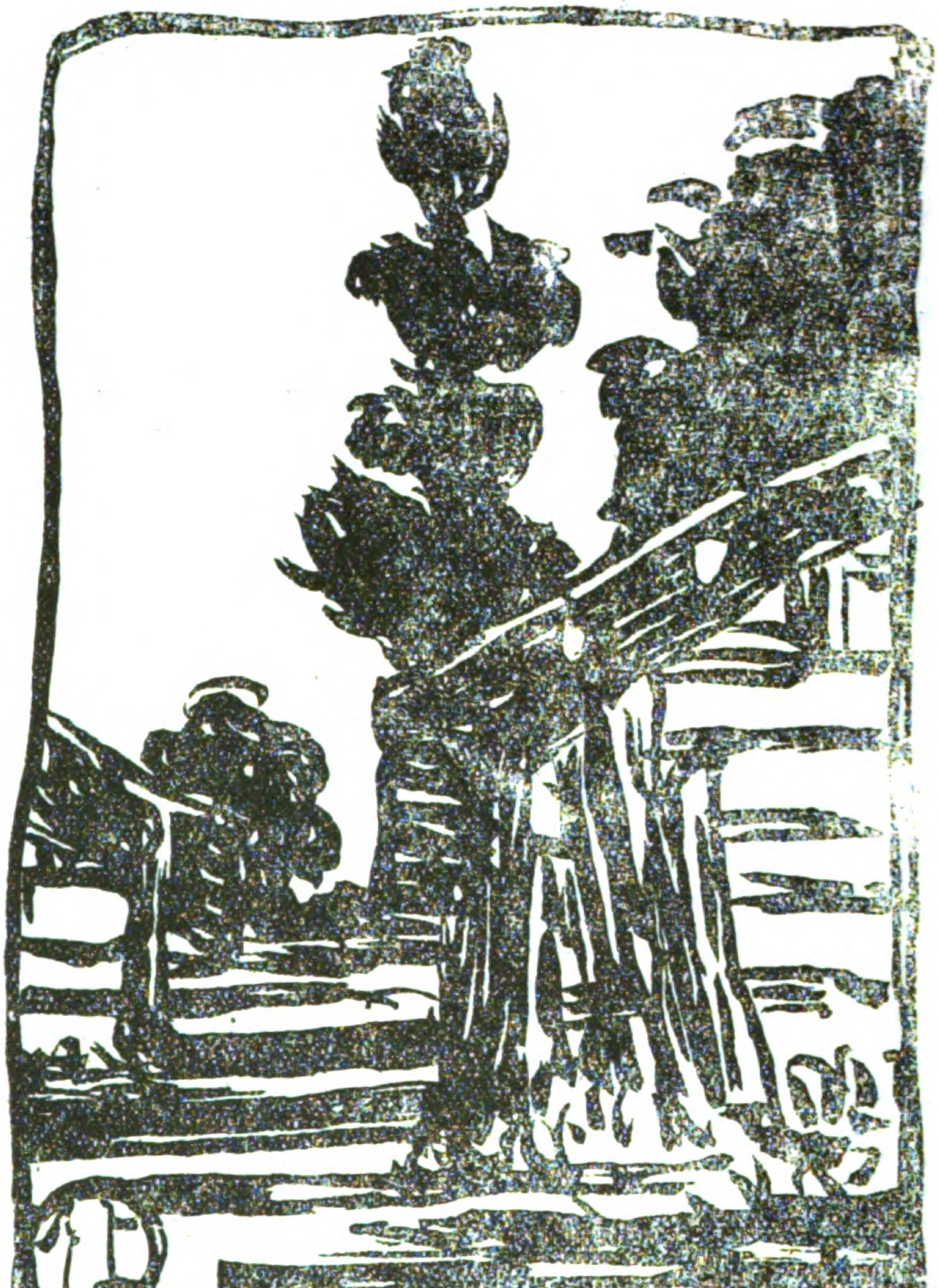
噫然し、戀を唯一の憧憬に生きた過去は淡く美しかつた。思出は明るく鮮かだけれども、さて私の未來は如何あらふ――考へ出すと厭な厭な思になる暗い〳〵闇のやうな氣がして――。悶えて惱んて僅に行先にみとめた光明といつてもはるかに遠くて小さいのだもの、道に迷つた旅人が森の奥深く一點の燈火を見たときのやう、あゝそれは狐火か眞の救ひの火が解らない。惑はしの輝きとも知らないで、微かな光明を目あてに世をたどるうち、若しもその火が消えてしまつたら――――噫暗い敢果ない生涯なんだわ。――獨りは寂しくとも美しい過去の思出を振り返りふりかへり行つたら又可懐しい思ひもあらうけれど……でも矢張り暗いわ……と思ふといつそ繁雜な人の世の煩ひを逃れたい戀も名もすべてのものを忘れ果てゝ酒に醉つたまゝ死んで了つたら――などゝ思つちやもう堪らなくなつて泣いた。灯をともすのも忘れてふと氣がついた、縫かけの單衣のみがほの白く、音もなう室の中を闇がこめる。

戀を語るものとしては誠實です（評）

○慰安

大阪　今西春江子

強烈な眞夏の日がキラ〳〵と照り渡つて、道行く人の影を僅かに足許ばかり見せた時、堀川監獄の中で四人が五六人、半ば出來上つた獄舍の家根を葺いて居た。其處からは中之島の控訴院が能く見えた。監獄の裏門から控訴院の裏門まで、强い日光の爲に地がヒヾ破れるやうな事があつても、深く刻み付けられて絶えない、數條の轍のあとがある。ふと控訴院の裏門に黑い箱馬車が顯れた。



村はづれの老杉　筑前　坪井よし子

其れがだん〳〵近くなつて、深く地上に刻み付けられた轍のあとをつたひ、いかめしい監獄の門の中え、吸ひ込まれるやうに這入つた。『ほい!!また來たわい!!!』屋根を葺いて居た四人は、皆一樣にほゝゑんだ。

思ひ切つて斯う云ふ材料を取扱ふて見たと云ふ才氣が迸つて居ます、男氣ある試みです（評）

○戸隱登山を懷ふ

信濃　前島優梨子

美麗な逆川の流れて淸めた手を、つゝましやかに合掌して跪づいた。こんもりした邊りの木がざは〳〵云ふ許り何の音も無い。靈山の神々しさが犇々と

迫つて來る。靜かに立つて石段を下りた。今通つて來た、杉の並木が見へる。あのシンとした薄暗い並木の間を、白い衣着た參詣人が、腰の鈴靜かに響かせながら、來やしないかと思ふ。

三年前の事が思ひ出されて來た、同級の友、二十何人が先生に連れられて、此戸隠表山を入里餘り馳けた事を……。さるをがせ――深山に許り見る苔――が房の樣に下つた木の根を攀ぢ登つて、馬の脊見た樣な、「蟻の戸渡り」冷汗びつしより、腹這ひになつて渡つた事。下は何千丈の崖、一度鎖の手を放したら、身は奈落の底に影を失ふ「劍の刃渡り」を夢中で渡つて、ほつと、息をついた事。

口は乾く、足は疲れる、倒れて終ひそうなのを堪へて、のぼせる樣に蒸し暑い、熊笹の間を分け下つて、冷たい〳〵「一杯清水」の流れを見た時！水晶の樣に澄んだ水を手で汲んで飲んだ時「私もうこゝで死んでも本望よ」なんて例の快活な美江さんが……。

何川か橋の無い川を十幾度も渡つて、よく轉んでは、着物も旗も裾もジックリした事。「鳥渡、其石が辷りますからお氣を付けなさいな」「そう有難う」云ひながらツルリと辷るんだもの。

あの廣い〳〵原に出た時、もう日は暮れて、晩夏の月がうつすり出て、今下りて來た山が、高々と聳えて居る、原には一面に秋草が咲いて、透き通る樣な聲で鈴虫が鳴いて居るんだもの、あの時程、自然の美しさを感じた事は無かつた。

もう前へ行く人の姿が月の光りでうつすり見へる位に遲くなつた時、向ふに二つの燈火が見へて、それが宿からの迎ひであつて、何とも云はれない懐しい、嬉しい氣がした事など、小車の樣に巡つて來る。

元來た杉の並木を、淋しい樣な鳥の聲を聞きながら、中社の宿へ着いたのは、山深い戸隠の地も靜かに暮れる頃であつた。

處女の戸隠登山と云ふことが珍しい許りでなく、文章が又それに伴ふて能く情景を表はしてゐます、所謂夏季の讀物としては絶好のものでせう（評）

○白い花

西多摩　三ケ島　よし子

今雨が落ちて居ないといふだけ、正午近い空は一面にたたきのやうな色をして、近い山の輪廓をにじませてゐる。雲は動かうともしないが、どこかまぶしいやうなそして樂しげに聞える小鳥の聲は、つゆある梢に歌ふとも思はれない、けれどもそこらはただ濕つぽい青葉の色ばかりで、よそはいざ知らず、私の目には紅といふものが少しも見られない、つひ此の間まで飽きるほど紅の花の咲いてた躑躅の枝にも、芍藥の葉にも、蜘蛛の巣がはかない露で白い花を綴うてゐる、まこと咲き誇つた南天の花も、軒ばの青苔に散りかかつてゐるし、朽ちた垣根によつて咲いてゐるのも白い小い䕅元の花、その向ふのくさむらの中に此の頃目立つてきた

のが、緑の白けた、やつぱり白い、それは大きい白百合の蕾である。
私はあの花が咲くと、この身體中の血でもつて染めたくなるものがある決してあすこに香る花ではない。それはもう四年の昔、櫻のまだ咲かぬ春の夜、數人の友と白い紙を切つて、色々の花を造つたことがある、紫紅、緑とそれ〴〵染めたけれど、私は白百合の形を造つたのである、それらを飾つて遠き國へ轉任さるゝ先生の送別會をした翌朝、その白百合を葡萄色の御袴の紐に、うつりよく持つて、ある學校の玄關の前に御立ちなされた、神々しいとも何ともいへない先生の御姿品性玉の如き人にといつも御もらしになる唇を、ただ微笑みに動された御顏！その時そのまま、四十人の同級生が先生をとり卷いて寫した紀念の寫眞を抱えて、私ひとりは友にまで別れて故鄕に歸つてしまつたのだ。淋しさと悲しさとに泣きつくした私の涙も涸れた一昨年の秋、庭の紅葉の色美しい日、嬉しい友の音つれとあわてて讀んだのが、その先生の限りなき愛の光に輝いてゐた御目はこの夏、遠い天上のみ星となられたといふことで……
私は目を閉ぢてああ多くの友はどこでどんなに泣いたらうかと、ただ人の心を思ひやつた時、どうしても自分の心を離れなかつたのが、生氣のない色のない百合の花なのだもの、染めたかつたのはその造り花なのである。
それでも――あらまた前の谷から霧が、霧のやうな雨が降つてきた、どうかあの花を雨の中へ咲かせたくない――空の晴れやかな朝、清い露をもつた、白百合の花が早く見たい。

○其夜の輝き

大阪　小千代

思ひめぐらせば三年前の今日、父が彼の銀行の頭取だつた時社長の息の賢次樣が目出度大學も卒業なされて愈々獨逸に遊學せらるゝ其門出を祝する送別會を開かれた、其時よ樂しかりし恥かしかりし日は其夜だつた、父の祝辭に次いでツト起立して明晰なる語を以て答辭せられた賢次樣の其男らしい眉の下に希望を以て輝く眼は絶えず私を見て居た、二三の人に次いで私は婦人連を代表して登壇せなければならぬ、胸は早鐘を突く樣說をしたか何うか覺えて居らぬ、やがら向き直つてピアノに對した其心地一生忘れ得られぬ程熱誠こめて彈き出した別れの曲、夢中に壇を下るとシーンとして皆私の擧動に注意して居るらしい、一足も百步の思ひして席に着いた、次に社長の御話し終つて食堂に集る事と申渡されて、ドヤ〳〵立たれる、伏目にして居た眼をつと上ると、手を握られて賢次樣、田鶴さんよく彈けた、さア食堂へ被入い、私は眞赤になつて絽の振袖をつゝましゆう亂れて從つて行く。
食堂には最う花電氣美しく輝いて、純白のテイブルクロッスの上には西洋料理の品々が並べて、椅子がヅラリと置かれ、ローヅやベラなぞの花束、名も知らぬ熱帶植物やらが幾つとなくなかれ、ブランデイ、ウヰスキイ其香は馥郁として室に滿ちて居る、ズン〳〵若樣の後から附いて行く賢次樣の次が私、其次が山田樣、其次は八重さんと云ふ風に男と女男と女と兩側に席が定まる、只無茶に恥かしかつたのも始めの間で、賢次樣と色んな話しした、私が落したナフキンを拾つても下さつた、洋行して後も御手紙をれつて云ひもした、フォーク持つ手に輝くダイヤ、首から掛けた鎖、襟のも光つて居たらう、ウヰスキー、ブランデイの香り、沸くが如き歡笑に醉はされて散會したのは十時過、父と二人馬車に乘る間際に、つと握手して、美しいルビイ入りホーアゲットミーナットの襟留を差して下された、其御手のぬくみ、ア丶忘れられぬ彼夜よ。
明日は新橋へ御着きになるとか、嬉しい又父と二人で美しい花たばを持つて……………どんなにお變りなすつたらう。

○仙人

北海道　星　精子

(母樣敢て頂戴な、れ)母樣は唯其美しい目をぱちくりさせて白い顏には、寫りの好い、眞黒に塗つた齒を愼ましやかに度々御見せなさる計り、(てすから鏡を御覽なさいな) 私の顏をぢつと、見ながら美しい笑をもらして仰る、いくら似てるからと云つて、鏡を見てこれが父樣とは見られない、他へ行つた時母樣を思ひ出せば、必ず今の樣な、美しい顏がちら〳〵見ゆるけれど、父樣の御顏となると、何も分らない、(否父樣の御話を聞

かして下さいな、什麼方だつたか)(姉様、私父樣知つてゝよ、御顏はれ、圓い樣な角な樣な、色の黑い、目の丸くて大きい、御鼻が低いの、額が思きつて廣くて、御口の大きい脊のすらりと高い方よ、れ 母樣そうでせう、)妹は母樣に似て美しい、(どうですかれ、符さんに聞かなきや)(おら何でも好い事よ)かゝといちどに笑つてしまつた。

他の方が仰入れば、母樣はよく、(私等は仙人と同じで景氣も不景氣も存じません、氣樂な者で御座います)つて仰るが、それは全くて、氣樂が通り越していつそ寂しい感じがする。いくら面白く笑つても、其後は何か物足りない。緣側の障子をがらりと明け離して、見渡す限り裾野原、何處までが自分の庭と定めやう、すぐ傍まで來て蛙が馬鹿にやかましくなくも、興がある、宵々ごとに、山の面野の面翠の色が濃くなつて來る、昨日の一雨で一層黑ばんだ、あの少し凹んだ、谷の下に暗い處には何があるのだらふ、蛇の巣が、否々、もしや〳〵、私の一番戀しい、父樣の靈かも知れぬ。田舍は嫌だけれど、父樣の御靈の傍て仙人暮が一番好い、聞ゆるものは 八千八聲を夏の日も足らぬ如く、咽喉もさけよと鳴き立てる時鳥、愼ましやかに歌ひながら谷を渡る鶯、雲の上までもとチヨ〳〵と上る雲雀、實に自然の聲、自然の景。けれど寂しい華やかな夏もすぐ逝くもの、鳥の聲が變つて虫の音となり、山野の色の變りゆく日に父樣が仰入つたらと、如何に仙人の私等でも心細い。

○今昔　冷花女

京都に遊びました私が十八の春、或美術家の興味あるおはなしを伺ひながら、ほとんどくたびれも何も忘れて、桂の御庭や其庭こゝ見あるいて、漸〻つかれを覺えて足を宿の二階にのばした其宵のやるせ無い徒然を、宿の内儀のまめにまかせて 舞子をよんでおどらせました。電燈まばゆい其下に、銀地裝房のゆれる舞扇、友染の長いふり、背中をたれる緋帶のれこじやらし こうした五人がよれつほぐれつ踊て居る處は、まるで錦繪を見る樣でご座いました。そういふ快樂によつて居る眞中に、私の胸はおどりました、と申すのは、こい眉、しまつた口つぶらぬ目、年頃と云ひ去年死別の頃を見た男美樣そつくりな美代香と云ふをふと見た時……横顏と云ひまともに向ひた跪と云ひ、女には過ぎる位りゝしい顏が其人そのまゝ、一昨年の三月のお節句に、結ひ初めのまげを面いと云つては笑た文金の男美樣が思ひ出されて、なんですか其まゝ歸へすにしのびなくなつて、鴨河に突き出たてすりに寄て、たしか模樣は牡丹だつたと思ひました、兩方の長いふりを膝にかされた美しい人とわざと灯をさけて語りました、あゝそれも夢、何も夢、今てはいたづらに思ひ出の種となるのが却ての恨み、あしたに起きては爐をたきつけ、夜は手仕事に更くるを忘れ、何も努力〻〻と神樣に感謝しつゝ、すつかりもう、新しい生涯に入た私の現在、人も必ず昔の人てはあるまい氣がしてなりません、おゝそれよ七月八日は忌日命日、泉下の男美樣に御花てもたむけませう。

○人懷しい日　平月伊知子

今日は朝から何んだか人懷しい日だ事、そして誰かお出になる樣な氣がしてならない、一寸の暇にも外に出て見度くて〳〵堪らないので遊門口まで出て見た、縣道ですから人通はあります。誰か知らぬ人迄も一寸立寄つて下さればよいに……と思ひながらも小半時許り立つて居ました。其内には何時も通つても話を交した事もない筒方のお常さんが通つたので、當方らから頭を下げて「何處へ入らつしやるの そっお急ぎてなくばお寄りなさいませな」と申したけれどもお寄り下さらなかつたので腹が立つ樣だつたが仕方ない。

倚ぼんやりと立つて居ると母樣が「伊知〳〵何をしてお出だ」との御聲、はつと思ふて内へ入らうとして又も縣道の曲り道を見ると郵便屋さんが來ますので若や手紙でもと思ふて心待ちして居ると隣の前からカバンを開けかけますのでいよ〳〵私にだと思つて手を出したら「あの橋本さんとはお内に居なさるのですか」と聞いたのであゝいや私にかと思つて居たのに、其人知りませんよと云ふてやりたかつたけれども其れもならず

え丶隣のお家にですよ」と教へて急いで家に入つた。嗚呼誰かお出てそうなものぢや又手紙も來そうなと云つて居ますと弟が「姉さん餘程樂しい事があるんですよ人の手紙を待つて居るなんて」と、いやな事云ふのれ―そうぢやないのだけれども何んだか人懷しくて堪らないのだもの。午後三時配達で郵便の聲、取る手もおそしと見ると、懷しい〳〵小夜子様からのと雪賀さんからのと二通、何時もやさしい御玉卒涙が出るほど嬉しい。

之で物待ちし效があつてほんとに人戀しい日であつた。

○惡戯の跡　福岡登磬子

寫眞帳を十枚目迄繰つて、私は、誰か見てゐはすまいかとあたりを見ました。此の顏のほてり、此の胸の動悸――。私を、眞赤にさせた其の主は姉様、

裏には「卒業紀念。明治三十六年三月二十日。清子(十八才)と優しく書いてある、

何度も何度も、叮嚀にお拭ひなすつたので、凛々しい積り、賞められる積りで書いた八字髭は、形こそない。が、それでも、あの美しい、白い、お口のあたりは、未だ、薄黒い。嗚――。未だに惡戯の跡は殘つてゐたもの。其後私に、取り出す度に、良心に責められる度に、柔い紅絹で絹手帕で――。消さうとしても、消さうとしても――。惡戯の跡を何時迄も殘す積りなのか。

惡戯の露はれた時、姉様は「知らない〳〵。此麼事して」と恐い目して私を睨みながら、欷歔り上げてお泣きなすつた。

母様は「其の優しいおかほて、其の美しい面差て、此年迄こうなのだもの、どんな女になるだらうれえ」と、ホロ〳〵涙こぼしてゐらつしやつた。

兄様は「いゝ〳〵。大丈夫だ。もつと〳〵いゝ事教へてやるよ」つて、荒々しく襖の外へ引きづる様につれ出して下すつた。此の時は氣の毒なといふ氣も何處へやら、いつか私はいゝ氣になつて一所に山に登つた。と恥かしい様て、恐ろしい様て、そつとぬけて歸つて、姉様のお好きなお庭の白薔薇を、よい事した積りで、お部屋の花瓶に挿して上げて、後で、父様に散々のお小言を戴いた。

「矢絣のお召物に、カシミヤのお袴の八字髭は隨分れ」。「マアあなたなの」と、笑はれる度に、聞く度に、何故此麼事したらうと思ふたせいか、年には抵抗しきれなかつたのか、十九といふ今年、母様は「見違へる様に、女らしい女になつた」と、喜こんで下すつた。

そして、今日、私は、結婚すべき身となつた。人妻となるべき身となつた。其爲、先方への寫眞を見つけようとして。

嗚。姉様は何と仰るだらう。兄様は――。

嗚。惡戯の跡は、十年經つても二十年過ぎても消えまい。妻となり、母となり、姑となる迄も――。

○名知らぬ樹　張津みなしご

家の裏にある一本の大樹、此處へきてからもう半年にもなるが、いまだに其名を知らぬ。

夕暮になると、お月様が此梢にかゝる。ちようど其時刻に私はいつも樹の下を逍遥してゐるのです。私は、此樹の下がお別になつかしいと思ふのではない、たゞ何かなしにこゝにきて見たいのです。

ころ〳〵と蛙が鳴く時、私は或國の或野にひとりたつてゐる――淸い流れ、青い草、鳩の毛のやうな白雲がふはり〳〵と漂ふてゐる――果てなき大野は實に美しい、どちらを見ても道はない。光明の野に道はない。もしあればそれは光のない道てせう。

あゝ光明の野、私はこの光明の野にたつて、或物を渴望してゐる、或物とは何だと訊かれても或時に見た或者のやうだとしか答へられない。

これが果して幻影と云ふものであらうか、否、否、前の世に燃えたる新草の精となつた、私の愛兒の魂が、ひそかに脱け出てゝきて、前世の母なる私の心神を、光明の導いてくれたところだつたてせう。そして暗い影には、求め得られぬ或ものを渴望せしめたのてせう。私は確にさう信じます。

だつて蛙の聲を聞きながら、自然と行つて仕舞つたのだもの、道もないいつもは高い／＼梢が今夜は手がとゝくやうだ、否、梢が近いのではない、私の心が光明を認めたからです。なつかしいとも思はないのに、自然と慕ひよつてくる、あゝ此名知らぬ樹！先の世では私の夫として、光明の國へ、靈魂の作用でなくつてどうして行かれやう。生れるのでせう。偉大なる人物、如何に我身は幸福だらうか、愛兒の魂なる草の褥に導かれて、光明の國に相携へてさまよふ時、どんなに彼野は美しく輝くてしやう。あれどこかで紙と紙とが擦れあふやうなさやかな響——草の褥の祝福の宴てしやうか——曉月は光る。私も光明に生きやう。

○つれづれ

栃木　しのぶ子

かわききつてほこりが立つ道をガラ、ガラと人力車がかけろ、車はとある門がまへの家の前でとまつた、車の中からあらはれた五十位の青い女——少しもつやのない顏色、すごいほどくぼんだ目、——藥瓶下げた手は眞白な繃帶してゐた、時々妙なせきをしては胸をおさへる、手は結核性の骨膜炎！、もう三年にもなる、胸はつい一月許り前からいたみ出したのだ。「みちや」、青い女はやさしくいつてうす暗い家のしきいをまいだ、そして青い女は妙なせきをしながらうす暗い家の中に吸ひこまれてしまつた。ある先生のお宅に隔日にみて「先生私はこうしてずり／＼つまりに死んでしまふのでせう」つて涙を落すのはこの女だ。

○

「お姉さんお乳おくんな」、名ある呉服屋の奥の椽先にみすぼらしい十一位の男の子が立つた、赤ン坊をおぶつてゐる。「アイヨ」障子がすつとあいて頂きうに太つたそしてすき透る程色の白い女が笑顔を見せた、花葉子を五つ六つ包んだ紙を男の手に與へて。太つた女は大きなひざの上にのせた幼子の頭うち守り。小さい口にやつと乳くびを含ませて、さも可愛いと云ふ樣な風にやわらかい頰に一寸頰ずりした、そして女は忍て泣いた、今は世になきわが子を思ふてゞあらふ。忍びかれて、熱い涙を幼子の頰に落しては驚いた、ハンカチを出して大急ぎでふいてる。

軒に出てホツと一息した、フト仰げば清い月がほゝ笑んでゐる、故郷がなつかしくなつた、と同時に私は身をのゝかした、あゝ私はなぜこんなに不孫生だらふ自分の身躰だのに、こんどこそはすしや行きは止そうと思つても其の時許り、やつぱり意志が弱いんだ、私は今に至るまでりボンやおしろいを買つた事がない、小使帳はすし代にかし代が主人公。いつもお父樣はおつしやる「お前はどうしてそんな不孫生だ」つて、すまない、御心配をおかけ申してあゝすまない、あゝあの時「自分の身躰を自分で注意する事が出來ない樣な者は人間でない」つておつしやつた、時のお顏、「これからはようくきをつけなさい」つておつしやつて下すつた母樣のお顏、思ひ出して又ブル／＼と身をふるはした、そして泣いた

○棧橋に立ちて

傑國　靑葉女

おゝ涼しい、すぐ目の前の絕影島も、沖の方の五陸島も、うつすりと霧がかゝつて居る。龍頭山の松の間からは社の常夜燈らしい、極あわく光が見える。棧橋には今朝入港した對馬と今夜出る壹岐とが繫がれて、客はもう皆乘りこんだらしい棧橋には二三のトロッコが通つてるばかりで、ひつそりして居る。壹岐丸の澤山な電氣燈が水に寫つて其影が浪の間に々々長くなつたり、短かくなつたり切れたり寄つたり何とも云へず美しい、あゝ連絡船、なつかしい連絡船、鳥も通はぬ玄海灘と歌はれし荒海を、今夜の内に乘りきつて、明けたなら戀しい下之關、かうして風の無い日は毎日、日本に行き來して居るものを、私はもう四年振、故國をはなれて、今年の夏の休みこそ此の連絡船の人となつて、あの懷かしい東の都に、傑人化した古るい頭を、美くしく銀座の街に呼び醒まし、上野の森の涼風に吹かれながら、新進の淸い空氣を一息なりとも吸て見たい、そしてお父樣、兄上姉上と早く呼んで見たいはやく／＼。低い調子て汽笛がなつた、あれもう出る日本へ。船は廻つたゴロ／＼と轟く車の音と、立ちさわぐ白波のみを殘こして、私し行きたい、日本へ、あゝ五陸島近かくだ。なに一週間、今に人を羨がらしてやるわ。大變遲くなつて仕舞つた。

ふと見返ると電燈會社からの黑煙は、まるで大きな怪物のやうに走つて

やさしい龍尾山の松ケ枝をこがし、次第に町の方を包んで行く。

○心の淋しさ

大阪　高山米子

ポト／＼と雨だれの音が絶間なしに、私は一人うつむいて編み物をして居ります。泚ひ朱のレース糸に白のふち飾りもうあと一廻りすれば出來上ります、此の花瓶敷に先達て編んどいた四季袋、それは花の都に居られる親友花子樣にお贈りする爲めなのて…あゝ花子樣、あの方は何てまあ幸福なのでせう、祖母樣は居らつしやるし、御兩親も御揃ひて然も私と同い年なのに、未だに學校生活なつゞけて居らつしやる。先月贈つて來て下すつた寫眞、あれで見ると五年前丁度十七の秋、お別れした時と一寸もお變りなさらない、イヽエ返つて若くお成りの樣だもの、髮だつてマガレットに、お結びなすつて、其れに肩上げをして居らつしやるので、どうしても廿一なんてうそにも思へやしない。だのに私は…もう考えまいと思つてゝも矢つ張り未練があるのですもの。



夕涼み　名古屋　岡崎德子

九つて兄に別れ十一て又母を亡くした私、祖父母の味は元より知らない私、あゝどうして愛だの情だのつて。其れは私には父も有ろ、妹もあるまだ小さい方の兄もある、けれど／＼女には女の味方が欲しい、せめて妹がも少し大きければ…兄は隨分妹思ひて何かと良くして下さろけれど、今は遠く臺灣の會社に居られろ。あゝ東京々々、日に幾度となく胸に浮ぶ此の言、だつて東京は私の故郷なんですもの、花子さん、あゝ今頃は何をして居らつしやるか知ら、私の胸の中を御存じなのい花子樣一人きり。お便りの度にいつても優しくなぐさめて下さいます、いつそもう此の儘逝つて仕舞ひ度いと幾度思つたか知れないけれど…何だか頭が重く成つて來た、障子の外ではサアーッと又一しきり降り出して來たらしい、本當に嫌なお天氣、まだ三時前だといふのに室の中はうす暗い。

○夕暮二篇

熱海　土屋さと川

夕暮れ時、濱邊に美しい方が佇つてゐらつしやる。

浪が白い息を吐いて、足もとまで押し寄せてゐるのに――夕雲が紅の炎の息を、頭脳から吹きかけてゐるのに――暗い影が海の底から、森の陰から湧いて、刻一刻體に迫つてゐるのに、知らないのかしら、ジッとして動かない。何を見入つてゐるのだらう？。あ、あ、あの方は、今に暗闇に吸ひ込まれて了ふ――ハッとして、吾身をかへりみた。

○

夕霧が罩う窓へ迫つて來る。なまぬるい風が、若い心をそゝるやうに吹く。

頭脳がぐら／＼とする。

書きさしの小説の原稿を、筆を投げて讀むで見た。拙い、拙い。自分ながら呆れる程拙い。何爲私は、こんなに下手なんだらう。胸がわく／＼して泣く程口惜しい、と、又『小説なんか書けるがらでない。』と言つた兄さんの言葉を思ひ出して、猶更、腹立たしくなる。『本統にがらにあはないんだ』と獨語ちて、折角書いたものを滅茶々々に引き裂いて了つた。

而して戸外へ出た。

沈み行く夜氣に、亢奮した神經がいくらか靜まる。と冷たい顔に熱い涙がわく／＼止度なく流れるがそれを拭はうともせず、靜かな夕暮れの街を、獨りぼつちのやうな心地てとぼ／＼と歩いた。

胸の裡には、もう決して、何も書かぬと言ふ氣と、今に立派なものを作つて見せると言ふ氣が、電氣のやうに閃めき合ふ。

○青葉のみち　臺北　稗貫みつ子

或る日曜日に、岸野様と二人、山路二里餘の先に居る姉をおとづれた事がございました、

朝とく家を出てゝ、細いみちを辿りますと、時しも、初夏の、足邊にまつはる草葉の上には、夜來の露うけてしつとり緑深く遙かに、「ホーホケキョ」と老鶯の音が致します、

しばし登りますと、右の方値が三四間彼方から向ふの小丘までパツト、燃ゆるやうな眞紅の躑躅の花が、緑滴る草葉の間間を點々と綾なして居ります、その色、……熱情走る若き女の胸の血潮にも似たその色、邊りの青葉と露に冷やされて、わづかに俛首れて居ります、「何て綺麗でせう、私折つて來てよ」と、級中の文章家たる友は早や、裾ぬらす露も厭はず馳け寄つて、鮮麗なつゝぢの數本とさうして只一本の氣高い白百合とをかざして來ました、「美しいでせう」と友は誇らしげに花持つ手をそと向ふへ離して、につこり、

「いゝ香でせう、ねそら」と、白百合を私の前に出されました、……と、はげしい香が鼻を刺激して何となくいやな、斯うむせたくなるやうです、却つてつゝぢに宿つた露の香の方がどんなに宜いでせう、友は只ひとり、恰も嬰兒の珍らしい玩具を得た様、夢中になつて、喜んで居る様子でしたがやがて、數町も登りますと、ふいに彼の花をばら／＼にむしつて、地上になげ棄て、靴の先てすつかりふみにじつて了ひました、「貴女どうなすたの？」と、私は非常に驚きました「どうつて貴女、美しいものゝ行末は皆斯ういふものよ、ね、さうでせう？」と友は寂しくほゝゑんで、あとは無言です「美しいものゝ行末はかういふものよ」との言葉、いつも私はくり返して、さうして、彼の時の友の笑を思ひ浮べて、何と無くそつと戰きます、

嗚呼、岸野富美様は若い美しい美しい詩人てした。

○森に佇みて　越後　なみ子

今、茂り合つた森の中に佇んで居ます、木の間を洩れた月光が僅かに眉先を照らして居る、星がまき散らした如く輝いて、――どの星だつたらう、と佇んだ儘葉と葉の隙間から見分けて居るけれど、あゝ分らない、

彼の如、是れの如、

姉様は横笛を携へて庭の敷石に立つて、お出て／＼、と妾を伴れては遊びにきましたけが、此森へ、そして横笛を調べるのてした、其音色、幽かに／＼印象されて居ります美妙の中に何とも云へぬ寂しさが籠つて――

――、大木の切株にハンカチを敷いて腰掛け、ジッと聴いて居ると心細くなつて思はず涙がこぼれますの、ジッと佇んで吹いて被在る姉様も泣いて居られました、蒼白い月がお顔にさして、どんなにおいたましい事

てしたでせう、私はたまらず「寂しいは」とお袖にすがると、「堪忍してれ、今一度みーいさんの姉になりたいは、みーいさんは姉さんを愛してくれて？」懐しい眼に姉様を仰いでうなつくと嬉し氣ににつこり、懐しい姉様は其年の冬遥々逝かれました、が妾はどうしてもなくなられたとは想はれませんでした、彼の森の中に被在る如な氣がして、月の冴えた宵、奥座敷の縁に立つて、ズーッと森を見て居ると黒い影が佇んで居る、木だとは知り乍も、若し姉様ではあるまいか等思つて恐ろしいも忘れて行つてみれば、矢張り立姿に好う似た若木でした、がつくり仕乍も其奥にでも等と茂つた枝、垂れてる枝かき分けて〳〵——皆みんな夢でした、

逝かれた其當時慕つて泣くと乳母やは「百合子様はあれ星になつてお出で遊ばします、餘りお泣きなさるとお姉様の星は消えて終ひます」と云はれて「どれなの」とおろ〳〵聲で尋ねると一番大きな優しい光の星を敎へました、まるで子供の様でした、でも其當時は其言葉に慰められて居りました、姉様の化身と思ふて——今森に佇んで……、どうしても其星を見分ける事が出來ません、地には只虫の聲のみ頻りでムいます。

○月夜に薩摩琵琶をきゝて

麻布　光子

今宵の清い月に、此胸の悶えを洗ひ流さうと、獨り庭に出でて、綠樹の下の椅子に腰おろして、月を眺めました。

青葉繁る木々を、吹き來る風は心地よく、前髪のほつれ毛をなぶる、何となくもう水無月だ、といふ感じが起る。

折柄程近い御社の森で、梟が鳴き出した。更けし夜の靜けさを破りて、ホーッホーッと、物哀れに、‥何故だらう、私は哀れな此聲聞くのが大好きだ、聞く毎に夏になつた、と、思ふ。そして故郷の事や、振り分け髪の昔を、思ひ起して、懐しく又戀しくなり、眼には怪しい露さへ宿る、が、それが又大好きだ。いろ〳〵の事考へて居る時、薩摩琵琶を、歌ひながら來る聲を聞いた、好む事とて、耳を澄して聞くと、歌の主、今は我家の前を、いゝ聲で歌ひながら通る、歌は、はつきりと。「後に引かるゝ心地して、松吹く風の音までも、母の聲かと疑はれ、ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば、父かとぞ思ひ、母かとぞ思ふ。」ぢーと月をみつめながら聞いた其時、胸の悶えも消え、地位名譽財産等、此世のあらゆる慾望は跡なく失せて、唯恍惚として、樂しい夢を見る様、清い清い、丁度今の月の様に、淸らかな心の我であつた、石童丸の歌と思つた時は、すげ笠かむり、わらじはぎて、左手に水晶の珠子もう、右手の杖を便りに、獨り高野の山奥深く、分け入りて、淋しき夜、不動堂に冷やかな、草枕結びかれて、鳴く山鳥の聲、咽ぶる峯の松風の音にも、母の聲か父や來しかと、疑がふ幼い、石童丸の哀れな身の上に、思ひ及んで、其有様を今目に見る心地して、追々遠くなる其聲の、幽かになる迄聞いて居たが、忽ちけたゝましい、犬の叫び聲に夢心地から、我に歸つて思つた、もう一度歌ひながら通ればいゝと、然しもう聲は聞えない。嗚呼、もし私が此世と永久の別を告げる時も、今宵の様にいゝ月夜で、父母の膝下に、今の様にいゝ聲で歌ふ薩摩琵琶を聞きながら靜かに、逝く事が出來れば、此上の望はないと、青春の今思ふのである。

獨り倉の二階にこもる、白かべの厚い窓に菱形に鐵柵をいれてある下に古い廣い島臺をかりの机として讀書をしてゐると秋の光りがどちらかといふと少し朱色がかつて明くさしこんでくる。暮れかけてゐるが晴れた日で。

と、ばたばたと蜂がとんでくる、鐵柵をくゞつては出て出てはまたくゞり、私のほとりをぶーんぶーんとうなつてとぶ。それが五匹や六匹ではないのだ。強くとぶのは雄蜂で雌蜂の方はしじゆうに逃げて机の上にはつたり落ちる。——空氣清き秋の日に蜂の羽風をしづかに聞いて、書物をよむ趣味は世に私の外たれが知らう。天地の幸福は實に私にのみあつまつてゐる。——きく子——

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奧樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙號の賞を送呈す

○大掃除の日（天賞）

日本橋　佐藤萬壽子

七月三日

今日は大掃除て御座いますからどうぞお早く御起下さいまし、と萬に起されて目をさますと時計はもう四時を二十分も過ぎて居る、又今日も雨ぢやあないのと云ひ乍ら着物を着替て居ると、まあ御らんなさいましよと萬はにこ〳〵して窓の戸を開けると、まあ珍らしい久し振りの日本晴、嬉しくつて〳〵仕樣がない、急いて朝飯を濟して自分の物を片付始めた。

此間お天氣がいゝ時に寫して置た妾の寫眞、あの翌日から雨が降つたり曇つたりして未だ出來上つてないのを燒付て三號藥て艶出しをして見ると、今までの內て一番よく寫た、うれしいから皆に見せて上げたいけれど、大掃除だと云ふのに又遊んで居るのかッて、父樣のお目玉が恐いから萬にだけ見せてそとつ仕舞て置く。

午後、お午まへに有りつ丈働いたので體がぐた〳〵になつて仕舞つた、二階へ上つて枕時計を見るともう少して一時、あゝお腹がすいた、誂物がまだ來ないのかしら、輕子等はさぞ空腹だろうに、萬やが竹の皮包を持つて上つて來た、まあ今日のお萬壽樣のよくお働きになつた事さぞおくたびれなすつたてしよう、と油煙でも付たのか鼻の頭を黑くした顏て言ふ、いゝえちつともくたびれやあしないわ、と平氣な顏をして威勢を見せてやる、萬は竹の皮を出して、あの若旦那が貴娘と私と二人て喰ろと仰被て下さいました　と妾の好きなまぐろのをすしをたくさん出す、お腹が空いて堪らなかつた處なので、まだ萬が言終らぬ內にもう一ッ頰ばつて仕舞た、ふと氣が付て店の者はまだおひるを食べないんでしよう、と聞くと、いゑ今皆な戴て居りますと云ふ、やつと安心して萬と二人て皆な平げて仕舞

た、あゝこんなおいしいおすしは始めて、かういふ時だけはさすが兄さんだ、と感心する。

もうくたびれて何もするのは厭だけれど威勢を見せた蔦やの手前動かずにも居られないので、仕方なしにそこらをうろうろして居てやる、二時半頃、もう跡別にお手傳して戴く事もお座いませんから納屋へても行て御休みなさいまし、と蔦が言ふのを幸ひにして納屋へ來て見るとまあ驚いた、河岸が上ると直ぐ姿が見えなくなつた中兄さんは新しい半臺を重ねた上へ敷物を敷いて心持宜さそうにねむつて居るし、大きい兄さんは、わかさぎの這入て來たざるを編笠にして、はたきを刀に差し、ひやめしぞうりをはいた儘「何と聞いたか櫻丸……」と車引の梅王丸の聲色をつかつて居る、皆なが一生懸命に働いて居るのに餘りのんきな、と思ふと少し腹が立て、何をして居るの早く向へ行て手傳つたら宜いぢやあ有りませんか、と言つたつて平氣なもの此方へ振向ふともしないで此度は櫻丸のせりふを言て居る、仕方がないから默まつて新聞を讀み始めた。

五時頃すつかり綺麗に掃除が出來てお湯から歸て來て自分の机の前に座つた時は、家も自分も生れかはつた樣な氣がして、あすこもこゝも姿が掃いたり拭いたりして此樣に綺麗になつたのかと思ふと、くすぐられる樣な、何とも知れぬ嬉しさがこみ上て、知らず〳〵



落葉かき　本郷　鈴木とみ子

笑が浮ぶ、今夜はさぞよくねむれるでしよう。

有りのまゝの事柄と心持が遺憾なく出て居て讀む者の興味を惹くこと、例もながら此人の獨壇である、其癖非常に巧みと云ふわけでは無く、筆もまだ〳〵定まらない、そこがやがて强味である（評）

○從兄さんの謠曲（地賞）

麻布　夕ほし

一週間許り前から縫ひ始めた銘仙の重ねが、漸く出來上つた。ハラ〳〵しながら赤塗の衣紋竹へ通して、白百合の額のかゝつて居る側の、なげしへ釣してみる。まあよかつた、衿丈も、身丈も行きもキチンと合つてゐる。ホッと一息ついて眺ながら今度の出來榮に、恍惚と衽先から裾先までみてゐた。大黑柱の店の時計が長閑に三つ打つ。オヤもうと吃驚したけれど、さて何となく物懶くつて直ぐ外の事に掛る勇氣も出ない。膝を崩して、ドンヨリした空を凝視する、濃い灰色の雲が西へ西へと流れて行く、いくらみてゐても盡きない、後から、またあとから。いつになつたらつきるだろふと思つたら、急に悲しくなつて來た。今更ガランとした家の靜けさが身に泌みる。と、地の底で何か……にて候、にて候、そうだ、從兄の哲さんが、お藏の二階で謠曲をなすつてゐるのだ、此間、私が「あなたのおうたひは、坊さんのお經讀むやうだ」つて冷やかしてやつたら、此蒸あついのに汗水流して、きつとお藏の二階の隅つこでなさる、今朝まで餘り言ひ過ぎたか知らと謝つてゐたけれど　お晝の食卓に、とうかして芝居の話しに移つた。私が、「芝居なんて嫌いよ」つていつたら直ぐ哲さんが、「私は活動寫眞が大好きだ、先刻も文明館の樂隊が廻つて來ましたよ、今度は、德富さんの不如歸が呼物なんだつて、今夜あたり行つて見たいなあ……ぢやないの草ちやん！」。口を入れさせる間もなく言ひつゞける、何んて皮肉つた言やう！今まですまなかつたと思つたのが馬鹿〳〵しくなつた。（七月十日、發、受信二）

全體にわたつて婉淑な情調があります、作品としても上乘の出來（評）

草苅日記（人賞）

茨城　初澤さく子

五月二十八日。青海のやうな綠葉の下に立つて、百畝に餘る梨畑の蔓草を、片端から立鎌で苅つて行く、まだ百性には慣れぬ身の、一生懸命に働いても父上の半分も出來ぬ、其癖人一倍疲勞して湯から上るとすぐに蚊帳の中に入つてしまふ。

二十九日。蒸暑い日である、昨日よりも仕事に慣れて母様位には苅れた、晝休みに青葉の上に横になつたま

いグウ／＼眠つてしまつた、六時過ぎ湯から上つて、縁側に寐轉んだまゝ雑誌を讀んだ、沈みかけた夕日が竹藪を透して腰のあたりを赤く染める、やがて十日餘りの月が美くしい顔を見せる。

三十日。明るい夏の日射は丸窓の下棧まで近々と寄せて、縁側に吊した金魚を入れた圓い硝子瓶は鴨居裏まで明るく見せた、八時頃漸く床をはなれたが、酷く疲れたと見えて背骨が痛む、草を苅つて見るとさ程感じない、五時頃馬の草を苅りに行く、夕暮の景色、私はこの景色がまたなく喜しい、あたりが黒ずんで筑波の山がぼんやりと見えて、高い堤を白手拭の女が節面白いひな歌唄ひつゝ家路を急ぐその様が何となく樂しいのである、蛙がなき出した、淋しいやうな、其中にまた云ふに云はれぬ喜しい所があるのだ、野に咲いた白薔薇があまりに薫り高いので一枝折つて歸る。

三十一日。今朝久しぶりで鏡に向つて見る、まあ日にやけたこと、午前に梨畑の草を苅り終へて、中庭の草苅をする、今紅躑躅が眞盛りである、菖蒲の蕾が大きくなつた、朝鮮菊を植ゑ替へて少し後れたけど菊の根分けをした、三時頃仕事をしまつて手風琴を彈いてゐるとがら／＼と車の音、三日間の休みて兄様が歸られたのだ、大きな白薔薇の簪を二つ頂く。

田園日記はやゝもすれば單調平凡になり易い、此日記幸ひにして其れに陥らず生々した趣味がある、思ふに其季節に對する人の働きがしつくりと融合して居るからであらう（評）

【秀逸】

○妹の居ぬ間

なゝしぐさ

七月何日、

今朝から君ちやんが本郷にお泊りに行つたから私は大萬歳だ、ほんとに此數日は學校がお休みになつたものて朝からあばれ散らして（もちつとかあいさうかもしれないけれど）やれ茄子を寫生するからなほしてくれるの、お人形のきものを縫ふから裁つてくれのと困る事ばかりいふ。

まさかお人形のきものゝ裁ち方は知らないよとも云へないので可い加減に裁つて渡すと變な風だとか何とかいつまでも皮肉に惡口を云つて居る、私が十二の時はあんな意地惡ではなかつたと思ふ。

とにも角にも今日はのび／＼する、「あら私に彈かしてよ」なんて横取する人が居ないから思ふ様お琴をひく五つさらへたが汗がビッショリになつた、濡れ序だと思つてとう／＼十三さらへた、但しおしまひの熊野はつかれてだんまりで彈いたので。

其翌日

おとなりでは朝早くからピヤノの音が聞え出した、私

も何かひかうかしら、でも一寸思ひ付いた事があるのでそれはあと廻しにする、思ひついた事といふのは君ちやんが毎晩缺かさずつけて居る日記である、どんな事を書いて居るか此好機逸すべからずと思つて。

まあ細くかいて居る、

七月二日……お姉樣は人の惡口を言つてはならないと仰しやつて置いて今日はお友達の花子さんと先生の惡い事を澤山おつしやいましたからいつかさう云つてあげるつもりです……

まあいやだ、それからづつとこつちのは

十一日……おひるからお姉樣の三味線のおさらへて私もお一所にゆきました、さうしてお姉樣はおひきになりました、そしたらそのすまし樣は何ともいひ樣がありませんでした、

油斷がならない人だ、こんな事書いて、歸らないうち元の通りにしておきませう、また怒られると大變だから。

やつぱり何だか寂しい、早く歸つてくれゝばいゝのに、一日別れたから今日からまた少し仲がなほるかもしれない。

巧賦、(評)

○部屋住日記

靜岡　高松ひて代

四月一日。學校出て一年、私はちつとも變つてないと思ふ、髮なりと少しはおとならしく結つたらと、お母樣が仰有るのをいや〳〵て今日までつとかたく引〆た桃割で居る、肩上げもまだ上げて居る、一昨日だつたが、つんつるてんに着物を括り上げてそしてあの袴下の三寸巾帶をお尻のさきへ垂してお庭を掃きながら、小聲でマーチを歌ふ、と、いつか足が舞踏風に動く、夢中になつてスケチングの足拍子をとつて居ると、「なんだねお客樣がいらつしたらどうするの」つて母樣があきれてしまつて被在した、

四月二日、今日は母樣のお側て朝から母樣のお袷衣を縫ふ今日はどうしたものか棲が何度解いて縫ふても棲形をあてゝ見てもいけない、母樣なのだから一層骨が折れる、やつと兩棲をいけぬなりに仕上げるとアーッとおぼへず大欠伸が出る、ハッと氣がついて「また何とか母樣よりいはれはすまいかと、お裁方に餘念ない母樣の御顏見上げると、幸にほゝゑむで被在したので、まづ胸なでおろす、此頃はもうお箸の上げ下しから母樣が注意して被在るやうに思はれる、立ち上るにも座るにもお茶を入るにも「そんなさまでは」と、もとよりやさしく仰有つては下さるもの丶何故こうお母樣は一寸したとにもむづかしくお仰有るのだろうとじれつた

くなる、ともすれば唱歌も聲張上げて歌つて見度いのだもの、學校がなつかしい、も一度生徒になつて學校へ行き度い、とお小言いたゞく折毎に學校時代が思ひ出される、然しよく／＼むねに手をおいて考へて見ると先生はどう仰有つたろう、教へて下すたろう、卒業の日は校長先生が二時間にもわたる卒業後の心得、婦人の務、家事に對する、とをくり返し／＼御訓戒下すつたではないか、あれでも女學校卒業生か！つていはれないやう決して／＼人から指さゝれないやう！にといつてきかされたとが種々に胸に浮むでくると「あゝ：これで私はと：急にはづかしく恐ろしく其處に穴てもあつたら入り度いやうな思ひがしてたゆむでた針を一生懸命に運ばして縫ひ上げてしまふ「ほんに早く出來ましたね母樣のには仕立が上等過ぎる」としんからおよろこびなさる、明日から萬事に氣をつけて女らしくなつたと母樣よりもほめられませう：先生の御訓戒をむねにきざみ、

徐ろに移ろ生活の變化がところ／＼に現はれて居ろ、內觀的省察も是れ位のところが日記としては眞てありませう（評）

○小鳥日記

京橋　夏　清

七月二日、今日父樣は芝の伯母樣の家へいらしつた。そして三時頃お歸の時私にお土產を下すつた。夫は平常からお願した小鳥私はすぐ風呂敷を解いて籠をだしたら私の願て居た山雀ではなく何といふのか美麗な鳥私は何だか拍子拔して「父さんこれ山雀ではないの子」といふと「夫は想思鳥といふのさ」私名は氣に入たけれど一寸でも手をだそう物なら夫こそ大變な騷毛並を亂して籠中を飛び廻るのでうつかりのぞく事もできない父樣が「是は摺餌だから明日からお前の役として餌をおやり摺餌と云でもわけないよ此粉へ靑い物を入て摺れば夫でよいのだから」私も何だか明日餌をやるのが樂しみだ。

七月三日、橫丁の瀨戸物やで小さい摺鉢を買て昨日の大根の葉を摺り粉を入れて、漸々でき上つたから籠をあけて手をいれると其暴れる事「折角可愛がつてやらうと思うのに此麼に暴れて憎らしい子」よう／＼餌を取替て紅葉の傍の棚へのせる暫くたつとポピヨ／＼といゝ聲で囀る昨日は塲所なれぬ故か一聲も囀らなかつた「まア何ていゝ聲なのだらうもうすつかりなれてしまつたのかしら」私はソッと籠の上へ手をかけるとバタ／＼はね廻るあまり仰山なので思はず「馬鹿つ」と籠の上をたゝいて半敗へきて父樣に「あの鳥だめよ人が傍へ行とまるで氣違の樣になるんですもの。だから私山雀がいゝのよ。おいてと云ふとすぐくるてせう」「そううまくゆくものかよ、」

七月四日、今日も父様どちらへか早くお出かけだそうして十一時頃又鳥籠をもつて御歸りだ今度こそ山雀と思てふろ敷を解くと又違ふ私もうがつかりしてしまつて「こんな鳥」と云つたら父様が「今度のはおとなしいよ文鳥と云のさ是はよく人なれて今に肩の上へのせてさへづる樣になるとさ」「うそそんな事―又鳥屋に欺されたのだッ」私は何の氣なしに手を出すとそばへ來る籠の口を開て手を入ても少しも驚かない夫から指を濡らして粟をつけて出すと平氣で食べるあまりおとなしいので思はず「いゝ子だネ」と云たら父様が夫ごらん

七月五日、昨夜は鳥の事ばかり思て居たのでいつになくすぐ眠れなかつた父様がお店へいつたあとでソッと文鳥を二疊へもつて行すつかり締て夫から籠の中へ手を入るとすぐとまる手の柔かい處へ爪が當るのでチク〳〵する疊の上へ下すと驚いて飛んだ私もびつくりして下から手をやるとすぐとまるあまりいつ迄出して置てもと思て籠へいれると出たがつて入口の處へきてピヨー〳〵と云て居るから又戸をあけるとすぐ手の上へ來るあまり可愛から父様に見せようと思て「父様一寸來て頂戴」「何だネそんな處へはいつて」と障子をサッと開けた。音に驚いて鳥が飛び上た父様も驚て「夫逃げるといけないつ」と急て障子を締める、私はわざとおちついて「大丈夫よ」と云ながら下から手をやるとすぐとまる父様は心から感心したようにむゝゝ

珍らし、面白し（評）

○手鞠かゞり　松山市　曉子

朝ぐもり、皆様に笑はれ乍ら洗濯などして、ひるから鉋屑、綿布、紅の絲、とんぼなど取り揃へ、孤兒院へ寄附する手鞠を作り始めた。其中初枝が學校から歸つたので、手傳はせて心を作らせ、私が糸をまく。今日は公園で開かる娛樂會を欠席して、人の爲めに働くのであるから、唯うれしくて二人甘い未來の空想などしながら、サッサと手を動かす。と程なく絹糸の樣な五月雨がしよぼ〳〵とふり初めて、靜かな〳〵晝を隣りの離れで織つていらつしやる梭音がかすかにひゞく。公園の人はさぞお困りだらうと思ひ乍ら、夕飯の支度にと臺所へ下りた。夕飯前一寸上つて見るともう下まきが豫定の四十は出來て居る。私のした分が二十三に初枝のが十七。食後初枝の洗ひあげする間を室の掃除して琴をさらへる。「唯忍ばるゝ昔なりけり」と一生懸命にさむしろを彈き終つて、さて振り返つて見ると、何時來たのか初枝はお城山の方向いた五月雨の窓によつて、灯もつけず一心に筆を動かして居る。「さあかゞろう」と云つても返事もせない。仕方なしに黃色の糸

て麻形にかゞつて居ると、八時前にもなつて「五月雨日記を書いたのよ」と笑ひ乍ら來て手傳つてくれる「さう、姉さんも腹案してたの」と云つて二人華やかに笑つた。オヽ夜風の涼しい事、白いカーテンがゆれる空も暗い屋根もくらい、木立は暗にさゞめいて居る。唯我が窓の光を受けた横の木のみが、淺緑の若芽を夜目には白う見せて、トタンの煙出しがシルバー色に輝いて居る、快い宵だ。つひ此間の演奏會で聞いた琵琶歌を小聲にまね始めると、下で復習してた弟までが來て盛んにうたふ。雨の音はます〳〵激しい。五月雨に妨げられてとても降りまでは聞えないだらう、かゝる夜こそなど〻三人あやしい節をつけてうたふ。たのしい夜だ。かゞり終つて寢たのが十時半、材料の算用して見ると皆で僅か十五錢。明日は早く小包にして送りませう。何だか子供たちの喜ぶ顏が見える樣でうれしくてならぬ——六月十八日



釣　青森　立花とも子

價値ある日記の一頁(評)

○嬉しかつた日

降旗さちえ

お祖父樣の事が氣に掛つて、朝飯も、碌に食べられ無い、やつと一ぱい食べて縫ひ掛けの弟の單衣を持つて、お祖父樣のお居間へ廊下傳ひて行つた、其時こんな事を思つた。お祖父樣はもう、八十三なんて年老りだから無理もないつてお母樣がおつしやつたが、眞に此頃は少しも笑

はない何か好いお慰はないかしら。と……そつと戸を開けて、お祖父樣お早うございますつて言つたら、おう今日は早かつたと、喜ばれた。

お茶をお祖父樣に上げたり、床の花を生け直してしまつて、何時もの樣に、お祖父樣の傍で縫物……今左の袖を着けて居つた、所へ、どし〳〵と足音を立て、お祖父樣〳〵と云つて壽雄さんと勉さんとが、這入つて來た。

お祖父樣は、今日は日曜かえつて、お聞きになつたら、勉さんはあいつて返事した、そして二人は顏を見合せて笑つて居た、其中に壽雄さんは、眞面目に成つて姉樣と云ふから、はいつて云つたら、姉樣私の着物を縫つて下さるから、貯金して上げやうと思ふと云つたので、あい〳〵、お金があつたら幾らでもと云つて見た、勉さんはお金が澤山有るから、うんと貯金して上げるよ、姉樣泣くと、いけないよと云つたので、幾ら貯金したつて泣かないよ、噓云ふ事が上手だ事つて云つた、二人は口を揃へて噓なんか云はないだよつて云つた、壽さんは笑ひながら、懷中から鋏を出して、これだつてもお金だよつて云ふが早いか、其の頭の毛を貯金して上げるのさつて、結つたばかりの髮を、つかんで、チョキン〳〵と、口で云ひながら、切る眞似した。……

私は、いやだつて云つて驚いた、今まで默つて見て居られた、お祖父樣は、だしぬけに大きな聲で（アハ…………アハアハ……）とお笑ひなさつた、勉さんは、初めてお祖父樣笑つた、わと兩手を打つて喜ぶ。

壽さんも、くす〳〵笑ひ出して、止めてしまつた、私も、お祖父樣の顏を見たら、嬉しくつて笑ひ出した、そして今日お祖父樣は大そうな御元氣で、度々お笑ひなさつた、壽さんも勉さんも、大威張り、今年になつて、今日が一番嬉しかつた。

無邪氣、こんなのも宜い、大手柄〳〵（評）

○處女日記　麻布　山下花子

六月十日、朝五時に起きて冷水摩擦をするいゝ心持に成つた、お庭を丁寧にはいて仕舞とおとなりから柿の花が五つ六つホロホロとこぼれた、あんまり奇麗だから其ままにしてなく、弟が目をさました着物をきせて芝公園へ遊びに行く、途中で六十許りの乞食が道端の石にしよんぼり腰を掛けて居る可哀さうだから二錢やると窪んだ目に涙を浮べて幾度もお辭儀をした、歸りにビスケットを買つてやる、晝から自分の帶を縫ふ出來上つたら四時を打つた、薄暗くなつて雨がポツリ、おやと思ふ間もなく大降りとなつた夜、雨の音を聞いて手習をする。

十二日、日本晴れ、今日の樣な日を取逃がしてはと思つて、張物をする、そばからかわくので氣持がいゝたらない、柳の木の下で洗濯を始めた襦袢二枚と足袋二足洗つたら手がすりむけて、ヒリヒリする藥をつけて、大げさに繃帶してゐると花さんそれぢやお三どんに行つても一文のねうちもないよと言はれて大笑ひ、午後わたしのかい卷をぬふ、お入つにゆ

て小豆をたべる、母樣に綿を入るのを手傳つて戴いたら日が暮れた、風呂へ入つておととひの帶を〆る夕食後定と三田へ買物に行く石鹼と水白粉ミルタ一つ買つた。歸つてあみ物をする。

十三日、けされ坊して六時半に起るお庭の松の木に止つてゐる雀の鳴聲迄が自分をあざけつて居る樣ではらが立つ緣側へ鏡臺を持ち出して、母樣に髮をむすんで戴く、前髮の出ぐわひに氣をもんで桃割が出來上つた白の丈長を掛ける、定にあらお孃樣ふつくりとまあよくお似合遊ばします事と言はれてうれしかつた、郵便ハイと飛んで行くと熊本の遠山さんから小包が來た開けて見たら新茶の香りの好いのが入つて居た午後弟の單衣を縫ふお客がいらしつてお父樣と碁を打つ、今日のお八つはロシヤパン、お客に御飯を出す、夜春背讀本をよむ。十時休む。

日記らしい日記であります、机の上のを裂いて其儘此處に出したかの樣、眞面目なのが何より(評)

○末は誰人が幸やら

備後　百合花

七月一日　梯端も朽ちるやうな雨が珍らしく晴れた、今日を逃してはと私の袷衣を二枚洗濯した垢はよく落ちたが手の皮が少し剝げた洗濯婆やにも姉樣にも恥かしいと思つたから痛かつたが誰人にも默つてゐた、物干臺に上るとお向ひの東代樣も襷掛で甲斐〴〵しく張物をして被在つた、東代樣は善く御働き遊ばす遊藝など出來なくとも彼樣な人を奥樣にした人は幸福だと姉樣が常々仰有る度に、心で私だつて奥樣になつたら其氣になるから働いてみせるわと思ふが今から矢張働き癖をつければ駄目だ、半日位の洗濯で皮が剝げちや……と思つたら東代樣に恥しい氣がした。

午後君子樣の別莊から遊びに來てくれないかと電話が懸つた、別に用事もないので直ぐに行つた、君子樣は廣い〳〵お前栽の四ツ室の前に立つて被在た、縞セスの御召物に白綾繻子の帶うつりよく足元の白百合を眺めて被在つた恰度畫中の人のやうだつた、一聲懸けたら君子樣も御兩親もこれは〳〵よく來て下さいましたと丁寧に迎へて下すつた箸より重いものは持たれた事なく文讀む事も遊藝も取立つて御好きと云ふものはないが、御兩親揃つての可愛〳〵箱入娘朝から念入りのお化粧とみえて、本當にお美しい、姿はどうでもいゝといふが矢張女は美しいが佳いと思つた、何んて御美しいのだらうと凝視てゐたら、君子樣に何んて御美しいのでせうといはれて冷汗が出た、暫く化粧品のお話し、それから琴をさらへてくれと仰有つたので六段を二時間程御さらへしたら善く彈かれる樣になられた、久し振りに三味線を手にして合奏した初めは合はない所もあつたが二度目は善く合つた、君子樣の御母樣は茶席で聞いて被在たが極樂で遊んでゐた樣だつたと云ひ乍ら果物やお菓子を持つて、被在た、何か一曲と望まれて琴で小楠公三味線で七小町を彈いた大變お上手だと云はれた、琴も三味線も鳴りが善いので、彈いてゐながら佳い音が出るなと自分ながら思つた加之凉風は吹くし景色は佳し靜かではあるし仙境に遊んだ氣がした、鳴りが佳いので佳く聞えたかも知れないが先生が聞かれたらお小言を云はれる所もあつたらう。お茶やお花の御話して日を暮して歸つた、下女が忙がしさうに夕餉の仕度をしてゐたので流石に今迄暢氣に遊んだのが濟まない樣な氣がして直ぐ手傳つた。夜は裏二階で帶を縫つた、お向ひの裏二階では東代樣が母樣と縫物して被在るのがよく見える。月は西の空に皎々と輝いてゐる、君子樣は風と月と景色をお相手に今日の六段でも繰返して被在るだらう、お二人は御兩親ある御方樣末は果して誰人が幸福に暮すやらと私は思つた。

多角多趣の材、加へて描かれた線が柔かに揺れて居るから面白いでした(評)

和歌

與謝野晶子選



○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

○（天賞）　伊賀　岡花子

悲まず別れし子をばかしこしとほむる淋しき男をいとふ

○（地賞）　大阪　梅本龍子

いと酷き掟なるかな君が爲めなげきする他を知らしめぬこと

○（人賞）　岐阜　篠田とみ子

けがれなく清くましろきくちなしの花にも似たることを云ふ君

【秀逸】

○府下　杉山常子

はげしかる情の歌をたまふ君我が前に立ついと弱き君

○石川　山田まつ子

諸共に築き上げたる愛の塔なりにし軈て崩れ初てき

○鎌倉　上原露葉

さら／＼と風唐黍に歔欷る音聞く一家の灯の陰に居り

○山口　酒向敏子

思はぬに待たぬに何の知らせとやこの夕暮の雲のふるまひ

○大阪　日野歌子

雨の後魔の來しやうに片破の月ほのめきぬ七月の空

○山形　きみ子

この八日君と思ひて亂れ髮かき上げむとも我はせざりき

○加賀　勝崎菊子

おつとせい波の間に遊ぶごと夏野の中を犬はしりきぬ

○美濃　篠田きん子

怪しくも耳そばだてぬ御君の非をうつ人の聲する方に

○伊賀　山村龍子

隣室や我等女を善く惡しく兄の友等のうわさするかな

○下總　月沖百合枝

ふるさとの井筒の側の草葵その花めでし君なりしかな

○牛込　塚原けん子

幻はとありし夜のよろこびのちまたに我の俤をおく

紀伊　あかつき

○

嬉びも悲しき事も寂しさも君あるゆゑに歌をよむわれ

讃岐　小野定子

○

そよ風に小簾まけば夏の月海を離れぬ高き家にして

大阪　京谷政野

○

君戀ふるその一の外知らざりし心なる故かくは寂しき

呉市　都子

○

のどかなるよき朝明けを里寺の芥子咲く窓に尼の君とふ

越後　井上良子

○

神の手にひかれてぞ見しよき君にあはんとぞ思ふこむ春の野に

元子

○

静かにも蛍飛ぶなり池の邊の草のいほりに誰かすむらん

熊本　松富智子

○

水やりていつか咲かむと夕每に少女はまてりなでしこの花

千代女

○

五月雨の宵こそよけれ窓とぢてひとり淋しく物思ふ身は

美濃　深尾鹿當

○

見るたびに聞くたびに涙もよほしぬ心讀めざる君を怨みて

奈良　山崎安子

○

何故と思ひわかれど悲しきは深山の家の秋の夕暮

大分　本田一枝子

○

折る袖に花も涙もちりかゝる君が御墓の秋萩の花

遠江　鈴木小ぎく

○

文月の中に咲きしかきつばた蝶も來らで空しく落ちぬ

喜惠子

○

戀怨みあゝこの怨み小女子のせまき胸には秘めも得ぬかな

ゆり子

○

北の極氷のやまに家居してあるがやうなるこのごろのわれ

越後　濱子

○

なまじひに君が優しきみことばをきかずし死なむことをこそねがへ

横濱　小澤さだ子

○

夕風に浴衣のそてを吹かせつつ千本の松の月夜をゆきぬ

長野　古畑よしみ

○

なつかしき文くり返し操り返し君を待つ夜のなぐさみとしぬ

長野　淺田千代子

○

うつら病む日の夕暮をまどろみてうらめしき子の面見つるかも

越後　喜志はつ子

○

青梅の實を吸ふ赤き唇よわがをさなさをふとおもひ出ぬ

下谷　谷口桂子

○

思人十人の中のわれとしもはかなきさまに君を戀ひける

奈良　福西白ぎく

○

かの蝶の花慕ふごとこの君は吾を慕へり歌うたひつつ

豊後　鈴木耶馬子

○

夕立や雨戸に顔を半ば出しをかしき繪見る心地して居ぬ

尾張　廣瀬かなえ

○

朝霧の中にたゞずむわれら今神の心とひとしき心

備中　馬越昌子

○

うすれゆく霧のほそみち少女子の草苅籠に百合花うごく

韓國　富永清子

○

此邊なつかし君が靴の跡つきし土ぞと思ひつゝふむ

麻布　江森美子

○

白百合の香り含みし夕風も辛しとなしぬ君を見ぬ日よ

大阪　山内溪子

○

別れては小雨の庭にあじさいの落ちるを泣きぬわれを思へば

麻布　花子

○

あゝかゝる切なき戀の文からもさめたる今はおぞましきかな

小石川　小泉溪韻

○

君思ふ心の暗に迷ひつゝ夜な／＼通ふ夢の通路

虹たちぬ彼方は遠き君が里かたみの胸のかくるがごとく　和歌山　水澤てる子
○
御涙器に秘めて永久に別れぬる日のかたみとやせん　伊豆　鈴木安子
○
行く春を青葉の蔭に涙しぬ歡樂盡きぬ幸思ひつつ　小石川　海老澤得子
○
死の國の如き深山の池の面に首さし伸べてわれをのゝきぬ　姫路　白さぎ
○
オフエリヤの狂ふさまにも似たるかな君が花もち舞ひたまふさま　府下　當麻俊
○
蜘蛛の巣に名殘りとゞめし花びらのゆらぐを見ぬる朝風の窓　根室　石田霽江
○
並木路や君と別れし二年の昔の月を今宵見るかな　伊勢　小富米子
○
夏の夜は紫の雲さし上げて星の御使面見せたまふ　美濃　伊島小枝子
○
うつむきてたゞうつむきて泣く君よいひしこと〴〵あぢはひて見れ　和泉　みつ子
○
たらちねやながめ給ひしはらからや涙に見しと月見ておもふ　和泉　岡野千枝子
○
天地にまことこの君見むとこそかれてしもこそ描きつる人　京都　大井香圃
○
黄いろなる宵の明星何故か母のみ靈とまどはるゝらむ　大阪市　乾しら露
○
短夜や宇治の川舟の朝月の下に髮梳くいく少女ども　日本橋　松岡千代子
○
春花のにほふ都とたのしみて東にのぼる人もあるらむ　鹿兒島　山本さゑ子
○
大神の怒り和みし如くにも再び君のよびたまひける　茨城　風見貞子
○
みだれ髮人に見せじとかきあぐる曉かげになく郭公　茨城縣　橋本のり子
○
なつかしき君に逢ひたる嬉しさを怨して見たる少女ごゝろよ　千葉　安井秀子
○
まろらかに並べる丘は青葉して夕風涼しわがふる里は　臺北　稗貫みつ子
○
今日もまた心のまゝに泣きてまし移れゆく庭の花散る陰に　奈良　中富よしみ
○
この想ひ君もおなじとさとりては嬉しさに泣くわれと知れかし　大阪　香崎靜子
○
たへがたき暑さに衣ぬぎすてゝ海に入らむと玉藻とらむと　上毛　岩田ろく子
○
うつくししとばかり昔見し君の俤今は戀しくなりぬ　長野　若林まさ子
○
ながるれば露の如かるおん涙袖にこぼれて痛ましき哉　信濃　東條周子
○
雨晴れしちぎれちぎれの雲遠く走りて西に夕ばえのする　長野　川端しづ子
○
夕燒は空の御神のおん酒をたうべたまひし顏に似るかも　若狹　瀧本なみ
○
彼の君と別れに摘みし事思ひありぬ藤花に雨そぼふる日　京都　岡本とし
○
奧津城のしるしの石に苔むしてからすのなくれ獨り身にしむ　盛岡　浮草子
○
朝顏のその花に似し人心いかてたのまむ一言をだに　宮城　沼倉福子
○
うなゐ子を見るにつけても忍ばるゝ樂しかりつる奈良の都を　阿波　大久保桂子
○
秋の夜の夢や眞白の靈みなが紅をどかして流るると見し　伊豆　加藤爲子
○
このことに今出てあひて怪しまぬ大人心をわれと悲しむ

○　大阪市　鹿島綾子
冷たかる御胸恨みず眞心の足らぬを恥ぢぬ君に逢ふたび
○　濱松　月れい子
花あやめ葉がくれに咲く二つ三つ水面に見えて小雨するかな
○　越後　靄子
詩の御神下りきましし夢をみてわれなつかしく野をさまよひぬ
○　鳥取　山田萬壽子
花見つゝ君は行けどもわかれ路とおもへばわれはかなしきものを
○　京都　村上きよ子
空の香の土にしみ入り新しき息ふくがごと若草もゆる
○　和泉　谷ふじ子
青柳の影を流るゝさゝ川の水のさゝやき鈴に似るかな
○　明石　落葉子
百年も山の眞洞に住みしごと日をおづる子となりにけるかな
○　西多摩　三ヶ島よし
短夜を戀しき夢のふとさめて二こゑばかりほとゝぎす聞く
○　日暮里　細谷鐵子
何事の希望もあらずいたづらに生くるを歎りす人の子のわれ
○　大阪　平尾とき子
夕顔の花かぞへつゝ歌思ふ清き少女はわれなりしかな
○　美濃　加藤芳子
いろ〳〵の紙を漉くなる山小屋に歌うたふなり美濃の少女は
○　筑前　とよ子
す枯れたる瓜の小花にむつれ居る眞白の蝶を我はをとしむ
○　山本みどり
初夏の夜はにの〳〵とあけそめてなごりつきせぬ星をけしゆく
○　茨城　初澤さく子
はづかしき清き流れに笠脱げば微笑む月の我顔のぞく
○　陸前　大場ちよせ
海一つへだてゝ遠き空にゐる夕雲を見て涙ながしぬ
○　常陸　木村那賀子
恥かしき君ならざるも我はなほ粉つくろひぬ少女子なれば
○　秋月花江
花あやめ白紫のいく群か朝の風ににほうよろしさ
○　伯耆　竹本春江
なか〳〵に女てふ名のおぞましく思ふことみな胸のをのゝく
○　福井縣　やまざと
そのかみの歌を想ひてよりかゝる柱つめたし秋雨降る日
○　廣島　田坂芳溪子
情ある君の御文頬にあてゝ土佐のみ空を遠しと泣きぬ
○　和泉　金田喜代子
夏の虫草葉の蔭に露を待つ我はこひしきおん文をまつ
○　茨城　岡田きよ子
そと揺れば紅の頬に紫のしづくこぼれん葡萄かげかな
○　土佐　山本秋子
五月雨るゝ五ヶ瀬のほとり闇ぬひて灯の一つこそひた走り行け
○　大阪　野村政子
別れ路の今日のこよひの戀しさをみそらの月やすこし知るらむ
○　播磨　森中かず子
よき風は海の千里をすべりきて朝湯の肌をおもむろにふく
○　若狭　蝶夢子
藤の花小女ゐならび髮梳けるさまして咲きぬ夏近うして
○　徳島　吉田紫花
吐息てふ青き烟に世は盡る人は戀のうつはなるべき
○　靜岡　此常美代子
幾たびも夢に遊びし故郷のむらさきの藤見るがうれしき
○　高岡市　篠原みゆき
いく色の夏雲うごく夕ばえの影はうすれてみづうみくれぬ
○　麹町　淺井ゆき子
このなげき全く消ゆらむその時は我れは死の神の御手にあるべし
○　大阪　春の海
死ぬもはた君と相見し始めの日受けしが如きうれしさなけむ

ごみ池に蓮の花さき醜浮きて夏はなつかし古里の家
○　沼津　中村あい子

夜の鐘はこう〱として我胸の焼け残りたる洞ろ木に鳴る
○　麹町　牧野一人牛

美しう晴れたる空のと息にてちりぬざくろの緋の花びらは
○　七北田　まさ

少女子の聞耳立てゝ足とめぬ紅の薔薇を手折らんとして
○　静岡市　さち子

よもすがら小雨しと〱降りにけるこの秋の夜を墓にます母
○　静岡　鈴木りう子

妹に傘さしかけて手を添へて池の菖蒲を剪らせつるかな
○　千葉　田島せい子

あぢさいのその花に似しいろながら夕の海はいとおそろしき
○　岡山　時實すみれ

一本の葡萄のかづらひろ〱と黒き影おくもとにまちける
○　茨城　寺門鶴子

たへてなき君の便りも今日は來て心くまなく晴れ渡りけり
○　丹後　松本たき子

月見草ゆかた姿のわが少女洗ひ髪して立てるさまかも
○　牛込　平塚白百合

青柳の姿を宿すさゝ川のほとりに熱き頬をさましける
○　和泉　金田香雲

小扇の歌ながめ居る橋の上君來まさぬにほとゝぎす啼く
○　東濃　美能枝

秋の青世に殘されし孤兒のそれとは知らで母を呼ぶかな
○　和泉　光子

君も射ね吾れも放ちぬまなざしの戀の矢じりに胸はみだれぬ
○　静岡　壽衛子

秋の日のよわき光にてらされて花を尋ぬる蝶のさまかな
○　秋田　加藤うん子

○　秋田縣　晴野いな子

君くやと待し今夜も更け渡り淋しき胸に水の音きく
○　茨城縣　服部うみ子

かたもみのめしひが流す笛の音に町はねぶりて長雨ぞふる
○　津久井　富田美彌

なつ草のしげきが中に何となくけ高さ見ゆる白ゆりの花
○　山形　島貫孝子

その昔萩の花散る朧夜に別かれし君はいづちいにけむ
○　豊後　藤田富子

幾度か巻きつ開きつ繰り返し口吻なしぬ紅いろの文
○　波島　伊東小百合

花つみて歸る少女のゑがほをばみるたびわれはこし方こひし
○　陸奥　石黒かれ子

塵塚の火にはあれども燃え上るほのほを見れば美しきかな
○　京都　井上瀧子

やむなくて一人をめづといつはればいやほゝ笑むかわれてふ少女
○　静岡　高田元子

七夕や麻屋いてたるわが姉に薄月さしぬ夕顔の花
○　千葉　平山佐多子

訪ふ人もなき山おくの里ながら螢飛び來ぬ六月くれば
○　大阪　土橋仙花女

我君にめぐりあひたる夢半ば朝鐘鳴りて野消え君消ゆ
○　野菊

君知るや短かき言葉繰返しいにし日しのぶ少女心を
○　三重　川原みさを

少女子の歌ふ唱歌の面白く夕風涼し背戸の畑道
○　山口縣　須子てる子

つく〲と昔忍ぶる其時に哀れなつかし君の玉章
○　常陸　とよの

若葉かげ宮仕する貴人が鷹狩する夏の夕ぐれ
○　下谷　村上幸枝

山深き温泉の宿のわびしらに友とじめづるしら萩の花

靜岡　池田芳子
○月に泣く若き二人を見し時は過ぎにける世の我を思ひき
鳥取　安木春子
○いたむべきかよろこぶべきか若き日のなやみを切に味はひ染めぬ
信州　荒井豐子
○少女子とやさ名もちたるわれなれど悪寛わびしみ鋒取りてゐぬ
本郷　海老原一梅子
○夢なりき亡き姉君と手をとりて秋野の花にたはぶれつるは
愛知　秋月
○いかなれば堪へる我をあとにして神のみ國に逝きにし君ぞ
茨城　黒澤とよ子
○音もなくおちし椿の一つをば池の緋鯉は爭ひにけり
小石川　せきちく
○わが胸に咲く花なると來たる子を憎みぬめてぬせのくるほしき
土佐　桃の花
○さゆり咲く片山里にいほりして歌に興やる君おもふかな
羽後　菊池りう子
○春の夜や艶唄うたふ隣人によき酒進ずと文がらをたく
土佐　梶原重子
○雨の日や寂しさと云ふ大き人刄物握りてうしろよりくる
大阪市　荒川那美子
○かばかりの御言さへも危ぶみてあざけるがごとあるやうなれど
尾張　小島秋雫
○斯くしつゝ君のみ戀ふとうちつけにいひもかれつる十八の秋
千葉縣　峰島和準
○山の端五月雨淡くけぶりするなかに咲くなる白百合の花
羽後　佐々木萬子
○ともづなとたのみし君にひきわかれ楫なき舟のよるへしらすも
伊勢　田中峰女
○去年の春君とたのしくかたりける櫻のもとの月夜こひしき
大阪　服部きよ子
○河越えて箏の音きこゆおばしまや夕べの燈は水に流るゝ
信濃　下枝よし子
○山奥のいほりの人のすさびなる笛の音による小鹿もあらむ
下關　山本芳子
○この女二八に戀ひしその人と遂に得添はず二十となりぬ
樺太　朝
○淋しさに父の旅路を思はれてふしおがみけり天地の神
福岡　角銅ゆきえ
○少女子の戀するさまに似たる哉川邊に匂ふ白百合の花
八戸　掛端杉子
○何んとなう人なつかしき夜なりき我は惱めり君のことばに
下總　小出保花子
○雨あがり白銀色の一とひらの雲は流れぬ君ます島へ
下野　たけ子
○晴衣ぬふ南のまどをそとあけて夕立あとの百合の花見る
樺太　眞田のぶ子
○朝顔のまばらになりて我庭はそよふく風に秋は來にけり
島根　長崎しづ子
○人の子が愁ひのきはみほゝゑみの極みぞやがて歌の領なる
京都　藤尾よしえ
○鬼も住み佛もいますいとくらき道にかゝりぬ我等少女子
小草子
○赤城山朝の氣清き頂に白百合あまたつむと夢みし
肥後　富丸わか子
○見し夢のたゞ何となく戀しきに小窓あくればざくろ花ちる
信濃　小池いち子
○入相の鐘なり渡る秋の野をいとぞ淋しう子馬の行くかな
田舍　願
○松が枝は小暗きまでにをほひけり根本に小さき白菊の咲く
加賀　野口そとえ
○ふるさとのそらなつかしとながむればすゞしくてらす二十日月かな

○夕顔の咲けるかたへを田舍人ほこり立てつゝ馬ひきてゆく　兵庫　靜子

○鈍色の空を仰ぎて我は泣く行衞もしらぬ人をおもへば　筑前　香原ふさ子

○池の面に散りて波立つしら桃の花にまじりて鯉のあそびぬ　鹿兒島　野田まさ子

○白萩の野の宵月夜さまよひて久に相見ぬ君思ふ哉　福井縣　明星

○五月雨の晴間に母のお墓訪ひ夏菊さしてかへりけるかな　上總　森[illegible]笑

○塵の世を捨てし白衣の人ふたり涼みいませり瀧つ瀬の下　伊豫　浮草

○うたゝねの夢に見てより日もすがら君が姿はたへず去來す　本所　武林朝子

○夢の穂や里の黄昏のどかにて夕げの煙裳に立つ　秋田　登興子

○そこしれぬくらがりみちと人はいへどよき花の香のただよひくるを　門司市　松永操

○淋しさに方丈記などひもとけば懸なき友とわらはれにける　藤澤　常盤幸子

○三ツばかり光はなてるほたるかご袖におほひて笑みたまふかな　大阪　梅村愛子

○子の胸に抱くおもひも知りませぬおん母なればいやなつかしき　京都　段谷のぶ子

○夏の日のこの夕ぐれを欄干に寄りてはまたも君をしのびぬ　京都　紫花

○夏木立しげるなかをば我行きぬ君にさゝげん百合折らむため　千葉　岩田よし子

○夏の月渚に座して浪の音にきゝ入る人の片頰てらしぬ　松山　曉子

　靜岡縣　鈴木とも子

○山百合の花をかざして頂上に神を祈りぬ山の曉き　越後　吉眞靜子

○雲の霧わく山の大木の根より吹きたつ初秋の風　千葉縣　鶴岡かず枝

○琴ひきて百が唄ふ朧夜や浪のひびきも遠方にして　兵庫　田村竹翠女

○故里の清き小川にわが從兄物思ふらし釣をたれつゝ　下谷　村上雅子

○青柳の糸より輕き乙女らの袖にかよへる河の風かな　千葉　金井うてな

○かじかなく澁の澤川の朝月夜朝逍遥のうすものの袖　さゝ舟

○うつくしき其君を得て喜びし其よろこびの束のまなりし　田中富美子

○青き花白きひつぎや黑き衣其日思ひて泣くとし申せ　本郷　田村波津子

○姉君と宵月の土橋に凉みつゝ三ツ四ツ星の名をおぼえけり　本郷　松榮きみ

○よそにゆく人をまれぐによしもなく我れ秋の野の尾花ならねば　大阪　新家順

○撫子の花のやうなる子とあれば人のこの世の罪もわすれつ　陸前　熊谷はるの

○ひきたまふ小琴のしらべなつかしき家をよぎりぬ春雨の朝　北海道　矢萩千代子

○紫陽花に細う雨する夕暮を友彼方より小傘して來ぬ　樺太　眞田のぶ子

○人とはぬ深山の奥のせゝらぎの岸にたつなる姫百合の花　美代子

○君行きしその夕ぐれにわれ獨り栞にかきし白ばらの歌　攝津　千代

奥山の岩がき淵の片かげににほふもゆかし白百合の花

○ 筑後　梧桐知登子
五月来ぬ白百合咲きぬけし咲きぬえ知らぬおもひ胸の野に咲く
○ 四谷　柳の人
今朝咲きし桔梗の露に筆染めてわが姉君に文をし書きぬ
○ 近江　辻廣子
野に立ちて君戀ふる日はふるさとの雲も見ゆべしはかなだのめよ
○ 熱海　土屋さと川
君を見る目よしひよかし吾れ君を見る毎胸のたゞならぬ故
○ 神田區　小林きく子
名もきかずところも聞かず今日も赤磯にわかれし袖長き君
○ 小石川　藤掛京子
君のみを一人まもりて終れとは愛の女神ものたまはずして
○ 布　野田富枝女
巖砕く濤に明星見えそめて出づる相撲の黒鯛舟かな
○ 盛岡　米澤白桃
御むれの濃ゝ紫とわが胸の眞紅をとかし繪などかかまし
○ 名古屋　岡崎とく子
あゝ淋し若葉の凪ぎひたやみて灰色雲は天地掩ひぬ
○ 常陸　繁子
往來して卯の花がきに躊躇ひぬ意志かよはき十五の少女
○ 兵庫　米田比奈
しほらしき撫子咲けり墳墓に眠れる君の優しきに似て
○ 武藏　山口みどり
いささかのことにもねたむ性もてる君と知りつゝあひ初めにける
○ 兵庫　杉山春翠
かなしみをかくすと小き少女子の腕を押さへし戀ざめの日よ
○ 鹿兒島　俊子
そゝくさと羽織の衿もまがりたる兄と語りて淋しく思ふ
○ 三河　宮田梅子
遠山にかり鳴き渡る夕まぐれさすがに戀し昔の人も
○ 福岡　仲道孤靈
死なましと君が語るを僞りと聞かざる程の吾とならばや
○ 神田　佐藤しづ子
ふと醒めしそのつかの間を閨の戸に君が面影ゑがきぬわれは
○ 紀伊　山本美代子
ゆら〳〵と長き眸に露浮きし妹戀しけれ朧月夜は
○ 横須賀　渡邊登喜子
春の日の隣の村のわが妹子が張物板に赤うてる時
○ 千葉　三輪花の香
夏の朝あえかなる人むらさきのあやめが圍む山の井にくむ
○ 靜岡　大瀧貞子
小さなる流れたづれて芹つめば心も清くなりにけるかな
○ 大阪　西戸政江子
裾下げて貝殻拾ふ美しき君の素足に春の波よる
○ 長野　野中小よせ
富士の山月はのぼりぬおばしまの涼しき風に吹かれて居れば
○ 信濃　赤津ふみ子
はなさきし昨日は追はじな青澄める靜けき空を父も仰ぎぬ
○ 福島　小畔忠子
蝶のまふ黄なる菜畑の畦道を辿りて行けば君の家あり
○ 下總　菀錦子
夕日さす花の蔭にし君とゐてわれはそゞろに涙こぼしぬ
○ 金澤　梅子
えわかれど涙おぼゆるなつかしさ兄姉に別れし寂しさに似て
○ 迷花
瑠璃色の幕つられたる夏山に模様の如く百合の花咲く
○ 牛込　塚原夢美子
美しき君が御手をゆるされてみ膝に泣きし日もありけるを
○ 紀伊　白萍子
わが髪のすべてをあつめ君といふ大理石結ふ綱ともなさむ
○ 茨城　橋本美津枝
膝に伏し泣き入る君の髪みつめつと落しけりなみだの玉を

新論文



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸孃が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○交友

（地賞）

あけぼの

「善き友撰びて交はれよ善き友善師は身の守」と云ふ句が小學校の唱歌の中にあつたのを記臆へて居ります、兎角人間は品行の道に於て友ほど大切なものは御座いません、其友によつて善くもなれば惡しくもなるのは誰もよく知つて居る事で御座います、格言にも御座います「其人の交友は其人の人格を代表す」と實にさうでは御座いませんか、とは申しますもの丶私共が善友に依つて受くるよき感化よりも、善友に與ふる惡しき感化の方がむしろ勢力を有して居るので御座います、で、何處までも己を高潔に保つて行くにはどうしても善師善友を撰ぶ事が大切で御座います。然し私は思ふのです、人皆爭つて是等の善友を撰び善友とのみ交るならばあはれなる惡友は果して何處に立つ瀬がありませうか、益々罪惡の巷に迷ひ出るのみでは御座いませんか、日々精神の鍛錬とか德義の修養とかをやかましく敎へられて居る私達は是等の惡友を撰びて交はり而かも此惡友を善に導く丈けの充分なる責任を有して居るので御座いますがどうしても其が出來ない、と云ふのは全く自分の意志が薄弱なためでしようと私は悲しく思ふのです、まだ學問の盛ならざりし時代には善師善友を撰べとの格言はありがたいですが、世が益々開け殆んど敎育を受けぬ者はないと云ふ今の時代には「惡友を撰びて交り而て之を善に感化せよ」と敎へらる丶丈の心の修養がなくてはならぬと思ひます。心なき蓮花さへ泥中に生ひ立ちながら尙ほ其濁流には少しも染まないでは御座いませんか。

古の傳道者は「凡そ骨肉の爲めならんには亡びに入らんも亦わが願ひ」と叫んだ、無論そこまでにはなか／＼行き難いものではありますが、修德の目的が稍もすれば利己的にならうとする今日、この同情ある而も高遠なる思想の聲を聞くを得たのを多とします、自淸潔癖以て他を

顧みざる者の頂門の一針でありまする（評）

○箸取らぬ前の御馳走（入賞）

茨城　定子

箸取らぬ前の御馳走とは、臺所の平和をいふ、普通の家にては臺所と客間と相接したるが故、勝手にて、語る事爲す事、すべて皆目のあたりに見きく、されば臺所の平和なるか否かはよく客の耳にする所なり、主人如何に赤心を以て客を迎へ、よく座敷の掃除及び装飾にいたるまで、行き届くとも、其用意中に、幼子の種々めづらしき物を求むるに、答へもせずに叱り、或は下婢のまめに立ち働かぬとて罵り、又荒々しく歩みては品物につきあたり、折角調理せし魚を猫にか丶られしを慌だしくおひなどし、廣からぬ勝手を走りまはりて、其所の戸棚を開きて膳を出し、此所の片隅にて椀を取り揃へなどして客に進むるとも、客は早や知りて不快を感ぜらる丶時なれば如何に山海の珍味を集めたればとて、子の求むるに應ぜざるもの、猫のか丶れるものなどと思ひなば毫も甘き事なかるべし、唯一汁二菜にても快く饗せられなば如何ばかり滿足ならん、之れ皆主婦たるもの丶殊に注意すべき事にこそ、



黒木大將肖像　黒川氏子

老成の文字、古き訓を讀むが如し（評）

【秀逸】

○讃めることに就て

若松市　佐藤安子

讃め方には幾種類もありますが、私は、心からと、冷評的と、お世辭との三種があると思ひます。

その中心から讃めるとは、中々むづかしいもので、そ

の人に、完備した點があるとしても、同時に他の短所が目に入ります。假令、缺點が見出されぬにしても、自分が、それに及ばぬことを悟りますと、羨ましさを越して、遂に、ねたむ氣が起つてきてどうしても、人の前で心から、ほめる氣にはなれません。

しかし多くあるものは、第二で、人の短所を心の中に捉へて、少し位よいことがあると、無やみに讃めたてます、通常の人は、この手にかゝつても、大概は察しますが、自尊心の强い、輕卒な人はウカ〳〵その手に乘せられて、遂に笑はれものになつてしまいます。

例へば、聲のよい人があるとしますと、例の口調を以て、「貴女は音樂の天才ですよ、あの高いところなどは銀の鈴でも振る樣なのよ、私共は未來の貴女が思ひやられますわ、」など云ふかと思ひますと陰では「あんなスタイルしてよくも音樂家氣取りが出來るものだ」なんて云つて居ります、しかしほめられた人は本氣になつて、ニコ〳〵しながら學校に何か會でもあれば、獨吟でもしたい樣な、顏つきが見える樣になります、

それから第三のお世辭はよく普通用ゐて居るので、云はれても、云つても、平氣な顏して居るが之れも第二の冷評の、分子ではありますまいか、いづれにしても第二、第三は默して第一をのみとりたいと思ひます。

第一のは自然の發露に委すべく、第二のは避くべく第三のは忌むべし、全くかやうに平氣に圖う〳〵しくなることは實に人情の弱ひなるが故也。又此論未だ盡さゞるところあり（評）

○交際に就いて

京橋　せゝらぎ

近頃誌友倶樂部にて男子と交際を望まれる方が次第に多くなる樣に見受けますが妾は絶對に不贊成です。如何に正しからうが潔白だらうが、若い男女の交際はあまり芳ばしくは有ません、否、男子と交際する必要は有りますまい、遠い樣で近いは男女の距離とか申す通り、たとひ玉章の交換にしろ、永續する限り遂には如何なる間違ひを仕出來さぬとも申されませぬ。又女同士の交際でも同樣、よく其の人物を選ばぬと飛んだ過ちを惹起します。

兎角世の人は針程の事を棒程に何の彼のと難癖つけたがるもの故、妙齡の女子はよく〳〵注意すべきだと存じます。一度受けた汚名は其ものゝ眞僞に拘はらず、永久身につき纒ひ、爲に出世の妨害となります。殊に私共は將來人の妻となり、母となつて一家を整理せねばならぬ大役を、眼前に控へて居るでは有りませんか。今が大切な時機です。余程、身を愼み假初にも惡評を立てられぬ樣、心掛けるが肝要で有ります。古來我國は貞淑を以て女德の第一と仰がれてゐます。彼の稅所

教子刀自の如きは、御承知の通り早くより、未亡人となられ、爲に六十才に至るまで男子と對面する時は、必ず侍女を傍らに置かれたとか、又、高崎正風氏と和歌について手紙の往復をされたが、刀自は毎に氏の姉にあて、送られた相な。其の用意周到な事は、恐れ入るの外は無い。「ナーニ、二十世紀の人間が、そんな野暮らしい」と、兎角歐風に染つた方は、仰せられるか知りませんが、彼は彼、我は我、一家に家風あるが如く、一國にも亦國風が有ります。何も男子と交際せぬからとて、女子の體面を維持することが出來ぬ理由でもなし、己が無聊を、慰藉するに男子と交際せぬからとて、他に求むべき方法は何程も有ります。世間は廣うムいます。善良な女子と交際なさるゝ樣、切に希望致します。

理趣よく此弊に適中す、無致亦勁（評）

○元祿袖

大阪　高山米子

學校ではなるべく筒袖をと仰しやるし、家庭では袂の方がと申すので、いつまで經ても一致させるとが六ヶしう御座います。其れは筒袖の方が活潑で、運動などするには便利ですが、お祖母樣など居らつしやる家庭では「どうも男の子の樣でみつともない」と、やはり長い大きな袂をお着せに成ります。

私は強ち、筒袖や袂が惡いと申すのでは有りませんが、それよりも猶ほ活潑で優美なる元祿袖を、諸孃にお勸めしたいのです、と申して何も女學校や師範の皆樣にお召し遊ばせと申すのではございません、皆樣のお妹子樣達、即ち三つ四つから十二三位の方々に、お着せ申したいので御座います。

用布は從來の筒袖より、僅か二三寸長く致せば事足りますし、仕立てますのにも別に大した面倒はなからうと存じます。宅の小さい妹達二人とも、お正月の晴衣から寢衣にいたる迄、皆元祿袖にしてありますが、當人も其の方がよほど着心地が良いと申して、喜んで着て居ります。

如何でございます？　諸孃方！　愛するお妹樣達の爲に一度此の袖にお仕立遊ばしては……

そういたせば遠からず小學校生徒の大部分は、床しい元祿袖を用ゐるように成るでございませう。

好提供、今少し功能を述べたら宜かつたでしやう（評）

○感じたこと

紫作　杉山花枝

徒然なるまゝ私は古雜誌を取り出して見てると、其中に「友情の安賣り」と云ふのがありました。

是れは或る女學校に愛嬌のよい一人の生徒が有りまし

て、其生徒は其女學校での交際家と云はれる位、ほんとに愛想のよい、お話し上手で、誰れにでも惡るい顏を見せた事の無いと云ふ程ですから、誰れも此人には直ぐ馴れ慕ふ樣に成つて、皆此人を讃めぬ者は無い位でした、處が或る事情で、此人は中途で退學する事に成りました、皆の生徒は別れを惜しみ尙將來の交りを願ふと、其人もいつ〳〵迄もと、かたく永久の交際を誓つて退學しました。不思議な事には其人が去つて一ケ月も立たぬ間に、其學校の生徒は誰一人其人に手紙を出す人もなく又其人の噂をする人さへ無く成りました。

其後其學校で誰れ言ふと無く、餘りお口上手な者を「友情の安賣りする人」と云ふ樣に成つたとの事。

是れを讀んで私は深く感じました。何故あんなに人に褒められて居た位の人が、かく早く人に忘れられるのだらう、つまり此人の愛嬌は心から出たのでは無くて、所謂お口上手で有つたのです、心の誠と云ふものは少しも無かつたのです。だから初め慕つて居た人も別れると直ぐ忘れて仕舞ふのです、誠の心から出た情は少しの事でも、なか〳〵そんなに直ぐ忘られるものではありません。

多くの人々に僞の愛嬌ばかり振りまいて內心露ほどの誠も無い、こんな人は、遂には一生一人の親友も出來ないことになるのではありますまいか。

たしかにお說の通りです、誠のない人が友を得やうとするよりは、木に依て魚を求むる方がまだしも易いことでせう（評）

○感興

福島市　齋藤田鶴子

私は世に感興程貴いものは無からうと思ひます、何程の名人の作でも、輪廓や形容にばかり重きをおいて、綺麗に正しくゑがかるゝとても、其中に自然に湧き出づる淸水甘露のやうな感興が缺けて居つたなら、鰹節のはいらぬ御つゆのやうにきつとまづい物たりない感がせらるゝだらうと考へられます。全く油の上を撫でる樣に上すべりして別段な感が永久に殘りません。

これに反して、もう感興の充ち滿ちた作物はすこし位文が拙づくても、かう心の弱點でもつかまへた樣に深い深い感を永久にとどめます。

眞のゑかきは氣のむいた時しか筆を手にしない、それだから一月といつて賴んでも、三月も五月もかかる時があるつてよくききますが、決してゑかきばかりでない、すべての作物無理に腦を絞つて作らないで、心にむら〳〵と感興の湧いた時、心のさけぶままをかきだしたならきつと人を感動させるやうな作物が出來やうと思ひます、然し私のやうな下手な者は折角現はれた感興も、案內法を知らないばかりに戸までひさせて見え

なくしてしまひます、そして氣のぬけた味のない文ができます、かういふのにはどんな方法を施したらよいか今なほ考案中ですが皆さん名案はありませんか。

一種の奇文であります、しかしお仕舞になつて呆ッ氣にとられました、これ矢張り所謂『案内法を缺いた感興の途迷ひ』かも知れませぬ、その教授方法の一つとして申上げます、外でもない剪裁して勉強する事であります（評）

○朝顏教訓

鹿兒島　野田まさ子

私は朝顏の花を愛します、もし、朝、夙に起き出てて、朝露を宿してゐる姿を見た時は、奈何でしよう、清い、涼しい、と云ふ感が新に湧いて參ります、でも只其の紅や白、黃や紫の麗しい色彩や、生々した淨い姿が、麗しい、塵ない、と感ずるのみではありませぬ。這麼美しい花が、しかも、つくろはぬ垣根等に、笑つて居るではありませんか、然し其の麗しいと云ふ點に於きましては、少しも變りはありません。言ひ換へてみると賢い人が、如何なる場合でも場所でも、矢張操を變へないと同じではありますまいか、私は此處をも愛するのです。然し世には朝顏と言へば、此の優しい裏面目を所を棄てて、何と根氣のない花でしよう、朝に開いて、夕には萎るゝ、哀れな花だ、弱い花だ、などと逍遙聯想を惹き起す人々が少なくありませぬ、イヤそれが常です、然し私は此の哀れな弱い所を愛します、一體朝に開いて夕べに死すと云ふ事は、朝顏の天から與へられた活動ではありますまいか、朝顏は其天職を盡して居るだらうと想ひます、人は猶ほ蚊帳を出でず、草は露の中に夢み、鳥も他の花も、未だ醒めざる時、起出でると云ふ事は、其露が乾かない間に、彼が天職を全うせんと、思ひ立つたのではありますまいか。言ひ換ゆれば、五六十年に比せらるゝ人間が達者な間に働いて置うとするのではありますまいか、かくて太陽の光がやゝ強くなると、靜かに眠りに就くのです。此の時は最早や、彼に取つての、安息なので天も許したのです、私は此際『働くべき時に、よく働いて、休む時は、よく休め』と立派な、教訓を、與へると、考へます。何と心強い、潔い、事ではありませんか。又其萎る時は丁度櫻花が滿開の時に、一陣の風が吹いて來ると、潔よく散ると同じではありませんか。然し其萎れ、其の散る、際に、一方は弱い、一方は潔い、と何故評されるのでしようか、私は其の心が解り兼ねます。

新らしかられど詩趣あり（評）

○己を知れ

阿波　大久保桂子

希臘のデルフアイの神殿に揭げられた「汝自身を知れ」

とは、實に千古の金言でせう、汝自身を知れとは、換言すれば即ち自己の人格を認める事で、處世上に於ては、第一に起る一問題です、然るに多數の人は自己の人格の如何を認めないで、只徒らに他人を標榜し、前に於ては喋々と賞讃し、後ではあらゆる譏謗を下す徒が、實に世に多いと思はれる、外面如菩薩、內心如夜叉、自己の爲には、犧牲としては猶飽き足らぬのは慨嘆に堪へぬ、心の表裏のある人は、必ずこのやうな奸手段を弄する、即ち自己の人格の如何を省みなかつた結果でせう、人が如何なる事實をなす上に於ても、只其目的に猛進するのみにては、成功する事は覺束ない、よしや成功するにしても、其は必然の成功ではなくて僥倖です、だから、人格を自知して着々歩を進めてこそ、最後の月桂冠は得られると思はれます、自知あつてこそ、取り止めもない空想や、虛榮心に憧れるやうな不始末は起らない、このやうな心の起るのは、意志が薄弱な所があるからです、表と裏とは人心の免れぬ所ですが、兩面同一の動作があつて欲しい、この域に達してこそ、實に理想的の人と云はれる、これとても己を知れとの一點から出發した結果です、かの加賀の千代女の俳句に「淸水には裏も表もなかりけり」といふのがある、これは具體的に表明したものです、＝己を知れ＝實に時間空間が無窮に流れる間は、決して永久に滅せずして、千古に人心を支配する力がある、巧言令色、口に蜜ありて劍を隱すような心が、社會から一日も早く其跡を絕つことを望みます。

自己の全人格を知ると云ふこと、なか／＼容易な談ではないが、爰に向って努力は致したいものです（評）

○白粉に就て

こてふ

私は女子でありながら、まことに白粉が嫌ひでありまして自分はさう云ふものを手にした事もないどころか、白粉をお使ひになる方の氣が知れませんので御座います、こんな事を申しますと、女の身だしなみを知らぬと笑はれるか知りませんが、身だしなみと云つても、自分の容儀を整へて見苦しからぬ樣にすれば宜しいでは御座いませんか、何も白いものを塗つてまで色白くする必要があるでせうか？私は唯自分の天性のまゝに、色の白い人は白いし黑い人は黑いで何の恥ちる處もないだらうと考へます、俳優や藝娼妓でしたらそれは白粉の必要もありませうがそれでない婦人に何の必要がありませう、さう／＼自分を欺いてまで美人にならねばならないでせうか、私の考では無用と考へる、この白粉の爲一般の婦人の消費する金額、及びお化粧の時間は大したものでせう、これて以て有益なる事業

を助け、慈善の事に用ひたならば、どの位世を益し苦しむ人を救ふ事ができるか知れませんと、私は思ひます、みな樣の内にも私の樣な考を持つた方が御座いますればどんなにか嬉しうございませう、私は兎に角、一生白粉なんか、手に觸れまいと心に誓つて居ります。

俳優藝妓等の外は白粉をつける必要は無い、など云ふのは餘りにどうかとも思ひますが、かう云ふ所信の方もあると云ふので採りました、或は他に今少し柔かい穏やかな意見の方も有うかと思つて（評）

○氣長くする事

近江　野渕その

私が先日鉛筆を削りましたら、最う少しと云ふ所でぽきつと折れました、嗚呼早くけづらないと筆記が遅れると思つて大急ぎで削りますと、又しても折れました一度折れてすら氣が氣でないのに二度までも中途で折れた、時の情なさと云つたら―
尙も急いで仕樣と思ひましたがふと考へつきました、う急いてすると却つて力が強すぎて折れるのだ、今度は落ついて仕樣と、其樣にしますと今迄になく手際よく削れて思ふ通り書けました、誰でも一度失敗すると氣のみあせつて何でも早く成功しやうと思ふものですそして焦せればあせる程不結果になります、其時まて〳〵せいては事を仕損ずると古人も云ふたからと充分心を落ちつけ、心臓の鼓動の靜まつた所で自己の體力と腦力とに尋ねて、自己によく叶ふ事を撰つて、せかずせまらず、わき見をせず目的と云ふ一道を辿つて行つたら乾度其所には成功と云ふ光美しき玉が有つて、私等の手に這入つてくれるだらうと存じます、てすから氣長くすると云ふ事は成功の一大要素と云つて好いと信じます。



測量　名古屋　〜く子

現代辭典

○ゐんしやう（名）印象　空間に於ける波動と振動とに依て傳へらるゝ現實的事象を感受したること、強烈なる色彩と、刺戟すべき香と、響きあるトーンと、一所にゴシヤ〳〵に錯綜することあるべし、曖昧ても何ても差支なし。眼の印象、顔の印象、涙の印象等多し。印象詩、印象批評と云ふ事さへあり。

○いもうと（名）妹　いも、わぎもこ等あり、古來平和な樣にして物騷なものとして今日に及べり、姉の妹は殊に危險なり。

○はいいろ（名）灰色　現代の代表色、倦怠、無目的虚無等を意味す、專ら口語詩に依つて傳へらる。

○ばいえん（名）煤煙　すゝけむりと讀むべからず、現代的潮流の澪標、赤旗に略して其意義通ず（へいぼん、及びふとん參照）

○ふとん（名）蒲團　掛けぶとん也、現代的潮流の澪標、綠旗に略して其意義を通ず。（前後項參照）

○へいぼん（名）平凡　現代的潮流の澪標、白旗に略して其意義を通ず、（前二項參照、いづれも式或は流の字を添へて用ふることあり、例へば平凡流、蒲團式等）

○はは（名）母　伯父の姉妹にして伯母に非ざる者。

○ホワイトツーライン（名）白の二本筋の譯語、女學生間に用ひらる、勿論高等學校生徒の事　。

○ぶぢよく（名）侮辱　現代語、可成的意味淡く淡泊に解すべし、つまり侮辱を感じたと云ふ事は、極りが惡かつた、體裁が惡かつた、一寸恥をかいたと云ふ程の事、昔しの恥辱などとは雲泥の相違あり。

○くわんのう（名）官能　神經感官の發顯に近づくに隨つて用ひらるゝ意味多し。『官能の疲れ』、『爛れた官能』等の如し、能く女の匂ひを臭ぎ、よくコロロホルムの香に醉ふもの。

○せつぷく（名）切腹　古昔武士の面目の爲めに自ら刃を以て腹を切りし事也。忠臣藏の劇すら動もすれば受けられない今日此頃なれば、むしろ mikado 或は samurai、などゝ共に harakiri と羅馬字綴りにする方はるかに普遍的世界的なりとの説多し。

○しゆぎ（名）主義　イズムの譯語、自然主義、社會主義、本能主義、個人主義、菜食主義、快樂主義、儉約主義、無妻主義、帝國主義、徒歩主義等の如し、皆其れ〳〵繩張り内の事、多分は究窟なもの也。

○あいさつ（名）挨拶　お寒う、お暑うなど言ふ事勿論也、但し表裏の區別顯著なるを以て入神の妙ありとなす、一例を擧ぐれば『奥さまいつもお若くつてお美しい』と云ふ一言一句の裏には、『此の山の神めだん〳〵年が寄つて見られたざまぢや無い』と云ふ處あるべき事、然らざるものは挨拶に非ず。又單に『御挨拶』と云ふ時は、『これは〳〵ひどい御挨拶!!!』と云ふ意。

○さいごのしようり（合成名詞）最後の勝利　一度も勝つた經驗のない者が言つた事とやうに故齋藤綠雨氏が言ひたる説首肯すべし、即ち野暮天の負け惜み語。

○ぎぜんしや（名）僞善者　善い事をしながら惡るく言はれたがる人。惡るい事をしながら善く見られたがる人。その何れなるや分らず、分らずと云ふよりもその意義が廣いのなり、又僞善者と云ふことが、人格その者か、資格か、態度か何かも曖昧にて迚も喰えさうもなし、蓋し新舊思想の過渡時代に於いて、しばらく免がれ能はざる處か。

○しぜんしう（名）自然宗又自然教に作る、ナチユラリズム也、本山は早稻田、囚へられてはならぬこと、性慾の神聖を謳歌すること。

○オールドミス（名）老孃と譯す、多くミツシヨンスクールより出づ、識見、天職、義務、權利、節操、理想、失戀、醜容、情熱、信仰等の渦中に戰

ひ更年期に及んで僅かに止む、而も終りを完うするもの極めて稀なるが如し。

○びやうてき(名)病的　精神狀態の一、お世辭にても賞めらるゝ事あらばクヮッと逆上して傍に居るのもあぶない位の勢となり、間接にでも誹らるれば、蒼くなりケンニャリとして、世に要なきものゝ思ひを爲し死なばや、と希ふの類。青年文士に多し。

○せいふ(名)清富　清貧すたれて清富生ず、富貴にも淫せざる紳士、淨財の出所なり、蓋し完全なる眞理、豐富なる人生觀の極致、一派の固陋なる道學者を嘲ける時に尤も適す。

○ひさしがみ(名)廂髮　女の前髮を雪隱の廂の樣に突き出した髷のこと、一女學生其おでこを蔽さん爲め苦心の餘の案出に濫觴すと云ふ、その廂ます〱突進して二百三高地髷と云ふ異名もあり、晩近は左右兩翼に發展するもの丶如し。

○おや(名)親　子に因りて生れたる者。(男女、牝牡、雌雄共通)

○ふとくえうりやう(合成名詞)不得要領　解頤錄に曰く『幻裡拵涎、夢中踏屁』、涙漫經に曰く、『彈身之力衝曖靡、大風之前撤蕊灰』、放蕩三昧歌に曰く『禿頭拔毛、孤立壓餘、隨行隨外、不得要領』と概ね如斯。又阿々詩集に曰く、『盲は蛙に聞けといふ、蛙は啞に言へといふ、啞は盲に見よといふ、朶稲が咲いて日が永い――』

○てんかん(名)癲癇　腦病の一種、回々敎の始祖マホメットは女を口說かんとする前此病を起し卒倒して神託を得たりと云ふ、露西亞の文豪ドストイエフスキー亦この持病あり、卒然顚倒の一刹那は實に言ひ難き詩趣ありと、以て神聖病なりとせり。

○ふかかい(合成名詞)不可解　萬有の眞相を一言にして蔽したるもの。(附記、明治卅六年五月藤村某が矢立を用意したる覺悟の自殺遺書の一句、)

○けごろ(動)華嚴る　けごらん、けごり、けごる、けごれ、四段格なり、初め藤村某の日光華嚴の瀧に投じて死ぬや、風を臨んで起つもの多く、逐次增加するが故に宣傳其煩に堪へず、略じて動詞となる。(前項參照)

○れいまう(名)獰猛　雄々しく勇氣あるを要す、本統はだうまうと讀む筈なれど、かく稱へて學生間に用ひる、副詞又感嘆詞なり。

○けんぼりようさい(名)賢母良妻　高等女學校のモットーに曰く賢母良妻、神社佛閣と、尤もこれは對句か、それとも卒業して神社佛閣に入ると云ふ事か、定かならず

○けんぜんは(名)健全派　病的の反對也、何てもかても世は樂しいもの、考へたりするものはつまらぬ事、金を賭け、體操をし、テニスをし、ビールを飮んで肥滿し、病、貧等を嫌惡と大呵し去る一派。

○たうへんぼく(名)唐變木　其實體を詳にせず南蠻より天竺を經て唐に入りたる時倏忽として變じたる植物なり、江南の橘を江北に移せば枳殼となる、支那に入りし佛敎、羅馬に入りし耶蘇敎皆之に適應す。ブッキラ棒と稱する棒は此木より製造したるものなりといへど定かならず。

○あいまい(名)曖昧　尤も融通の利く賢き而も神秘的態度を云ふ、『薄暗い事』と言換に解せられたるは未だ盡さず、寧ろ『薄明い事』とすべきか。

○うらこつ(名)恨骨　恨み骨髓に徹すと云ふ略なり、多く女學生語として通用する由『無名通信』にも見えたり。又之を例の動詞として用ふる事あり、『私あの方にうらこつてゐるのよ』、『何かうらこつた筋合てもあつて?』などの如し。

○ぐうたら(名)愚迂駄惱　睡り氣味の意を含む、夜となればおしなべて此兆候を呈すれども、其の本領とする處旨として白晝に存す

○にく(名)肉　人間の肉のことなり、白い色なり、肉慾ともいふ、神聖なり。

散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式韻調はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十九行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○火（地賞）

神戸　田中ますゑ

私は一人丘へ登つた
何のあてもなく只とぼ〳〵と
いやな天氣
足元の紅い花は皆萎れて居る
私も自然となえてくる
眞晝の空は動かない、ちつとも
私はふと何氣なく下を見た
たつた一人美しい若い女がすぐ下の
畑で麥藁を燒いて居る、無心に——
煙は纔に空に登つて行く
火はパチ〳〵と燃えてる
疲れた村にたつた一つの火
私もあんなだらう
なえた體の中に
一點の火は燃えて居る

眞晝の野邊に麥藁燒くと云ふ火の印象がもつとはつきり出れば更に好かつた（評）

○煙（人賞）

赤穗　さゝ舟

蚯蚓がなく
ぢじじつと暗い〳〵土の中で
悲哀のさけびだ
又ぢじじつと胸にひゞく
と向ふの屋根の上に魔の樣な
黒い黒い煙が襲ふてくる
あたりはうす暗い
煙はうすくなつたと思ふと
又黒い〳〵のがずつとあらはれる。
何だか自分の魂を吸ひ取る樣な思はず身ぶるいした煙は益々襲ふてくる
黒い〳〵と又すつと薄くなる。
もう雲と煙と全じ色になつた、
私の胸も漸く凪いだ

心の動くやうに動いてゐる、煙の動くやうに動いてゐる、所謂現代詩か（評）

【秀逸】

○何か

備中　篠原しげ子

何か動いて居る、
彼方向ふの畑の中に、
恰ど一つ兒か座つて手をわな〳〵さして居る樣だ、
又動き出した、
おや〳〵鳥だ〳〵大きな鳥だ、
翼を廣げてばさ〳〵さして居る、
何鳥であろう、鷹か鳶か、
しのび足に行つて見る、
あゝ〳〵何であろう萵苣の大株だつた、只々一株、
此葉が夕風に吹かれて居たのだ、
私はだまされたので腹が立つ、

ぴく／＼と、其が又可笑しくなつて來る、日は全く暮れて終つた、

輕い調子が作意に和してゐる（評）

○ものおと

札幌　薫子

洋燈を消して、目をつぶつて、無理に眠ろうとしたが眠られぬ。月の青白い光りが、窓のカーテンの隙間から洩れる。あゝ嫌だ、誰れかが、のぞいて居る樣でならない。起きあがつて——掛け直す。今度は光りがさゝなかつた。安心して目をつぶる。心がいやに、さえざえて——どうしても眠られぬ折しも遙かどよめきが——かすかに私の耳に通つて來た、だん／＼近よる。——何となく行きたい——見たい——門まで出樣と、床を離れたがでも外に出る迄の、勇氣はなかつた。身は或る強い強い——何物にか、しばりつけられた樣で……どよめきは、道を通り過ぎた。見たいと心はあせつた。ひた慕ひに慕はれて——何となく——只何となく——音もかすかに遠のいた。あゝ——と今迄の思は消えて、恐怖の念が漲ぎる。こうして、私の魂を引いて行く魔物でなかつたかと、急にそれがおそろしい。身ぶるいがする——床に入つて掛布團を頭からかぶつた。猶眠られぬ——

情調は動いてゐるけれど、意味は薄い（評）

○時計屋

牛込　千鳥

或夜、妾はしんとした町の、煤けて黒い時計屋の前に立つた。白髪の黄ばくもつた硝子戸の中に、白髪の黄ばんだ灰色の顔の、手は澁紙を揉みくしやにしたやうな小男が、机に向つてセッセと時計を修繕してる。ドンヨリした重い邊の空氣をついて、彼の周圍の柱時計や目覺時計の、「あれでも仕事してる氣か、己等が斯して生命を削て行とも知ずに」といふ囁やきが、夢のやうにカスカに響く。妾はゾッと身慄してそこを去つた。

詩の感じだけれど、少し詩になりかねる（評）

○或る夜

日暮里　畑谷鏡子

ふと氣がついて顔をあげた、
つゝぷしてた机の上にはぼつ／＼と涙のあとが
青い机掛にしみてゐる、
うるんだ瞳を見張つてぢつと天井を見つめた暗
い天井にぼうと灯が夢の樣にうつゝてゐる、あ
ゝと思はず溜息を吐いて、
光線のとゞかない室のすみに、目を向けた
と何物か自分のそばへくる樣な氣がして、から
だがぶる／＼と顫へる
又力なく机の上につゝぶして終つた、
讀みかけの手紙がスルリとひざからすべり落た

○雨の日

高岡市　みゆき

今日は災日だらうか
何ても寂しい日だ。
雨ばかり降つてゐる。
凶日ではないが
よい日では無論ない
何うても好い——

と云ふ氣になると、
悲しさが込みあげて來る。
わかるい影が
遠く遠く逃げて行くのか見られる
あわたゞしく暮れて行く街。

○妾の魂が

麻布花子

また雨だ暗い日だ
なぜこう降續くのだろうか
何だか壓迫される樣だ……
あゝ暗い天も地も……
妾の心も眞黑闇だ
……迷ているのだろうか……
妾の魂が……
心が抜け出て黑暗い暗い
暗い世に……屹度……誘惑
誘惑されるのだろう……妾の魂が

○雨上り

越後佐藤浪子

雨あがり、まだ灰色の雲が殘つて居る、――小草の葉末から露がホッチリ小さな水溜りへ滴つた……
水はチラ〳〵動搖した、其時、ふと其上を飛び去つた小さな蝶、水に映つた其かげが、搖らいだ……碎けた……ほんの束の間、
最早水は動かぬ、小蝶の影もない、只灰色の空が寫つて居る計り
短い程、鋭く彼の美しい影が印象されて居る――

○謎

たき子

チラー、と胸に閃るものがある
解き得ない謎だと云ふ
詩にも繪にも解き得ない
そんなことがあらうか……
自分はきつと解いて見せる！
自分には解つて居る！
と、あれか、これか、と考へて居る内に何の事だか、解らなくなる、
自分がうつかり目をつぶつて居つた時スッ！、と足下を通つたものがあるそれを、目が開いてからも解つて居ると云つたやうな感じがする許り

○恐怖

函館谷内ふさ子

雨が歇んだ、厭な雨が――
暗い暗い、何處となく濕つた室に、苦し氣な、微かな呻きは止んで、靜かに闇の色が、室内を罩めた。
痩せこけて、血の氣の褪た頰、灰色の唇、疲れ極つて、
横になつたまゝ眼を閉つてる、窶れ果てた母の姿が、蒸熱い、濁色の空氣に包まれて、朦朧と浮いて見える。
あゝ、また呻いた、また呻いた、苦し氣な微かな聲て――
長い長い、針のやうに細い、怪しのものが、枕の黑い影から、首を擡げて、母の唇の血を吸ふて居る。
――瞬間であつた――
私は跟々として、心は遠く、極の知れぬ、廣い廣い闇を走る。――

○狐の嫁入り

近江佐和田芳子

あら雨かしら？と思ふとさつと一村雨
でもやはり、日光は倉の白かべに、きら〳〵と
そら狐の嫁入りだよう二三人の子供、地にあなをあけて、何やらチュウ、とはいた、つばだ
上へ硝子のかけをのつけて、一生けん命のぞいて居る。見える〳〵
そら一つ二つ三つ――提灯があつまへた、妾しも見たくなつた、いそいて同じように
のぞいて見た
と丸い光つたものが一つ一つきゑて行くこれが
提灯かしら

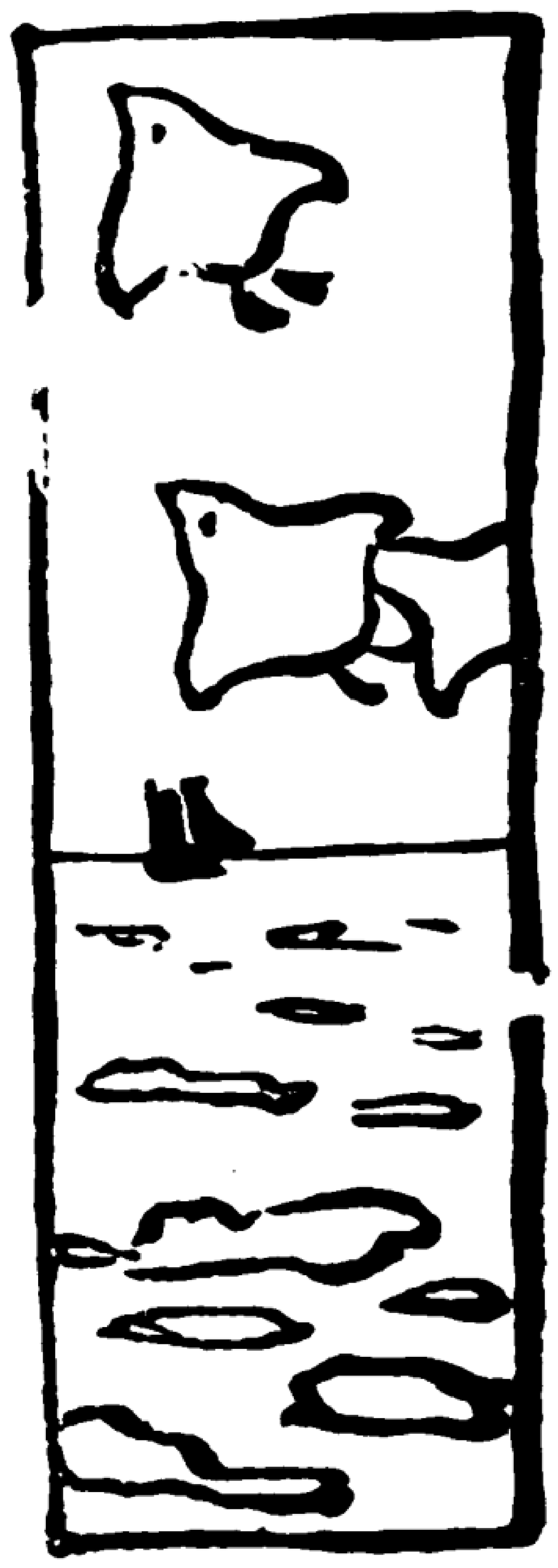
○白い道

小石川滕乃

鐘の音が綠の葉の間を通り白い花を搖らがせて、其音が染々と私の魂に響きます。
マア私の魂を柔かく暖く包むで了ひましたよ。
足下の小川の調が恍惚と夢の樣に聞えます、何の音でせう――銀線の樣な細い音がチーンと彼の杜から褪ふ樣に……私の魂は包まれたまゝ動き出しました。――白いボーとした道を通つて、
オゝいゝ薫、魂を美しい雫に溶かしてしまう樣な香が迫つて來ます。正面の空が漸々紅を帶びて來ました。オヤ光りました――彼處がアラー紅の雲が除に兩方に分れました。その間から黄金の光が彼樣に迹く此方に飛むで來ますよ。
オゝあれは金の糸ですわ――幾本も綺麗にならむで――
アラ今度は彼樣に入亂れてチヤラチヤラと微妙な音をたてながら……今迄淡白いと許り思つてゐた道がホッと金色をおびて見えます。
私の魂は其間を通つて、紅の雲を目的にズンズン進むでゆきます。

短文

中村文學士選



○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て假名つきペンガキは許さず一人一章に限ること賞は丙種を送呈す

○冷たき石（天賞）

信濃　秀枝子

若草の息に柔かさうになつて居る夜の石！、私の書いた懐かしい人の名は、いつか自分のに書きかへられてあつたのを、又書き消して胸をとゞろかせた春は、あゝ夢であつた。―そと觸れた冷たい石の面、「今宵は：：」と思つて返しては見たが、たゞ懐し人の名は雨風に消えさうになつたまゝ、永遠に私の名に書きかへられるときは、もう無いであらう。―

（評）何んだか引きつけらるゝ様な氣、！

○いたち（地賞）

越後　惑女

キチヨキチヨ！、と白壁のくづれかかつた彼方に、いたちの啼聲――草茫々と生茂つて月の光に毅立つた土藏の様の、物語めいて何となく嬉しく、好奇心にかられて裏手へ廻つてみると氣味悪い、古井戸を見出し思はずぞつとした。

（評）凄

○友（人賞）

伊保子

いつも淋しい御顔を遊して世の不遇にすねていらつしやるすみ枝様ついてゐる害蟲を除いて紅い花を咲かすのが親友たる私の務であるのに私は又どうしたのか一寸も慰籍したくありませんみ胸の暗い色はます／＼御顔にあらはれて來ますのに、あゝ、

（評）冷血？暗闘？

【秀逸】

○月見草

下總　月沖百合枝

刀根川畔の草の家は、蚯蚓の小唄に暮れて行き、家の側の木下陰には二本ばかりの月見草が涼しい瞳をあげて咲きそめた。刀根の水音が遠笛の様に響いてくる。私は此可憐しい花のために靜かな夕暮を祝福せずには居られませんでした。

（評）詩も出來謌も生れるのは、かういふ晩でせう、

○一匹の蚊

土佐　譽田桃の花

夕方椽に腰掛て茫然してると、ブーンと一匹の蚊が飛て來て足へ止た。私は暫く痛いのを耐へてジッとしてると、吸ふわ／＼小い躰が眞赤にな

つてるのにまだ滿足せぬのか。私は耐へ切れなくなつてピシャリと打つた。そして世間には此樣な人がよくあると、思ふと、何んだか惡人を懲罰したかの樣に一種の快感をえました。

(評)同感

○蟬のお墓　三重　川原みさを

今年五つになる美いちやんが、向ふから一散に馳けて來て、「姉さんこれに蟬のお墓つて書いて頂戴」と云つて小さい板きれを差出した。妾は不審に思つて聞いて見ると、だまつて教へない。

向ふには淸ちやんが澤山百合の花を持つて美いちやんの行くのを待つて居る。

(評)無言の詩、

○ある夕　千葉　金井うてな

薄れかゝる夕榮を薄れるなと眺めると氣の所爲か少しくたゆたふ氣配である、折柄ポツリと一雫雨が額を打つ、冷いなアと思つたら闇がドッと落ちて人形芝居の樣に日が暮れて了つた、闇は冷いものである。

(評)妙

○ひなげし　牛込　平塚白百合

ひなげしの花がゆれてる。白い蝶がいたましげな花に口づけた……餘命のない花の榮えをせめて一時とやうな口づけを……。輕い風がふいて來た。蝶はサラバと風にのつていつてしまつた。花は長い莖のまんまゆらいてゐる。

(評)晩春の詩趣、

○松ちやん　上總　齋藤みす子

糸の樣な雨、夜の町はまるで美しい夢の樣です。〇〇湯と書いてある磨硝子に、ツッとよる黑蛇の目、足の下からは緋の蹴出しがチラつきます。白粉のなまめいた香のする手拭の端を一寸と啣へ、柔軟な眞白い手がかゝると、朦々とした湯氣に石鹼箱は淡く曇つて、「今晩は」と嫣然と笑ふ可愛い頰に笑凹が……松ちやん二八です。

(評)艶、

○出來るものなら　韓國　富永淸子

蘇生が出來るものなら、私も一度冷たい死の手に抱かれて見たい。

淸子の死……に對して、他人が如何なる擧動を取るか?そして一番多く悲しみ、一番多く泪を注いで與れた人に、蘇てから、私は滿身の愛を捧げ度い。

(評)勝手な人もあればあるもの!

○私の慾　鎌倉　上原露菜子

私は今は慾と言ふ慾がないのであります、戀しい君をば得るし、又世の

人の最も慾しがつて居る黄金もあまる程身につけて、あらゆる慾をみたした上は、此の世の中のことは、すべて易過ぎるので、今は何事も心に叶はぬ事はありませんから、一度死んで見たいと思ひます。

（評）そして又生きかへりたいのでせう

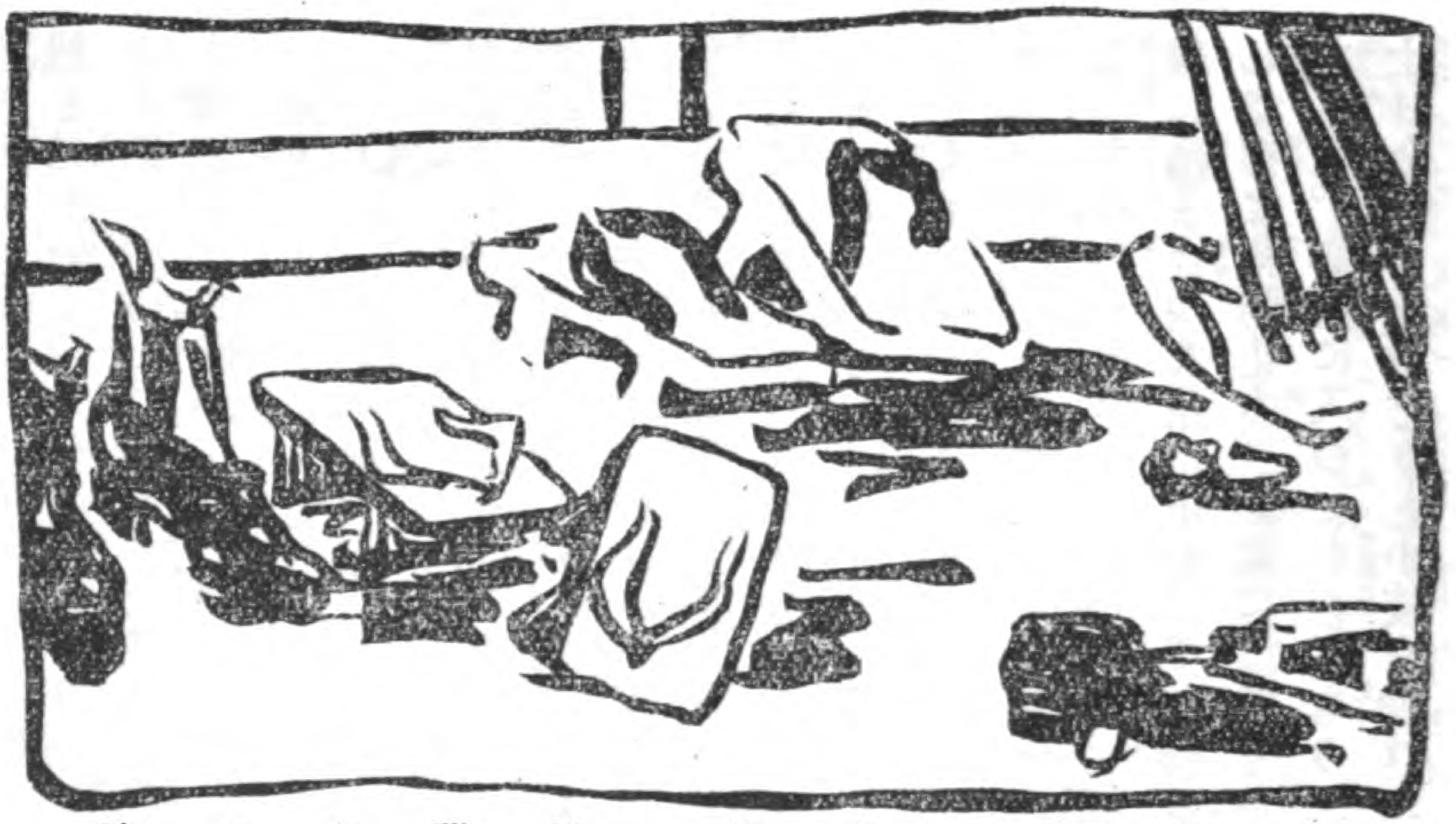
○雨の日　讃岐　田中政子

今日も又雨だ、疊がじめじめする、心もじめじめする、やがてはかびが生るだらう庭の隅から蟇が出て來た降る中をのそのそ這うて行く妹の飯事道具が濡てる傘を差して取りに立つ中を開けて見たら大きなめくじが這入て居た。

（評）よし

○織子　京都市　井上すみ子

裏の機屋から、はた、はた、はたりといふ音と共に、露骨な淫らな歌が幾度となく操り返へされる。



入口　青森　須藤みつ子

そして時々思ひ出したやうに笑ひ崩れる。私は思うた。彼れ等の目的は、働いてお錢を得て食べて、月二度のお休みには美しい着物をきて、そして……

（評）却て罪がないかもしれません

○結婚　京都　くちなし

結婚て云ふ事は案外殺風景なものですね、清い空氣を吸うて天上をたゞようて居る神の世界から、汚い恐ろしい人間、否、むしろ動物界へつき墜されたやうな氣がして男と云ふものは恐ろしいもんだなあとつくづく思ひました。

（評）これ結婚に就ての一部なり、全部にあらず

○我が生活　奈良　中富よしみ

浮世をすねて故郷の山陰に小さな庵を結んでからは、五町の森林と二反の畑とで別に生活に不自由を感じま

せん。良人が作つた歌に私が作曲して村の少女に教へるのが何より樂みて、尚餘暇のある時は互に創作をやつて批評し合ふのも亦趣味があります。

（評）結構な御境遇です、

○回向院　本所　木幡きみ

圓蓋の大建築物は洋式て、屋根高き大伽藍は和式である、前者は生々しいペンキの異臭を放ち、後者は佛臭い線香の匂を放つ、片方に毛の長き、寸髷が居れば、片方に毛を剃た坊様が居る、又此方て、ドンと櫓太皷を打てば、彼方てはカンと鐘を叩く。

（評）共に都の名物、

○白百合　松山市　ぎよう子

一しよの蚊帳に寐てた潮さんは、ソと起き上つて、お床の白百合の花をいきなりひきぬき、椽先から庭へパラツと投げた、そしてすらりとした身躰を寢卷姿のまゝ柱によせて、茫然と見ていらつしやる。香りが高いので例の頭痛を誘つたのだらう、私は惜しくて仕様がなかつた。

（評）巧

○急ぐ勿れ　京橋　せゝらぎ

私の室の窓の障子は、開閉に、工合が惡くて、急げば急く程、容易に開かない、エーイツ、ヂレツタイ…致方がないから此度は加減して靜に開けるとスラ〱スーツと開いた。

（評）何事も

○梅雨　鳴澤ゆり子

ハラ〱と散る雫を追つて。飴色になつた柿の花がポトリと落ちる。淺緑に重り合つた葉の上を。手鞠轉ばした樣な紫陽花の。此處には露も色ある樣。梅雨に入つてから。もう二十日余り。しつとりと小枝を垂れた窓の楓に。今日も目白が迷うて來た。

（評）凡手にあらじ

○人の妻　千葉　美濃輪光子

妾はもう間近くお嫁にゆかなければならないのです嫁けば今迄好きな燒芋も遠慮せずばなるまいし得意な歌留多も出來まいし、それにまた、おなつかしい誌友の皆樣と繪葉書の御交換も出來ず……あゝいやだ〱、いつ迄も獨身でいたいが……

（評）扨て……

○都人は親切　越後　木島しのぶ

田舍出の私初めて電車に乘つたのが現はれたと見えて傍の男の方が席をおゆづり下すたので都會の人が斯うも親切だらうか「渡る世間に鬼がない」と良く云ふが、と思ふと涙勝の私の眼ボッと四方は眞白になつたチン〱鈴の音に顏を上げた「此處でお下りなさい」と隣の方に教へられて急いで降りた先の男の方もよく

見える電燈が淡く輝いて矢の如くに走つて見えなくなつた。

(評)是れ確に都の一面、

○山寺　上總　美那子

破れかけた門を潜つて青葉の中の石段を登ると、夏の太陽が庭一面に照つて、芭蕉がくれの書院に和尚が圍む碁の音が、閑寂とした中に聞える。裏庭へ廻ると、池があつて澄んだ清水が流れてゐて、蟹が紅い甲を顯して其邊りを這つてゐる。時折杜鵑が青葉隠れに啼く閑静な山寺の眞晝時

(評)かういふ所で一夏暮してみたい

○母の情　下總　相川　みよ

故郷の母様から手紙がついたので封きつて讀み行くと、する〳〵つとすべり落ちたものがある、見ると折目新らしい五圓紙幣！　巻紙の末に小さく他國へ行つてると金が入要だらうから父様には内證だが少し送るとありました、私は思はずぽとり、尊い巻紙を濡しました。

(評)女親の長所にして又短所たるところ

○女心　福井縣　やまさと

春子さんは、村一の美人て、お宅は十年程前には、有數の金滿家だつたそうですか、近頃不如意になられましたので、相思の裕さんと、結婚なさる事が出來ないので東京へ行かれましたが、假乞ひに來られた時、「妾が行つたあとて、裕さんがどれほど失望なさるか、知らして頂戴ね」

(評)結句、冒頭の句と照應して妙。

○蜘蛛　兵庫　靜子

今朝からやう〳〵出來上つたらしい、細い〳〵銀線のやうな絲を出して合歡の木と、松との間に巣をかけてゐた蜘蛛は、今眞中でぢつとして休んで居る、余程骨が折れたのだらう。私は是を見ると無慈悲に取り去る事は、どうしても出來ない。

(評)やさしい心です、

○硯箱の蓋て　栃木　小田切銘子

私は常も、讀書に倦んだ、時には、硯箱の蓋て、自分の顔を寫して、樂みます。眞白な顔へ、新月の、現れた様な眉、通つてもいない、鼻筋がキッと高く、細い眼も、パッチリ、ソバカス、フキデモノも見えず、斯うちやんと、澄してる時は、宛然、某家の方としか、思はれません。

(評)結構な事です

○醉　山口縣　河村しづ子

人酒に醉へば騒ぐ百足を食ふた鷄は夜明を告げず、蜂が蕎麥の花をすふ時は人を刺さず、蛇茱萸を喫へば蛙を逐はず、猫薄荷を咬めば鼠を捉らず、桑の實を呑みし鳩は久く啼かない、是等は皆醉ふのですが、私の心を醉はすのは何でせうか、

（評）自ら知るべし

○梅雨の時　岩手　清子

ムシヤクシヤする胸をはらさうと、縁に出たら、芽の長く延びた芋が、一つ轉がつて居た。しやくに障つたので、其のまゝ庭へ投げつけた。夕方、芽も共に萎びた芋を、庭石の上に見た時は、云ひ知らぬ可憐さを覚えて、早速松の木の下に埋めて、そして心に私の罪を詫びた。

○縺れ絲　福岡　とよ子

急がしや／＼礒邊の石に腰かけて心盡しの糸をとくなり。と繰返し／＼一心にといて居ますと、無茶苦茶に縺れて居た五色の絹糸が夫々、赤は赤白は白と奇麗にとけて行きますの。私もう嬉しくて／＼

○盂蘭盆　箱根　下澤とし子

去る秋父が逝くと間もなく家は壊滅して、いまは茄子畑となつてゐる不幸續き。昨日母がお精靈様にするのだと取りに往かれたらば雲雀が巣を造つて二匹の雛を孵してゐた、とてほろり涙を落された今宵は叔父の宅で燃火をして父の靈を迎ふる筈。

○縁談　大阪　鹿島　綾子

夕方母様は御相談があるからとて、叔母様の許へ入らつしつた。多分妾の縁談の事だらうと思ふ。胸が動揺めく、顔が熱る。結婚後の空想までが潮の如く湧いて來る。嬉しいやうな、悲しいやうな、そして又羞かしいやうな、妙な思ひのせられる晩だ。

○夏の礒邊　土佐・山本　秋子

漣がザヽと寄せて來てはスーと礒を洗つて行く、其の跡が實に涼しい、折柄そと起る沖風に青松葉がチラ／＼と波に散り込んだ……白帆の影が生み出されるかの如うに二ツ三ツ遠くに見え出す…… 私は知らず知らず砂に腰を下ろしてゐた、

涼しさや亂れ松葉の波に浮く

○やつれ　麹町　淺井ゆき子

鏡臺に向つて自分の顔を熟視めると大變やつれて眼と鼻ばかり目立てゐる、それに肩も撫肩になつたし指環もゆろくなつた。如何してだか自分にも一向解らない、義兄様は痩せて女らしくなつたと仰せられるけれども、自分は何んだかかなしい……。

○横町　岐阜市　篠田とみ子

かつッ、と夕日は表通家の高き屋根の切れ目より此横町に流れ漂ふを、こゝは倉庫の前、春さく栄積の荷やあげ下しけん雀の一二羽そのこぼれたるをついばむあゝあの愛くるしき小雀の我長き影に立ち去らん心許なや

○朝　高岡　篠原みゆき

昨日まで降り續いた雨も今朝は晴れた、小庭の樣子がなよ／＼と音なき風に漂うて居る、椽先に猫の子が、丸い可愛らしい目をくり／＼させて蛙をねらつて居る、屋根からはポッ々々と暖かい白い蒸氣がふわり／＼と上る。

○棹の歌　山口　昭子

金色の落暉、オレンヂ色の空美しく、沖の小島は朧にて、寄せては返す女波男波のさゝやきに、潮風颯と吹いて袂を拂ふ、今し一艘の小舟は夕日にきらめく金波銀波を千々に砕いて艪音徐かに岸に向ひぬ、堤上の綺師は竿を取りぬ、遥莫かの清き棹の歌を如何にかする！

○葡萄　紀伊　森井しづ子

隣家の葡萄が房々と美味さうに熟つて居る。私の方にも挿木にして見ますから、來年はどうか、一株分けて下さいと姉に言へば、直に棚にお結ひなさい、このまゝお庭へ伸ばしておげませう。

○夏の夕べ　大阪　星野　妙子

悲しむ如く恨む如く最後の光をまばらに散在する西の雲に殘して太陽は今沈んで了つた。紅な浴いた樣な夕燒けの雲もいつか消えて待ち受けた樣に涼しい風が吹く。夕顔の花にウットリして居る和尚の頭に今山を離れた月がスッと映る。しばし前行つた白リボンと日和下駄の其人遠かあらぬか四條五條月影洩るゝかなたの森よ月かすかに洩るゝ笛の音！

○年齢　上總　森　婦美

貴女様お何歳、二十歳、まあ、御若い事、どう見ても十七八としきや、御見えなさらないのよと、皆さんがおつしやるが、御友達の内では、私が一ばん苦勞をしてゐるのに……よく年をかくしなさる、人がありますが、私はつまらない事と思つて居り升、さゝいな事ですが、自分の心をあざむいて、心地のよい筈はございませ

んもの。

○宵の街

山口　滞夏美奈子

うす絹さわやか、艶なる素足に湯の香匂はせ、月影ふんで行く女、パナンと、足下の音にはじかれた樣、見透せば中月形の黄楊小櫛眞二ツ、アツトおびえ樣見上げた二階、髮ふり亂し、青白き面に凄く笑つた美しさ。

○親友

四谷　櫻子

時々はけんかもしますけれど、じきになほれば又もとの通り、夫は〳〵親にも云はぬ秘密まで話し合つて何でも自分の上についての事ならお茶碗をわつた事まできつと報告します。一日逢はなければ一年もみない樣な氣がして話は山の樣にたまり、戀しくつてたまらない。私と○子樣とは人も我も共に許した親友です。

○蛙聲

紀伊　女郎花

蚕を見ると氣味が惡るくてぞつとするが妾はあの蛙の啼聲が大好きです一種悲哀を帶びた樣に



聞かれるあの調べ何と形容してよからう、月消き夕べ人靜つた時青田を渡る風に送られくる聲をきくと云ひしれぬ感がひしひしと胸にせまります。

○懺悔

山口縣　花月子

十五夜每に彼の橋に行きましては過ぎし昔の夢を思ひ出して君の無情な恨み彼女だになかりせばと聞えしも束の間さ猶恨めしかりし君乍ら今

日此頃は每日の如くに此寺に來て泣いて居ります。

昔の友

岡山縣　かつら子

小學校で親しい交りをした久代さんが突然訪ねて下さつた、しばらくでしたはれと、昔に變る御言葉流石に女學生だ、海老茶の袴に友仙の袖長ふ氣どつた挨拶談話は御召と、嫁いだ友のおうわさばかり、嗚呼虚榮を望むは、女のつれとはいひ乍らかう友と趣味を異にしては……。

ゆく人　陸奥　江渡けい子

○人の運命

近江　佐加田芳子

向ひの家では、主人がしんだ、六十以上の兩親と三十だいの妻と十五をかしらに八人の子供ををいて四十四歳を一ごとして？五つになる男の子は好い着物きせてもらうたうれしさに、とびまわつて居る？あゝ内は、およばれだわ、あゝうれしいなあと。

俳句

内藤鳴雪選



○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使ても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙稿

○（天賞）

螢飛ぶあたりとばかり水の宮　越後　藤原泣黒子

○（地賞）

秋風に物々しさや銀襖　横須賀　齋藤松代子

○（人賞）

芋虫にたぐへて僧の晝寢かな　越後　藤原法子

神主の白衣の上に螢かな　奈良　西尾かめ子
引汐の殘り澪月ぞ涼しけれ　横濱　鈴木重子
水田に浮苗一つ五月雨　美濃　むらさき女
川に來て米磨ぐ下女や花あやめ　美濃　丸山峰子
明月や野路に這ひ出る虫の影　右野春霞
玄關の深き若葉や蝉の聲　伊豫　新田きみえ
あけやすき夜を呉竹の雫かな　横須賀　近藤美喜枝
夕顔や出窓に若き人の顔　石川　小柏すま子
朝顔に美人嗽ぐ縁の先　奈良　山崎安子
一聲は何と鳴きしかほとゝぎす　静岡　久子
紅蓮たゞ一輪雨を破りけり　麻布　野田富枝子
夏の風小女の髪を吹きにけり　大阪　岡本春子

水あれば水あれば翻ふ金魚哉　秋田　高本やゑ
妹の髷にも似たる毛虫かな　秋田　小原あき子
明け易き夜を蔽ひたる屏風かな　三河　松井らく子
竹の戸に一筋しろき蚊遣哉　三重　川原みさを
村十戸夕立つ雲の風下哉　一宮　華影
竹椽に身を横へぬ夏の月　韓國　原登里子
夕立のあと葉柳の雫かな　京橋　三輪春月
夏木立清水流るところまで　千葉　岩田よし子
五月雨に馬獣したる野路かな　秋田　竹内きくの
下京に夏菊作る翁あり　紀伊　田中富美子
鎌倉は穴庫多し秋の雨　徳島　西野ひさし
出陣の鎧にとまる螢かな　大阪　沼生美代子
海晏寺の昔にも似たり赤椿　本郷　相樂きみ
薄月夜人待ち顔の松一木　松山市　曉子
母刀自が御墓の花に蝶一つ　静岡　鈴木とも子
このながめ久しくあれや花曇り　長野　津金春枝子
濁酒に醉ひたる顔や舟の夢　紀伊　あかつき
夏雲の透間〳〵に高峰かな　讃岐　小野定子
藍色の石燈籠や夏の月　千葉　鶴岡一子
月の船人待つ顔の淋しげに　播磨　笹舟
過ぎ行けば黄なはな咲く夏野哉　千葉　金井うてな
ほとゝぎす月まださむき門出かな　門司市　鈴木靜枝
蚊帳の中螢を愛づる聲涼し　若松　佐藤安子

水鳥の白く點して夏の海　四谷　柳の人
刈草の夜を香ひたる土用哉　三河　中西葉流江
雲の峯崩れて筵を投げにけり　熱海　土屋さと川
日盛りや張り板多き裏の町　名古屋　とく子
若竹や見る間にのびて鳥の宿　樺太　眞田のぶ子
百合提げて飄然と來る翁かな　京都　日朱蕾
骨董の店を拂へば蠹蚊かな　本郷　渡邊香子
月の夜の卯の花垣をさまよひぬ　茨城　しげ子
村雨の一雨毎に秋となる　安部　阿部樂天
百合の花鬼と云ふ名のなくもがな　京都　佐々木紫子
高樓に歌の會あり青嵐　盛岡　米澤白桃
炭ついで炭ついで人を待つ夜かな　兵庫　杉山春翠
姉の君と糸を繰りけり夏座敷　武藏　みどり子
月清し今宵も君と散歩して　上海　小山照子
時鳥なくや青田に殘る月　下總　小出保花子
笛の音も月の下こそ戀しけれ　大阪　屋野たえ子
古庭や芒の中の秋の水　島根　長崎しづ子
夕顔に心ばかりの垣結ひぬ　京都　藤尾よしえ
小坊主が經よむ聲に秋近し　大阪市　千代女
しをれたる晝顔の花の柴月哉　秋田縣　佐々木渓子
草の家に不如歸きく寢覺かな　伊勢　田中蜂女
夏の夜に寢轉ひながら謠かな　三河　天野清子
村雨にぬれて桑つむ少女かな　信濃　下枝よし子
夕月にほの白く鉢の冷奴　兵庫　祥子
京の雨なゝめに降りて秋近し　長野縣　山西照子
川風はすだればかりに吹きにけり　陸奥　三浦てい子
山寺の門傾きて青嵐　上總　金井英那子
大軍の動くに似たり夏の雲　陸奥　石黒かれ子
遠雷に薬屋町の晝靜か　尾張　長尾信子
破れ寺の庭一杯や柿落花　名古屋　宮地蝶子
葉櫻に雨ふる夜半の朧かな　鳥取　安木春子

こぎ出づる船唄消し夏の海　黒澤とよ子
高樓に燈火ゆらぐ夏書哉　茨城　喜惠子
物洗ふ閤の女や飛ぶ螢　美作　山本鳳外
戸を閉ぢて障子を閉ぢて時雨かな　麹町　牧野杏庵
行水の垣の外行く白帆哉　紀伊　森井しづ子
春雨の今日も興の謠かな　若松　蝶夢子
ほたる籠投げ捨てあり夏ざしき　信濃　平澤きよ
聲する竹の中から夏の月　上毛　岩田ろく子
薄月夜西瓜をぬすまんはかりごと　茨城　橋本初美
わが妹の髮に白百合かざしけり　千葉　ゆり子
星祭る灯も二つあり姉妹　京都　村上きよ子
神苑に噴水白し夏の月　美濃　さくら子
今日一日旅の心地や衣更　靜岡　波多野いち
夕顔の宿に紹蚊幮の佳人かな　とよ子
時鳥なくや谷間の草ふかき　遠江　松本せき
君がため栗の花焚くかやりかな　宮崎　菊の露
田から田へ美しく吹く青嵐　靜岡縣　鈴木りう子
御陵の下に蘭掘る日和哉　茨城　寺門ッチ子
名月や秀才多き君の門　石狩　河合菊子
友呼べば應と答へて月涼し　下谷　谷口桂子
行水の腋に月さす山の宿　備中　馬越昌子
夏の月小橋渡れば竹の里　千葉　菅沼しげ子
夕立の晴れて垣根の瓜の花　大阪市　山内渓子
泳ぎつく沼の中洲や行々子　羽後　三浦ふみえ
君が顔に月涼しくも上りけり　德島　野澤紫子
草の井の溢れて涼し百合の花　大阪　乾白蕾
紫陽花や昨日の色のなつかしき　京都　大井香園
夏の月大藏經を照らしけり　伊豫　竹村さなへ
細帶の姿踊らん小傾城　茨城　宇野とめ子
山陰や苗代小田の鳥おとし　千葉　石原すみれ
明けて行く八百八町五月雨　上總　小川露子

餘興



電車（課題）

○すり（天賞）

牛込　白百合

街鐵線での出來ごと、割引が切れて一時込み合つた。○○町から眼のギヨロツとした會社員風の男がのると、車掌が例の「込み合ひますから懷中物の御用心をねがひます」と云つた。と私の傍にゐた七つ位の子供が、母樣何處にかすりが乘つたのだわねー、お錢とられると私人形が買へないわ。町の子らしかつた。車中の人は一せいに子供の方を見た。男は次の停留塲で降りた。

○規定　毎號課題を出して諸彦の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は欄末にあり見落す勿れ

○京都式（地賞）

京都　今堀なつ

或日の事、私は、電車に—乘つた。其後から、頭のはげたハイカラな人が、私の横に、腰を—掛け、わずかの—切符を買ふのに、縮緬の—風呂敷。次にハンカチーフ、其の次に、大きな財布、其の中に、小な財布、よう〳〵其の中から十五錢出して、切符を買た。いち〳〵、前の如く包みふところに入た。ところが耳にはさんである煙草に火がついてをつたので、はげ頭をやけどした、私はおかしくなつて笑ふに笑はれず、とうとう電車から下りて笑つた。

○縫殿之助（人賞）

本所　橋田しづ子

本所車庫前で、車掌運轉手が交代する、私は一番に、其名札と車掌の顔を見較べる。竹田縫殿之助。見馴れない三本筋の、白髪まぢり、目の凹んだ、四角な顔。隣にゐた柴垣さん。そつと私の袴を引張つて、あの車掌の名、何と讀むのでせう、可笑しいわね、とクス〳〵一人で笑つてゐらしつたが、よく昔の人形師などに、こういふ名前が多かつた。あゝ此人も、時の變遷で、こんな車掌になつたのかと、氣の毒に思つた。

【秀逸】

○想像

失名

生れてから電車と云ふ物を見た事のない私は、無論乘つた事もありません、けれども人から聞いたり、新聞で讀むだりして、想像だけはして居ります、電車に乘つて居る間は、始終あたりが何となく忙しげて、落ちつかず、そして汽車

に乘つた時のやうに、愉快てはないのだろうと思つて居ります

○回數券賣り

名古屋　しき子

西行と擢れ違ふ時、彼方から猿の樣に身輕に渡つて來た回數券賣りは運轉手の肩に捉つて「エー回數券は如何ア〳〵」と云ひ乍ら乘客一同をズーッと見廻して最後に出口の隅に乘つて居た妾を認めてヘヽヽヽと御世辭笑ひをして「今日は、毀う御斷りて」と云ふ一同の視線が妾へ集つたので眞赤になつた。

○スケッチ

下谷　村上雅子

何日てしたか電車內て、髮を長く肩迄垂らして、だらしのない風をした學生さんが、愛らしいお孫さんの方へ氣をとられて居たお婆さんをスケッチして居た。その時樂隊が通つたから私は其方ばかり見てゐたが、ふと氣が付いて見ると、あらどう仕樣今度は私を——思はずも眞紅になつて電車が留まると、逃げる樣に下りてほつと一息ついた。

○負惜み

嵐子

丁度私の前に掛て居た立派な紳士、ポケットから敷島一本取り出してあわてマッチをすろうとした時、車掌が電車內ては煙草は吸へぬ規則てすからと丁寧に注意した。處が件の紳士さも立腹そうな顏して「吸ふんぢやないこうして居るばかりだ」と遂に私が四ノ宮で下車するまで煙草を口にザット窓の方へ向て居らしつた。あの人は大阪終點まであゝしてゆくのぢやないか知ら!

○恐めしき車掌

日暮里　細谷けふ子

先日電車に乘まして二停留も過ぎた頃車掌が切符を切りにきましたからつと懷中へ手を入れますとまあお金入がないのてすもの!、もう〳〵私はどう仕樣かと胸がどき〳〵して夢中て其事を車掌に云ましたの、そしたら車掌は私の頭から足の先迄ヂロ〳〵見て「仕方がないおりて下さい」つて怒た樣に云ふのてす、車內の人の視線は皆私にそゝがれて居るのてす物、中には切符を下さると云た方も有た樣てしたが私は夢中でおりて終いました。

○電車にのつて

京都　井上澄子

毎日學校へ行きますのに、あまり遠いので四人揃つて、いつも電車に乘ります。乘つてからみんなそれ〳〵の癖があります、柏木樣と近藤樣とは、歷史地理そして博物などの問答なさるし、財部さんは膝の上に包みを、その上に兩手を重ねて、すまし込まれます。私は一番下手な編物たくしく〳〵やります。

○足もと

大ひか

電車に乘るとすぐ目について見苦しいのは女の口を開いてゐるのが……又足を見ると赤い下駄は八の字黑い緒はイの字下駄は右左がねじけてゐる側に小さい革の緒は宙に浮いてゐる電車といふ小さな區劃の中ても十人十色になつて現はれてゐる

○花輪

兵庫　祥子

昨日は久しぶりてかつになる妹を連れて叔母樣の家へ行きました、途中電車に乘りましたら丁度私の向側に五六人の西洋婦人がばらだの撫子だの、美しい花輪を持て居ました。其中のカーネーションを一りん妹にくれましたので喜んて禮をいひますと其婦人も嬉しそうに笑つてゐました。それから色々話して見ますと其人等の親友が亡くなられたので此花輪を亡き魂に捧げるのだと語られました。

○短氣

四谷　櫻子

忘れもせぬ一昨年の夏、友と二人てよそへいつた歸りがけ、牛込門のそばまてくると電車がとまつてしまつてまつても〳〵動かない。きくと停電だといふ、家には忙ぎの用事もあるのではてしなくまつてゐるより歩いた方が早からうと車掌がとめるのもきかず、すぐ下りて一間ばかり歩くと、忽ち後から風をきる音、アラと友と顏み合せる間もなく電車は横を通りすぎて行く、何だか車掌が笑つてゐる樣てほんとにきまりがわるうございました。

○眞晝の電車

大阪　中野喜代子

南から來た梅田行の電車に乘ると、中には職人

風の男が唯二人、どんよりと曇つた目付きて私の顔をヂロリと見る、嫌になつたので目を電車道に向けると、きつい夏の日がこれでもかと言はぬ計り片側の家に照り付けて居る、犬の子一疋通らない、靜である、唯、ゴーーと行き違ふ電車の音と、ガン／＼と警鐘の音を立てゝ進行する計り、

○見物　京橋　せゝらぎ

妾は、先日、築地から三田行へ乗つた。直、脚に五十歳前後ノ田舍者の夫婦連、多分江戸見物に來たのだろう、男はチット位様子を知つてると見えて自慢らしく此處は何、彼處は何と、数へてゐる。所が歌舞伎座前へ來ると「オイ婆さん見れー常盤座、々々々」婆さんは「ハーアツとさも／＼感じたらしく、大口開いて、たまげてゐた。妾は可笑しくて／＼。齒を食ひしばつて下を向いてゐた。

○嬉しさ　牛込　千鳥

或日學校からの歸途突然の俄雨なので、妾は早速廻り掛りの江戸川行の電車に飛乗り切符取らうと財布を見れば、悲しや貳錢銅貨が二つ切。ハツと思つたが仕方なしに有りのまゝを車掌に物語るのを見兼てか、脚席の若い女の方が『失禮ですが』と回數切符を一枚下さつた。餘りの嬉しさに折返し御姓名を尋ねたが教へて下さらなかつた其の方は、鼻筋の通つた地藏眉の優しさうな御顏樣。

○おもひて　韓國原　とり子

嘘、電車、私は電車に乗る度に、思ひ出さずには居られない悲しい思出があるのです、それは母樣と二人て、東京の江戸川に住んで居た時でした、其頃母樣は重い病ひに惱んで居られたので、私は毎日神田迄電車に乗つて藥を取りに行きました。例も電車の中で母樣の御病氣を心配して人心地もなく歸るのが常でした。間もなく母樣は悲しみ嘆ふ私一人を殘して逝かれたのでした、其時の悲しみ……今でも電車に乗る度に其當時を思ひ出して涙をこぼす事が度々あります。

○どんな顏して　八戸　掛端　杉女

私はほんの田舍者です、東京に來て始めて電車を見たのですもの、或日曜です、同縣の寄生連が大勢、家にゐらしたので奥樣に命ぜられ大急ぎと云ふので電車で三丁先きの八百屋迄行きましたが何時降りてよいのやらさつぱりわからない、で市中を一週してやつと家に歸りましたがどんな顏して家に這入つてよいものやら、戸口でしばしためらひました。

○喜怒兩面　栃木　しのぶ子

私が始めて電車に乗つた時でした、ある停留所に來た時、車中は大混雜、七十近いおばあさんが乗つたので席を讓つて上げたら勿體ない程御禮を云つて下さる、この時どうしてか私の洋傘の先がすぐ脚に二人分の席をしめてゐた立派な紳士さんの靴に一寸あたつたので「ア御めん下さいまし」て云ふより早く「失敬な」つてにらみつけられました。今でも電車に乗るとあの時の、嬉しそうなおばあさんの顏と怒つた紳士さんの顏が目にうかみます。

○失敗　越後　一下　紳

私は田舍駈出しの經卒者、電車の失敗は度々て御座いますが、財布を無くしたと思つた時程、狼狽たことはありません。いつの間にか車掌は私の側に立て居る。帶と帶との間、内懷、袂、皆な麼かいさぐつたが怎うしても無い「あの……：私財布無くしましたから……と今はもう進行中の電車から、飛び降りやうとした、私の顏は怎麼だつたでせう。

○病人　府下　曾我　福

色青ざめた一青年が電車に這入つて來ましたが、腰掛る場所がないので革につかまりながらも日口／＼として、いかにも苦しそうなので、私はつと立つて席をゆずつたので、彼の人はさもうれしそうに一禮して、腰をかけた、其そばにとうとうと、喋つて居た紳さま達は見ても見ぬふり、知らぬふり。

新課題（締切本月十五日）

病氣▲病氣はいやなものですけれど人間一生の間に病氣にかゝらぬと云ふ譯にもゆかない▲人は病氣になると神經が過敏になつて、却つて平生より考が鋭くなる、好い美文が病中に出來たなど云ふことは珍しくない話です▲殊に若い人は病氣にかゝり易い、何か書くことがあるでせう▲病氣の經驗談も可し注意もよし病氣に就ての一切萬端何んなことても考へついたことを一寸書いてみて下さい▲懸賞其他例の通り

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通信の音信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以內とす一人一章に限る原稿紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

○乳母の子に（天賞）

小石川　野の菊

よく降るよ。先刻あまりじめ〳〵するからと、母樣が御たき遊ばした香の薫で、乳母やの御葬式の日を想ひ出して泣けて仕方が無かつたわ。御手紙は今つきました。よく考へて見たけれど私は不賛成よ。高島田に柔い着物の上品な小間使の姿を想像して靜さんは胸を躍らしてゐるでせうが――立派な召物や髪飾も頂く、御供で面白い所も見る、行儀も覺えると上べを數へれば願つても無い幸福と思ふのは尤ですけれど、內々恐ろしい事も潜んでるんですよ。奉公するからは御上大事と勤めるのは勿論、朋輩の大勢にそれ〳〵つとめなくちや成らないのよ。新參ものは馬鹿にして、何か落度を目付けて笑はう〳〵と澤山の目がにらんでるの、氣の小さい靜さんはつらいでせう。わけて、女中頭の意地惡さつたら無いつて。しとやかにしつけて居るから、はした無く言葉を荒立てたり、手を出したりは決してしないかはり、眞綿で首をしめる如な目に逢はせるのは每々ですとか聞きます、又お上で目に懸けて下さり過ぎれば、朋輩に憎まれたり妬まれたり。一人を大勢でいぢめるから堪らないわ。夫れかとて、誰に訴へる事も出來ず、心で泣いて顏では笑つて過さねばならないのですよ。病氣だとて自由には寢られず右を向くにも左向くにも一々氣兼ねをしなくてはなりませんもの氣骨の折れると並大抵の話ぢや無いでせうよ。夫に華族樣なんて淸い家庭と思ての樣だけど、反つてけがれて居ますよ。はげしい人波にもまれ刺々しい言葉に打つかつてる中にはねじけたわるがしこい者に變つて泣かされし昔のつらさを忘れて人を泣かして面白がる樣に成つてしまひ升よ。私は、玉の如な今の靜さんのまゝ大きく成つて貰ひ度ひの。夫にちいやの世話は誰

がして、靜さんが居なかつたら。母が無い子は不憫だから望み通りにしてやらうと許したのでせうが、必々手離し度く無いのですとも。私だつて乳母やに呉々頼まれたし、一つ乳で育つた妹ですもの、みす／＼茨の中に投げ込まれて泣くと知りつゝ默つてゐられません。着物が欲しくば分けて上げてよ。も一度考へて御覽なさいね。花や鳥の友と成ておいやの側に居る方が幾倍幸福でせう。ぢいやに宜しく。乳母やにお詣りの時は私の分もどうぞね！ぢやお返事待つて升よ。

溫かき同情を傾けて迫まらず激ゆ、意達し情あふれて猶ほ餘裕あり、有益にして又床しき文字（評）

○故鄕の母樣へ（地賞）

札幌　薫子

昨夜は御病氣の處の夢を見ましたがお變りも御座いませんか。今日も朝から心配致して居りますと、若い者の樣でもないつて、とう／＼先生に笑はれてしまいました、どうぞお身體を御大切になすつて下さい。私はあれから以來至極達者で毎日通學致して居りますから御心安く思召して下さいませ。前かど御報知致して置きました寄宿舍は、今度學校から許可が出まして、一昨日の夕方一臺の車を頼んで、荷物を運ばせました。そして私も愈／＼舍の一人となりました、私の入つた舍は五舍でありまして、お友達が八人それに舍監先生と合せて十人の家族でございますの。今までの樣な下宿屋とは違つて、學校から御親任の舍監先生もついていらつしやる事ですから、自分の身を修めて行くには誠に適當な所と非常に喜んで居ります。母樣が常々、都に出してやると女に持前な水仕の仕事がおろそかになつて、との御心配でいらつしやいましたが、其方の御心勞はほんとうに御無用です。

毎日二人の當番が定められて、其方々が炊事を致しますの、風呂もたきます。水も汲みます。實に他の寄宿舍に見られないよい習はしと私も內々喜んで居ります。其他校長先生の特別なる御奬勵で、鷄もかつて居ります。又畑も作ります。日曜の日等は、先生も皆樣も姉さんかぶりに手拭を頭に戴せて、鍬や鋤等をもつて、畑に參りますのです。ほんとうに愉快です。私も明日炊事の當番ですから今から粗忽のない樣にと祈つて居ります。先生は谷田と申されましてそれはそれは、おやさしう、何くれと面倒を見てお世話下いますので、暖かい平和な一家族に入つた樣な心地が致しました。金錢も先生にお預けして無用なものは、一切買はれない樣になつて居りますので、私の樣な金費ひの荒い者は至極宜しく御座います。又ゆる／＼舍の模樣もお話致す事と致しまして今日はこれで筆留めます。御面倒て御座いませうが端書一本先生の許へ御差し出し下さい。どうぞくれ／＼も御身を御大切になすつて、惡い流行病等におかゝりなさらぬ樣お願いたします。私も毎

日裏の白山神社にお所り致して居ります。さようなら。

いさゝかの奇を弄せずして而かも趣味津々として湧く少しの無駄なくして又枯淡ならず、佳作（評）又曰此文わざと圏せず惣じつゝか少部分の打點にまさりたらんと思ひて也（再）

○都のおもひて（人賞）

西多摩　三ヶ島よし

こんな山の中に居て、それで遠くの山を仰ぐことの出來ない私の心を、御察し下されたのでせうか？美しいうす紫の山、まして氣高い富士の姿が、すが〱しい夏野のはてに見えるのですもの、今朝配達の手から受取つた御はがき、まだ一度も狀差へさゝないで、今もこの机のはじへ置いて眺めて居りますの。御上京なされてからはじめての梅雨季、お汁粉のやうな街路の光景に驚きなされて、淸楚な山地の風色を御羨みになる御心深く御察し申し上げます。私も芝公園に近い親類にをりました時、恰度今頃でした、暗の夜なんぞ地内の大木が山のやうに見えて、鳴きもしない時鳥や、故郷を思ひ出して、裏口へ出て泣いたことがありましたさうですけれども賑やかな夏の晩涼みながら買ひ物に出たり、繪草紙屋の前に立つたことなど、どうしても忘られませんのよ。田舎はいつも同じこと、あの時分あなたが仰つしやつた通りよ、おまけに今年は蠶の大違ひでしたからなほ淋しうございます、そんなどころぢやありません、折角よくできた麥が思ふやうにとり込めなかつたものですから、みんな畑で眞青に生えてしまひました、瓜も茄子も未だ花さへ咲かないで、なさけないやうです。今夜もなか〱怠りなく雨の音がしてゐます、こんな時こそ私電氣燈の光が見たいのです。まあ花子樣これぢや羨望の爲つこになつてしまひましたね！人はだれも自分の境遇には滿足できないものなのでせうかね！つひ失禮なことを申しました御めん下さい、さよなら。

一度都會に生活したる人が、雨に倦みてのおもひての表白極めて鮮明巧みな書翰（評）

【秀逸】

○破談になりし友に

麹町　喜久

御察し申します、ちつとも愚痴は御こぼしになりませんけれども、御心の中は、私もう〱、何と幾言御くり返しになりますより、よう〱御推し申して居るので御座いますもの、けれど何事も運命、今はたゞ御身を御大切に、またいつもの頭痛が御ひどく御なりにない樣御いとひ下さいましな、申すまでもなく金玉の御身で御座います。

とは申すもの〻くしき運命といふもの〻今更に果敢ない、い〻えうらめしいものだと思はれてなりませんの「今寫眞を返すところでございます、そして見も知らぬ人になりますの」大方日外一寸御洩し下さつた意外の妨害でと思ひますが、委しい御話承りたく、いづれ御樣子伺ひに其内出ます、今は先刻頂いた御手紙をくり返し拜見してはぢつと御部屋にうるんだ御眼を伏せていらしやる御姿が見える樣で、もう多く申上げる言葉が出ませんのでございますもの、是非々々あがります、そして御一所に泣かしていたゞきます……あゝミン〳〵が鳴きます、靜子さん今日の御暑さは、たまりませんことねえ。

備動、まことに力ある好慰問、推移抑揚の情調、名優の科白などを聞くが如く、息もつけざる妙味あり(評)

○祭禮過ぎて山住の友へ

冷　花

此上も無いおひどひ方と華久樣はさんざたのしましたり、待たしたり、失望させたりして、知らんおかほなんて……それはもう、貴下の樣な超越なすつた御目から御らんになれば、人の狂するお祭など、馬鹿々しいと思し召すかもしれませんけれど、せめて人氣少い小雨の宵を待て、野毛山から夜景でもと思ひましたのに、正金銀行の灯が一番て御座いましたの、水色をした、雲の中に、黄金の棗の上へこがね作りのかぶとをのせたと云た樣な形に浮き出て居りますの——かういふと此處には自然のイルミチーションを螢が見せて呉れますと、例の又お口惡にきまつてますわホ……慈善會の文士劇つまりませんでしたの、舞臺で泣けばこちらもなくと云ふ八達の御運でせう、ですもの察して頂戴、これがまあ貴下と御一處で、趣味あるお話をしあつたらそれこそどんなにと思ふと殘念で……期待して居た興味の半ばはたしかにお蔭てそがれましたわ。山車がどうの軒燈がどうのと云た處でお喜びにはならない貴下の事、何も聞いては戴きますまい、盆おどりには參りますから、ほうづき提灯の赤いのをブラ〳〵させながら、裏のお山へ上りませう、そして杉や松の雄々しい木立の間から、海の見える芝生に足をのばして、貴下の面白いお話に醉はされるのは何時てせう。今年朝顏の御出來ばえはいかゞ異り咲きでも封じて下さい。

第一に、命題が新らしい、筆もきび〳〵して怨言もよく利きました山住の仙人も破顏一笑されるとてしやう(評)

○兵營の兄さまに

西澤常磐幸子

兄さま御目出度う御座います。愈々來る七月七日が勳章授與式ですつてね、廿八日の官報で兄さまの御名譽承知しては居りましたが今日の御手紙を拜見しますと、私嬉れしさがこみ上げて胸の底まで、泌み徹りました。お父さまも大滿足、母樣はね兄さま、涙を流して悦んで被入いますのよ。丁度去年の今頃よ韓國暴徒の情報は、頻々と新聞に傳はるのに兄さまからは、ばたつり、御便りが絶えて仕舞つたんですもの、若しや、兄さまは維林の空、草いきれする野に、蠻人共の手にかゝり、恨みの血汐を吸つての御戰死かと、そりや、御國のお爲ならと覺悟してましても、笑らつちや厭—どうだか知れもしないのに全然それときめて仕舞つて、母さまのお膝にしがみ付いた事も御座いましたつけ。其れを思ふと、今日のお悅は、丸で夢よ、本統に何て、御目出度いので御座いませう。もう御小使も欠乏でせうつて、父さまから十圓母樣から五圓御請求がない中に別封爲替で御送りします。オホヽ、這麽事始めてだわね其代り早く勳章を父樣母樣の御目に掛けて下さいまし。私からはお庭の枇



はなし　　名古屋　渡邊みつ子

杷を澤山差上げ升、御入營の際御預りした蘭科植物ね、教へて下さつた通りハートを見ては、栽培に苦心した故か、兄さま褒めて頂戴、今年初めてクリーム色の花が、ポコッと咲いたの。。。。。。、幸は嬉しくつて〱、早く兄さまに御目に掛け度いと思つて、昌雄さんに頼んで撮つて頂いた寫眞小包の中に入れて置いてよ。それから昔の間の高山植物もむしられては大變でしよ、だからお庭掃除は幸ばかり御安神遊ばせ。餘り長くなり升から筆止めます、何卒軍務御大事にね、幸は兄さまの健康を祈つてますのよ。

天眞流露、性格と習語とが直ちに紙に出て居る、「蘭の花がポコッと咲いた」なぞ無邪氣の俤歷々、これがやがて奇拔な聲となつて現はれたのです（評）

○歸省前の姉樣に

武藏　山口みどり

姉樣、今年はほゝづきが澤山なりまして嬉しいの、朝顔も大輪が咲きますわ、姉樣おすきの紫のもね、この頃の東京はさぞお暑いでしよう、暫くお手紙が參りませんので、母樣が心配して居らつしやいますが、別にお變りもありませんか、隨分お身大切に御勉強なさいませ、家では皆無事です、父樣も御退職後は至極御達者て、この頃は下男と畑にお出てになります、母樣も今年は頭痛がしないつてお働きなのでうれしう御座います、花子もよく勉強します、そして花ちやんはね昨年姉樣が月夜によくよりかゝつて石童丸の歌をうたひなすつた梧桐の下で指を折つて微笑ながら東を向ひて立つてるの屹度姉樣の御歸省を樂しみに待つてるのですわ、竹坊も丈夫で兵隊だなんて棒で鷄や三毛なぞ追ひまわしてあばれて居ますよ、私はね、桃の節句頃裏庭へとうもろこしをまきましたらもう私の丈よりのびて花が咲いてるの姉樣お好きでしたわね、御歸省頃には實が入りませうから燒いて上げますわ、兄弟四人で裏椽の涼しい處で食べませう、その時には東京のおはなし聞かして頂戴な、おや十時よ、ては休暇になつたら早くお歸省下さいませ、お土産はお忘れなく澤山にね、左樣なら。

すべて活き〱して書かれてあるのがうれしい（評）

○お隣りへ

山城　山田幸子

靜樣お早う、あなた今お目醒め？アラ違つてマアお掃除をしてゐらつしやるの、惡い事云つたのね、ゆるして頂戴ほんとにすまない事、オホ……私ね、受持ちの花畑から歸つて來た計りよ、靜樣のお好きな白菊も私の手入れて奇麗に咲いてよ「又朝からじまんしてしかられるか知ら」それから、御用がすんだら裏の切戶ま

て行つて御らん遊ばせ菊の花がチヤンと置いてあつてよサア誰が置いて行つたのでしやうね、教へて上げませうか、私だけは知つてゐるの、あのね、神樣が靜樣の花好きを察して、昨夜の中に置いておらしたの、アラそうではなくてよ、でも夢に神樣が私にお告げなしたもの、いゝえほんと。後でおひまがあつたら何なりと御仕事御持參でお話相手に來て頂戴、澤山お菊の種が出來ましたからよ。これは母樣が瓜畑へ行つてゐる間に、一寸走り書きしたの。さよなら

こんなのも罪が無くつて宜い(評)

○朝鮮便り

釜山　宮永淸子

一

雪子さん、とう〳〵韓國の水を、飲む身と成りました。心地よく後れ毛をなぶる風も、あの汚ない韓人共の衣服を吹いて來たのかと思ふと、何だか悲しくつて、察して頂戴な。でも日本居留地は、もう日本に居るのと少しも變りが有りません、當分お友達はなし淋しう御座いますけど、なあに雪子さんがお便りして下さるからねホ……

二

今ね韓人が蕗を賣りに來ました。叔母が門口で買ふて居ますので、私も傍に行て見ました。韓人はね、非常に掛値を云ふんですつて。蕗が三十本計が一束になつてゐますのを、三錢と云ふんです、叔母は其れを五厘につけました。私もう吃驚しましたわ、迚も承知しないだらうと思ふてましたら、案の通ブツ〳〵怒りながら、荷を擔いで立去りました。私も内に這入て居ましたら「お神さんまけます」と云ふて來ましたのよ、私二度吃驚したわ。韓人は皆然うですつて、でもね韓人でも、女は其れは〳〵慾張よ、一文でもまけやしませんよホ……又次便でね、さよなら

どうか次便で又珍妙なのを、(評)

○妹に

福岡　登譽子

成績がいけないから歸らないつて。富さんがまさかそんなこと自分でいふのぢやありますまいね。出來た後の事ですもの仕方はないわ。失敗は成功の基だとか、却つていゝお藥ですわね。

父樣と母樣とは「富は何日に歸るかね、間もない事だから、果物なんかも少くしない樣にしまつて置きなさい」と仰るし、圭ちやん達もあの惡戲つ子が「姉ちやんにすまないからつて、いろんな物に手もかけないでゐますよ」。兄樣が「何時に着くかしら迎へに行からね」と仰れば、英ちやん迄が「僕も行くよ」つて大騷動。

あなたの好きな裏山の梨も、今年はいつもよりも、餘計になつてゐますし、お庭の葡萄も、まだ青いけれどもお歸り頃には屹度熟れませう。それに、もつと〳〵嬉しい事は、三ヶ月前に生れた綾ちやん、それは〳〵可愛いの、富さんの送つて下すつた涎掛あてゝ、ソラ二人で見立てたメリンスの着物ねあれを着て、今、無心に笑つてますよ。見たくはない事義姉様も、富さんに澤山抱いて戴かねばならぬと待つてゐらつしやるの、私も富さんにと、柄の好い對の浴衣を拵へて待つてゐます。此麼に皆して待つてゐるのにこれでも歸りたくなくつて。其程の氣があつたら、夏休後でも勉强は出來ます。貴女も女なら、何時迄もこの樂しい家庭に起臥することは出來ませんもの、今の内ようく樂しんでをかねばねえ。歸つてゐらつしやい。

懇懃懇願、情で動かしたり理で攻めたり、さて〳〵恐るべき辛辣の手腕なる哉(評)

○兄様と嫂様に代つて

横濱市　小田切錦子

母様吃驚なさつたでせう、電報なんかかけまして、ホヽヽ、眞個に兄様の氣早には困つてしまうの後の御手紙もう御覧になつたでしようね、嫂様が話しの時、鳥渡おどけ半分に、二三日前から、お腹の工合が、變で食事も進まず、吐き氣がして仕方がないと、被仰たら、さあ出來たのだ〳〵一時も早く國へ知らせて、喜ばせなきやならない、子のある時は吐き相のものだと聞いて居たなんて、いくら二人で、譯を云つても、其時計りは、承知して、遂に會社からそつと出してしまつたのよ、それだから、嫂様の心配たら一通りでなく、毎日お氣にして被在ると、丁度、四五日目の朝なかつたものが、あつたので、さあ大騷ぎ、屹度國では知らせが着くと、大欣びでお祝ひをしたり、遠い親類までわざ〳〵知らせたり、するだらう、どうしても電報より外にないと、兄様は萎れかへつて、夜の遲くなつたのも構はずに出て、かけたのよホヽヽ、氣早のたちには、こんな事にも一度出會つとくと爲になるわねホヽヽ、もし聞いたら大變〳〵、兄様も嫂様も、極り惡うてと、被仰るので、お出しやの私が引受けて、先づは右まで。

珍らしき手紙、而かもありさうな事、面白し(評)

○都に物學びせる友に

羽後　菊池りう子

五月雨の頃、御便り日にまちまゐらすれど、そよとももらし給はねばいさゝか御恨み聞えあげんと、軒の玉だれ硯にうけて墨すり流せし折から郵便とて椽近く投げきしをみれば、まちまゐらせし御文、いつに變らぬ深き御情の程嬉しう拜し候ものゝいさゝか心得ぬ筋の有

之候へば親しき仲とて謹みもなく申あぐべく候、御氣にさはり給はゞ許させ給へ。思ひ起せば去年の今頃にもや候ひしか。雨晴れし庭さきに御許様は希望に輝く御瞳もて「都行きを許されぬ、たとひ如何なる波風にあふ共固き心は砕くまじ、榮えある世に出で再び君にまみえん日は必ずよき便りもたらして……」と語り給ひし彼御言葉。今尚耳には殘りて候。私は其健げなる御言葉、たゞ我身の如喜びて君が幸をば祈りて別れ候ひしものを、いかなれば御出京遊ばされてよりしかも一年も經ぬけふ「つく〴〵都は厭はしく候平和なる田舎の戀しくて」かゝる御言葉承らんとは、夢にも思ひよらず候ひき。何とてさらに悶え給ふにや。友よりのそしり、そは察しまゐらすれど、あれ程の御決心にいさゝか違ふ事の候はずや。東北の片隅より花の都にのぼり給ひしからには言葉抔笑はるゝは當然の事には候はずや。田舎者々々と呼るゝも又詮なき事に候さる弱き心なもち給ひそ。今に其田舎者が如何なる活動をなすか活目して見居れよとの强き廣き御心もち給へ、世には都に埋るゝやむなき子等も候ものを。努力し給へ、我藝術の園に――。必らず〳〵あんき事に心痛め給ふな。情なき友よとも御思召されんが、か弱き君が御心は充分に御察し申あげての上の申事に候へばあしからず聞し召せ。



待合の春　　太田和子

此後共口惜しき事、悲しき事の候はゞ何なり共語り給へ如何様にも御相手仕るべく候へば。故郷の様をとの

仰せには候へど今日は餘り長く相成り候へば後の便りにゆづり申候。只今時鳥の高鳴き靑葉がくれに一聲、あれ又‥‥。垣のうの花まさかりに候へば一花を封じて。餘りくよ〳〵と物案じ給ひ御身害ひ給はぬ樣くれ〴〵も御祈り申上候。かしこ

巧みなれども格別これと云ふ興つた點が無い作者の平生に比して大に物足らない、一番の努力を望みます(評)

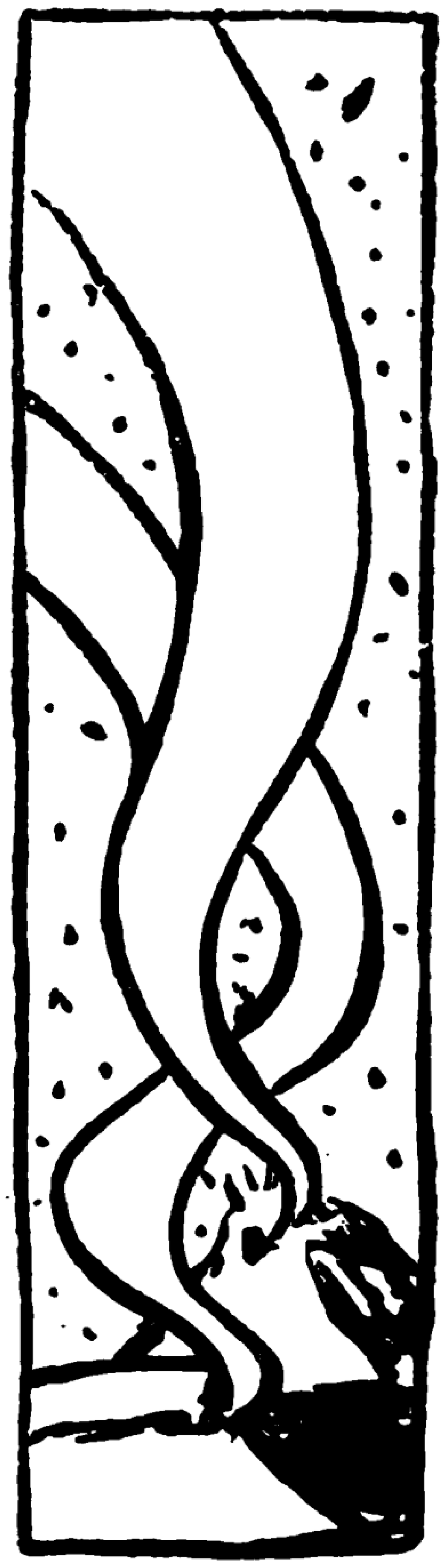
○舊恩師の君に

京都　益子

先生私は昨日不圖途中で先生に御目に懸りました、それは午後四時頃一條通新町東へ入る所で、先生は御二人連で餘念なげに御話し乍ら西の方へ御こし遊しました、先生は一向御存じ御座いませぬ樣でした、私も御傍へ參るまでちつとも分りませんでしたが、ふと心付きまして思はず先生！と申しかけましたが、若しや違ひはせぬかと思はれためらつて居る內に御ゆき過ぎなさいました、で御後姿をつく〴〵と御眺め入りますに確に先生四年以前に泣き乍ら御別れ申した御懐かしの先生で居らつしやいました、さうと知つては堪りませず御後より御すがりつき度存じましたけれ共御目もじをしたならば御話し申たき事はつきぬ計りあり斯樣に御懐かしさせまりて心亂れし折なればどの樣なる失禮を申すやもわかられず、また先生の御優しき御言葉の承りては御別れむ事のいか計り悲しく辛からむ、ゆるゆる御物語も出來ぬ折柄なるに、なぞの想一時に湧き申しとやかくと惑ひます間に、さる事か御存じなきとは申せ先生は情なくも一歩々々と御遠ざかり遊しました、今は詮方なしと御姿の見えぬ迄淚の眼で御見送り申しつきぬ名殘をつゝみつゝよそ乍御別れを告げました、想ひ申せば夢と過ぎ去つた四年の間に先生も御變り遊ばしました事よ元より御やせ氣味の御身の尙御細り遊ばせしよう、無造作に御束ねの髮も少さくなつて‥御見上げ申して淚が一ぱい浮びました、先生御年を御重ね遊せし故でございませう？御省みますれば私も變りました先生が御らんなれば屹度御驚き遊すでございませう、先生何故人の身は斯く修り變るものでございませう？昔が戀しうございます汚れたうつし世の風にもまれて幾多の憂愁苦痛を味つた私はあの無邪氣なりし昔が戀しうございます、飛んでもない空想をゑがいて先生に笑はれた事も御ざいました夢のように浮びます何につけかにつけ先生の御情厚き御敎のしみ〴〵と身にしみます先生御懐しう御座います御見送り申した御姿の窶窮といたします何故あの時御よび申さなかつたかと今更悔しうおぼえます申あげたい事澤山々々御座いますが何から申のべて宜いか思ふまゝに筆が回りませぬ今日は之で止め近き日に御訪ひ申しませうそして其後の事どもゆる〴〵聞いて頂きませう、四年の永い間只一度の御音信も致さなかつた御詫も申上ませう、暑さはげしき折から御身御自愛專一に遊して下さいましさよなら、

命題はたしかに佳い、しかし辭令があまり京都式婉曲を極めたので、却つて天眞の情趣を殺いだ氣味がある。もつと鋭く突きこんで書くとてす(評)

新歌謡



○（地賞）　麹町　浅井ゆき子

お江戸名代の銀座の街は華の電気に夜が明ける

北行一番の電車のリン鳴を破つてひゞく

○（人賞）　美濃　傍島小枝子

松の木の間をクリーム色の洋傘があちこち逗子の浦

逗子を聯想す

【秀逸】

○　大坂　乾しら露

ふたつ並べた紅緒の草履内が床しい青簾

○　長野縣　古畑よしみ

露をめぐんだ螢の籠に染みた情けの口の紅

○　栃木縣　しのぶ子

桔梗色なるお山をおふて銀とかゞやく富士の雪

○　京都　紫花

萩の花散るお寺の窓に吹かれて止つた秋の蝶

○規定　古来の俗謡の形式を取りて専ら優美洒脱なる作を歓迎す野卑猥雑なるものは断る一人一篇を限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○　豊後　吉良静子

かさのやぶれに小雨がもれてたもとぬらしたあやめ賣

○　上総　菱花子

青葉がくれに蜩なけば裏の野風呂に煙がたつ

○　大阪　平尾とき子

お池へだてゝ君の名よべば聲に開たはすの花

○　大阪　乾花子

青い芒を離れて馬を洗ふ入江の夕月夜

○　下総　相川みよ

歸る漁夫がふなうた止んだ後は松風波の音

○　下関市　芳子

鳥渡かくれて鳥渡また覗く葭の葉かげの百合の花

○　美濃　さくら子

ドッとふり過ぐ大夕立の晴れて涼しい夏の月

○初朝顔の開いたあしたゆめ見が悪しと文が來た　松山市　ぎよう子

○堰にとまつたうばらの束を上て流した主は誰　美濃　篠田欣子

○靄を着て寢たあの富士が根が脫いた帶やら靄かすみ　鎌倉　上原顯葉子

○母に吞ませる藥を買ひに三里山路を月明り　千葉　藤沼しげ子

○君がすみます向ふの村は梅雨にくもりて見えやらぬ　茨城　岡田きよ子

○兩方の岸にて恥かし相に顏を見合す川柳　和泉　金田文子

○やみに手折つたこの卯の花を君に送らう歌そへて　德島　野澤翠水

○花のおもひがつぼみの中に秘めてありそな深山百合　奈良　中富よしみ

○小川ぬるめば小石は芽ぐむ芽ぐむ小石にや花が咲く　藤澤　常盤幸子

○月の光はか弱いけれどいつも心の底てらす　兵庫　祥子

○天にそびゆる神代杉に鷺の聲すりや夜が明ける　下總　月沖ゆり枝

○捨てた花束蝶々が追ふて花と一所に流れ行く　下谷　村上春枝

○夜風すゞしい里川つゞき月にうかれてなく水鷄　四谷　櫻子

○人目忍びて見送る宿の柳烟りて雨が降る　熱海　さと川

○每夜眼はうお湯や前に身閉てらして銭買　岐阜　鷲見ちい子

○馬子が得意の追分ぶしにくろろ信濃の馬場斷　長野　若林まさ子

○雨は降りきぬいとしめやかに遠い山々煙りつゝ　信濃　川端靜子

○しげる靑葉の中から見ゆる赤ふ熟した桃の實が　長野　東條周子

○小猫可愛いや閃の瞳で空の御星とにらみくら　筑前　田中とよ子

○お猫は四眠起き猫の手もはしや客も客にはして泣けぬ　牛込　平塚白百合

○姉と妹と揃への浴衣踊りや手先もよく揃ふ　大阪市　鹿島綾子

○姿が影さしや金魚はもぐる主にや尾をふる悄くちしき　豐後　鈴木耶馬子

○風がそよ吹くそよ吹く風に庭の蛍は鬼ごつこ　羽前　鳳志子

○蜘蛛のまれして姉さんをかし庭の木陰にはんもつく　尾張　小島はる子

○夏の夕は靑田の上で赤いとんぼが飛んで居る　和泉　谷ふじ枝

○軒に舞うむ蚊やりのけぶり洩らす機嫌の高話　筑後　蝶夢子

○すれてちぎつた韭間の菊がまよて出そうな雨の道　山城　幸子

○散つてにこく花咲鈴がひよつと出そうな靑葉陰　美作　長尾はやの

○鳴けば雨降る雨降りや鳴かぬ靑葉の影の雨蛙　岐阜　佐藤秋子

○たきの白糸こげ茶に染めてゆかし五月雨今日も降る　小草子

○赤いぼつくりて落ち葉のうへを小鳥みたよにちよこくと　德島　吉田紫花

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話ても一口話ても隨意なり賞丙種

○はがき（地賞）

本郷　千とせ

母「幾ら忙しいたつて月に二三度はハガキ位よこせさうなもんだね」
倅「ナアニ東京は物價が高いからハハガキだつて仲々安くないからさ」
母「デハ折ふしこつちで買つて送ろうよ」

○立つたら高い（人賞）

四谷　柳の人

弟を連れて上野へ行つた。
「顯チャン、あの木と大佛とどつちが高いでしやう」
「さうねえ、大佛樣は座つてるから低いが、立つたらあの木より高からうよ」

○上に半分下に半分

信濃　吉澤辰美

先生「貴方此字は半分しか、書いて無いぢやありませんか」生徒「下が詰つたから上の方へ半分かいて、おきました」

○婦人會

伊豫　文字

甲「貴女どこへお出ろの、
乙「あの婦人會に行くのよ、
甲「あらまあいつのまに奥樣にお成りてすの。

○頓智

嵐子

學校寄宿舍へ用事があつて參りまして御免なさい〳〵と幾ら呼ても誰人も出て來ぬ。其癖内ては面白そうな笑聲などきこえろ。そこて試みに一聲高く「郵便」ッて叫んだ處、五六人の生徒さんが我先にとかけつて入らした。

○利口

岩代　百合子

「姉さん鰹節は魚てせうな」と妹が聞いたら「あれ鰹節は人造魚よ」と姉さんの御答、次の間ては御父樣が小聲て「姉は姉だけ利口なもんだ」と御母樣との御話。

○病氣

福島　大河原文子

甲吉『乙助に向ひて君の病氣は此萬病圓を飮めば直ぐに治るよ、
乙助『ても駄目だよ僕は臆病なんだから

○地球を差上る

大阪　野村政子

孫「今の學校ては體育と云ふことをしますから私などは地球を差上ろ位の事はワケはありませんよ」
老人「馬鹿を言へどうして差上るのだ」
孫「それ御覽なさい」と逆立をして見せる。

○痛くない方で泣いた

靜岡　高田元子

今年尋常一年の春ちやんが右の眼が惡いので眼藥をつけてやりますと痛ッと言つて泣きました「折角お藥をつけて上げたのに泣くと駄目になつてしまいますモう一度つけましよう」と兄サンが申しますと春チヤンは兩手て眼をさへ、「モーつけなくつてもいゝよ。痛くない方の目で泣いたんだから」と申しました。

○正直な答

本郷　渡邊喬子

敎師が奢侈と云ふ言を生徒に說明して、もし私が立派な頸飾或は指輪等をはめて、美しい衣服を着て來たとすれば諸君はそれを何と申しますか――一生徒答へて曰く『大方先生は借りておいてになつたのてせうと申します』

○だから

京都　大欄八重子

或る夏の暑い日、盲目の女房が厨所て養燭を仕て居りましたが誤つて火傷をし思はずオホ熱いと叫びましたら盲目はふりむいてそれ見ろだから。夏は傘をさして歩けと云ふにと申しました

○八文半

和泉　光

家には誰もゐません。十二歲ばかりの男の兒は庭を掃いてゐます。とそこへ、巡査が來て、
「汝はここの者か」
兒「いえ、私はまだ八文半の足袋てす。」と左足を巡査の前につき出しました。
巡査は笑ふ、兒はけげんな顏。

女子衛生問答

産科婦人科專門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず葉書差支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第百二十六問　●●●●●●● 産褥期中の攝生法

御面倒様ながら、姙婦の心得、及び産褥期中の攝生法詳しく御教へ下さいませ。（山の手、花子）

答　姙婦の心得に就ては文壇の近刊に詳細に述べおきましたから御覽下さい。産褥期間に於ける攝生法……分娩直後には産婆若くは醫士に委し消毒を嚴にし、局部の清淨を保つ可し猥りに動搖を爲す可らず。大小便通は床上平臥の儘ま産婆若くは看護婦の手に委し排出せよ食物は消化し易きもの、可成は流動的滋養分豐富の物を用ひよ、産褥第三四日頃によく發熱する事あり、之には種々の原因あります、或は單に乳汁の分泌意の如くならず、乳汁が乳腺に充盈したる時に發熱する事ありますその他時としては尿の排泄不充分にして膀胱に多量の尿の潴溜したる時に一時的に發熱する事があります、次に發熱に於て恐る可きは、産褥熱なり、之は分娩の際或は分娩後に於て消毒の不完全なる爲め會陰の損傷局部或は膣の創傷部或は子宮膣に黴菌が侵入して發生するのである。（詳細は專門に渉る故へ略す）一度産褥熱に犯さるれば場合によりては死を招く恐れあり、故に消毒は務めて必要であります、故に分娩の際は必ず全然消毒したる物を用ゆ可きであります。

産褥熱にも犯されず、無事に經過し行けば第七日乃至八日に於て床上に坐する事は宜しい、それよりは常食若くは粥食を執る可し、哺乳は分娩後十二時間位を經て始められて宜しい。急ぐ必要はありません、初生兒は初めの間はほんの少量を吸飲する許りにて足ります、倘し乳汁が思ふ樣に出でざれば消毒したる牛乳を初めの間は三倍の微溫湯に薄めて自家哺乳の補足に御用ひなさいその中には漸次に乳汁も多量に分泌して參ります、哺乳規則は玆には述べません（初生兒取扱法は他日時機を見て述べませふ）産褥第十日頃よりは床上以外に上厠せられてもよろし、第十四日頃よりは少し宛つ運動を試みられても可なり、それ以後は特に述ぶ可き程の事もありませんが、全然常態に復する迄ては六週間乃至七週間を要するのでありますから、それ迄ては産褥期と申して可なりてす産褥期間は務めて過勞（身心共）を避け男子に接せず、適宜の運動營養豐富の飲食物を攝取し平安の天地に生活を營まれよ、殊に淸淨なる空氣溫暖なる地冬になれば轉地する等も必要なり。

玆に注意す可きは初生兒は可成母乳を以て哺乳せよ、もし母乳に缺ゆるに乳母若くは人工營養法を用ゆれば、初生兒に不良なるのみならず、母體の身體恢復を妨ぐ可し。左りとて母體が疾病に罹りたるに拘はらず（例へば脚氣の如き）哺乳すれば、乳兒を害する事多大なるべし。先づ大體を論ずれば産褥期に於ける攝生法は右の如くなるべし、然し漏洩する所なきに非ず、爾後問題に應じても補遺する所あるべし。

第百二十七問　●●● 神經痛

私の母は永年神經痛のために苦んでゐます、治療もうけ、溫泉浴もいたしましたが一向効めがありません、この上はどうしたら宜しいでせうか。（葉子）

答　單に神經痛のみでは甚だ御答へ致し兼れますが一般に神經痛の原因にも種々の事柄があります從て療法も種々その趣きを異にする次第です然し頑固なる神經痛に對しては醫師の側より申せば或は鎭痛劑或は藥劑液注射療法或は電氣マッサーゼ、或は神經纖維伸展法等の療法があります專問醫師に就て受療せられよ。

第百二十八問　●●●●●●● 肉の如きものが下る　年七

二十歳、月經四五日づゝあり、毎月正しけれども下腹部の痛む時と痛まざる時とあり、月經中濃き血少々づゝ下り、其濃き血をよく見ると時々なれど極めて少さき肉の如きものが下る、こは誰も同じですか、又は病的でありますか。(岡山、白菊女)

答　經行時の出血中に組織片の混交する事は多くは病的であります、殊に劇烈なる月經痛を伴なふておるならば、排膜性子宮内膜炎と申す疾患に恰當します、然しその實際組織片なるや又組織としても調査して如何なる物なるかが、分明せねば確實の事を申す事は出來ません。又白帶の事に就いてもお訊れですが、白帶血に就いては本誌上にしば〳〵説明してありますからそれを御覽下さい。

第百二十九問　●●●●●●●●婦人科的疾患の徴あり

十四歳に初經ありてより常に不順にして、古綿樣の物のみ通ずる事あり、頭重く、動悸高く、思考、記憶等の力減じ、何事にも恐れやすく、安眠しがたし、如何なる所以なりや。おたづねいたします。(花子)

答　月經不調白帶下、頭重頭痛下腹痛等は婦人科的疾患の徴候を示せり加之ならず心悸亢進記憶力減退安眠不能等は全疾患に伴ない發生せる神經衰弱若くはヒステリーの徴候らしく考へられます宜しく根本的治療を御受けなされ。

第百三十問　冷水摩擦にて治りますか●●●●●●●●

私は目下身體衰へ、頭痛、眩暈甚しく、月經はいたつて小ない方ですが、以前は隨分甚く苦しみました。月經時を除く外は白帶血がたへずあります、或人は冷水摩擦をすれば治るといひますがどうでせうか。(長門、十八歳女)

答　貴孃の御訴へも前問に類似のものと認められます、冷水摩擦のみでは根治不可能であります。冷水摩擦は婦人科疾患に何等及ぼす可き効を認めかねます。

第百三十一問　●●●●●●手術後の瘢痕

五年前さかまつげにて手術をうけ、その時の瘢か今だに目の下にあつて消えません。如何したら消えるでせう。又近眼は眼鏡をかければ目のために惡いでせうか。(北國、心配女)

答　眼科的整形手術後の瘢痕は全然消失致しません殊に五年以前手術を受けたるとすれば、恢復す可き者なれば、巳に恢復して居らればならぬ答です、近眼の度によりては、眼鏡の必要を認めます。(他のお問は百二十九、百三十の問に同じですから御覽なさい)

第百三十二問　●顔

私はたへず顔に腫物が出來て、そのあとが黒くなつて困ります、この腫物を絶やすことと、色を白くする事は出來ませんか。(紀伊、憂女)

答　餘り顔の皮膚を刺戟せず可然皮膚科專門醫に就て治療を御受けなされ皮膚に現はれた色は如何とも爲し難いです。

第百三十三問　●●●●神經衰弱

私は深く物事を考へる事が出來ず何事にも直きあきます。何時も身體がだるくて、時々お汁粉樣のものを吐きます。二三年前に胃を病つたことがあります。(八千代子)

答　神經衰弱症なるべし、嘔吐なさるさうですが、他に胃の疾患らしき訴へはありませんか。

第百三十四問　●●眼病

私は本年四月眼病にかゝりましたが醫者に見てもらふのはいやですから自分で出來る樣な療治、及び目藥はありませんか。(鈴木の心配女)

答　眼は人の五官器中最も大切の者であります。醫者を厭ふ故ゑ、手療治で治療し度しとは少し御考へが無理であります。賣藥又は素人考案の藥劑(?)杯は何等の効なく却て害を受ける恐れあります、御考へ直しなさい。

第百三十五問　●近眼

私は近眼ですが年とる毎に度がのす樣におもはれます、宅にある眼鏡をかけると少時して頭がぐら〳〵して痛みます、この上惡くせぬ法はありませんか。(岩代十九歳女)

答　近眼の度の進むを止める藥劑は聞き及びません、可成眼に平安を與へる樣に務め眼

に強作用を爲さしめぬやうになさい、適宜の度の眼鏡よりもより低度のものを用ひ若しそれにて余り不自由なれば、その時丈け適當の眼鏡を代へ眼鏡として準備して居られたら宜しいてす又余り高度の近眼鏡を用ゆれば頭痛を起します。

第百三十六問 月經少量となる　私は夫を向へてより月經が少なりました。如何なる譯てせう。(心配女)

答　結婚したる爲めに月經量の減少を來す理由はありません、月經は年齡の進むに從ひ生理的に減量するものであります、多分その理由に基くならんか、若しそれならば何等の障害を來さぬ筈てす。

第百三十七問 腫脹を來す　私は蚤や蚊に刺されてそのあとを掻くと赤くなつて腫れます。やはり身體に毒氣多いせいてせうか、何が一番よろしいてせう。(困女)

答　皮膚の强靱ならざる人には能くある事てあります、格別に毒氣が多いといふのてはありません、余り掻かぬ樣にし、硼酸水の冷罨法を施してお置きなさい。

第百三十八問 顔の皮膚　私は體、手足等は色白くきめもよいてすが、顔面は色黒く、皮膚が粗くて見苦しいてす、藥を以て直す事は出來ませんか。(長岡女)

答　顔面の皮膚の粗糙なると色黒なるは個人の先天的持前てありますから、藥劑を以て治する事は出來ません。

第百三十九問 發育悪し　私の弟は十六歳てすが、身體の發育悪く、如何なる營養分を食しても肥えず、常に胃腸て苦しみます、如何なる病氣てせう。(越の一讀者)

答　腺病性體質らしく考へられます、醫士の治療を御受けなさい、投擲しおく時は他年恐る可き疾患に犯されます、殊に結核性疾患は往々腺病質の人に發生するのてあります。

第百四十問 心配てす　私は十五歳の時局所と腋に毛が生じました、今ては一面にはびこりました、何歳位より生ずべきものてせう、只一人心配てなりません。(薩摩、いれ子)

答　發毛す可き所に發毛したのてありますから格別氣になさる必要はありません、その局部より他に蔓延繁殖する事は決してありません、

第百四十一問 肋膜　肋膜は一度治つても又いかなる場合に再發いたしますか(千鳥)

答　肋膜の疾患は往々再發と申すよりは、全治しおらぬ爲め或時期に於て或刺戟の爲めに急性症狀を起し來るのてす、恰も休火山が時によりても噴火山となるの類てあります。

第百四十二問 頭髮の脫落　私は十七歳より頭髮脫け初め二十歳の今にいたるまて未だ止みません。身體は悪い所ありませんが常に頭痛がします。(新潟、心配生)

答　毛髮の脫落は種々の疾患に原因し又產褥に於ても仝樣の狀態を來すのてあります或は何か疾患の爲めてはありませんか一度醫士に就て原因を御確めなされ唯だ片簡の文面のみては判斷に苦みます。

第百四十三問 鼻病　私は鼻がいやな嗅がして困ります、腦が悪いのてせうか。(きよ子)

答　鼻腔に疾患ある爲めならん、他に何か訴ふ可き症狀はありませんか、尙一度詳細く御示しあれ。

第百四十四問 急激なる脈搏　私は時々急激に脈搏が起つて全身が堅くなるとがあります。何病てせうか。老幼を通じて普通人の脈搏度數はいくつ位があたりまへてありますか。(備中、心配女)

答　精神の感動若くは急劇の運動に由りて脈搏の速急になる事は健康なる人に於てもある事てす病的に於ても脚氣、心臟疾患、腎臟炎發熱等に於て脈搏の速急になるのはあります。貴孃のはその何れに屬するか、一應檢査の上てなくば確答し兼れます、初生兒の脈搏は百二十位てあり、中年に至りては七十位老人に於ては六十五六或は六十搏位に下るものてす、素より

一分時間の脈搏數であります。

第百四十五問　消渴

一昨年夏に消渴に罹りました。其後月經前後に其きざしがあります。放擲つて置いたら不治症となりますか、又昨年の夏は月に一二度づゝ多量の鼻血が出ましたが、此頃は左の方のみでます。何故でありますか。(心配女)

答　或は膀胱カタル兼尿道炎或は膀胱カタルのみ或は單に尿道炎のみを皆俗に消渴と申して居ります(素人の方は)あなたのはその何れに屬するや診察の上でなければ確實の事は申しかねますが、何れにしても放擲つておけば難治症となります又白帶下の排出もあるそふです、が恐らく生殖器及び前記泌尿器の疾患の合併しおるものにして、殊に此類の疾患には痳毒性のものが多いです、速に治療を御受けなさい。鼻血の原因にも種々ありますが左方にのみ限るとせば或は左側鼻腔壁に潰瘍若くは腫瘍を生じ居る爲めならんか、專門家に診察を御受けなされ

第百四十六問　便秘

私事身躰に異狀はありませんが大便の通じ惡しく腹部は非常に膨れて居ります、治する方法はありませんか。臍の上下に黑い縱の筋がありますが之は誰にもありますか。(十九女)

答　習慣性便秘は特に疾患のある人でなくても往々之を認めます、之を治するには務めて便行の習慣(一日一行)を附ける事が必要であります、その他適宜の運動果物の攝取、消化し易き食物を用ゆる事、冷水浴勵行等が必要であります。臍部の上下正中線に暗褐色の現出するのは誰しも通常あります、然し濃淡の差は免かれません。殊に姙娠すれば著く着色します。又經産婦には多く著明であります。

第百四十七問　るいれき

私は十七歲にるいれきが出來十八の時に手術を受けました。がその時は腋に出來てゐましたが醫師のいはれるにはこれは筋の腫であるから月經があれば治るとてそのまゝにして置きました。このまゝ放ておいて差支ないでせうか。(近江、十九歲女)

答　瘰癧とは頸部林巴線の腫脹したるを稱するのです(之に就ても病理は玆に述へません)月經來潮によりて林巴線の腫脹の消失すると云ふ理由は無いです。勉めて體質を強健にし、加ふるに醫療を以てすれば、全治する事が出來ます。倘し止むを得ざれば外科的手術に訴へて摘出す可してあります。

第百四十八問　受胎する時期

(一)受胎は月經後一週間内にいたすべきものですか。(二)交接後一二ヶ月經て受精いたすべき場合もありますか。(但馬、無學女)

答　(一)此種の問題に就ては已に女子文壇の近刊に御答へ致しおきました受胎(姙娠)機能は月經後より次回の月經來潮期迄ての期間に必ず有り得可きものであります。(二)交接後精糸(精液中に存在せる原質)は生理的一週間は生存し得べき者である。(元より婦人生殖器内に於て何等故障を受けざる限り)は然し特殊の場合に於ては倘それ以上生存し得たるを認めし例もある、生存せる精糸のある限り適所に於て健康なる卵に遭遇せば受胎は成立す可きである、然し一二ヶ月の長きに涉り精糸の生存し得らる可きや未だ之を聞かざるなり。

第百四十九問　脫毛――梅毒

此頃脫毛甚しく、何の原因かと心配です、又梅毒は未婚者にもある病ですか。(十七才の女)

答　第百四十二問を參照せられよ、梅毒は老若を問はず傳染し得可き疾患であります、

第百五十問　火傷痕

火傷の痕が治らないので困りますなほる法はありませんか、ところは顏です。(安房心配女)

答　火傷後の瘢痕は殖皮術以外に治療する方法はありません。殊に顏面ならば余程巧妙なる外科醫に治療を御受けなさい。

讀友倶樂部



○規定　本欄は諸友諸嬢の機關として隨意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

各地通信

○米國より　毎年エルクス祭とて行はれますので七月十六日のロスアンゼルス市は市始まつてよりの一大壯觀で、會衆在十萬と稱せらる、當市の人口三十萬、地方より集まりたる者幾十萬の多きに逹し、電鐵會社は三臺及四臺續きの電車を時々刻々使用し、其の使用したる電車總計三百以上の多きに逹せりとの事、斯くて各國各團體より成立せる其の行列の壯觀は譬ふにものなく壯麗を極め、全車悉く花を以て飾りたる自働車の行列、種々の意匠を凝して出來上りたる各國民の出したる花車等、皆人目を曳きて、何れを何とも批評し難く、行列進行中は觀客悉く手を揚げ、ハンカチーフを振りて歡聲實に天地を動かさんばかりて、其の雜沓の爲め巡査の心配は左こそと思はれて氣の毒でした。行列の第一の先導者は警察署長を始め、騎馬巡査の一隊を率ひ、此れに續きたるは當市の主なるエルクス會員にして、多數は自働車に乘り、周圍を白色の花を以て飾り、其の美言語に絶した、此の軍隊　中には日本の喫茶店にて藝者の給仕する模樣を寫したる某白人の自働車を見受けた。第二は男女よりなる三百人の一隊で、金銀細工の馬具を用ひてあつた、第三は郵便配達者の行列、第四は當市の勞働組合員よりなる行列、第五は當地消防組よりなり全車悉く花を以て飾り、特に注意を曳きたるは、五才より八才に至るまでの美しき少女を乘せて通行したる車、此の麗はしき小女は何れも無邪氣なる笑みを浮べて、觀客の喝采を博した、次ぎはロスアンゼニス市に在留する各國民の行列車(スペイン)は古時代の教會を寫したる者にて寺院の鐘付き堂を表はし、其の周圍は果物の森に形を取り、此れに加ふるに數多の花の如き小女を乘せ、昔のスペインの俤を偲ばしめた。

(伊太利)は大なる遊び船を形取り、此れに船客として七八の婦人を乘せた、伊太利の日光當に輝く國土の美は本日の好天氣に相和して殊更に美であつた。

(メキシコ)は古き時代に於ける大陸生活を表はしたる者で數名の小女と青年等を出した。

(日本)は五條橋上に於ける辨慶牛若丸會見の現場を表はし古武士の歷史的物語りを寫したもので、英字新聞は特に大賞して之れを賞讚した、殊に私の朋友は皆、賞めて與れた、尚其の外の國々の花車も實に美事であつた(在米國、初子)

○上海より　記者樣ほんとにお暑くございますのね。お變りはございませんの。上海はね、寒暖計が普通ので九十度以上ですわ。あの記者樣のお蔭樣で、諸友の諸姉と御交際することが出來て、絶えず暖かき玉章を頂きますよ。あの、少し上海とれ內地人の女と違ふ所を御紹介いたしませう。先づ支那人の女は立つて御飯をたべてよそしてれ大きい茶碗で、私れ來た時は鉢でたべるのかとびつくりしてよ。年とつたものでもお化粧のあついこと。お話しする時でも、大聲でいたしますよ。そして少しも遠慮も會釋もなくつてよ。風呂へは少しも、は入らないのだから體はきたないけれど顏はれ、日に三度位づゝ洗つてよ。よつほどおしやれだわ。あとは又此次。(淸國上海三井洋行小山照子)

○臺灣より　朝の內地では見られぬ雲の色、夕の小川の細流にくだくる月と星の影、それにもまして心ゆくのは、雨後のわたり靜かに風戰ぐ頃のながめです、得も云へぬ涼しい氣が身をおそつて、見えみ見えずみの太陽の光りは、實に實に美くしい濃い紫色に霞むをちこちの山々に、眞白い雲のぽーつと立つて居るのも、とんびの空高く低く圓を畫きつゝゆろう遊んで居るのも誠にしづかに見えます。しつとりした土の上に立ちますと、池にはびこる蓮の葉毎葉毎に玉なす露は宿つて、折節音づるゝ風に、ほろ〳〵と葉から葉にこぼれ散り、雜草にやどろつゆの香、奇しう身を包みます。二回目の田植の終へた田ノ面に水は充ちみちて、それに影する空の雲と、木々の倒影とは、ゆら〳〵風に動いて居ります、(臺北稗貫美津

子）（八月五日投）

○丹後の元伊勢より●●●●●●●

舞鶴停車場から凡そ五里で内宮に着きます、旅舍は田舍に比して多いです、町の行き當りから石階を登ると廣いお庭があります、右手には社務所、之から寂しい杜を潜つて坂を登ると、老檜古杉鬱々として太古の靈城たる事は自然に覺えられます、拜殿があつて奥には本殿が幾十の小宮に圍まれて奥床しい、斎蹟は澤山にあります（舞鶴臼井八重子）

記者と讀者

大阪の大火に就いて

七月三十一日より八月一日に涉つた大阪の大火は、同市の北區を殆んど全滅に近からしめ、慘狀言語に絶する程でした、記者は深く罹災者に同情すると同時に本誌愛讀者の中にも此災禍に罹られた方が多からうと一層痛心いたしました、果然、誌友の平尾とき嬢から火災當時の狀況を報じた長い手紙が參りました、文面に據れば同孃のお宅も其災を免れることが出來なかつたのです、其一節に云ふ。

松枝町は風下にて私が母上に起され候時は早黒けむり立こめて火の粉は用捨なく牢閉されし戸のすきまより入りて物すごく、我家迄はと用意はいたしながら急ぎも致さず候ひしに、風向一變して火は隣どなりに燃え移り、警官は幼子を連れて逃ぐべしと指され候故、後に心は殘りながら（略）…氣も狂ふばかりに立戻り彼方見おぼえの我家は火に包まれ（略）…我家の燒跡を見に參り候折は、只何を見ても涙にて我家て丶朝夕手はなさゞりし書物の中こけて吹く風にひるかへれる、なつかしの友とかたりし庭は目も當られず、大方の松や庭木は燒かれて、日比の面影もなく、涙は止めんとして流るゝのみ、かなしさ胸に迫り候云々

これで見ても如何に傷ましいかは察せられます、なほ此大火に就いて左の方々から見舞を申されました、紙上て御披露いたして置きます。

▲大阪の姉樣たちなん共御見舞の申上やうも御座いません私も丸燒けにあふた一人ですものどうして同情よせずに居られませう人に聞いた時新聞て見たとき、まだもえて居る、まだもえて居ると聞いた時其時私は今我が身に受けて居る災難としか思へませんでした、かく別大阪には本誌愛讀者が多いのですもの八月號て北區、とあるのを見ると、もう〳〵堪まらぬ位ひ三年前私もそんな身になりました、どうぞ〳〵御氣をたしかにお持ち遊ばして下さいまし何かお望の品がおありなさいましたら本欄までお知らせ下さいまし私の身に及びますだけの品は御送り申します（名古屋、てふ）

▲此程の大火を新聞て知りまして誠に驚きました多き誌友諸姉樣の中には此災難におあひ遊ばした方はなからうかと朝夕お案じ申して居ります。さぞ御驚き遊ばしたてせう別にお怪我は御ざいませんてしたか一々御見舞申す筈てすが誌上にて御伺ひ申します（滋賀縣、磨志緒）

▲誌友の姉樣方八月一日の大阪大火は既新聞紙て御覽に成りましたてせう其れはもうお話しにならなかつてよ私に詩才がありましたら彼の哀れな光景の百分の一ても書いてお知らせ致しますのてすが惜しい哉私其丈け才が備つて居りませんから只類燒遊ばした數有る誌友のお方に く御同情申上げるのみて御座います（大阪北區、木村淚花）

▲大阪の祝融は誠に千萬の恨事て罹災のお方も多くゐらつしやるてせう私は衷心同情いたします（高岡篠原みゆき）

暑中見舞

今年の夏は近年稀な酷暑て、涼しい東京てさへ九十度以上に上ると云ふのてすもの、全國一般に暑氣烈しく地方に依つては百度にもなつた處があるさうて、記者一同各地方の誌友諸孃の健康を祈つて居りました、又諸孃からは御ていねいなる暑中見舞の繪はがきや、手紙をたまはりまして、記者は一層發奮いたしました、左に御芳名を掲げて答禮に代へます。拜具

○大津市、鎌田光枝。信州、高木とめ子。山城、田舍娘。渡島、平田宮子。伊豆、加藤爲子。長野、丸山美根尾。相摸、長田みどり。越後、木島さう子。下野、柳田喜美子。廣島、手島まさ子。上總、渡邊なか子。渡島、宗原みつ子。豐前、三宅敏子。西茨城、田村はつ子。京都、高田皎月。ちどり。靜岡、高田もと子。高田、篠原みゆき。細野その子。光子。和歌山、木澤てる子。後藤よし子。

○記者樣私はまだ十六歳の愚かな少女で御ざいますが本がすきで本誌を愛讀して居ります諸姉上樣方のお作を拜見して私も何か作つて見たい〳〵と思ふて居りますがなか〳〵作れませぬ其れに私の家はびんぼうひまなしてひるなんかても〳〵よんで居られませぬ夜も一月に十ぺんほどよましてもらふだけて心の内で作つては心の内で沒書して居ります心の内で許り沒書して居りましても一こうつまりませぬからはづかしさをもかへりみず此からぼつ〳〵投書しますからどし〳〵沒書なすつて下さいましと願はなくても沒書になりませうあの少女といふ雜誌は御社から發行なさるので御ざいますか近くの書店へまゐりますかお尋れ申ます別紙下手てすけれど書いて見ました私はきつい字やつゞけ字は書けませぬからよろしく(芳子)(記者曰、心の内て沒書してゐるは面白いてす、何うぞ沒書しないて追々お見せ下さい、この文面だけを見ましても文章は上手になれさうてす、末頼母しく思ひます、「少女」は本社の發行てす、女子文壇をお求めになる家から求めて下さい、もう一號は發行いたしました)○記者樣晶子先生の歌集て最近の分を定價と發賣元とをお知らせ下さいませ(篠原みゆき)(記者曰、歌集『佐保姫』定價一圓、神田表神保町十、日吉丸書房發行)○記者樣、御社にはまだ、新作家が有ますか御尋致します。(吳竹)(記者曰、まだ少しございます)○長野縣、下枝よしゑ子さんに、御投稿は別に規則に外れて居りません、特に入念の御尋れてすから御安心まて(記者)○三河、永田舞鶴子さんに、直接横瀨氏に手紙をあげたら可いてせう氏の住所は常陸下妻大寶、横瀨夜雨氏宛てよろしい(記者)○豐子さんに、御熱心と御着實な心がけには敬服いたしました、何うも澤山な中てすし、それに誌友くらぶ欄と他欄とは係りもちがひますし、一寸困りましたけれど、成るべく注意して置きませう(記者)

○例の通り下に御名前を掲げた諸孃方には一々お答申しませんけれど、申越の事は拜見しました、差支ないことは別に申上ません、よろしく。近江、榮畑矢枝子。函館、菅野まさ子。成田、登子。富山、米澤やす子。相馬、志賀みどり。群馬、横堀輝子。奈良、藤岡みゆき。岡山、河原萬壽野。淺草、まさご。春翠。和歌山、武田たまへ。羽前、橋本いつ子。越後、S、I生。渡邊じん子。鹿兒島、山本さえ子。信濃、清子。くれなゐ。百合花。下總、のぎく子。青山、鴫良子。三宅恒子。青森、みくづ女。七尾直子。根室、石田露江。福井、市橋久代。漣漪子。佐々木しげ子。三河島、木原英子。初子。金澤、後藤よし子。青爭。遠江、島花子。豐子。岡山、河原岩重。無學女。杉山翠松女。こまの。(記者)

交際を望む

○絵畫に趣味ある方　絵畫に趣味をもたれ都に御研究中の姉君達と絵畫についての思想を交換して頂だき併せて誠ある友の御交りを願ひたいのて御座います(福井市山の奥、藤元露月)

○東京より　諸國の情け深き諸孃と成べく多く御交際致し度いのが希望なのです東京の新聞御用の御方は何新聞ても雜誌ても至急に御送附致しますから御申し下さいまし遠國なれば男子の方ても清く御交際いたします(本所區菊川町二丁目五十七番地、戸邊とよ子)

○花物好きな方に　諸孃樣妾花物大好よそして毎朝夕花園に再三行つて其の手入を致しては樂しむ者てすが諸姉樣の内に美麗な草花種子が御座いますなれば何卒送つて下さい乾度御禮は致しますわ(靜岡縣引佐郡都田村新木北増、鈴木小ぎく女)

○名古屋の方に　文學趣味を持つて居なさる方と御交際を願ひます。妾は七月迄は伯父の家から通學して居ましたが來る九月からは何處に下宿致しますか決定して居ませぬから九月の十五日迄の通信は下名へ御願ひします。名古屋の御方は親しく交通して下さい、又御寫眞や編物の交換を願ひます。バイオリンの一寸古いのがあります差上げても宜しうございます申し込んて下さい。但し文通は男の御方は固く御斷り申上げます(愛知縣海西郡十四山村大字鳥ヶ地十六番戸字佐美鈴江)

○お玉章下すつた方に　私の樣な者てもとやこう御思召して御玉章をお惠み下さいました方には厚くお禮を申上げます、いち〳〵お返事を差上たいのてすが、餘りの多數て御交際致兼れますから誌上て御あいさつ致します、(日暮里元金杉二四四、細谷鏡子)

○申込者四百名にとゞく　再三本誌に出して頂いた圖案の樂については七八十名の申込に過ぎまいと思ひましたのが意外にも四百名に近きお方から毎日澤山の禮書贈品等が絶間もなく波のやうに打寄せて來ます私の志が達したので此

上嬉しいことはございません以後私に初めてお玉章下さいますお方は可成潔白なるお身の上をお閑せ下さいませ又寫眞繪物美人山水の景色名所エハガキ等の交換も宜れ〳〵お願いたします其の上特にお願ひいたしますのは自作の和歌を美しい短册帋にして或は名著の文學書類並に樂器等お贈み願ひますとても〳〵お伴にもなれますまひが返信いたしますから何卒〳〵宜々お願ひ申し上ます（靜岡縣引佐郡奧山局區內柄濱第二十二番邸內、高田元子）

○御詑　先達頃私が「臺北の愛讀女」といふ人から誤解された事について色々と皆樣から御親切な御慰めのお給葉書やら御玉章やらを戴き何とも御禮の申し上げやうが御座いません一々きつと御禮したつもりですが何しろ百數十通の事故取はもれたのがあるかも知れませんので再び誌上を拜借して御禮申し上げます（稗貫みつ子）

○御許しを乞ふ　男子の方々からお手紙が頂きましたけれど家人の言葉に遂つてまで御交際申上げる事は心願き私には出來ませんから左樣御思召して私の姉は御免し下さいませ（伊知子）

○涼しい海濱より　私の住むでる氣仙ぬまといふ小さい町は三方山で前は廣い海てあります、夏なんかほんとにいゝとこなの、おなつかしい記者樣をはじめ誌友の皆樣よ、どうぞおあそびにお出て遊ばせ（陸前本吉郡氣仙ぬま港八崎りん子）

○同じ日に生れた人　私は『明治二十四年十一月二日』に生れましたの。私と同じ日にお生れあそばした人ならば、どなた樣でもよろしう御座いますから、お交はり下さい。但し永久に交際の出來る自信の有る人だけ。一時的の人は失禮ながらお斷り。（大阪東區高麗橋詰町。十三。今西祚江子）

○田村さん秋山さん　芝區の田村波津子樣あなたはもと水戸の女學校にいらしつたでせうそんなら私を御忘れには…御ひまの節には御遊びにいらつしやいな…それから茨城の秋山きん子樣私も水戸のものでおなじ縣と存じますとほんとにおなつかしくとくから御名前だけは存じて居りました御交際が願へませばうれしうございます（東京府下上澁谷町二九八國分方杉山常子）

○在學の方に　女學校や師範學校に御在學の姉さん方、どうぞ愚なる田舍の私に學校の模樣や唱歌その外なんでも田舍の私に珍らしいものを知らせて頂戴、私も田舍の有樣を知らせて上げるわ（秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤すみれ子）

○皆さんの中で　海外に住居の方、將來海外に渡航の方、小學教員の方、英語や音樂お好みの方等と行末長く文通を望みます、又寫眞、シナリ、リボン、他繪物、絹ハンカチフ以上、二十名迄の方と交換致します、尙福島縣內の本誌々友は男女の區別なくれー宜しく、（會津若松市中六日町宮原方にて小濱宛）

○市內の方　本誌愛讀者の方で福岡市內に居られる姉樣達よ何卒御手紙下さいましれ御返事は必ず差上げます（福岡縣福岡市九州高等女學校內、角銅翠波子）

○謹　皆樣の中で樂譜の長唄、元祿踊、蝴蝶の譜お持ちでしたら私の樂譜と交換下さい、前以て御一報を（小石川小日向臺町二ノ十九、高木きん子）

○朝顏の種子　私は朝顏が大好きです、今年の種子を送つて下さい、相當の御禮はいたします（越後柏崎下町、橋本とふ）

○妹死す　前號て御しらせしました妹芳子は八月二日午後六時二十五分、終に冥目いたしました、皆さんから御見舞下さいましてありがたう、なほ後に殘つた妹靜子の爲にいろ〳〵御送り下さる方には寫眞私共兄妹の）香水、リボン、レート、乳白化粧水、等小包て差上ます（大阪市東區上本町九丁目一五三、阪田稔、仝靜子）

○中止　私は交際を求めましたけれど都合あつて一時止めます（弘前市、みよし）

○文學上の交り　いとなつかしき誌友の諸姉樣何卒〳〵文學上の交際を願致しますわ。私は和歌や俳句が大好きて御座いますのよ何卒何卒給葉書なり又は葉書に和歌なり俳句なり御自作のもの御皆なされて送つて下さいませ（靜岡縣引佐郡都田新木寺前通、鈴木とも子）

○中流の方に　私は本年十九歲の不束者てすが遠く故鄉の東京をはなれて只今はかゝる他鄉に心合ふ友とてはなく寂しく日を送つて居る者て御座い升何卒中流の家庭に育ち給へる文學愛讀者の皆樣にいつ〳〵迄も變らぬ御交際を願ます（近江彥根池須町大矢八重子）

○東京の御方　諸姉上樣よわたくしは少女くらぶをあいどくする樣になりました不束な者て

すが東京の御方と交際を致度ありますからどうぞ御交際して下さいましよ交際を致して下さる御方には必ず絵はがき差上げます（下野國下都賀郡寺尾村大字初音山福富うめ子）

○桑港にて　誌友の皆様姿は遠き異鄕に何の慰藉も無く暮して居る便り無き獨身者です情深きお方と永遠の御交際を願ひます又皆様の内に紀念スタンプ付き或は肉筆の絵葉書、編物、皆様方の寫眞等を左記へ御送り下されたるお方には外國古切手風景エハガキ等を以て必ずゝゝ御返禮致します（桑港ブキアナ街一六二三阿久津波子 From, Akutsu, 1623 Buchanan St, San Francisco, Cal,）

○君枝さん　八月號の横須賀の君枝様とやら家庭日記の投せたいと思ふの文ほんとうに面白く拝見いたしました 私机の前で澤山笑ひました のよきつと君枝さんは面白いかい活な御方であると思ひます、わたつたてしよう其外皆々様此頃は如何なさいましてすこしも御たよりが御座いませんのねー私西端さんに御寫眞をいたゞきましたから御送りいたしたいと思て居ります先の處に御出になりますか御伺ひ致し升（麹町にて、山岡ふみ子）

○水彩畫　本誌愛讀の皆々様の中に水彩畫御描きなさる御方がありましたら御交際を願ます御返事は必ずゝゝいたします（茨城縣東茨城郡竹原村大字羽鳥、長谷川治子）

○英文の通信　誌友の諸子、美濃の山奥に友もなく淋しく暮して居る者です、以後英文の通信をして下さる方はありませんか、而しかく云ふと英文が達者の様ですが實は餘り出來ませんから皆様に敎へて頂きたいのです（岐阜縣可兒郡廣見村淵ノ上中屋敷方加納霽舟生）

○看護婦　私はれ御父さんや御母さんに死に別れてこゝに病院の看護婦の身と成り日々淋しく暮して居るのよ今度れ女子文壇の愛讀者に成たのよ御見捨なく絵葉書や玉章の交換を御願ひ致します（大阪市東區博労町一丁目丸山病院内、和平文子）

○本月も亦新しく交際を望まれる嬢様方が左の通り多數にありました、記者は皆さんの間に純潔にして邪氣無き交情の取り交されることを祈つてやまないのです。

○高知縣長岡郡五臺山村汲江六十一番、靜子。
○神奈川縣橘樹郡向丘村、鈴木いく子。
○岩代北會津郡湊村内齋藤松次郎方、秋野百合子。
○福岡縣三池郡大牟田町字下田、河原畑政。
○群馬縣佐波郡東村大字東國定村第九番地、諏訪芳子。
○北海道石狩札幌郡江別河畔、今野よし子。
○富山縣高岡市片原町二三内山勝次郎方、喜多子。
○岩手縣岩手郡田頭村、縮坂くに子。
○靜岡縣引佐郡鹿玉村、伊藤銀子。
○茨城縣筑紫郡小野川村字手代木、沼尻利子
○三重縣安濃郡村玉村小宮幸之丞方、小宮つろへ子
○京都市綴喜郡八幡町字小金川齋藤とわ方、湯川幸子
○北海道根室梅ヶ枝町二丁目七、石田雪江。
○茨城縣眞壁若柳、初澤さく子。
○岩代若松市町五丁目、吉川きち子。
○牛込區若松町百十八尾崎方、塚原けん子。
○北海道根室根室郡和田村三〇三番地、本田富美子。
○金澤市脊林坊奨川屋方、後藤よし子。
○新潟縣佐渡郡吉井村大字上横山、内海靜子
○靜岡縣引佐郡都田村新本北六十三、鈴木小ぎく子。
○熊本縣熊本郡梳木町、萩尾秀子。
○熊本縣熊本郡梳木町櫻馬場通、西依房子。
○靜岡縣引佐郡都田村新木波多野いち子。
○岩代原局下共和乙一二〇、中村清子。
○鳥取縣氣高郡大郷村金澤村、松浦春江子。
○山形縣置賜郡白鷹村中山、大瀧すみれ子。
○香川縣綾歌郡林田村大字西梶、川井糸子。
○常陸笠間町局内箱田、田村むらさき。
○茨城縣稻敷郡柴崎村戌渡新田山本三造方、あさ子。
○千葉縣印旛郡成田町成田、櫻井初子。
○山形縣東置賜郡吉島村吉田三十渕、島貫學子。
○栃木縣下都賀郡寺尾村 大字尻内百十四番地石川さだ子。
○大阪市東區紀伊國町九三〇、一柳文子。
○新潟縣北府後備三ノ三、内藤しげ子。
○大阪西區三軒家上之町一五七、野村みどり子
○神戸市三宮郵便局私書函五六、山片八重子
○本所向島寺島村二九〇、古川幸枝。
○北海道後志昆布局下宮川温泉内。E、M。
○富山縣新川郡魚津大町、米澤やす子。

○京都府加佐郡由良尋常高等小學校内、川崎艶子。○岐阜縣加茂郡黒川村鷲見啟彌方、鷲見千江子。○大阪市東區佐官町八三二吉田信之方、山口貴美子。○奈良縣山邊郡朝利村大字長柄飯田嘉七方、秋子。○神戸市花隈町二五五中井方、中村勝子。○靜岡縣濱名郡天神町村相生小學校内、磯部壽美子。○千葉縣山武郡南郷村鈴木彌市方、昌子。○秋田縣仙北郡金澤町厨川町入加藤りん子。○京都府舞鶴町字紺屋岡見永藏方、松本たき子。

品物交換

○皆様の内、新寫眞掛御持の方は、私の習字本絵葉國行幸記と御交換下さいませんか、二箸者以下は、私の寫眞差上ます（呉市二川町四本通二ノ一〇二、呉竹碓井松枝）○皆さんの中に御使ひ古しのヴアイオリンが御不用なれば私の寫眞器か泊來ハーモニカの上等と御交換下さいまし（東濃加茂郡黒川村、藤井まさ枝）○諸姉様妾の手許に、美丈夫前後、後の不如歸、小說作法、憧風悲雨世路日記、不運の娘、同情、女子作文法等ありますが右全部とヴアイオリンと交換下さいませんか可成新物と妾は神へ誓つて違約なんかしないわ（福岡縣朝倉郡寶珠山村仲道久根方、仲道澄子）○御情け深き誌友の皆様私の手許に女學世界（第九卷第壹號）心の秘密、少年世界、少年、談話會、秀才文壇、婦風雑誌（十二）しきしま（二）等ありますから、尺八、呼曲、銀笛、みん笛、月琴、以上送附の方は御送り次第差上ます男子にても、よろしく候（山口縣大島郡浙野村字日賀志榮歷、山根日奈子）○誌友の皆々様、ハンカチーフ、お送り下すつたお方には、繪葉書や、リボンを、お禮として差上ます（東京牛込區市ケ谷富久町一番地、吉田みどり）

繪葉書を好む

○倶樂部に出すのは初めてですが繪葉書が大好きですからどうか御交換を願ひます、なるべくは狀色のて（名古屋市西區岩井町竹の家閑所戸崎友子）○誌友の諸姉様妾も非常なエハガキ狂です、てそれが交換をしたいのですから何卒御裏送を願ひます（茨城縣筑波郡小野川村大字小野崎四〇中山照子）○紀念絵はがき五枚以上送りて下さい御返禮には、女子文壇か秀才文壇か活動かヘガキ文學を必ず送ります、（長野縣北安曇郡麿津會北村、三好まなぶ）○妾寺社の印章有る絵葉書が大好きよ送つて下さつた方には御禮として誠に拙ひのですが妾の肉筆絵葉書を送りますそれから水彩畫の肉筆絵葉書も交換して下さい。（大阪市北區堂島濱通り四丁目二二番地亀田方國近みどり）○皆様私は畫がすきなので毎日筆とあそんで居ります皆様肉筆の絵はがき御送り下さい御禮としては私のかいた絵はがきを御送りいたしますから（佐賀縣三養基郡山代尋常小學校内村山ゐか子）○なつかしき誌友の諸姉妹様よ絵はがきの交換をお願致します、別して九州の御方なれば此上もありません。（佐世保市上京町五十六番地中山方、山下靜枝）○皆様私の許に未使用の絵はがき二百八十枚ございます花、美人、勝景、なんでもよろしふございますから御交換をねがひます先着五名の御方には私のみにくき姿、よみ古しのコブシ、青春、己が罪どれでも御のぞみのを添へて差上げますから（千葉縣東葛飾郡舟橋町、川島はつ子）○面白き文集や古雜誌其上に赤十字社總會の紀念スタンプの付た私の所の名勝絵葉書も十五枚ばかり持て居ますからそれ、何卒御交換下さい。且又折々は寫眞も御送りしますから皆さんの御寫眞も御惠みして頂戴な（長門豐浦郡瀧部局第二區内山耕村山川友太郎様内にて中村琴子）○私は郵劵を集めてゐます澤山ありますから男女に不拘世界の郵劵の交換をいたしたい（本郷駒込曙町十一平島すま）

問合せ

○伊原千代子様　御推察の通りて御座います本人目下病床にふせつて居りますから失禮作ら誌上て（熱海、綾野姉春枝）○伊橋ふく子様　千葉の何處にお出てすか詳しくお知らせ下さい（本所區南二葉町江木病院内、伊橋秀子）○能登、小原千代野様　吹雪凄まじき昨年の三月にお別れした切りてすが今は何地にお住居てすか、誌上ておしらせ下さい（石川、ぬい子）○佐久間文子様　上總のお方て只今東京芝の三田邊に居られるお方てすが皆様の中て知つてる方がありましたら何卒住所をお誌上て知らせ

て下さい、御禮は致します。（いち子）

讀みたい書物
持つてゐる書物

〇横濱市内の方に　横濱の諸姉様の中で、婦人雑誌、（女學世界、婦人世界、婦女新世界の中）何にても、愛讀なされて居る方は、御相談の上、御許にないのを、妾が御送り致しますから、毎月どうぞ、御交換して下さいませ。そして、讀み終り次第に、それ〴〵御返す事と、定めましこう、御賛成の方は、此月から、御願ひ申ます（横濱市南太田町二〇九〇横山醫院方、小田切鋭子）

〇小說　七月號で書籍の御交換を願ひましたら四方の御方から御申込みがありましたがまだ殘本として獨歩集一二、二重帶、月魄、怪光雷外先生の猟野、寬風懸風、浪六傑作集上下外に文藝倶樂部八卷より先月分中三十册計と尙江氏の乞食、大學男、倉田櫻芳氏の若き妻、奚津子夫人等と御交換致したし（茨城縣那珂郡額田村寺門クニ子）

〇歌集　誌友諸姉様の中に、靜夜、夢の華、舞姫、あけぼの、伶人等の歌集の中、いづれにても御不用の方がありましたら、妾の、二十五絃、即興詩人、思ひ出の記などゝ御相談の上、御交換を願ひます（千葉縣君津郡駒山村字山中高濱春枝）

〇六月號　本年六月の本誌四五日御貸し下さる方が御座いますなら、石狩河邊に限つてある山百合の押花を差上げます、成るべくは教育家で、京坂地方で、男子でない方におねがひ申します（北海道雨龍郡納内局區内多津子）

〇繪畫書類　皆様の中に三宅先生著の水彩畫指南、水彩畫手引中村不折先生著の鉛筆畫法、野口小蘋女史の畫法自在等何れにてもおもちの方は私の己が罪、不如歸、女學世界、婦人くらぶ、婦人世界又上等絹製栞、水彩畫、外種々の雜誌等にて御交換下さいませんか（門司市清見町古河社宅の東古賀芳子）

〇文典、修辭等の書　滿天下の諸姉様に、折入つて御願ひ致します、御手許に博文館發行の日本大文典、日本文典講義、帝國百科全書の内修辭學、音韻學、日本文典、文學史、日本語學史（上下）藝術論、其他何編ても、日本文學全書の内、何編てもまた文學講義錄、等御所持てしたら損じてゝもかまいません、お讓り下さいませんか、また小說や、文集をお好みの方は、御一報次第書の目錄を差上ますから、御交換下さいませ、其外、文章世界、新潮、詩人等の雜誌類の交換も、合せてお願致します、（岩代羅多方新中町五十嵐清子）

〇宗教　皆さんのお手許に基督教に關する書がありましたら古くともかまひませんからお送り下さいませんかきつと御禮をいたします（常州湊町三丁目、綿引みき）

〇詩歌集　私の歌集の海の聲白光黑髮亂れ髪また詩集の湖畔の悲歌、聲旗雲、ハイネの詩、カプラ矢、金色夜叉の詩、これらの中の一つと晶子女史の著の夢の華または常夏と交換下さる方には、拙い私の寫眞をつけておかへし申します、斷りは申しません名所エハガキの交換もねがひます御返事を下さる方は左記まで（紀伊新宮町、大和靜代）

〇皆様私の手元に女子文壇女學世界婦人世界ムラサキ中學生、中學世界、秀才文壇、花かすみ、家庭の友作歌自在、三越の時好、裁縫秘術綱要、新式裁縫教授書、豆腐料理實用料理法等の本が御座いますから、どんなでも、小說乳姉妹、多情多恨、亦、女持ちの尺八お持ちの方は私のいづれなりとも御交換下さい（長野縣更級郡中津村町田かめの）〇誌友の諸姉様の内に玉蟲舞姫藤村詩集御不用なのがあれば妾の黄菊白菊文話詩話新詩文の内何にても御交換を願ひます（德島縣麻植郡上浦村上野浦節子）〇皆様の中に「玲瓏高き仙嶺の」と云ふ歌と譜をそれから露國國歌の譜とを御存じの御方は何卒御知らせ下さいまし御願ひて御座います御禮は必ずいたしますわ（越後國北蒲原郡乙村井上貞子）〇手元に自由結婚寬詩人町の仙女および新聞切拔の春潮人の罪など不用になつて居ます御入用の方は御寫眞にひじつき栞など添へてお望みのを申込んで下さいキット間違なくすぐ差上ます（三重縣飯南郡射和村大字射和川原みさを）〇姉様方妾の手元に新金色夜叉武俠の日本武俠艦隊十五少年其他種々の新小說が有ますが姉様の中でアミ物と御交換を願ます（信州松代在東寺尾荒井豐子）〇諸姉様の中にヴアイオリン御不用のお方があつたら妾に惠んで下さいませんか御禮として古今集萬葉集懸と懸其外種々の小說がありますから御望のものを上ます又月琴手風琴など

もありますどれとてもヴァキオリンと交換してください願ひます（金澤市香林坊美川屋方後藤ふし子）〇諸姉樣の御もとに金色夜叉合本を御持ちの方は妾の天鹽日記石狩日記二册差上ますから交換を願ます又紀念スタンプ付のヱハガキ御持ちの方は至急送つて下さい妾の許に（ふた葉）外二十册計り小說が有りますから惠まれ次第御返禮申上升已後は諸姉樣親しく御交際を願升（青森縣西津輕郡鰺ヶ澤町新町十五番地小泉元子）〇和歌古今集遠鏡、千山萬水、バイロン詩集不用になつて居りますから、どなた樣か歌集（新派なら何てもいゝのです）御取換下さいませんか（下總印旛郡中郷村海老川花野馨）〇皆樣の中でもし不如歸の歌月岡花子の歌自治論御存じの御方は何卒お敎へ下さいませそしてどうぞ〳〵末長く御交際を（淸國上海三井洋行雲龍小山照子）〇皆樣「婦人の日常生活法」「明治少女節用」「繪畫獨習書」おもちの方私の「女學世界」「少女界」「日本の少女」「女子文壇」等とりませ十册と交換して下さいませんか又「女子職業案內」おもちの方「習字速成術」と交換して下さい（常陸久慈郡太田町中城一五五、小澤とよ）〇諸友の兄姉上樣妾は郁文舍發行の料理辭典、不用てすから諸嬢の御持合の富田ドクトル著作、男女生殖健全法、又は衛生學會編、色情衛生哲學、等と交換す希望の方は往復はがきにて照會下さいよ（信濃國北安曇郡會染村中村蝶子）〇諸友の皆樣、何卒寄稿や雜誌の御交換を願ひます。返禮は「染色獨りまなび」と雜誌二册を添へて必ず〳〵返します。尙『染色獨案內』に限り御望みの御方は郵券四錢送つて下さい。女子文壇の愛讀者に限り、無代で進呈致します。但し前案內は私のお父さまの著したのです（千葉縣夷隅郡千町須ヶ谷鶴岡一枝子）〇諸友の御姉上樣方よ小說の春。みだれ髮。金色夜叉。を御持ちの方が御座いましたらおめぐみくださいませんかお禮には小說に寫眞をそえてお送り致します（長野縣南安曇郡南穗高村細萱丸山成吉樣方峯子ますゑ子）〇ヴァキオリン樂譜根引松、鶴の巣籠、奥先生獨洋吟敎則本、靑年會讚美歌、（以上最も新し）新體詩七ツ星、同迷の跡、己が罪全部、秋聲白露、新約全書、春夏秋冬興味旅行、美文磯馴松、寺尾吉田合著中學敎科書算術の部上下、長澤龜之助著中等敎育代數學敎科書、野瀨田著新定中等算術上、上野淸著普通敎育平面幾何下、六ヶ月間英語卒業書、イーストレーキ著英和學生用新會話、神田第二リーダー、及び小學英讀本第四、と本誌、ムラサキ、秀才文壇、中學文林、中學文壇、等四十一年度迄全部六十册程ありますから皆樣の中でヴァキオリン樂譜長唄越後獅子、同勸進帳、箏曲小督の曲、同八千代獅子などのある俗曲集、音樂史、食道樂合本、コールブンゲンの一（舶來）思出の記、一葉全集、と御交換下さい相當代價に滿たない時は御望みのを幾册ても差上げます御一報下さい（神戸市下山手六田中愛子）〇おなつかしき諸友の皆々樣美しき賜物シャシンバサミ、秀才文壇、冒險世界、探險世界、文章世界、中學世界、小說、等お惠み下さる方へは御禮として在米の兄樣から送つて頂いたオレゴン新報先着拾名樣へ（但し一枚あて）限り差上ます（信濃上伊那郡西春近村六〇六加納初子）〇妾はほんの山の中にて今は兄と弟と妾と三人で只だ樂しい事もなく兄が足が不自由でそれなぐさめて暮して居ますから何卒よみ古しの雜誌でも小說でもお惠み下さいまた兄のお願いですが小說おかし下さいませんか、よみおわればおかへし致しますから、（福岡縣朝倉郡小石原村荒川醫院內、荒川みつ子）〇諸友の諸姉上樣方御所有の金色夜叉戀か慾か筆子ハイカラ合讚美文作法等御不用のものが御座いませんか如何古くとも紙が破れてゝもそれは厭いませんからどうぞ一ヶ月位御貸して下さい御禮には切手代に相當の雜誌繪ハガキで御返送します（岩代國原町下共和乙一二〇、中村淸子）〇妾の手許には女學世界婦人世界少女界女子文壇などの古雜誌が多數ありましたから皆樣に交換を願ひましたら御申込のお方が豫想より少數であつたため未だ古雜誌は殘つて居ります又大日本國民中學會女學部の講義錄一號より九號まで、帝國習字速成學會の練習帳九册（草書一册假名之部四册）あります右之內お望みの品がありましたなら相當の物と御交換致して下さいませんか（東京府下青梅町日向和田、吉田欣子）〇確實なお方よ、本誌四十年第三月號があれば私の女子のふみと交換して下さい、（廣島縣賀茂郡仁方町手島政子）〇皆樣の內でどなたか實用寫眞器上等手風琴洋學銀笛上等ハーモニカ繪葉書ズツク寫眞ズツク（上等）まきえ額寫眞かけ、ひじつき、しほり（絹製）漢和大字典英和辭典數學辭書新体作文百科辭林遊花一人學內彈おもちの方は妾の愛の神、桂月小集（七月實）深山櫻算術敎科書一、二、下、三册、珠算敎授書一、二、四、手工實習書一、二、三、四、五、六、東京遊學案內婦

人世界本誌少年世界秀才文壇少年學五拾册ばかり古本ては中學作文、漢文文典讀本日本歷史問答小學實驗體操書若菜集唐詩選大塔宮ハンニバル勅語講義中學世界中學文壇青年界青年文壇等と交換して下さる方はありませんかお望の方は一封下さいお望の本に繪葉書五枚そへてお送り致します（日向宮崎郡青島村折生迫、岩切綠陰）

○皆樣の御内に聖書をお持ちの御方がありましたなら何卒御ゆづり下さい、リボン、シオリ、寫眞、ひぢつき、編物、何れなりとも御望み次第虚言は申しませぬ誓ひます（越後國北蒲原郡乙村井上貞子）

○私の手元に文壇の花新詩文文話詩話蘆風雁聲など不用なのがあります皆樣の内に文壇の光朝晴玉蟲女子文壇第一懸賞文集御不用のお方は右の書何なりと御交換を願ひます（徳島縣麻植郡上浦村上野浦繁子）

○私の許に逍遙著淀殿第一編、源平盛衰記、花くらべ、獨逸皇帝、日露戰史、倫敦發行雜誌ウヰンザカ、東洋大歷史上卷、略說付世界歷史地圖、二千五百年史、高等地理歐洲之部、東洋歷史、日本中歷史、平面幾何學講義、生理學講義、其他各科の參考書、雜誌も種々ありまして小說類と交換して戴きたいのですが思召の諸姉樣は下記迄御一報下さいませ（姬路市本町富岡方綾子）

○讀者諸姉、妾の許に、魔風戀風、金色夜叉、英語講義、算術講義、婦人世界、十二冊、婦人くらぶ、五册、女子文壇、八册、秀才文壇、四册、女學世界、十册、其れに、原價八圓の、ヴァイオリン、中古ろが有ります只今不用故、手風琴、及び、御寫眞繪葉書、御送り下された方に、進呈致します（茨城縣稻敷郡柴崎村茂渡新田、橋本美津枝）

○御寫眞お惠みの方に下記の小說一册宛差上ます、又寒潮暖潮、病間錄、旅姿、行雲、婦人の日常世活法、食道樂、お持ちなら交換して頂戴、但男子の方はお斷りよ、思出の記、少女の戀、乳姉妹、良人の自白、青春、不如歸、魔風戀風、生、金色夜叉、墓場、出產、春、以上（大阪堂島濱通四丁目飯田樣方にて菊江）

○私の手元に和歌作法立身要鑑其他小說類澤山ありますの、皆樣の内に不如歸、火繡波、青海等が御座いますれば交換して下さい。尙、いかほど古くとも、破れてゝもよいから、書籍や雜誌を送つて下さい、御禮には私のお父さんの著した『染色獨案内』と美しいエハガキをあげますわ。（千葉縣夷隅郡千町須賀谷鶴岡一枝）

○諸姉上樣只今妾の手許に左の本がありますから何卒シオリ、ヒヮツャと御交換下さいまし Pure Gold. Greatest Man of The World. 野口男三郎獄中の告白、其の他文藝俱樂部、新國民など雜誌數部尙カビネ形二頁引伸し階籍の上等寫眞器も相當の價にて御讓り致しますから御望みの御方は下名へ御照會下さいまし尙又御寫眞お添への方へは妾の見惡いのを差し上げますわ（東濃加茂郡黑川村山手屋方美能枝）

○小說秘密の婦人、及び婦人畫報、演藝畫報等あり本年二月の演藝畫報、皇族畫報、女學校畫報等と交換を希ふ（岐阜市四谷町、棚田よね）

○婦人畫報定期增刊皇族畫報御持ちの方は妾の手許にある婦人畫報定期增刊女禮式畫報と交換して下さいませんか（北越小千谷在時水、草間滿子）

○皆樣の中て「呪はれたる女」御持の御方は、私の新作家女學世界と、御交換下さいませ（新潟市、古五、小山せつ）

○諸姉樣の内に緋子、夏子、紅葉全集、乳姉妹、多情多恨、盛榮全部、女華族、青春全部、御持ちの方が有ますれば御交換下さいませんか私の方には雅問答美人寫眞、文藝俱樂部、愛火、百科全書、不如歸、風俗寫眞、等いろ〳〵有ますから御入用の方は前記のものとぜひ〳〵御かへ下さいませんか（大阪四區三軒家上三町、野村みどり）

○皆樣私の手許に、文章世界、新文林、少年世界、日本少年、中學世界、女子文壇、少年界、少女界、美文傑作、縱美辭寶典等、古いのが澤山ありますから、皆樣の、懸賞文集、美文作法、文壇の花、文壇の光、雪文一致などと交換下さい其外如何なる古雜誌でもかまいません（佐賀縣東松浦郡芳谷工藤方、江越キミ）

○私の手許に不如歸、天國、谷間の姬百合、書信文作法新古讃璧琵琶不用になつて居りますから皆樣の御中てバイロン、ゲーテ、テニソン其他詩集と御交換して下さい（芝區愛宕下町四ノ七樋口樣方、前田かづ子）

○誌友の皆樣只今手許に女子文壇、婦人くらぶ、女學婦人兩世界、ムラサキ、（每月號）新小說文藝俱樂部、女學生々理、小品論文、小品文集いろ〳〵小說では離黃麗、美津子、篠子乳姉妹、人の世（販賣禁止の本）新己が罪不如歸古版等あります皆樣の中にハイチ詩集女學世界增刊心の日記、數く手紙、心の秘密等あらば交換下さい寫眞添えて下されし方へ別に水戸繪はがき呈す尙妾の寫眞は當文壇本年三月號誌上にあります（水戸市上市楓小路二一、根崎方晉とみ子）

○懐しき誌友の諸姉樣よ妾小紺雜誌が大好てすが皆樣の内て新不如歸、夏子、女夫波、魔風戀風月しろ其

他女學世界婦人世界少女の友御持ちの方有ましたら御送り下さい此度御禮には小説極樂村三壹夜號者夫人駐在巡査繪はがき御送り致します（大阪東區紀伊綱町九三〇、一柳好子）

○親愛なる皆様よ三四年前發行になつた長田秋濤譯怨と云ふ本を御もちの方は妾の己が罪と三湖櫂乙女の操などと御交換下さいませんか又拜借致しても宜しいのですそれなら御禮としてみにくき妾の寫眞に繪葉書をそへて必ず御返へし致します（武藏町田郵便局配下中崎三郎方にて同じくきよ子）

○私は先月の誌友倶樂部て小せつ交換を願つた眞澄初枝子（眞澄あい子）です。どをゆうまちがいてしたか名字がちがつてゐるんてすわ。あれてわ郵便がまいりません今度のはほんとうの所てす何卒／＼交かんして下さい（滋賀縣彦根二番町三十ノ五守村うの様方、眞澄あい）

○皆様の中て金色夜叉不用てありましたら御送り下さいませ、私の春と一葉全集を御送りいたします、（岩代國河沼郡笈川村、淺野千代子）

○私の手許に國民英語學會講義錄が一號から六號迄ありますから諸君の内て育海又は法科講義錄御持ちの方は御交換下さい（駿河清水港在村松、竹田龍子）

○なつかしき未見の友よ若し貴殿方に不如歸、新不如歸、新己が罪、新金色夜叉、人の兄、琵琶歌、伯爵夫人、嫁ヶ淵、肉彈、魔風戀風、二人濱子、乳姉妹、色懺悔、此外小説類御持ちの方は御送り下さい御返禮には昔鬼が棲みしてう安達ヶ原繪はがき（三枚組）郷地東宮殿下行啓紀念繪はがき（二枚組スタンプ付）其他私の讀んだ小説か雜誌を付けてきつと差上ます御損は掛けません（岩代二本松竹田町、木村良子）

○私の所に古今才媛文集が一部御座います新體詩集御持ちの方と大至急交かんしたし（群馬縣利根郡薄根村恩田二番地、根岸しよう）

○私のもとに少年世界少年少女世界等數十册ありますから皆様の小説や雜誌其の他何とてもよろしう御座いますから御交換下さい（長崎市東紺屋町三〇、高橋こと子）

○懐しき諸姉よ私は音樂が好きてありますが、春之歌、別れ千鳥、須磨の浦等の唱歌がどうしても手に入らず困つて居りますが諸姉の内て御不用な御方は御讓りして下さい相當な御禮を致します若しも其れが出來なければ寫して送つて下さい私も六段の曲、三男十陸奥の花笠羅落響之霸讃岐院等を持て居りますから御讓りは出來ないが寫してならば御送り申上ます（名古屋市東區本願町五、入一、水田方加藤不二子）

○お願ひ　私事操てより夏目さんのウズラカゴが讀んて見たいと思つて居りますが。何所に賣て居るかわかりません。皆様のお内て持つて居らつしやるお方は。何卒お送り下さいませんか。お望な品物てさうとうなお禮はきつと致します。御希望によれば代金お送りいたしてもよろしふ御座います。又婦人畫報お持ちの方は昨年十二月からのなれば。どれてもかまいませんから。お送り下さいまし。お禮はきつと致しますハンカチ澤山ありますから先着四名の方へは半ダースづゝ送ります（伊豫新居郡神郷村小野長美内おや子）

○八月の文壇早々に御惠み被下誠にありがたく存じます、されど何處の何と申す姉様やら御返禮致す事も相成らずたゞ／＼御したわしの御水くきの跡に幸も薄き此身は嬉し涙をそゝぐのみてあり升（山口縣田中文子）

○私の手許には左の不用書がございます、新魔風戀風、歸雁の聲、金色夜叉の歌、己が罪の歌、乳姉妹の歌、戀の魔風、女夫波の歌、戀無線、金色夜叉等ございます、皆様の御手許にコブシ、青春、己が罪）筆子、夏子、血の涙、戀と愛何れなりとも御座いますなら送つて頂戴、私も必ずお送りいたします、又お寫眞を送つて下さつた方には、擬物てお返しいたします（栃木縣下都賀郡寺尾村大字尻内初音山、福島濟平方、きん子）

○皆様のうちてヴアイオリン、紙腔琴、手風琴等お持ちの方は、私の双眼鏡とお換へ下さい、又少年百科寶鑑、少年百科事彙、國民百科辭典、小説ては紅葉全集（第一卷）仇と仇（前後）晴小袖、コブシ（上中下）等御持ちの方は、私の虞美人草、彌野（前後）みだれ髮、里見八犬傳（全八册）細君のため、女學生訓、女寶と交換下さい、御交換ねがへろ方は一寸前以てはがきて打合せを――（長野縣北佐久郡北御牧村五九五、村田賞）

○私は小説が大好てす、それて繪はがき、日米紀念スタンプ付三枚、伊勢の神社、千葉縣神社の名所など取揃へ六七枚ありますが何か小説と取換へませんか、紙質は上等てす、外にもあります、それから冒險世界二部、日本農業雜誌一部、新潮一部、實業少年一部、英語研究五部許を小説と取換へませんか、外にも雜誌は澤山あります、小説は成ろたけ金色夜叉、不如歸、魔風戀風、己が罪、良人の自白、夫人の自白、コブシ、春濤源氏蒂の冒險小説、或は譯物の巖窟王、鄕士柳子の話、噫無情、肉彈の如きものを望みます（常陸稻敷郡島崎村佐倉、大槻成美子）

雜報

西洋婦人新聞

▲驚くべき婚約　Wisconsin 大學の女學生七十人が Delware へ修學旅行に來て、旅館に泊ると、同じ家に辯護士百人ほど辯護士會議の爲めに來て泊つてゐた。だんだん心安くなつてゐるうちに夫婦約束をするものがぼつぼつ出來た。さて明日出發となつた晩に、女學生と辯護士とが會食をすると、女學生の最上席の引率者が、自分の婚約を發表した。そこで、「わたしも」「わたしも」と白狀する。驚くべし。七十人の女學生は一人も殘らずいひなづけになつてゐたのである。

▲巡査の權利、女子の權利　米國の巡査が町の交通を中止させる權利を有してゐる。そして女に對して大に禮を厚うする。Pittsborough で女の沓の踵が電車の軌道に嵌まつた。Wise といふ巡査は交通を留めて、女に沓をぬがせてやつて、それから沓を軌道からはづして穿かせて遣つて、そこで交通中止を解いたさうだ。

▲踊ゐ曳かぬ組合　ミュンヘンには可笑しい組合が出來た。それは女が町を裾を曳いて步かないやうにするといふのである。其實施法は裾を曳いた女に逢ひ次第どしどし其裾を踏んでやるといふのである。それを旨くやつて巡査につかまらずに濟むと賞品が貰へる。

▲要帶の必要條件　Intransigeant で「奈何なる性質を妻に必要なりとするか」といふ問を出して答を集めた。但問様に便宜上性質を十三に分けてあつた。即ち美、慧、勇、忍、良、温、快、直、智、富、健、才、謙の十三である。これ迄集つた處では、最高點が健である。男は健の半數である。慧は三番目である。それから直、才、良、智、富、忍、謙、温、美の順序である。美を要求するものが最少いとは意外ではないか。

▲七歲の妃殿下　Abossinia の世繼の太子 Johnn と Romanie 女王との結婚があつた。婿君十三歲、よめ御七歲。

▲難色　今年の夏の西洋婦人服には別に流行の色といふ程のものはない。綠を大分見る。併し綠は所謂難色（schwierige Farbe）なので大に行はれるに至らない。難色といふわけは、血色の好い女でなくては似合はないといふのださうだ。

▲男子禁制　伯林の大學では文藝史家 Erich Schmidt の講堂くらゐ女學生の多くはいる處はあるまい。此頃いたづらものがこんな張札をした。「自今 Schmidt 教授の講義は大學婦人室に於て開催、男生の入場は不相成候事。」

▲三千六百の女子大學生　一九〇九年の初佛國の大學及 Ecoles の學生總數は四一八九七人で、內女學生三六〇九人（外國女學生一六四三人を含む）である。其學科別は文學一七四七人醫科大學六八九人、自然學科大學六〇四人、醫學校三五八人、法學一四九人である。

▲娘の電報　米國の金持の娘が巴里で頭の飾の欲しいのを見出して、故鄕へ電報を打つて、買つても好いかと問ひ合せた。代價は二十五萬圓である。親が no; price too high と返電した。處が巴里の郵便電信局の役人が no price too high と書いた。娘は大悅で飾を買つた。

▲一滴二圓五十錢の香水　倫敦の Royal Horticultural Hall（Westminister）に化學製造品博覽會があつた。中で人を驚かしたのは高價な香水である。薔薇香精といふものが一箱七萬圓であつた。一滴二圓五十錢の香水もあつた。麝粉といふものが一封度三千五百圓である。但非常に多量の生花を費したものださうだ。

（「ズバル」椋鳥通信より）

空中結婚

去る七月三日の事シヤトル市のカレイ、エー、ビーベといふ青年はリウキストン市のマーガレツト、エー、ハウル孃とシヤトル博覽會で飛揚した飛行船內で結婚した結婚式場は鐵道員協會に設けられ二人は飛行機の船艙內に入つた船艙には無線電話が裝置せられ電話係は地上に居り協會の事務員や儀式を司どる宣敎師サンドストロンはその周圍に群がり電話で御祝儀の挨拶が濟むと新夫婦は空中で結婚をした結婚後地上に下りると一同は祝儀の財布を贈つたが一軒の家は特に二人の爲めに美しく飾つてあつた二人は久し

い間の許嫁であつた相だ芽出度し／＼

文界消息

▲文士は避暑に行ても夕ゞは行かない、其紀行文や談話が方々の新聞や雜誌に出てゐる、然して世間並に山より海の方へ行たものが多い。

▲松原至文氏は『東京毎日新聞』に入社して文學欄を擔當した。

▲三木露風氏の詩集『廢園』はいよ／＼今秋出版の著である。

▲京都大學ん卒業しだる文學士澤村胡夷氏は今回上京して關群社の編輯に從事することになつた。

▲自由詩社の詩集『自然と印象』の第三が出た人見氏の「湖畔の一夜」「敗滅の跡」「山鐘の哀歌」福田氏の「綠の世界」外六篇がある、「山鐘の哀歌」と福田氏の「硝子窓」「月夜の境内」を好いと思つた。

▲與謝野寛、生田長江兩氏は前月中旬紀伊木ノ本町に開かれたる講演會に招聘されて全地方へ旅行した。

▲岩野梅溪氏は『二六』に入社した。

▲岡田八千代女史は駿州佐野に避暑をした。

▲與謝野夫人の小說『自覺』は目下『萬朝報』に掲載中。

▲兼て噂ありし坪內博士邸內の文藝協會附演劇研究所は既に落成し九月一日より同所にて始業該校　平生は一個の　に舞臺を　け舞踏其他の教授に便にする事なるが場合によりては間口五間以上の舞臺となし優に百餘名を容るゝ觀覽席を設け試演し得る仕組で研究生は今度改めて男女合せて十名を募集す

近江美濃の激震

大阪に大火あつて間もなく、又關西に大地震があつた元來京都附近は歷史上にも地震の多い土地であるが、今回の發震時は八月十四日午後三時三十分で、近江美濃の國境にある伊吹山鳴動し、琵琶湖北は最も甚しき慘害を蒙つた、壞家數百戸に上り半壞は無數、死者三四十名負傷者は數百名、美濃も亦此地震の爲に損害を蒙つた、十五十六の兩日に渉つた小震數十回容易に搖りやまぬので住民は露宿の有樣であつた、因に云ふ東京に於ては此地震は僅に人體に感じたばかりで、知らぬ人が多い位であつた。

▲女子の富士登山　女子の富士登山團體この花會では例年の通り八月三日富士登山を試み、目賀田男爵の令夫人令孃を初め女學生、外國婦人など此行に加はり野中到氏夫妻も周旋する處あつたが、登山の日は折あしく雲霧多く、十分の遊賞は出來なかつたさうだ。

▲堂島女學校の燒失　七月三十一日大阪北區の大火に當り、府立堂島高等女學校は終に猛火に包まれて灰燼となつた、最も本館と西館だけは辛うじて燒失を免れたから、其處にて假教授を初めると。

▲女子判任官養成所　神田の東洋女醫學校では女子判任官養成所と云ふを設置し前月十六日から授業を始めた、卒業は二ヶ月、次て第二回の生徒を募集するさうだ。

▲輕井澤夏期寮　女子大學では毎年信州輕井澤に夏期寮を開き、女生徒中の有志を募つて山中生活をやつてゐるが、本年七月十三日から八月まで三週間之を實行した。生徒は四十三人、成瀨校長指導の下に學課、思索、實習等を行ふた。

▲女學生の體格檢査　神田一つ橋の女子職業學校が先頃現在通學生千廿五人に付校醫の體格檢査を行ひたる結果は▲強者　六一六名▲中等三五九名▲弱者　五〇名にして最も多き疾患は▲脊柱後屈弱　一二五名▲齲齒　五〇〇名▲近眼　九五名▲結膜炎　八一名▲扁桃腺炎及同肥大　九四名等

文士の雪月花

『小說辭典』（博文館出版）の編者は現代文士に向つて雪、月、花の三者に就いて其好む處の一つを指定すべく請求した、其結果は肉筆を以て辭典に挿入してゐる、之を分類してみると月を好む人が最も多く、花に次ぎ雪は最も少い、左に其名を掲ぐ

月の部

○坪內雄藏○志賀重昂○廣津柳浪○佐々木信綱○巖谷小波○山田美妙○須藤南翠○蒲原有

明○後藤宙外○須六○河岡潮風○小堀柄音○寺崎傳濃○渡邊霞亭○平木白星○飯田旗軒○小杉天外○兒玉花外○幸堂得知○小川未明○岡田八千代○中村星湖○三島霜川○草村北星○田山花袋○沼波武夫○鏑木清方○尾上柴舟○小山内薫○長谷川天溪○岡鬼太郎○薄田泣菫○山岸荷葉○前田木城○梶田半古○大町桂月○大塚楠緒子○田口掬汀○水野葉舟○江見水蔭○青柳有美○遲塚麗水○齋木菊雨○石井研堂○角田浩々歌客○柳川春葉○野口小蘋

花の部

幸田露伴○正宗白鳥○永井荷風○泉鏡花○三宅花圃○石橋思案○西村渚山○土井晩翠○山路愛山○押川春浪○跡見花蹊○與謝野寛○小栗風葉○德田秋聲○小島烏水○佐藤紅綠○緑原遠柿○坪谷水哉○沼田笠峰○芳賀矢一○與謝野晶子○岡野知十○內藤鳴雪○饗庭篁村○村井弦齋○金子薫園○横瀬夜雨○相馬御風○河井醉茗○前田曙山○生田葵山○山崎紫紅

雪の部

○木下尙江○伊藤松宇○武田櫻桃○前田林外○島村抱月○眞山青果○吉江孤雁○竹貫直人○筒井年峰○姉崎正治

八月の雜誌

▲趣味　「水」と云ふ夏向の散文がある、小說に藤村の「河岸の家」と仙子の「ひと夜」とある、ひと夜は評判が好い▲新小說　泣菫の「其の女」と云ふ小說がある、附錄「招凉珠」には面白い答案が澤山ある▲新文林　靈舞の小說「邂際」が卷頭にある▲スバル　森博士の「鷄」吉井勇の「魁の死骸」二篇を讀む、因にスバルの七月號は發賣禁止となつた▲新牛面　近頃は大いに氣乘がして來たらしい、紙面が活氣づいた▲秀才文壇　例に依つて態度が若々しい、「文章世界」の弟分とも云ふべきか▲ホトトギス　虛子の「修善寺紀行」を讀む▲無名通信　絲鋒いよ〳〵峻烈當るべからず▲綠熱　「船のふたり！あう夜涼のデ・カシイよ」と云ふやうな口語句がある▲シキシマ　「白虹」と云ふ雜誌と合併した文學雜誌で詩文相半ばしてゐる、發行所は奈良縣高田（以上寄贈）

○孝女白菊　わらび山人著

皆樣も御存知の「孝女白菊の歌」の歌にある孝女のことを書いた小說です、文章もやはらかく、事柄も面白く且少女達の心得にもなることですから、御寶になつたら宜しからうと思ひます、清方の揷畫があつて、四六版二百三十頁、定價は金三十五錢です（神田表神保町福岡書店出版）

▲本年の大暑は各地とも同じことですが、新潟の華氏溫度百二度四と云ふのが本邦未曾有の暑さださうです元來北陸の新潟、金澤、福井方面は氣象の工合で、夏は溫度の高く上ることがあるので、本年中央山脈を越えて南東風が吹下したる爲に殊に以上の地方が一時酷暑を覺えたと云ふことです▲佛蘭西巴里では日本料理として、さしみは歡迎されませんが、鰻の蒲燒は甚だ欣ばれて流行してゐるさうです▲火事があり地震があり、又河內牧方禁野と云ふ地に陸軍の火藥庫が爆發しました、夜中の出來事で死人はなかつたやうですけれど家が倒れたり、怪我人があつたりしました、今年は關西地方はよく〳〵祟り年だと見へます▲東京は年々夏期になると旅行する人が多くなるやうです、旅行もしやうに依つては爲になります、又旅客を歡迎する設備が年々便宜になるので、皆其方へ傾くやうです、旅行は寧ろ不自由な地を選んだ方が旅情の自然な會得することが出來ませう▲記者が見る處によると最近女子の讀書力はます〳〵增加するやうです、市中の書店雜誌店などに女のお客樣を見ることは、四五年以前は極く稀でしたが、只今は男子の二分の一ぐらゐ女子のお客樣を見受ます。

○河井道子女史の洋行

女子英學塾講師河井道子女史は學事研究の爲め向ふ一ヶ年英國へ渡航せられることゝなりました、八月二十八日に出發されました、最も本誌の英語欄は本年一ぱいの分既に御寄稿を得ました、なほ洋行中にも有益なる通信に接しましたら讀者に披露いたしませう、なほ諸孃と共に謹んで同女史の爲に航路の安全と、遊學中の健勝を祈る次第であります。

寫眞を送つて下さい

誌友諸孃、本誌は諸孃の詩歌文章を紹介すると共に、諸孃の姿をも天下に紹介したいのです、多年本誌上に、掲出して居る諸孃の寫眞は大多數に上つてゐます、併し我が誌友は無限に增加してゐるのですから、是等の方が一層の好意を以て其寫眞を貸與して下さいましたならば、如何に本誌の光彩が添はるでせう。寫眞は其裏に「乞返送」と書き添へて置いて下さらば、用濟次第速に返送いたすのです、一人のでも多人數のでもかまひません。又誌友の外に新しき風景風俗、女學校や婦人會などの寫眞も歡んで迎出いたします、本誌を愛する諸孃よ、偏に寄送を希ひます

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。 地賞金壹圓五拾錢。 人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。 地賞金八拾錢。 人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、敎への庭、少女文壇 圖書は二寸の三寸の大さにて漉き日本紙に限る）
天賞金壹圓。 地賞金五拾錢。 人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の吳服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◎投稿締切日 凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

●賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

―（社　告）―

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

（服部製本）

○定期發行分 ▲毎月一回（一日定期發行）

一册（一回分）	定價金拾五錢	：郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三册（三月分）	同前金四拾三錢五厘	：同四錢五厘	計金四拾八錢
六册（半年分）	同前金八拾四錢	：同九錢	計金九拾三錢
十二册（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	：同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一册（一回分）	定價金貳拾錢	：郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二册（半年分）	同前金三拾八錢	：同三錢	計金四拾壹錢
四册（壹年分）	同前金七拾貳錢	：同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部――十六回

四册（三月分）	定價金六拾三錢五厘	：郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八册（半年分）	同前金壹圓三拾二錢	：同拾貳錢	計金壹圓四拾四錢
十六册（壹年分）	同前金貳圓三拾八錢	：同二拾四錢	計金貳圓六拾二錢

▼申込注意 振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

明治四十二年八月廿九日印刷
明治四十二年九月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館 上田屋、至誠堂、良明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇定價金拾五錢　郵税壹錢五厘

【東京秀英舍印刷】